

えんとつそうじのネタ 帳

えんとつそうじ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ネタはあるし、そのネタの内容の小説はみたいけれど、知識不足ややる気の問題で連載を断念した短編集です。

できれば他の人を書いてほしいネタの短編を中心に載せているのでしようがないから自分が書いてやるといいう方がいる場合はぜひ挙手のほどをよろしく願います（お願い）。

目次

モツピーをリア充にしてみた。 : イン	
フィンニツト・ストラトス	1
こんな乙女ゲー物もあつていいんじゃない? : オリジナル	14
とある空手家のセカンドライフ : 史上最	
強の弟子ケンイチ	47
魔法先生ネギま〜おりーしゅくんのゆう	
うつゝ : 魔法先生ネギま!?	61
遊戯王GX〜アンチサイバー流(笑)を書	
いてみたww〜 : 遊戯王GX	81
遊戯王ストラクチャーデッキ偽CM『電	
脳魔人の覚醒』	133

とある保身の転生者 : オリジナル

140

削除作品 : 転生の奇術師	
プロローグ : 転	
生の奇術師	160
第一話 : 奇術師の帰国	179
第二話 : 奇術師の再会	185
第三話 : 奇術師の決闘。VS異次元の王	
(1) 黒の魔術師の登場	197
第四話 : 奇術師の決闘。VS異次元の王	
(2) “天才” 赤馬零児	222
第五話 : 奇術師の決闘。VS異次元の王	
(3) DD魔導賢者ケプラー、ガリレイ	253

第六話：奇術師の決闘。VS異次元の王

(4) 最強の王の力と奇術師の切り札

271

嘘CM『ストラクチャーデツキー久遠

編』

311

火属性メタな長兄(前編)：ONE PI

ECE×フェアリーテイル?(微クロス)

317

火属性メタな長兄(後篇)ONE PIE

CE

323

インフィニット・ストラトス〜アンチ物

に見せかけたなにか〜インフィニット・

ストラトス

334

鬼人が斬る!：アカメが斬る×ナルト

346

バカとテストと召喚獣〜修羅(ある意味)

の道を行く転生者〜：バカとテストと召

喚獣

366

仮面ライダードライブ〜黒井響一郎には

なぜ前世の記憶が存在するのか?〜

381

仮面ライダードライブ〜4人目の仮面

……ライダー?〜

388

ハイスクールD×D〜グラシヤラポラス

の“狂”呪〜：ハイスクールD×D

398

仮面ライダードライブく特状課の支援者の1人は先輩ライダー!?くく：仮面ライダードライブ	411	イクトウルフ神話	464
ハイスクールD×Dく吸血鬼の王と最強のメイドく	419	踏み台転生者がいる世界で平穩に過ごしたい人におすすめな転生特典：オリジナル	470
劇場版真剣で私に恋しなさい！嘘CM：		ハリーポッターと闇の血を引く魔法使い	483
真剣で私に恋しなさい！×HDS S微クロス	433	削除作品：“赫足”と呼ばれた料理人	489
恋姫無双異伝く偽物の大徳く：恋姫無双	444	主人公とパートナー猛獣の紹介	497
FAIRY TAIL異伝 大魔導と呼		登場人物設定詳細	501
ばれた男	459	第一話 料理人ゼフ	506
劇場版嘘CM 「名探偵コナンと本当に怖		第二話 戦闘。VSGTロボ	519
		第三話 悪意の胎動。そして出会いと帰	

還。

531

第四話 『ゼフ』という男について

540

第五話 グルメ・バラテイエ

552

第六話 マツチの依頼

568

黒井響一郎はヒーローの世界で何を見る

のか：ヒーローアカデミア×仮面ライ

ダー

580

ヒーロアカでアンチ物を書いてみた：ヒー

ローアカデミア

595

名探偵コナンvs対決する兄弟：名探偵

コナン

610

モツピーをリア充にしてみた。インフィニット・ストラトラス

書かない理由：ロボット物の知識不足（インフィニット・ストラトラス）

——【IS】。

正式名称『インフィニット・ストラトラス』と呼ばれるそれは、本来宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツのことだが、しかし主にその『現行兵器全てを上回る』というキチガイ染みた性能（スペック）により、そんな『製作者』の意図とは別に宇宙進出は一向に進まず、結果このスペックを持ってあました機会は『兵器』に変わり、しかしそれは各国の思惑から『スポーツ』にて落ち着いた——所謂飛行パワードスーツのことだ。

そんなまさに『ぼくのかんがえた最強の』を地でいく兵器であるIS。物語はそのISについて学ぶために日本に創設された学校である『IS学園』より始まる。





ここはIS学園一年一組。本日入学したばかりの、まさに新入生（ルーキー）のクラスであるここでは、現在とある人物たちの争いが勃発していた。

「決闘ですわ!」

「のぞむところだ!!」

一人はセシリア・オルコット。イギリスの名門貴族に生まれながらも、その誇り高い気質と幼いころに両親が他界するという境遇により、決して自身に甘えを許さず、家に寄ってきた有象無象から家を守るためにあらゆる面で努力を続けてきた不屈の女傑。

また自らの価値を上げるためにISの訓練にも幼いころより勤しんでおり、その腕はイギリスの代表候補生に選ばれ、若くしてISエリートの特証である専用機を授かるほど。

そしてもう一人の名は織斑一夏（おりむらいちか）。本来ならば女性しか扱えないはずのISを使用することができる世界でただ一人の男性操縦者。世界最強と呼ばれる『ブリュンヒルデ』、織斑千冬（おりむらちふゆ）の弟でもある。

そんなどちらも一般人とはいいいがたい経歴を持つ両者が、どうしてこのようにいみあっているのか？それにはある理由があった。

事の発端は三時間目の授業のはじめ、織斑一夏の姉でありクラスの担任である織斑千冬が発した、クラス代表者を決めなければいけないという言葉。そのクラス代表者にクラスの女子から織斑一夏が推薦されてしまったのが原因だ。

クラス代表者とはつまりはクラス対抗戦などの学園内での大会に代表として出る役目のことで、その他にも生徒会の開く会議や委員会への出席などの雑務もこなす、所謂普通の学校でいうクラス長や委員長とほぼ同じ役割の役職だと思っ

ていい。まあ重度の鈍感さ以外はごく普通の男子高校生とほぼ同じ完成の持ち主である一夏は最初はこれに我関せずの態度を決め込もうとしたのだが、物珍しさからかクラスの女子に推薦されてしまい、そんな面倒なことは嫌だと咄嗟に辞退しようとするも、他薦されたものには拒否権はないと却下されてしまう。

これだけなら一夏がいよいよやクラス代表をやることになるだけで平和的に終わっていたのだが、それに待ったをかける女性がいた。イギリス代表候補生、セシリア・オルコットだ。

セシリアは許せなかったのだ。世界に一人だけの男性操縦者であるというだけで、I Sについて何も知らず、また知ろうという姿勢も見せない彼のが。本来ならばもつと危機感をもち、抗うべきなのに状況に流されているだけでへらへらしている彼のこと

が。

今はもう亡き父の影響による男性嫌いもあり、その感情はどんどん悪化していき、クラス代表に彼が推薦されたことにより、それがとうとう爆発してしまったということだ。

クラス代表になりたくなかった一夏は、初めはセシリアの言葉に我慢していたが、セシリアの暴言がどんどんエスカレートしていき、それがとうとう日本の侮辱にまで及んだときとうとう我慢ができなくなった彼は、セシリアの故郷であるイギリスを侮辱、そのまま売り言葉に買い言葉で事は冒頭でもわかると思うが決闘に発展。決着は織斑一夏とセシリア・オルコットによるIS勝負によりつけることとなった。

睨み合う両者。そんな彼らを横目で見て、一人あきれるようにため息をつく少女の姿があった。

「(……やれやれ、あんな安い挑発に乗るとは。本当に変わってないなあいつは)」

髪をポニーテールに縛り、どこか凜とした雰囲気を持つ少女。

どこか日本刀を思わせる彼女の名は篠ノ之箒(しのののほうき)。彼の有名なISの製作者である“天災”篠ノ之束(しのののたばね)の妹だ。

彼女は数年ぶりに会う自分の初恋(……)の人である幼馴染を、しかし冷めた目でこっそりと観察する。

「(——まったく。まっすぐなのはあいつの昔からの美德だが、それもこうなると少し

考え物だな)」

自身がかつて恋した男。昔ならばその顔を見ただけで頬は紅潮し、心臓の鼓動が高鳴っていたが、今では何も感じない。

それに少し寂しくなりながらも、箒は満足げな表情を浮かべる。

「(……思つたより何も感じなかつたな。まあ、それだけ私があいつ(……)を愛しているということだろう)」

そこまで考えたところで箒は自らの考えに苦笑する。以前なら自分の内心でであろうとこのように素直にはなれなかつただろうことを思い出したからだ。

「(これもあいつ(……)の影響か……。だいぶやられてるな私も)」

そして彼女は思い出す。自らの恋人(……)であるとある少年との出会いを。

★ ★

私が彼と出会つたのは今から約三年前のこと。中学一年生の頃だった。

当時の私は、姉のせいで受けることとなつた要人保護プログラムにより各地の学校を転々としており、その一環でその中学校に転校したのだ。

その頃の私は愛する人である幼馴染から話され、度重なる転校と政府の監視により心が荒んでおり、元来の人付き合いの苦手さもありどこに行っても友人の一人もできず、その学校でも孤独な生活を送るはずだった。

——そこで出会ったのが『彼』だった。

初めは奇妙な時期での転校生ということと私の周りには多くの人が集まってきたのだが、どんな質問をされても、どんな対応をされても素っ気無い反応しかしない私の周りにはどんな人がいなくなっていくた。

しかし彼だけは私がどんな反応をしても諦めず、粘り強く話しかけてくれた。彼は不思議な男だった。

初めは彼の対応を鬱陶しく思って邪険にしていたのだが、その陽気な性格と、他の男にはない下心ない誠実さに絆されたのか、なぜか彼には自分でも不思議と思うほどに心を開いていき、二年にあがった頃には彼とはもう友達と呼べるほどには親しくなっていくた。

彼の影響のおかげか多くはないが数人の友人もでき、私は今までの鬱屈とした学園生活が嘘のように、楽しく、それでいて充実した日々を送っていた。

そんなある日のこと、それは起こった。

その日は教室に忘れ物をしてしまい、それを取りに行くために放課後の教室へと向

かっていた。

そこで私は偶然自身の担任と話している彼を見つけてしまい、そこで聞いてしまったのだ。彼が私に話しかけてきたのは彼自身の行動ではなく、一人教室で浮いていた私を憂いてクラス委員長だった彼に面倒を見るように頼んだということに。

私との交友が彼の意思ではないと知った私はショックのあまり急いでその場を離れた。今までにない彼との輝くような日々。それが偽者だったと知ってしまったからだ。

私はその時初めて気づいたのだ。荒んでいた心に暖かな光を彼に私はいつの間にか惹かれつつあったことに。

それから私は彼を見るのもつらくなり、だんだんと彼を避けるようになる。話しかけられた時も会話を最低限に済ませ、こちらに来ようとする時はその前に逃げ出し、決して接触しないようにする。それはまるで転校したての生活に戻ったかのようで、再び私の心は冷たい風で支配されていく。

だがそんな日々も長くは続かず、私はある日彼に捕まりなぜ自分を避けるのかと問い詰められる。

初めはなにも答える気はなかったが、彼のあまりの必死さに、そしてなぜか泣きそうなその表情に私は思わず全てを話してしまう。

私が篠ノ之束の妹であること、そんな姉のせいで私が保護プログラムの一環として各

地の学校を転々としていたこと、そんな生活のせいで心が荒んでしまったこと、そんな自分の心が彼のおかげで救われたこと、彼のおかげで今までで一番楽しい学校生活を送れていること、ある日担任に頼まれて私の面倒を見ていたことを知ったこと、——そしてそれがきっかけで自分の想いに気づいたことも。

全てを話し終わった私はまともに彼の顔が見られなかった。こんな情けない自分を見られたくなかったから。そして失望されなくなかったからだ。

しかし何時まで経っても何もいってこない彼に不思議に思った私はゆつくりと顔を上げると、そこには穏やかな笑みを浮かべた彼の姿があった。

それを不思議に思った私は彼になぜそのような顔をしているのか聞くと彼はこう答えたのだ。

——嬉しかったからだ。俺も君のことが好きだったから。

詳しく話を聞いてみると、彼は確かに最初は先生の頼みで私の面倒を見るために接触してきたらしいのだが、やがて私に徐々に惹かれていき、その、自分でいうのは恥ずかしいが私に好意を抱くようになっていったんだとか。……本当に恥ずかしいなにか。

それからの話は早かった。

お互いの好意を確認した私たちはさっそく正式につきあうことになり、恋人としての生活を送ることとなる。

初めてのデートではその学校に来てから初めてできた友人に選んでもらった服を着たり、彼が考えたデートコースを回り、彼のために頭を捻って弁当を作って学校で一緒に食べたり、近所の公園を一緒に散歩して将来を語ったり。それはそれは幸せな日々だった。

——だがそんな日々もすぐに終わりを迎える。

それは中学三年の終わりごろ、政府からのある通達が私に届いたからだ。

その内容は『篠ノ之束の妹としてIS学園に入学せよ』というもの。つまり彼と離れ離れになってしまうのだ。

これを聞いた時私は思わず彼の前で泣いてしまったのを覚えている。

せっかく出会えた運命の人と離れ離れになってしまう。これで終わってしまうのだと思つたからだ。

だが彼はいった。待つていると。この三年で篠ノ之箒という女性に相応しい男になつてあなたを迎えにいくと。だからあなたも待つていてほしいと。

そしてその言葉と共に私は一つの小さい箱を渡される。

高鳴る鼓動を感じながら私は震える指でその箱を開ける。

——その箱の中にはちょうど私の薬指にぴったりの指輪が入っていた。

★ ★

「いふ……」

彼から送られた指輪を見て思う。

確かに姉のせいで私は散々な目にあつた。変な姉を持つ妹としてよくからかわれたし、家族はばらばらにされるし、政府の人間からはわけがわからない詰問を受けるし。

しかしそれら全てが彼と出会うために必要な出来事だったとしたら、私は姉にお礼をいふべきかもしれない。なんだかそんな気がした。

——だがこの時の彼女はまだ知らなかつた。

おとなしく三年間を一生徒として過ごそうとしてもブラコン千冬（きょうし）の横暴により彼氏持ちの身で一夏（ほかのおとこ）と一時的とはいえ同棲することになつてしまつたり、その男（ぼくねんじん）のせいで加わりたくない女の争いに巻き込まれてし

まった、なぜか彼氏がモビ〇スーツだとかいう新しいワードスーツを開発し、暴走した姉と戦うことになってしまったり、そしてかつての一夏（はつこいのおとこ）が自分を賭けて彼氏に決闘を申し込んだりとかずかずの厄介ごとに巻き込まれてしまうことに。

「ふふふふ♪今度はいつ会えるだろうか」

………まありア充のことなんかどうでもいいけどな!!

★ ★

■登場人物紹介

・篠ノ之箒

この作品の主人公兼ヒロイン。原作キャラ。リア充にして作者の敵その一。

本来なら原作どおり一夏一筋の少女であったが、度重なる政府の命令による転校や詰問などで荒んでいた心を、中学のころ出会った『彼』の持ち前の雰囲気と誠実さに絆され心を開いていき、徐々に惹かれていった。

そしてとある出来事がきっかけで自分の気持ちを自覚しその気持ちを彼に告げ、そのまま恋人として付き合うことになる。

IS学園の三年間は花嫁修業でもしながら目立たずに過ごそうとしていたが、唯一の男性操縦者の幼馴染、そしてIS開発者の妹としての立場から様々な厄介ごとに巻き込まれていくことになる。

ちなみに原作と違い恋に目覚め、彼氏からの十分な愛情を感じているため、心に大きな余裕ができ、本人が気づかない間に魅力が三割り増しであがっているために某朴念仁が思いを寄せる未来も存在するが、その場合は彼にぞっこんな彼女はあっさりと振り切りする。(その場合は一夏と彼の決闘フラグが立つ)

・彼

篠ノ之箒の恋人。リア充にして作者の敵その二。

初めはクラスで孤立気味になっていく箒を見た担任の教師に箒の面倒を頼まれたた

めに彼女に接触するが、彼女と日々を過ごすうちにどんどん箒に惹かれていき、彼女から気持ちを告げられた時に自分の気持ちを告げ、彼女と恋人となる。

箒がIS学園に進学する際には婚約指輪を送り、卒業したら箒（あなた）にふさわしい男になって迎えにいくという事実上のプロポーズを行っている。

実は原作知識なしのチート転生者で、彼女に出会う前までもこつそり技術チートにより作った発明品により小金を稼いでいたが（学生の身で婚約指輪を買えたのはこのため）、彼女と恋人になってからは一念発起、世界的な科学者の妹を嫁に貰ってもどこからか文句が出ない社会的立場を手に入れるためにチートをフル活用し、男性でも使用できるISに匹敵するパワードスーツであるモルスーツを開発し、『第二の天災』の称号を手に入れる。

こんな乙女ゲー物もあっていいんじゃない?: オリジナル

書かない理由: 謀略や主人公の作戦が思いつかなかった(乙女ゲー物)

【国立悠久学園(こくりつゆうきゆうがくえん)】。

明治初期より設立されたその学園は日本に現存する教育機関の中でも最も古い歴史と伝統を誇り、皇族をはじめとした名門、名族が多く通う所謂「お金持ち学校」と呼ばれる類の学校だ。

そんな名門中の名門であるこの学園には五人の有名人がいるのを皆さんはご存知だろうか?

生徒会長、『九劉雅人(くりゆうまさと)』。

日本で三指に入る財閥、『三大財閥』の一つである九劉財閥の跡取り息子で、俗にいう「オレ様系」の肉食男子。その類まれなるリーダーシップにより生徒会を纏め上げる若きカリスマ。

副会長『大黒白楼(だいこくはくろう)』。

生徒会長である雅人の実家の九劉家には劣るが日本トップクラスの名家の人間で、彼の幼馴染でもある。その智謀で生徒会長を補佐する学園屈指の鬼畜眼鏡だ。

会計『大門周防（だいもんすおう）』。

経済界に大きな影響力を誇る大門家の次男坊。温和な性格で他の学生や教員たちと癖の強い性と会員の調停役も担っている苦勞人。

書記『神宮寺武彦（じんぐうじたけひこ）』。

毎年多くの有能な武術家を輩出している大家の人間だが、本人が三男坊で家を継ぐ可能性が低いことと生来の臆病さゆえに生徒会の中では比較的地味。しかし才能はかの家の中でもピカ一なため、機器察知能力は比較的高い。

庶務『財全尊（ざいぜんみこと）』。

日本でも有数の大病院の跡取り息子。お調子者でいつも女性と戯れている生徒会屈指のプレイボーイ。

この悠久学園の歴史上でも稀に見る特別なメンバーで構成されたこの生徒会は、そのメンバーのあくの強さから当初不安視されていたが、その権力、財力、行動力、そして自分たちの能力によりその影響力を学園中に広めていき、今では多くの生徒の尊敬と憧れをその身に受ける存在へとなっていた。

しかしそんな彼ら生徒会と真つ向から対立する一人の女生徒がいた。

その名は『天城院姫亜（てんじょういんひめあ）』。

生徒会長である九劉雅人と同じく三大財閥にあたる天城院財閥の一人娘であるこの少女には幼いころから多くの伝説があった。

曰く、産まれたときから言葉が喋れた。

曰く、生後三日で立ち上がった。

曰く、三歳のころにはもう英語をマスターした。

曰く、その歌声を聴いた大物歌手が涙を流しながら昇天した。

曰く、その冷たいまなざしで罵つてもらいたい。

このような様々な伝説があることからわかると思うが、この天城院姫亜という少女、生徒会のメンバーと同じ、いやそれ以上の規格外の持ち主で、その能力は生徒会メンバーをも上回るといわれている。

そんな彼女にはある秘密があった。

そう、彼女はこの世界のことをゲームとして記されている世界からやってきた――

だったのである。

☆ ☆

どうもはじめまして、皆様。私の名前は天城院姫亜。栄えある天城院家の一人娘にして、この悠久学園にて風紀委員長をやらせてもらっています。今後とも是非お付き合いのほどをよろしくおねがいますわ。

……ふう、やっぱりお嬢様口調は疲れるな。俺（・・・）の性にあつてないし。

あ、ごめんごめん。待たせちゃつて。え？さつきと口調が違う？ああ、それには実は話せば——まあ短いけどちょっとした理由があるんだが、まあその前に改めて自己紹介をさせてくれ。……いいか？じゃあはじめろぞ？ン、ゴホン！

改めてはじめまして諸君。俺の名前は天城院姫亜。日本でも三指に入るほどの名家。三大財閥の一つである天城院家の一人娘だ。三大財閥がわからないやつは、まあ日本の上から三位以内に入るお金持ちの家と思ってくれればいい。

さて、そんな俺には他の人間には話せないある秘密があるが、せつかくなのでここで喋らせてもらおう。

俺の秘密、それは俺には俗にいう「前世の記憶」があるというもの。……ここまでのえばその手の知識が豊富な同士諸君にはわかつてもらえたと思う。

そう、俺は前世の知識を受け継いだこの世界のまさに異端者（イレギュラー）。所謂『転生者』と呼ばれる存在なのだ!!

……まあ待て、とりあえずその哀れむような目はやめてくれ。

気持ちにはわかる。俺だって全く見知らぬやつにそんなこといわれたら思わず今の君たちと同じような目をしながら冷静に黄色の救急車を呼ぶために携帯電話を手取るだろうし。

でも、しようがないだろう?これは漫画や小説の話じゃなく、もちろん俺が見た夢の話でもなく本当の話なんだから。

話は戻すが、俺が前世の記憶を思い出したのは三歳の俺の誕生日でのこと。突然激しい頭痛がした俺はその場で倒れ気を失ってしまったのだが、その後目を覚ましたときには全てを思い出していたのだ。

そこで思い出した記憶によると、前世での俺は就職に成功したはいいが、なかなか仕事があまくいかず、大きな失敗をしてしまいその会社をクビに。

失意のどん底に陥った俺は、これからの生活をどうしようかと帰り道を歩いていたのだが、その際にトラックに轢かれてそのまま死亡。そのまま帰らぬ人となってしまった

のだ。

普通ならここで俺の物語は終わってしまうのだが、そうは問屋がおろさなかった。

死んだと思つた俺は気づいたら全く見たこともない白い空間にいて、そこであの人と出会つてしまったのだ。——自らを『神』と名乗る老人と！

その老人は俺が自分の存在を認識するのを確認すると、なんともいえぬ笑みで俺にこんな話を持ちかけてきた。

『お主物語の世界に転生してみる気はないかの？』と。

なんでも神様というのは長生きで誰も逆らえないほど偉い分かなり暇な存在らしく、ときおり暇つぶしに死んだ魂をその魂の持ち主が生前に創作の世界として知っている世界に力を持たせて送り込み、世界にどんな変化をもたらすのか、それを観察して楽しむことがあるらしく、今回は俺がその観察対象に選ばれたらしいのだ。

その時俺は「テンプレきたー！」と思つたが、それと同時にある懸念を抱いた。

俺もその手の専門家（笑）としてこのような展開の作品はネットでいくつも見ていたが、それにはある共通点として転生した世界がそれなりに物騒だということが上げられてしまうのだ。

転生物のテンプレよろしくなにかサイキョー的な能力ももらえるらしいし、それがなくても転生者には神様のサービスで通常の人間より各種能力が格段に上がっているら

しいのだが、それでも俺はそんな血と硝煙がはびこるような、もしくはそれに準じるような世界には行きたくないことを神様に告げら、危険度が少ない世界は所謂転生特典がランダムになるし、転生先も自由には設定できないが、それで安全な世界に行けるならと承諾。そのままこの世界に転生したというわけだ。……まさか女になるとは思わなかったが。

まあそれだけなら別にいいのだが、問題は俺が転生した世界にあった。

俺が転生したのは『悠久物語』という所謂乙女ゲーと呼ばれるゲームの世界で、世界的な名門である悠久学園を舞台に、特待生として入学した庶民出身の主人公が、家柄も能力も規格外なイケメン生徒会メンバーに目をつけられ、さまざまな問題に巻き込まれるというもの。その騒動の中生徒会メンバーの問題を主人公は解決していき、その主人公に生徒会メンバーが徐々に惹かれていくという俗にいうハーレム物になっている。

なぜ俺がここまで詳しいのかというと、生前姉がこのゲームにハマッていて、俺にもその素晴らしさを教えようとよく俺の部屋に乗り込んできて強制的にやらされていたからだ。

そして一番の問題は俺が転生したこの天城院姫亜という人物。実はこいつは悠久物語というゲームにおいて主人公のライバルキャラとして登場し、その三大財閥の一人娘という立場と類まれなる美貌から学園のマドンナ的存在ではあるが、傲慢な性格で嫉妬

深く、庶民でそれほどの美貌でもなくせに学園でもトップの面々である生徒会メンバーを魅了する主人公に嫌がらせを繰り返し、最終的には自暴自棄になりその命を狙おうとするのだが、生徒会の面々がそれを阻止。そのまま生徒会メンバーに殺されるといふ悲惨な最期を迎えることになる女性なのだ。

俺はこのことに気づいた時あまりにも暗い自身の未来にしばらく絶望に包まれていたが、そこで俺は考え直した。自分の未来が暗いものだとはわかってはいるならそうならぬように行動すればいいんじゃないかと。

幸い神様のいうことが正しければ転生者の俺はそこいらの人間よりも格段に能力が上がっているはず。ならば今から自身に磨きをかけて能力を底上げすれば学園で生徒会に匹敵する社会的地位を得ることができ、なるべく彼らに関わらないようにすれば無事に人生を送ることができるとは思ふ。

そう考えた俺はさっそく行動を開始した。

体力づくりのためにまずは屋敷とその周りの探索をはじめ、屋敷の書籍部屋に忍び込み一人勉強をする。

それだけでは物足りなくなつた俺は両親に強請り高い教育を求め、その結果今では自分でいうのもなんだがどこに出しても恥ずかしくない立派な淑女へと成長したというわけだ。……まあ今でも内心は強制されずにこんな言葉遣いになつちまつてるが。

悠久学園に入学してからはまた大変だった。

生徒会のメンバーは確かに優秀で設立された当初から多くの人望を集めたのだが、原作が始まりヒロインがこの学校に入学してからは言い方は悪いが徐々に腑抜けていき、彼女に近づく男たちを恐喝したり、学校の設備の占有など問題を起こしていき、生徒会の業務が停滞していった。

俺はそれを最初は現実なんてこんなものかとそれを傍観していたのだが、学校はそれを憂慮したのか生徒会を牽制させるために生徒会とは別に独立した生徒主導の機関である風紀委員会の委員長に俺になってくれと頼んできたのだ。

なんでもあのヒロインが学校に入学してから生徒会の面々はたびたび問題を起こすのだが彼らの家柄が凄すぎて自分たちでは何もいえないので、生徒会長と同じく日本の上から数えたほうが圧倒的に早い三大財閥の生まれの俺に対抗して生徒会を抑えてほしいんだとか。

俺はその申し出に正直迷った。俺は生前男だったこと、そして今は肉体は女で女としての教育を受けてきたために男にも女にも興味がないのでヒロインに嫉妬して嫌がらせをするなどということはありえないが、本来の歴史で俺を殺すことになる生徒会とどんな形であれ敵対することになったら俺の命を脅かすことになるんじゃないかと思っただからだ。

だが冷静に考えたら俺が財閥の娘という地位を追われて生徒会に殺されてしまうのは俺がヒロインに嫌がらせをして裏でいろいろ悪どいことをいろいろしていたからであつて、今の俺にはなんの後ろ暗いこともない。

生徒会を抑える役目でいくらか彼らの恨みを買つてしまふかもしれないが、それでも家から追い出され今の地位を失うことがなければ彼らも迂闊に俺に手を出してくることもないだろう。

そう結論付けた俺は、風紀委員会風紀委員長の内示を快諾。生徒会との戦いを決意するのだった。

風紀委員長の仕事は大変だった。名家名門の人間は皆若いころから甘やかされてきたのか注意してもいうことを聞かないやつも多いし、もちろん生徒会もただいっただけでは今の環境を改善しようとしなない。なのでそれなりに強引な手段をとつてやつと事が進む、そんな状況だった。

だが俺の努力と誠意（・・・）が実を結んだのか、俺のいうことを聞いてくれる人も段々と増えてきて、俺を慕つて風紀委員を手伝いたいという人も続出。委員長としての活動も段々と楽になつていった。

生徒会の方はさすがに一般の生徒みたいに簡単にはいかなかつたが、彼らも名家としての面子があるのだろう。最低限の仕事はしてくるようになった。

まあ生徒会にいる友達(・・・)のいうことには本当に最低限らしいし、俺もいくつか故意に見逃してやったこともあるので完全に改心したとはいえないが大分マシになったと思う。

まあそういうわけで生徒会とは一種の冷戦状態にはなりながらも、なんとかかんとか仕事をこなし、先日ようやくゲーム、つまり原作の終わりを確認した俺は、現在学園の風紀委員会に割り当てられた執務室で一人紅茶を飲んで一息ついていた。

「——やれやれ、やっとここまで来ましたか。思ったより長かったですわね」
ため息とともに思わず口から漏れる言葉。

だが許してほしい。本当にここまでくるとは大変だったのだ。

甘やかされたクソガキどもの面倒を見ながらさらにやっかいな生徒会のクソガキどもが起こす面倒ごとの被害を少なくするために奔走。それをしながら原作に起きる事件でイレギュラーが起きてこっちや学園に被害がいかないう風紀委員メンバーに偵察をさせ事態を推移しながらコントロールしていった。

鈍感なヒロインと癖の強いガキを誘導するのはなかなか至難の業だったが、それもなんとか成功し、原作でいうハッピーエンドを先日終えたのを確認したために、こうして他の風紀委員メンバーに仕事を一時任せ、今までがんばってきた自分をねぎらう意味も兼ねてこうして一人優雅に紅茶を飲んでいるというわけである。

「（これでは何事もなく学園生活を終えるだけ。そうすればあの忌々しい生徒会ともようやくおさらばできる。これほどめでたいことはないな！）」

本来ならば生徒会メンバーをきつちりと更正させるためにいろいろやったほうがいいのだろうが、もう表向きは（・・・）なにもしていないだろうし、それをわざわざ粗探しするのもめんどくさい。するとしても俺が卒業してから俺の後を継いだ誰かがやるだろう。

そう考えた俺は、ちよつとした達成感とともにまた紅茶を一口口に含む。その時だった。

こんこん

「お嬢様、今大丈夫ですか？」

ノックとともに自分の腹心である男性の入室を求める声が聞こえてきたので許可を出すと、執務室の扉から腕に風紀委員のシンボルである腕章をつけた角刈りの大柄な男子生徒が部屋へと入ってきた。

彼の名は『磯野健二（いそのけんじ）』。幼いころに父親がどこからか拾ってきた子供

で、俺の世話役兼遊び相手。まあつまりは私の腹心でもありちよつとした幼馴染でもある男だ。

父の話を聞くと、どうやら彼は父の昔の友人が愛人との間に作った子供らしく、その友人が病気にかかって死んでしまい、その最後の頼みとして家に連れてきたのだ。

ちよつど自分のでご、げふんげふん。友人が欲しいと思っていた俺はそれを歓迎し、今でもこうして俺の腹心、そして貴重な友人として手元においているというわけである。

はじめはどこともわからない、いつては悪いが馬の骨である健二を俺のそばに置くのは相応しくないというやつも親戚の中から出てきたが、健二の方は幼いころから一緒にいた俺についていくのに不満はないのか、それとも家に恩を返すためか、必死で努力をしてくれて俺という名家の娘のサポート役としてどこからも文句がでないほど優秀な友人、そして部下として自らを成長させていった。

いつも冷戦沈着でいて、豪胆である俺の右腕でもある存在。しかし俺はそんな彼がなにやら微妙な表情をしていることに気づき、思わず首を傾げる。

「どうしたの健二、そんな顔して? いつもあなたらしくありませんわ?」

いつも俺がなにもいわないかぎりは「鋼鉄の仮面(アイアン・マスク)」とあだ名されるほどのポーカーフェイスの彼が表情を崩すこと自体が珍しいので思わずそう尋ねる

と、彼はしばらくになにやら悩みながらも、ゆっくりと口を開いた。

「……申し訳ありません、お嬢様。なにしろ予想外の客人が来たもので」

「客人？この時間に？」

「はい」

健二の言葉に俺は再び首を傾げる。何しろ今の時間は夕方。ほとんどの生徒がもう帰宅しているはずなのにそんな時間に客人など珍しいと思つたからだ。

しばしその不可解さに考え込んでいたが、客人を待たせるのは申し訳ないし、わからないことを考えていてもしょうがないと、俺は一旦顔を上げる。

「まあいいわ。とりあえず、お通して？」

「承知しました。それでは少々お待ちください」

健二は俺の言葉にそう一礼すると一旦部屋から退出し、少しした後再び扉をノックする音が。

「お待たせしました。こちらが風紀委員長の執務室になります」

そういつて健二は客人だという人物に俺の執務室に入るように促すと、その人物は戸惑うような気配を見せるも、恐る恐るといった感じで、部屋へと入ってくる。

その人物の姿を確認した俺は思わず驚愕で目を見開いた。

「——あなたはッ!？」

そこにいたのはあまりにも予想外な人物だった。

☆ ☆

——とある人物が風紀委員会の執務室にやってきてから約一カ月後の昼下がりに、俺たち風紀委員は、とある案件を生徒会につきつけるために、彼らの根城である生徒会室まで足を運んでいた。

「——生徒会のリコールだ?!」

「はい、ちゃんと署名と手続きの書類は揃えてあります。——これはコピーですがどうぞお読みください」

俺の言葉に激昂する生徒会長、九劉雅人。俺はそんなかれに一枚の書類を差し出すと、彼はそれを奪い取りなにかの間違いではないかと何度もその紙を見渡すが、それと間違いがあるはずはない。風紀委員全員で何度も見直したのだから。

そう、俺たちが今回ここに来たのは生徒会にリコール、つまり解散をもうしわたすためにここまでやってきたというわけだ。

本来の彼らの能力とカリスマならこんな自体にはならないだろうが、ヒロインがこの学校に来てからの彼らの行動がまずかった。

生徒会活動の職務怠慢、ヒロインに近づいたであろう男子への精神的、そして物理的手段を使った恐喝、生徒会費の横領、そしてヒロインにわずかでも害意を抱いた女子生徒、男子生徒を実家の権力を使って退学や定額に追い込むなど、問題行動は後を絶たない。

リコールされた理由についてそう告げると、今まで黙っていた生徒会副会長である大黒白楼が眼鏡を人差し指で軽く持ち上げるとこちらをいつもの冷静な姿はどこへやら。物凄い形相で睨みつけてきた。

「証拠はあるのですか？それがないとこちらとしても承服できかねますが？」

「そ、そうだよ！証拠をだせ証拠を!!」

白楼のその言葉に、生徒会庶務である財全尊が騒ぎ立てる。

うん、いわれると思った。でも仮にも学園屈指の名門ぞろいの生徒会に喧嘩を売るのは証拠のひとつも揃えないと思つてたのかな、この人たちは？

内心呆れながら俺は慌てずゆっくりと口を開く。

「もちろんですわ。この一ヶ月私の友人（・・・）にじっくりと調べなおしてもらいました。——ねえ、大門さん」

「そうやね、天城はん」

「「は?」」

私の言葉に生徒会のうちの四人が思わず呆けた声を出す。それもそうだろう、敵である俺の言葉に答えたのは自分たちの見方である生徒会会計、大門周防だったのだから。

大門は生徒会メンバーを書き分けてゆっくりと私の前に出ると、手に持っていた鞆の中から一つの書類の束を取り出して私に差し出してくる。

「これがこの一年間のこいつらの行動の調査録や。実家の権力を使った悪事もばっちり入ってるから有効に使ってくれ」

「もちろんですわ」

優雅に微笑みながらその書類を受け取る俺。しかしそれに我に返った生徒会メンバーの一人、生徒会書記の神宮寺武彦が待ったをかける。

「ちよ、ちよつと待てよ。俺たちを裏切る気か大門!!」

「じゃかあしいわい、甘ったれたクソガキどもがッ!!」

「!？」

仲間であるはずの自分たちを裏切った大門を神宮寺は糾弾するが、大門はそれを一括して黙らせる。

その顔は温和な彼にしては珍しく、憤怒の感情で彩られていた。

「この一年、実家の命令でコネを作るためにあんたらと一緒に行動してきたがいつもいつも面倒ごとの尻拭いばかりやらせやがつれもう我慢できんわ! あんたらとは縁を切らせてもらう!!」

「——いいのか? 俺たちの家がだまつちやいないぞ?」

大分鬱憤が溜まっていたのだろう、激昂する大門。そんな大門を睨みつけながら生徒会長は脅すようにそういうが、大門はそんな彼を鼻で笑う。

「はっ! 困ったらお家に泣きつくとはさすが三大財閥の時期当主様は格が違いますのお?」

「……なんだと?」

「好きにしたらよろし。実家でもどこにでも行つて好きなかだけわしを潰すための工作でもおこなえばよろしいがな。——尤もそれができたらの話ですけどねえ」

そういうと大門は新たな書類の束を鞆から取り出すと生徒会長の前に叩きつける。

生徒会長はそんな彼の行動に額に青筋を立てながらもそれをなんとか抑えると、その

書類の中身を確認する。

「——なんだとツ!?!」

「?どうしたんだい雅人?」

驚愕の表情を浮かべる生徒会長の様子を不思議に思ったのだろう。副会長は訝しげにしながらも横から生徒会長が持っている書類を覗き込む。

そこにはこう書かれていた。

『悠久学園生徒会長九劉雅人、副会長大黒白楼、書記神宮寺武彦、庶務財全尊の四名を退学処分とする』

「退学だと!?!」

「なに!?!」

そう、大門が彼らに渡したのは彼らの退学を通知する書類だったのだ。

慌てながらそれを覗き込む彼らを見て、大門は嘲笑う。

「あんさんたち、どうやらあの子に入れ込む前もいうこと聞かないからって実家の権力で無理やりどうにかしてたみたいですねえ。その時の悪事の証拠がたまりと出てき

ましたわ。——あんたらの実家があんたらに愛想がつかすほどになあ」

そう、彼がここまで生徒会の面々に強気なのはこれが理由だったのだ。

政財界の大物、大商人大門家に生まれた彼はとびつきりの名家ぞろいである生徒会にコネ作りのために入ったのだが、その生徒会は表向きはいいが、裏ではいうことを聞かないやつ、少しでも自分たちの意に沿わない生徒は実家の権力で黙らせ潰す。そんな腐ったガキの集団だったために、彼は彼らの活動を抑制するために彼らに対抗できるだけの家柄である俺に接触。そのままスパイとしてこの一年間生徒会に居続けたのだ。

その彼や健二に集めさせた彼らの愚行の証拠を彼らの実家に突きつけ、こうして彼らの退学処分を取り付けることに成功したというわけである。

未だなにが起こったか理解していないのか、呆然とした彼らをよそに話は続く。

「あなたたちの家族はたいそう悲しんでいましたよ。まさか自分たちの子供が、弟が、兄が。こんなことをするとは思わなかったとね。——尤も私もはじめはここまでするつもりはありませんでした」

「？なに？」

「どういふことだ？」

俺の言葉に不思議そうにする生徒会メンバー。その中には大門や、健二以外の風紀委員会メンバーも入っていた。

ああ、そーういやいわなかつたっけ?

「あなたたちは確かにやりすぎましたが実家の権力を使うという点は間違いでありません。この学校に来るのは権力に甘やかされた子ばかりですからそれ以上の権力はまず必要でしょうし。なのでよほどの被害が出ない限りあなたたちの行動を黙認しようとしていました。——尤も彼女(・・・)の訴えを直接聞くまでのことですが」

「彼女?それはいつたい……」

生徒会長の呟きに、私はため息を一つつくつくと、そばに控えていた健二に視線で合図をして、彼女に生徒会室まで入ってきてもらうように促す。

健二が部屋を出て行つてから少し、扉の向こうから女性の声で「失礼します」という声が聞こえたかと思うと、その女性が部屋の中へと入つてくる。

その女性の姿に、はじめはどんなやつが自分たちをここまでの苦境に貶めたんだと扉を睨みつけていた生徒会メンバーは、しかしその女性が誰なのか理解すると、あまりの驚愕に口をあんどりと大きく開けた。

「——な、なんでお前が!?!」

生徒会長、いや元生徒会長九劉雅人が叫びながらも震える指で指した先にいるのは、一人の気弱そうな雰囲気を持つ女子生徒。

用紙はせいぜい並より上といった程度だが、その小柄な体とぱつちりと開いた大きな

瞳から小動物のような可愛らしさを感じる彼女の名は『桜木シオン（さくらぎしおん）』。
この学校で数少ない庶民出の特待生であり、私が認知する中で最大の被害者。

——そして生徒会メンバーが崇拜するヒロイン様である。

☆ ☆

「な、なんで彼女がここに……?」

「それは彼女があなたたちの最大の被害者だからですわ」

生徒会庶務の震える声を、しかし俺は一刀の元それを切り捨てたが、そんな俺の物言いが気に入らなかつたのか生徒会長が俺に向かって食って掛かる。

「被害者とはどういうことだ！俺たちは彼女をこれ以上なく愛し、大切に扱っていた!!」
「そ、そうだそうだ!!」

会長の声に便乗して声を上げる財全。どうやら他の二人も同様の意見のようでこちらを激しく睨みつけてくる様子を見て、俺は思わずため息が漏れるのを感じた。

「わかってねえ。本当にわかってねえよこいつら」

彼女が最大の被害者だという理由を教えるために、俺は再び口を開こうとしたが、その前に叫び声を上げた人物が一人。

「——ふざけないで」

この世界のヒロイン。桜木シオンだ。

先ほどまでの気弱そうな印象とは打って変わって彼女は冷徹に生徒会の面々を見回す。その瞳には冷たいながらも激情の炎が燈っているのが見えた。

あまりの豹変に凍りつく生徒会の面々。そんな彼らを冷たく一瞥しながらも彼女は話を続ける。

「確かに私は最初はあなたたちに興味を示した。あなたたちはそれは輝いて見えたもの——でもそれは遠くから見ただけでよかったの。私は普通に行きたかっただけなのに何度も巻き込まれた」

「離れようとはしなかったんですか?」

俺のその質問に、彼女は涙を零しながらも気丈に答える。

「したわよ!!でもこいつらはそれを照れ隠しといって離れさせてはくれなかった。家や教室まで迎えに来て、私が周りからどんな風にいわれてると思う!!いいとこのおぼっちゃんを誑し込んだビッチっていわれてるのよ!!」

「なんだと!?!」

「そんな!!」

桜木シオンの涙交じりのその告白に驚愕の声を漏らす生徒会メンバーたち。

ちなみにこの噂のことは俺も知っていたが、生徒会の面々がなんとかすると思いきり黙認していた。尤もそれが間違いだっただけだ。

「それだけじゃないわ!九劉生徒会長は私に近づくと人間を暴力で遠ざけようとするし、大黒副会長は私の周りの人間を脅して私に話しかけないようにする!神宮寺先輩は来ないでつていつても私の後を尾けてくるし、財全さんはセクハラばかり!!もうあなたたちにはたくさんよ!!」

そういうと彼女は大粒の涙を流しながらその場に蹲る。

あまりの痛ましいその姿。沈黙が部屋を支配する中、震える声で口を開く人物が。

「……………どうしてだ」

生徒会長、九劉雅人だった。

生徒会長はいつもの自信はどこにいったのか、青ざめた顔でこちらを怯えたような瞳で見据えていた。

「そこまで嫌ならなんでいわなかった? いってくれれば俺たちだって」

「——いえるわけないでしょッ!!」

言い訳してみた生徒会長のその言葉に、しかし先ほどまで泣き崩れていた桜木シオンが月光の声を上げる。

その顔はすでに怒りを通り越して怨念のようなものを感じてしまう。

「私は庶民! あなたたちと違ってごく普通の一般家庭に生まれた人間なの!! 逆らえるわけないじゃない!!」

「なッ!? 俺たちはそんなことしない!!」

桜木の言葉に生徒会庶務財全尊が激昂するが、彼女にあらかじめ相談されていた
(・・・) 俺はそこで口をはさむ。

「あんた方がやるかどうかは問題ではなく、あなた方が実際にそれを行うことができる
(・・・) のが問題なのでしよう。あなた方にはそれができる権力があり、能力がある。

——そしてそれを行ってしまいう実績も。彼女はそれを知っていたんですよ」

そうですねと桜木嬢に視線を向けると、彼女は瞳を潤ませながらもしつかりと頷く。

「私はつらかった。私のせいでひどい目にあっていく人たちを見るために心が痛んだ

わ。でもあなたたちが怖くてなにもできなかった。もし本気で怒らせたなら私だけじゃなく家族にも迷惑がかかるんじゃないかって。そう考えたら黙っているしか私にはできなかつた。——でもそこで私は姫亜様のことを知つたの。姫亜様はこの学園で唯一あなたたちに対抗できる存在。だから一か月前にこの人に相談したのよ。あなたたちのことをどうにかしてほしいってね!!」

『——なッ!?』

彼女の声に驚愕の声をあげる生徒会メンバー。

そう、実は一か月前に俺の執務室に来たのは彼女、桜木シオンだったのだ。

生徒会の能力、権力任せの求愛行動。彼女を誰にも渡さない、彼女を護らないという違法行為。そしてその被害に遭う生徒たち。それに我慢できなくなった彼女は俺の所に駆け込んできたのだ。

それはどれほどの勇気がいったらう。彼女は全校生徒に完全に生徒会側の人間だと見られており、私もその時まで彼女とは直接の面識はなかつたが完全にそう思つていた。自分に対して噂を把握していた辺り自身も周りからそう見られていることを認識していたに違いない。

なのにその生徒会と敵対している風紀委員会まで単身一人やってきて、下手をしたら自分をも罪にとわれかねない告白をするのだから。それほど彼らの行動が彼女を精神

的に苛んでいたということだろう。

私は善人ではない。むしろ細かいこととはいえ必要とあれば違反行為も見逃すこともしていることから彼ら生徒会とどっこいどっこいといったところだろう。尤も私は彼らのように自分の都合のいいように自身に持たされた権力を使うことは絶対にならないが。

彼女の言葉を聞いた生徒会メンバーは、よほどショックだったのか全員顔を真っ青にしており、その顔は深い絶望感に彩られていた。

まあそれも仕方ない。彼らは原作では自身の人生に関わるコンプレックスや問題を彼女に解決してもらったせいとか、彼女に深い愛情を抱いていた。

そんな彼女と自分たちの間にできていたと思っていた(・・・)絆を完全に否定されたのだから。

……でも私は同情しない。全て彼らの自業自得なのだから。

★

★

——それからの話をしよう。

あれから生徒会の四人は、俺が説得した実家の指示で特に問題なく退学にすることができた。

最初は彼らのような子供を育てた実家なのだから説得は難航するかと思つたらわりとそうでもなく、権力をもつ者のあり方を熟知していた彼らは思つたよりすぐに動いてくれた。どうやら彼らがあそこまで悪質に育つたのは彼らの能力の高さからついつい甘やかしてしまつたからだそうだ。

俺の報告に激昂した彼らの家族は彼らの実家においての実権を全て剥奪。地獄の再教育を施し、一からやり直させるらしい。(ちなみにその時これを聞いた桜木嬢はよほど嬉しかったのかとてもイイ笑顔で笑つていた。

ただ生徒会の面々が逆恨みで彼女を襲わないとも限らないので、彼女の能力の高さもあり私は元々卒業してからはどこかの会社で働く予定だったという彼女を家の実家の会社にスカウト。彼女は喜んでそれを受けてくれた。

——そして十年後、自身の性的問題的にどうにも結婚する気が起きなかつた俺は両親が無理にそれを進めなかつたこともあり女のみで家を継ぎ、彼女はそんな俺の健二と並ぶ腹心にまで成長していた。

「——姫垂様この書類にサインをお願いします」

「わかったわ」

差し出された書類の中身を確認しながら生き生きと毎日を生きる彼女を見て私は思う。
う。

この世界に転生した当初は、どうせ自分は神様のおもちやなんだと心の底で卑屈になつていたが、俺が転生したことで彼女を救うことができたのなら、別に神様のおもちやでもいいんじゃないかと。

……ただ、

「……………(うつとり)」

なにをどう間違えたのか、彼女が時折俺のことを恋する乙女の視線で見ってくるのが、どうしたらいいのだろうか？

——おもちやでもなんでもやるから教えてくれよ。なあ、神様。



・天城院姫亜（てんじょういんひめあ）

この小説の主人公。前世ではなんとか就職することができたが上手いかずにそうそうにクビに。神様の暇つぶしのおもちやになるためによりにもよって姉がハマっていた乙女ゲーの悪役キャラに転生することに。

将来約束されている自分の死を回避するために自分を磨きあげ超人ぞろいの生徒会を凌駕する超・淑女（スーパーウーマン）に。

原作は傍観するつもりだったが、ヒロインに現を抜かして生徒会業務を怠り問題行動を起こす生徒会を牽制するために学校から風紀委員長への打診を受け、原作の展開により生じる被害を減らすためにそれを受けることに。

下手に刺激してもあれなので原作が終わってからはよほどの問題行為以外は見逃そうと思っていたが、ヒロインの訴え、そしてスパイである生徒会会計の大門周防から寄せられた証拠を使い生徒会の面々の実家と交渉。彼らを学校から追い出すことに。

卒業してからは心が男、体が女ということから男にも女にも興味がわかかなかったために結婚はしないで実家を自身が継ぐことを決意。そのカリスマ性と超人的な能力から部下からは「女主人（ミストレル）」と呼ばれ尊敬され、親しまれている。

最近の悩みは部下の視線が熱すぎることに。

・桜木シオン（さくらぎしおん）

世界の元となった原作、『悠久物語』のヒロイン。

向上心が強く、自身を高めるために名門中の名門である悠久学園に入学するが、そこでいろいろとやっかいな生徒会に目をつけられ、彼らに関わる問題に巻き込まれ、なんとかしないと自分も大変な目に遭うためにいやいや解決に奔走していたら本人の意図しないところで逆ハー状態に。

愛が重すぎる生徒会の行動により、友達になった人たちが自分から離れ、どんどん自分のせいで人が学園から追いやられ、嫌気がさし、生徒会と唯一対抗できる主人公を頼るようになる。

悠久学園で特待生の地位を獲得したその能力を買われて主人公の実家の会社で働くことになった現在では、毎日主人公の傍で生き生きと働き、自分の上司に熱い視線（意味深）を送る日々を送っている。

・磯野健二（いそのけんじ）

主人公の幼馴染兼世話係として幼いころから主人公の傍にいる主人公の第一の臣。
特技は野球。

・大門周防（だいもんすおう）

元生徒会会計。

錚々たる家柄の人間が集まる生徒会に対してコネを持ったために生徒会に入ったが、生徒会メンバーがヒロインに現を抜かして好き勝手する生徒会の面々に嫌気がさし、主人公に接触。そのまま主人公のスパイの一人として働く。

・生徒会メンバー

超人的な能力を持つイケメソ集団。いろいろ問題をかかえていためんどくさい男たちだったが、ヒロインが（いやいや）それを解決し、ヒロインへの恋愛感情が暴走。さまざまな問題行為、違法行為を起こす。そのために学校を退学することに。

退学してからどうなったかは不明。

・生徒会メンバーの実家の家族

権力者のあり方を理解している人たち。意外にいい人たちで退学した生徒会の面々を再教育することに。その後どうなったかは不明。

とある空手家のセカンドライフ：史上最強の弟子ケンイチ

書かない理由：空手の知識が足りないため（史上最強の弟子ケンイチ）

これは一つの善行により武の才を手に入れた一人の転生者の物語

★ ★

俺がその記憶を思い出したのは、俺が五歳の時、階段から落ちて頭を打ち付けて気絶してしまったのがきっかけだった。

前世の俺は、小説や漫画の題材になるほどの伝説的な存在である空手家の子孫の家に産まれ、幼いころからその空手家が創始した流派の跡取り息子として、武術家としての英才教育を受けてきた。

それは常識的に考えて子供に施すような教育ではなかったが、幼いころより一線級の武術家として活躍する父親や兄弟子たちの背中を見てきて育った俺は、そんな彼らに憧れを抱いており、早く追いつきたかった俺は、時に泣きたくなるほど厳しい修業でも、文句一ついわずに黙々とこなしていた。

一流の武術家を目指して修業に励む日々。しかし俺は全くつらくはなかった。それが憧れの人たちに近づく行為だと信じていたからだ。……だがそんな俺の夢も唐突に終わりを迎えた。

俺が十五の時、家の流派の総師範である祖父に告げられたのだ。

『——武の道を諦めろ』

先にいっておくが、別に祖父は意地悪で俺にこのようなことをいっているのではない。理由は全て俺にあった。

——俺には絶望的に武術の才能がなかったのだ。

薄々は感づいていた。同期の門下生が簡単に覚える技の習得も俺は時間をかけなければいけないし、大会に出てもなかなか結果を出せない。

自分で言うのもなんだがそこいらの人間とは修業時間が違うので試合に勝てないわけではないのだが、それでも世界的な流派の宗家である実家の後を継ぐ人間に求められる実力に達せられるほどの才能がなかったのだ。

だが俺も幼いころから父親たちの背中を追いかけて修業に励んできた身。いわれて
そう簡単にあきらめられるわけがない。

そう考えた俺は、俺が武の道を辞めた際後を継ぐ予定であるという兄弟子との試合を
要求。それに勝てたら今のまま後継ぎとして武術の道を諦めずにすむことになった。

その兄弟子には俺も幼いころから修業をつけてもらっており、文字通り兄のように
慕っていたのだが、その腕は凄まじく、体格的に追いついた今でも勝てたためしはない。

それは絶望的な戦い。だが諦めるわけにはいかない俺は一カ月の猶予を貰い、自身に
今までの修業が可愛く思えるほどの猛特訓を課し、その試合に臨み——

——そして敗北した。

それは一方的な試合で、俺のことをよく知る兄弟子たちの中にはやりすぎではという
声も上がったのだが、彼と付き合いの長い俺にはわかった。俺を殴る度に彼の瞳に苦悶
の表情が浮かんでいたことを。

おそらく彼も苦しかったのだろう。俺が彼のことを兄と慕っていたように彼も俺を
弟のように思ってくれていることを知っていたからだ。

後で他の兄弟子に聞いたところによると、今回の試合は本当は彼の本意ではないそう
なのだが、祖父にこれから俺がこの道をずるずると続けてもためにならず、ならば早い

うちに引導をわたし諦めさせたほうがいいということで、この試合を受けたんだそう
だ。

それを聞いた俺は、もうなにもいうことができず、祖父の言葉に従い武術の道を諦め
普通の人生を歩むことにした。

普通の学生としての生活は、俺が想像したより楽しく刺激に満ちた時間だったが、そ
れでも今までの生きがいでもある武術を失ったためなのか、どこか胸にぽっかりと穴の
あいたような虚しさを常に感じていた。

それはとある会社に就職し、妻を迎え子を為しても変わらず、そんな思いを振り切る
ためにも俺はがむしやらに働いたのだが、それでも武術への情熱を振り切ることはでき
なかつた。

だからだろうか。自宅に変える途中にチンピラに絡まれている学生を見て助けてし
まったのも。

純粹に彼が哀れだったのもあるが、武術の道を閉ざされ使う機会がなくなった空手の
技を使いたくなくなってしまったのだ。……尤もそのせいで報復として、後日チンピラの
中の一人に報復としてナイフで刺されて死んでしまったのだが。

だが俺は運がよかった。思わぬ形で死んでしまい人生の幕を閉ざしてしまつたはず
の俺は彼（・・・）に出会うことができたのだから。

そう――

――『神様』と呼ばれる存在に。

★ ★

彼がいうには俺がチンピラから助けた学生は、将来世界を救う救世主になる存在らしいのだが、あのままではチンピラに抵抗したことでその怒りを買ってしまい、俺と同じくナイフで刺されて死んでしまうところだったらしい。そんな彼の運命を俺が代わりに請け負ったことにより世界は救われたので、そのお礼として新しい人生をプレゼントしたいといってきた。

しかし俺はそんな彼の言葉にさほど興味を持てなかった。またあのような虚しい日々を送るくらいなら、このまま死んで天国やら地獄やらにつれていってもらったほうがいいかと思つてしまったからだ。

だが神様のとある言葉に俺は耳を疑つた。――欲しい才能があるのならくれてやるという言葉に。

俺はその彼の言葉に祖父の言葉を思い出した。「武術をやめろ」という言葉を。

俺は才能のために武術の道を諦めたが、才能があつたら諦めずにすんだのにと何度思ったことか。

そんな何度も頭の中で繰り返したIF（もしも）。それが現実になるという言葉に俺は逆らえることはできず、彼の申し出を受けることにした。

★ ★

そして新しい生を受けた俺は、なにか理由があつたのか物心ついた時からとある小さな孤児院に世話になっていたが、その院長は年寄りだが温厚で思いやりのある性格で、俺も含めた孤児院の皆に多大な愛情を持つて接してくれたので、生活にこれといった不自由はなかった。

そしてある程度年齢が経ってから肝心の才能の方も試すために生前学んだ空手の技を試してみてもわかった。自身の体のキレが生前とは圧倒的に違うのを。

力や体力はもちろん厳しい修業を積んだ生前の体の方がすぐれているが、それ以外では少し体を動かした今の方が優れていることが理解できたのだ。

俺はこれに歓喜した。これだ！これこそが俺の求めていたものなのだ！！

それからの俺は自分より年少の子供たちの世話をしながら生前行っていた修業の中で今の自分が行える修業を全て行っていった。

その度に力がつき、キレが増していく自身の体に俺はますます自身の体を鍛え上げるのにのめり込んでいった。

血の繋がっていない俺のことを「息子」と呼び愛情を注いでくれる院長に、俺を兄と慕って懐いてくれる子供たち。そして日に日に上がっていく俺の実力と、俺は幸福な毎日を送っていた。

——この男が現れるまでは。

「——ぐあッ!?!」

「じいさん!!」

「ざまあみやがれ、このジジイ!!」

俺をたつた今殴り倒したこの男の名は氷室（ひむろ）。関東系のとあるヤクザの幹部をやっている男であり、この孤児院の土地を狙い、何度かうちの孤児院へとやってきていた。

だが家の院長であるじいさんはそれを断り続けていた。この孤児院が潰れてしまえば俺たちがどうなってしまうかわからないからだ。

そんなじいさんの様子に痺れを切らした氷室が組員を連れてここに押し寄せてきたのだ。

「——このクソ野郎!!」

じいさんを殴られて頭に血が上った俺は氷室に殴りかかる。それを防ぐかのように氷室の部下が割って入るが、

「がつ!?!」

「ぐあ!?!」

「なにッ!?!」

俺を取り押さえようと伸ばしてきたその手をよけて二人の護衛を殴り飛ばす。

そのまま驚愕の票所を浮かべている氷室に殴りかかろうとするが、

「ぐ、なめるなクソガキが!!」

「なッ!?!」

先ほど殴り倒した男の一人が俺の体にへばりついて動きを体をはって止めてきたのだ。

氷室はそんな俺の硬直を見逃さず、手に持っていた拳銃の柄で殴り飛ばす。

「ぐはッ!?!」

俺はそのまま先ほど殴り飛ばされたじいさんに体ごとぶつがった。

「うぐツ。だ、大丈夫か？」

「お、おう。なんとか……」

俺を気遣うじいさんの言葉に、俺はなんとかそれだけを返す。

そんな俺たちを苛立たしげに見ていた氷室は、俺を殴り飛ばすために使った拳銃をそのまま俺たちへと向ける。

「ふざけやがって、このクソガキ！ そんなに死にたかつたらこのまま殺してやるぜ!!」
そして氷室が引き金を引こうとした……その時だった。

「——いやー、子供を殺すのはさすがにやりすぎでしょう」

——その声が聞こえてきたのは。

「ツ!?だ、だれだ!!」

突然聞こえてきたその声に、氷室は声のした方に振り向き、俺たちもそれにつられて視線を向ける。

そこには一人の青年が経っていた。

ぱつと見、どこかの大学生だといわれても通じるような青年だったが、前世の経験と神様に貰った武術の才能により俺は気づくことができた。

——その身に秘める、彼の暴力的なまでの圧倒的な力に。

暴力の世界に身を置く者として、彼もそんな青年の実力を感じることができたのか、氷室は額から冷や汗を流しながらも虚勢をはり、彼を怒鳴りつける。

「だ、誰だてめえは!?! 外の見張りはどうした!?!」

「ん? ああ、彼らなら眠つてもらつたよ? 今頃いい夢でも見てるんじゃないかな?」

「——なツ!?!」

なんでもないことのようにそう答える青年の言葉に、思わず絶句する氷室。

それも仕方ないだろう。俺たちがこの部屋でやりとりをしている間、外からはなにも物音が聞こえなかった。

ということは目の前のこの青年は拳銃を所持した男数人を、物音を立てずに無力化したということなのだから。

だが青年がゆつくりとこちらに歩いてくる姿に、氷室は怯えるかのように俺たちに向けていた拳銃をその青年へと急いで向ける。

「く、来るんじゃない?! おまえらやつちまえ!!」

その氷室の言葉と同時に彼の手下たちは各々の武器を取り出し、青年に襲いかかった。

「に、逃げる!!」

その光景に思わず俺はそう叫んでしまう。彼がとんでもない実力者なのは感じ取れるがどう考えても絶体絶命な状況。常識的に考えても彼がそれを逃れることができるとは思えなかったからだ。

——だからこそ、俺はその時見た光景を信じることができなかった。

「ふッ!」

青年は襲いかかってくるヤクザ者たちの姿を一つ鼻で笑うと、一息でそいつらをとんでもない力で瞬く間に全員殴り飛ばした。

「なッ!?!」

そんな常識はずれな光景に、氷室も思わず驚愕の声を出す。

だがそれも仕方ないだろう。俺は前世では多くの武術家、格闘家を見てきたが、そんな俺の経験でも目の前でみた光景を理解することなどできなかつたからだ。

自らを阻む者がいなくなつたからか、青年は再び氷室へと向かつて歩むを進める。

「く、くるんじゃねえええええええええ!!」

化け物のような実力を示した青年が自身に近づいてくる姿を見て、恐怖に負けたのか引き金を連続で引き絞るが、青年はその銃弾の軌道が見えているのか、体をしなやかに

ゆらし、ついに氷室の目の前にまで到着すると、彼が手に持つ拳銃を掴むと、そのまま握りつぶす。

「なんだとツ!？」

「——寝ている」

驚愕する氷室に青年は一言そうつぶやくと、首に手刀を落とすと、氷室はその場で崩れ落ちた。どうやら気絶したらしい。

(あんな漫画染みた方法でよくもまあ……)

俺の今までの常識を覆す事態に、呆然とする俺とじいさん。

そんな俺たちの様子に気づくと、青年はにこやかな笑顔で俺たちに近づいてくる。先ほどの圧倒的な覇気が嘘のようなさわやかさだ。

「大丈夫でしたか?」

「あ、ああ助かったよ。ところで君はいつたい……う?」

じいさんの言葉に青年は一瞬きよんとしたが、やがて何かを思い出したかのような表情を浮かべると、申し訳なさそうな表情で口を開く。

「ああ、そういえばいつてませんでしたね」

そういうと、青年は再びさわやかな、それでいてどこか深みのある笑みを浮かべて言葉が続ける。

「僕の名前は、鈴木はじめ」。しがない空手家ですよ」

——これが俺、『筑波歳三（つくばさいぞう）』と生涯の師と仰ぐこととなる空手の達人『鈴木はじめ』の出会いだった。

★ ★

■筑波歳三（つくばさいぞう）

・この小説の主人公にして転生者。

前世では漫画の題材にされるほど高名な空手家の子孫として生まれ、その空手家が作り上げたとある空手の流派の跡取り息子として生きるが、才能がなく武術の道を諦める。

しかし諦めたはいいが武術の道を諦めきれず、再び技を振りたいと思った歳三はあ

る日チンピラに絡まれていた学生を発見。救助の目的で以前学んでいた空手の技を使い、そのチンピラ達を打ちのめすが、それを逆恨みしたチンピラの一人によってナイフで刺されて死亡するが、助けた学生は実は将来世界を救う救世主で、自分はその身代りで死んだことをしる。

そしてそのお礼として神様により武術の才能を与えられ「最強の弟子ケンイチ」の世界に転生。とある理由により物ごころついたころより孤児院で育つが、その院長の愛情を存分に注がれ、また自身の兄弟である年少の子供たち、そして前世では考えられないほどの速さで成長していく自身の成長に幸せを感じていたが、ある日、孤児院の土地を狙っていたヤクザ者、氷室が急襲。絶体絶命のところを空手家の達人である鈴木に助けられる。

空手馬鹿で、転生してある程度体が自由になる年齢になってからほぼ毎日鍛錬を行っている。

今一番の悩みは顔がいかったために初対面の子供がたいはいは怖がってしまうこと。

魔法先生ネギま〜おりーしゅくんのゆううつ〜：魔法先生ネギま!?

書かない理由：他の連載があり、まだプロットが練りあがってないため（魔法先生ネギま!?)

イギリスがウエールズの山奥にメルディアナ魔法学校はある。

この学校は世界中に点在する魔法関係の教育機関の中でも多くの優秀な魔法使いを輩出してきた所謂名門で、魔法世界（ムンドウス・マギクス）で起きた大戦争、「大分裂戦争」の英雄である“千の呪文の男（サウザントマスター）”を生み出したこともあり、今ではこの学校に入学を希望する魔法使いは、年々増加の一途を辿っている。（尤も当のサウザントマスターはこの学校を中退していることを知っている者はほとんどいないのだが）

そんなメルディアナ学園の渡り廊下を、一人の少年がをにこやかな笑みを浮かべながら歩いているのが見える。

紫の瞳に艶やかな黒髪を持つその少年は、まるで名工が彫った彫刻のように整った容

姿をしており、機嫌よく鼻歌を歌っているその姿はまるで天使のようにも見えた。

その証拠に先ほどから彼とすれ違う人々の視線は男女問わず彼に釘付けとなつてい
るのだが、しかしそれには気づいていない、

彼は決して鈍感なほうではなく、むしろこういった人の視線には敏感な方なのだが、
今回ばかりはある理由により、その限りではなかった。

その理由としてはいたって単純。彼がとある理由から気分がとてもよかつた。
つまり、

「ははははは！これでやつとあいつ（・・・）から開放されるぜ、ちくしよめ!!」
——最高に「ハイ」ってやつだったからだ。

そんな彼の名は「オリーシュ・ランペルージ」。

今年十一歳になる少年であり、たった今このメルディアナを次席で卒業した学生。
そして——

——『転生者』である。



俺の名前はオリーシユ・ランペンルージ。転生者だ。

俺が自身に前世の記憶があるのを自覚したのは五歳の誕生日の時、テーブルに載ってるケーキの蝋燭の火を吹き消したとたん、気を失うほどの頭痛が俺に襲い掛かり、目が覚めたら全てを思い出していたのだ。

前世の俺は、都内の大学に通うオタクの入った学生で、夏コミや冬コミ。ネットアイドル発掘にアニメ鑑賞など、そんなことに青春を注ぐ駄目学生だったのだが、三年になつてさすがにこれはだめだと一念発起。

約一年ほどかけて、なんとかこの不景気の中一流と呼べる会社に内定を決めることができ、浮かれながこのことを報告するために実家に帰省する途中に、突然道路から道をはずれたトラックに轢かれて死んでしまったのだ。

そりやないよ神様とか考えながら、俺はそのまま意識を失ったのだが、目を覚ますとなぜか見知らぬ場所で見知らぬ老人の前に立っていた。

そしてその老人は俺がなにか尋ねる前にこういったのだ。

『——おめでとう、君は選ばれた』

なんでもその老人はこの世界で尤も高次元に位置する存在、つまり俺たち人間の言葉でいう“神様”てきな存在らしく、時々俺みたいに唐突に死んでこの世に未練を残した人間の魂を適当に選び、特別な才能を持たせ転生させ、世界にどういう影響を与えるか。その様子を観察するという暇つぶしが趣味なんだそう。

「テンプレきたー！」とか思いながらもなんて趣味が悪いやつなんだろうと思っただが、よくよく考えてみれば神様なんてどうせ永遠に生きるだろうから仕事以外にこういういつでもできる趣味（もちろん神様がいつでもできるという意味だが）でも持たないと暇を持て余してしまうのだろう。

そのことに若干の同情の念を抱きつつ、でもまあ俺も死んじまったし、こうなったらもらえるもんもらって第二の人生を有意義に過ごそうとさっそくもらえるという特別な才能がなんだか聞いてみたら、それはある程度自分で決められるらしく、俺はさっそくそれを要求してみた。

『俺をイケメンにしてくれ!!』と。……我ながら欲望丸出しである。

い、いや、ちよつと待ってくれ、これは違うんだ。実はこの時俺はこれを俺の夢だと思ってたんだ。

だって突然事故にあつて気がついたら神様に出会つて転生つて、確かにオタクなら垂涎の状況だけど、だからこそありえないと思つた俺は、どうせ夢だからと、前々から思つていた「俺もイケメンに生まれて美人の彼女を捕まえていちやいちやしたい」という願いをぶちまけたのだ。本当にただそれだけなんだ！

……あれ？ひよつとして言い訳になつてない？

〈閑話休題〉

ま、まあそんなわけでその記憶が戻り、俺はようやくその時のことが夢ではなく現実だったと知つたわけだ。

俺はそれを知つたとき、絶望しそれを後悔した。

なぜかつて？それは俺が転生した世界に理由がある。

俺が転生した世界。それは魔法と剣どころか銃やロボットなんかが交錯し、魔法や気なんていう不思議エネルギーが存在するリリカルではないがマジカルな世界。――

の世界である。

—— 『魔法先生ネギま！』

★ ★

【魔法先生ネギま!】

これは週間マガジンで連載されていた漫画で、連載された当初は所謂ドタバタラブコメ要素が強かったが、物語が進むにつれ本来のテーマである「父親越え」が表面化し、それに係わる者達との「バトル」路線と、従来の「ラブコメ」路線とが交互に描かれるようになる

その設定とストーリーの緻密さ。そしてひと癖もふた癖もある魅力的なキャラクターたちにより、一躍ベストセラーとなった。

一オタツキー（死後）を自称する俺もちろん愛読していたのだが、それとこれとは話が別。

なにせ、前半はともかく後半はいつ死んでもおかしくない、死亡フラグだらけなのだ。他の二次創作のように「むげんのけんせい」やら「げーとおぶばびろん」なんてもらってたらもつと前向きでいけたかもしれないが、俺が貰ったのはあくまで「イケメン（笑）」。

確かに容姿は抜群によくなったが、戦闘能力や生存能力にはなんの恩恵もないのだ。絶望しても仕方ないだろう。

幸い俺が転生した場所はイギリスではあるがネギまの主人公であるネギとは全く関係ない村に生まれたので、悪魔襲撃事件には巻き込まれないだろうし、それなりに有名ならしい(母親談)魔法使いの家に生まれたので魔法を習う環境には困らなかった。自衛手段として必死に魔法での戦闘方法を修行することにした。最初は別に原作に関わらなきゃ大丈夫だとも思ったのだが、よくよく考えてみればネギまのクライマックスではなんか世界規模で大変なことになってたのをかろうじて覚えていたので、どっちみち自分の身を守れなくちゃ命の危険があると思ったからだ。

そんな俺の様子に両親はじめ困惑していたが、学習意欲が高いのはいいことだと協力してくれ、このメルディアナに入学するまでには単純な戦闘技術では少なくとも同年代には負けないと自信を持っていえるほどになっていた。

尤も俺が望むのはまず第一にこれからこの世界に起きる大事件に巻き込まれないこと。

ここで仮に目立ったとしたら無事卒業してどこぞの魔法関係の仕事に就職しても、兵士代わりに使われる可能性が高いことに気づいた俺は、メルディアナにいる間は実力を少し優秀なくらいに落とし、選考も魔法戦闘ではなく、錬金術。つまりは魔道具製作関

係の科目を選択した。オリジナル魔道具つてなんか懂れるし、これなら事件が起こっても兵士代わりにされることはないだろうと考えたからだ。

なので俺は隠れて先頭の訓練を続けながらも、メルディアナで勉強を続けていった。それが俺の生活の平穩に繋がると信じて。

「——尤もそれも無駄に終わっちまったんだが」

と、そこで俺は渡り廊下の向こうから近づいてくる一つの影に気づいた。

「オリーシユきょん!!」

先頭に立つ眼鏡をかけた赤毛（・・・）の少女の声に俺は思わず自分の頬が引き攣るのを止めることができなかつた。

そう、彼女こそ俺の平穩を乱した張本人だからだ。

だがいろいろな理由から彼女を遠ざけることができなかつた俺は、彼女を拒絶することもできずに表情を無理やり笑みの形に変えながらも、その少女を迎え入れる。

「どうした、そんなに慌てて?」

そんな俺の言葉に、その少女は不満そうに可愛らしく頬を膨らませながらも口を開く。

「——どうしたもこうしたもないですよ!卒業式が終わってからすぐにどっか行っちゃうんですから。探したんですよ?皆で卒業記念のパーティをするって約束した

じゃないですか!!」

「あーなるほど……」

そうか、そういえば卒業式が終わってあまりに嬉しかったからすぐに会場から出てきちまったんだっけ。すっかり忘れてた。……嘘だ。それもあつたが有耶無耶にして出席したくなかっただけなのだ。せつかく卒業して縁が切れると思ったのに、出席したらこのままなし崩しに縁を持ち続けることになりそうだからだ。

「まあ、面と向かってそんなこといえるわけがないがな」

そんなことを頭で考えながらも俺は言葉が続ける。

「悪い悪い。すまなかつたな、すっかり忘れてたよ」

「もう、仕方ないですねえ」

少女は俺の言葉に呆れたのか、ため息を一つついたが、すぐに満面の笑顔になると、俺の手を掴むと、再び口を開く。

「ほら、早くいきましょオリーシユさん!二人ももう待ちくたびれてますよ!」

「ははは、それは怖いな。わかった、すぐにいくからそう急かすなよ——」

「……」

——ネギ

そう、彼女の名前は『ネギ・スプリングフィールド』。
英雄“ナギ・スプリングフィールド”の一人娘にして今年のメルディアナ魔法学校の
主席卒業生。

——そしてこの『魔法先生ネギま!』の世界の主人公でもある。

……なぜか『女の子』になつていたが。

「——本当にどうしてこうなつたんだらうな？」

そして俺は思い出す。彼女と知り合うことになつた出来事を。

★ ★

それは約一年前のこと。俺が錬金術の教師に頼まれ資料を運んでいる最中、たまたま
通りかかった図書館の裏あたりからなにやら争うような声が聞こえてきたのだ。

その時はその日の講義は全て終わっているはずの時間で、図書館ならともかくその裏
にいるなんてなにかおかしいと感じた俺は、いったん資料を図書館においてその現場ま

で行つてみると、そこで見たのは一人の女生徒を数人の男生徒が囲んでゐる姿だつた。

どう見ても暴行現場だったので、とりあえず母さんに習つた身体強化を使いそいつらをぼこぼこにしてその女子生徒を助け出した。いくら目立ちたくないからといつてこんな現場に行くわしてなにもしないほど外道ではないつもりだし、この世界の両親の教えで、イギリス紳士として女性に優しくするということを細胞レベルまで教え込まれていたのも、それ以外の選択肢はありえなかつたのだ。

俺はなにが起こつたのかわからず、尻餅をつきながら放心していた彼女を引つ張り上げる。

「——怪我はないか？」

そんな俺の言葉に未だ呆然としていた彼女は我に返ると、なぜか頬を赤くしながら突如あわあわと慌てだす。

「だ、大丈夫です！ どうも助けてもらつてありがとうございます……」

恥ずかしそうにそういう彼女はあまりに可愛らしく、一瞬抱きしめたい衝動に襲われたのだが、そこで俺はあることに気づいた。

今まで出会つたことがないはず（・・・）のその少女の顔を、どこかで見たことがあるような既視感を感じたのだ。

俺はなにか嫌な予感がしながらも、その予感が外れるように祈りながら口を開く。

「——ところで君の名前を聞いてもいいか？君がなんで襲われていたのかも知りたいし」

「あ、そうですね。わかりました」

そして彼女は答えてくれた。

——俺にとっての衝撃の名を。

「——ぼくの名前はネギ・スプリングフィールドといいます。よろしくおねがいしますね♪」

「……………は？」

それが俺と本来なら少年であるはずの少女、ネギ・スプリングフィールドの出会いだった。

★ ★

いやー、あの時はおどろいたぜ。まさか要注意人物として出会わないようにしていた主人公が女になってるなんてなー。

あ、ちなみにあの時彼女を襲っていたのは、魔法使いの国『MM（メガロ・メセンブリーナ）』、通称『本国』のお偉いさんの息子たちだったらしく、英雄の娘である彼女と仮契約（パクテイオー）を結ぼうとしたんだとか。

仮契約とは、特定の魔法使いのパートナーとなる儀式のことで、どうやら自信の白付けのために彼女のパートナーとなろうとしていたらしい。

俺はそれを聞いてお偉いさんの子供を殴るなんてやっちゃったかなーと思ったのだが、どうやらやばかったのは英雄の娘にそんなことをやった彼らだったらしく、その事件のことを彼女の祖父という校長に話すとすさまじい勢いで激怒。さっそく手を打ち、俺の安全についても保証してくれた。……それから噂でネギを襲った男子生徒たちは魔力を永久封印され、彼女や俺に手を出せなくなる呪い（ギアス）をかけられ本国送り。彼らに指示を送ったお偉いさんは、どこからともかく現れた笑う眼鏡にぼこぼこにされ、とある鬼畜眼鏡の剣士議員に社会的に抹殺されたことを聞いたのだが、俺はそれを聞かなかったことにしたのはいうまでもない。

まあここまでではいいんだ。母さんの教えも守れたし、俺にとつてのマイナスはせいぜ

い原作キャラとの接点を持つてしまった程度。それもこれから距離をとって生活すれば問題ないし。

だがそこで一つの問題が生じた。俺が助けた少女、ネギ・スプリングフィールドがなにが楽しいのか毎日俺に付きまといてくるようになったのだ。

授業以外はどこへいってもついてくる彼女を、さすがに少いうつとうしく思った俺は、原作キャラとあまり親しくしたくなかったこともあり、一度離れるようにいったのだが、

『——め、迷惑でしたか?』

そんなことを涙で潤んだ瞳で、上目遣いをしながらいわれたらいいえと答えるしかなかった。

い、いやそれでも最初は断ろうとしたんだぜ? だけどよ、英雄の娘だからか、それとも彼女が類まれなる美少女だったからか、周りからすごい殺気が俺に集まり、彼女の姉という女性が黒いオーラを発しながら微笑んでこちらにプレッシャーを与えてくる状況でそれ以外どう答えろってんだよ!!

それからの日々は大変だった。

どこへ行くにもネギがついてくるので、プライバシーなんて無きに等しいし、とびつきの美少女を連れてくるから男子生徒からの嫉妬の視線がすごいし、女生徒と話すときはなぜかネギの機嫌がものすごい勢いで悪くなり邪魔される。

またさりげなく問題児である彼女は、いろいろ騒動を起こすのだが、彼女と知り合ってからはずいぶん彼女はその騒動に俺を巻き込むようになっていったのだが、学校の教師がいうには俺が関わってからその騒動の規模が小さくなつたらしく、そのまま彼女とその幼馴染の世話係に任命されてしまい、俺の苦勞は日に日に増していった。

——だが、それも学校の卒業で終わりを迎えた。

「(やれやれようやくここまでできたなあ。苦勞したぜ本当に。——あれ、なんか涙が出てきた)」

くたくたになるまで振り回され、ストレスに胃をおさえる日々がようやく終わるかと思うと涙腺が緩くなったのか、自然と瞳が潤みはじめるのを感じる。

と、そこで俺はある女性たちの言葉により我に返った。

「——何かのマチガイではないのですか？十歳で先生など無理です！」

「そうよネギったら、ただでさえチビでボケで……」

彼女たちの名前はそれぞれ『ネカネ・スプリングフィールド』と『アンナ・ユーリエウナ・ココロウア(通称アーニャ)』。主人公ネギ・スプリングフィールドの従兄弟と幼

馴染だ。

ちなみに今俺たちがいるのは、メルディアナ魔法学校の校長室。

なぜこんなところにいるのかというと、あれから俺とネギはこの二人と合流したのだが、その際配られた卒業後の修行場所で、原作どおりに日本で先生をやることになり、こうして二人が校長室に詰問しに行く場に、なぜか俺もこうして連れてこられたというわけである。……まあ無駄だから無理に抵抗する気もなかつたんだが。

女性二人の詰問を受けている当のメルディアナ魔法学校校長、『マギ・スプリングファイル』は、そんな彼女らの圧力にも動じず、悠然と答える。

「しかし卒業証書にそう書いてあるなら決まったことじゃ。立派な魔法使いになるためにはがんばって修行してくるしかないのう」

「ああつ」

そんな彼の無常(?)な言葉にシヨックを受けたのか、ネカネさんはくらりとその場でよろめいたので俺はそれを片手で支える。

「大丈夫ですか?」

「あ、ありがとう」

年下に世話になるのが、生粋のお姉さん気質である彼女は恥ずかしかったのか、頬を赤くするとすぐに立ち上がる。

「むー」

そんな俺たちを見てなにやら面白くない顔で頬を膨らませるちびっ子二人。……な
んで睨まれてんだ俺は。

そんな俺たちの様子を楽しげに見ていた校長は、ひとつ咳払いして注目を自分に向け
ると、再び口を開く。

「——安心せい。修行先の学園長はワシの友人じゃからの。ま、安心しなさい。——
—それにさすがにネギだけでは無理があると思つてサポート用の人材を用意している
からの」

「「サポート用の人材？」」

校長の言葉に三人そろつて首をかしげるネギたち。……どうでもいいが関係ないな
ら帰つてもいいかな、俺。

と、そこで俺は校長の視線がなぜかネギたちから視線をぼうつとしていた俺へと移
る。え？なにになに？

「ところでオリーシユよ。お主自分の修行場所がどこか確認したかの？」

「え？あ、そういえばまた見てなかったな……」

その俺の言葉に、校長はなぜかニヤリと笑う。その視線は気のせいかどこかおもしろ
がっているように見える。

「おお、それはちようどいい！ちよつとここで見てみるがよい」

「？はあ、わかりました……」

校長の言葉に訝しく思いながらも、俺は校長の言葉に従い、卒業証書を開く。
そこにはこう書かれていた。

『日本でネギ・スプリングフィールドのサポートをすること』

……は？

★ ★

■登場人物紹介

◆おりーしゅ・ランペンルージ

この小説の主人公で転生者。

前世では元オタクが入った大学生で、とある会社の内定が決まり実家に帰る途中にトランクに轢かれて死亡。神様の暇つぶし道具に選ばれ、ネギま世界に転生する。

転生特典は「イケメン」。つまりは容姿をよくすることで、そのおかげか名前のとおり、某反逆の王子並みの抜群の容姿を手に入れたが、実はこれは夢だと思つたかららしく、本人としてはネギま世界に転生すると知つていればもつと戦闘向きの特典を貰つていたらしい。

とりあえずの備えとして二つ名を持つほどの腕利きの魔法使いである母親からいろんな教えを受けているため、戦闘能力は年齢に見合わず高い。(ちなみに母親の二つ名は「閃光」)

可愛い彼女といちやいちゃしたい程度の欲望はあり、今の自分の容姿が人並みはずれていることは自覚しているが、前世がオタクであつたために女性経験が少なく、自分に否定的であるため、容姿がいいだけの自分に惚れる人などいなと思つている節があり、そのために鈍感なところがある。本来は女性に対しては初心。

MMのお偉いさんを親に持つドラ息子に襲われていたネギを助けたら彼女に懐かれ、そのせいかさりげなく問題児であるネギの世話係として認定され、胃が痛む日々を送っており、卒業とともに開放されると思つたが、修行先もネギのサポート役に任じられて

しまう不幸な男。

タイプとしては「魔法剣士」。

最近の悩みは距離をとりたいのに慕って自分についてくるネギの扱い。

◆ネギ・スプリングフィールド

原作主人公にしてこの作品のメインヒロイン。

英雄の娘のパートナーを狙うドラ息子に襲われていたところを主人公に助けられ、そこに父の影を見たのか、それから主人公に懐き、ついてまわるように。それが恋心かどうかは本人もまだわかっていない。

原作とは違い、性別の違いからかそれほど父親に依存しておらず、それより村の皆の石化を直す方法や母親が誰かを探すことを重要視している。（尤も悪魔襲撃事件による復讐心はいぜん変わっていないが）

この小説では見たとおりTSしているが、その頭脳、才能は変わらないためにメルディアナを主席で卒業している。

原作では年齢が近く親しいものにはため口だが、主人公に対しては気になる相手だからか常に敬語を使う。

遊戯王GXのアンチサイバー流（笑）を書いてみたww
の：遊戯王GX

書かない理由：主人公の使うカードのカテゴリが少なすぎるため（遊戯王GX）

ここは海馬ランドの象徴的施設である海馬ドーム。

現在ここでは、エリート決闘者デュエリスト養成学校として名高いデュエリスタアカデミアの高等部への編入試験が行われていた。

【デュエルアカデミア】。

それは、彼の史上最強のデュエリストと呼ばれた『決闘王デュエルキング』武藤遊戯の永遠の宿敵ライバルと称された伝説のデュエリストであるKC海馬コーポレーション社『社長』海馬瀬戸が創設した、次代のDMデュエルモンスターズ界を担う人材を育てるための学校の名。

KC社の力を使い、世界各地から優秀なデュエリスト、教育者などを集め、さらにはDMの産みの親であるI2インダストリアル・イリユージョン社会長のペガサス・J・クロフォードの協力もあり、既に多くのプロデュエリストや、有名なカードデザイナーを輩出することに成功している。

そのおかげで、このデュエルアカデミアは、まだ歴史の浅い学校でありながら、既に全国屈指の人気を誇る名門校となっていた。

そして毎年、日本中の明日を夢見る青少年たちが、この時期になると、こうして海馬ランドで行われる中等部入学試験、そして高等部編入試験のために全国各地から集まってくるというわけである。

そして、現在試験会場でデュエルアカデミアの実技担当最高責任者である“クロノス・デ・メデイチ”と対峙しているその少年も、そんな受験者たちの内の一人だった。

★ ★

「あなたが受験番号0番、崔黄慈さいこうじでよろしいですーノ？」

「はい、問題ありません……」

「そ、そうですーカ（や、やりづらいーノ）」

クロノス・デ・メデイチは困惑していた。

デュエルアカデミアの実技最高責任者である彼は、その若き頃母国イタリアのオープントーナメントで優勝したこともあるほどのデュエルの腕前と、アカデミア創立直後からの教師としての長い勤務歴から、アカデミアの教師たちの間では比較的第一人者とされ、だからこそ今回の高等部編入試験や中等部入学試験などの重要なイベントの際は、自然と他の職員たちを取りまとめ、取り仕切るのが彼の役目になっていた。

そんな彼にとっての毎年のことであるはずの今回の編入試験。しかし、今回に限って、いつもと違って普段と違う出来事があった。

それは、特別推薦枠である『受験番号0番』が適用された受験生が存在したことだっ

た。

本来なら、高等部編入試験の受験者たちに贈られる受験番号は、実技試験の前日に行われる筆記試験で決まり、それは筆記試験一位の生徒から順に受験番号1、2と渡されるのだが、実はアカデミアにはとある制度が活用されることにより筆記試験が免除されることがあり、受験生0番は、その制度が適応された受験生にのみ渡されるのだ。

そしてその制度こそが『特別推薦枠』。

この特別推薦枠とは、毎年デュエルアカデミアの高等部編入試験のみに三名分ほど用意されている、文字通り特別な推薦枠のことで、それはデュエルアカデミアオーナーである海馬瀬戸にアカデミア理事長の影丸。そして外部の人間ではあるが、DMの産みの親でありアカデミア創立に多大な協力を果たしたI2社会長であるペガサス・J・クロフォードの三名がそれぞれ特別に推薦したいデュエリストがいた場合、この特別推薦枠を使いデュエルアカデミアへの入学を推薦するのだ。

この特別推薦枠によって推薦された生徒には様々な特典がもたらされる。

筆記試験免除は当然として、実技試験に無事に合格することができれば三年間の学費は免除され、高等部編入でありながら、所属寮はアカデミアに三つあるうちの最高ランクであるオベリスクラブルーへと自然に決定される。

他にも購買部での買い物が割引される特別な生徒手帳や、デュエルシユミレーターの優先使用権など、本当に様々な特典がこの特別推薦枠を得て試験に合格した受験生には与えられるのだが、少し考えればわかるとおり、この特別推薦枠を得るのは並大抵のことではない。

特別推薦を行える3人は3人ともDM界の大物ばかり。そんな3人から推薦を受けることなど並大抵のことではなく、最低でもデュエルの腕は一国のジュニアチャンピオンクラスの実力を持っていなければならず、それ相応のコネも必要だ。

尤もそれだけの実力者ならば普通に試験を受けてもまず問題なく、その難易度もあつてかこの特別推薦枠を使用した受験生はアカデミア創設から数えても、片手の数ほどもない。だからこそ、現在アカデミアで雇われている教師の中で最古参の一人であるクロ

ノスも、この特別推薦を得て編入試験へとやってくる受験生の担当をしたのは、殆どなく、二年前に二人で日本ジュニアチャンピオンの座を争っていた丸藤亮と天上院吹雪の二人だけ。

だからこそ、アカデミア内でもエリート主義で知られたクロノスは今回のデュエルを楽しみにし、またはりきっていた。

特別推薦枠を得るほどのデュエリスト。しかも話に聞くと、その少年は単純な実績ならばクロノスが所属しているアカデミア本校に匹敵するといわれている、アメリカ・デュエルアカデミアの中等部で日本人でありながら主席の地位についていたという。

なんでも、校長がいうにはとある事情から、このアカデミア本校に入学することとなり、そのために特別推薦を受けることとなったらしいのだが……。

「まあ、そんなことは私には関係ないのーネ。重要なのは彼が滅多に見ないほどのエリートデュエリストだというコートですかーラ」

そう、将来デュエリストとして成功することがほぼ確実である彼のようなエリートを自らが教え、そして導くのが、栄光あるメイチ家の人間であり、学園一のエリート教師である自分の役目であると、そう確信していた。

そしてあわよくば、彼を次代のデュエルスターへと成長させ、そして広告塔にし、まだまだ歴史の浅いこの学校を、文字通りのデュエル界の中心地といえるべき存在にまで成長させようと企んだのだ。

だからこそ、彼はいつものように編入試験の責任者としてではなく、一教師として、自慢のデッキを持ちはりきって今回の試験へと臨んだのだが、

「(な、なんなのーネこのボーイ、この威圧感ーワ!?)」

そう、彼が困惑していた理由。それは今回特別推薦枠を受けたこの少年、「崔黄慈」から発せられる雰囲気、他の受験生、そして自分がよく知るアカデミアの生徒たちとも大きくかけ離れたものだったからだ。

崔黄慈。

紫がかった流れるような銀色の髪に鮮血のような紅い瞳を持つその少年の容姿は、少々眼つきが鋭すぎるような印象を受けるが、それ以外は一見そこいらにいるようなごく普通の少年。

しかし、腐っても学園で指折りである歴戦のデュエリストであるクロノスには感じ取れた。彼から感じ取れる、圧倒的なまでの『鬼気』とも呼ぶべき威圧感^{プレッシャー}を。

クロノスはそこから、彼のデュエリストとしての実力の高さを敏感に感じ取ったのだ。

「な、なるほど、どうやらただの生徒の一人だと思っただ大間違いのよーね」

黄慈からプレッシャーに冷や汗を流しながらも力量を感じ取ったクロノスは、そう一人ごちると気を引き締め直す。

先ほどまでは、いかに特別推薦を受けた生徒とはいえただの生徒には違いないところか、油断していたが、彼のプレッシャーを真正面から受けたクロノスには先ほどまでの油断は一切なく、ただ一人のデュエリストとして向かい合うと決意する。

「（そうなの。私は栄光あるデュエルアカデミア実技担当最高責任者クロノス・デ・メデイチ。彼がどれだけの実力者だったとしても、全力で応対しなければ名が廃るといふもの―デス!!）」

そう決意したクロノスは、自身の特別製のデュエルディスクをデツキにセットして構える。

するとそれに呼応してか、先ほどまで沈黙していた黄慈も自身のデツキを手持ちの黒いデュエルディスクをクロノスと相對するように構えた。

「それでは、これより高等部編入特別試験を始めますーノ。準備はよろしいですーネ？」

「はい……」

「それでは」

「デュエル!!」

そして、『デュエルアカデミア実技担当最高責任者』クロノスと、謎のデュエリスト『受験番号0番』崔黄慈。二人のデュエルは始まった。

クロノス

LP：4000

手札：5枚

黄慈

LP：4000

手札：5枚

デュエルが開始すると共に、クロノスは口を開く。

「先行は慣例として、受験生に明け渡されるーノ」

「……わかりました。ドロー」

クロノスの言葉を聞いた黄慈は、少しの間が空いたが素直に頷くとカードをドロースる。

「私のターン」

黄慈

LP：4000

手札：6枚

黄慈は、ドロースたカードを一瞬ちらりと確認すると、1枚の魔法カードを発動させる。

「……私は魔法カード「天使の施し」を発動。このカードの効果により手札からカードを3枚引いて2枚を墓地へと送る」

天使てんしの施ほどこし

通常魔法

自分のデッキからカードを3枚ドロウし、その後手札を2枚選択して捨てる。

天使の施しの効果により黄慈はカードを3枚引き2枚を墓地へと送ると、手札の中から一枚のカードを抜き出した。

「さらにモンスターをセット。カードを1枚セットしてターンを終了します」

黄慈

LP：4000

手札4枚

場：セットモンスター（1体）

魔法、罨：伏せカード（1枚）

1ターン目、黄慈はモンスターと伏せカードをそれぞれ1枚ずつ伏せてから、クロノスに自分のターンの終了^{エンド}宣言を告げた。

「なるほど、まずは様子見ということですか、ペトリヨシカ。——しかし、このクロノス・デ・メデイチを相手にして、その程度の防御で護りきれると思っているとしたーラ、片腹痛いのーネ!!」それでは、私のターン、ドローニョ!!」

クロノス

LP：4000

手札：6枚

クロノスは、ドローしたカードを横目で確認すると一瞬目を見開いたが、すぐにその表情を喜びの感情で歪にゆがめた。

「くくく、これはいいカードを引いたーノ。——私はフィールド魔法「歯車街」を発動
！」

「……ッ!？」

ギア・タウン
歯車街

フィールド魔法

「アンティーク・ギア」と名のついたモンスターを召喚する場合に

必要なリリースを1体少なくする事ができる。

このカードが破壊され墓地へ送られた時、自分の手札・デッキ・墓地から

「アンティーク・ギア」と名のついたモンスター1体を選んで特殊召喚できる。

クロノスの宣言と共にデュエル場を包み込むように出現する機械の街、歯車街。

それはクロノスのデッキである「暗黒の中世」デッキにおいて、中核となるカードの一つ。

その効果はアンテイク・ギアと名のつく上級モンスターを召喚するためのリリースを一つ少なくともすることができるといふものだが、実はこのカードにはもう一つ、さらに隠された効果がある。

その効果を発動するために、クロノスはデュエルを続ける。

「そして私は、カードを2枚伏せて魔法カード大嵐を発動しますーノ!!これでフィールド上の全ての魔法、罠カードを破壊しまーす!!」

「やはり……ッ!!」

おおあらし
大嵐

通常魔法

フィールド上の魔法・罨カードを全て破壊する。

フィールド上に嵐が巻き起こり、歯車街を破壊していく。

だが、その光景を見て、デュエルを観戦していたアカデミア生たちの何人かが、今のクロノスの行動を見て疑問の声を上げる。

『あれ？なんでわざわざフィールド魔法に、伏せカードまでセットしてから大嵐を発動したんだ？』

『あれじゃあ、自分のカードが破壊されちまうよ』

『まさか、クロノス先生のミスか？』

「（やれやれ、どうやら補習が必要な生徒ーガ、何人かいるようなーノ）」

観戦席から聞こえてくる自らの生徒たちの声に、クロノスは内心思わず落胆する。まさか、仮にもデュエルエリートの卵であるデュエルアカデミアの生徒たちが、今の自分

の行動を理解できていないとは。

「まあ、尤も彼はさすがに理解できているようですよーガ」

クロノスが視線を黄慈の方に戻すと、彼はその顔を僅かに険しくしていた。そこから、彼がクロノスがこれから何をしようとしているのか理解しているのが見てとれる。

「ですが、さすがに伏せカードを破壊されたら何もできないでーシヨ。ムフッフ」

——だが、クロノスのその考えは甘いものだった。

このまま、何もしないままクロノスの行動を何もしないで見過ごすかと思われた黄慈は、ここでこのまま破壊されるかと思われた伏せカードを発動させた。

「……私はこの瞬間、大嵐にチェーンして伏せカード「和睦の使者」を発動」

「なんですート!？」

わぼく
和睦ししやの使者

通常罨

このターン、相手モンスターから受ける

全ての戦闘ダメージは0になり、

自分のモンスターは戦闘では破壊されない。

和睦の使者の発動により、黄慈の目の前に青いシスター服に身に纏った修道女の集団が現れる。

「このカードが発動したターン、私に対しての戦闘ダメージを無効にし、私のモンスターは戦闘では破壊されなくなります」

「ぐぬうッ!？」

淡々とカードの効果を説明する黄慈の姿に、しかしクロノスは内心歯噛みする。これで、彼の計算が狂ってしまったからだ。

「まさか、フリーチェーンの防御カードを伏せていたとーワ。せつかく、1ターンキルを決めるチャンスだったのーニ」

そう、クロノスはこのターン、必殺のコンボで一気に決着をつけようとしていたのだが、今の黄慈の和睦の使者の発動により、その目論見があっさりと崩れ去ってしまった。

クロノスは黄慈の予想外の行動に心乱されるが、やがて我に帰ると、頭を振りかぶり無理やり動揺を鎮める。

「いや、それほど深く考える必要はないですーノ。相手が実力者なのはわかっていた。ならばこれくらいやって当然!!それに攻撃を防がれたのなら、次のターンに万全の攻撃ができるように場を整えればいいだけの話なのですかーラ」

そして、気を取り直したクロノスは、大嵐が全ての魔法、罫を破壊したのを見計らい、

歯車街の真の力を発動させる。

「私は、大嵐によって破壊された歯車街の効果を発動！このカードが破壊された時、自分の手札、デッキ、墓地からアンティーク・ギアと名のついたモンスターを特殊召喚することができる。私はデッキから、「古代の機械巨竜」を特殊召喚しまっス!!」

アンティーク・ギア
古代の機械巨竜

効果モンスター

星8 / 地属性 / 機械族 / 攻3000 / 守2000

このカードが攻撃する場合、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠カードを発動できない。

このカードの召喚のためにリリースしたモンスターによって以下の効果を得る。

●グリーン・ガジェット：このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、

その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

●レッド・ガジェット：このカードが相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、

相手ライフに400ポイントダメージを与える。

●イエロー・ガジェット：このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した場合、相手ライフに600ポイントダメージを与える。

そのクロノスの言葉と共に、クロノスのフィールド上に現れるのは機械と歯車が集合して創り出された巨大な竜。

そう、クロノスが歯車街をわざわざ自分から破壊したのは、歯車街の隠された効果により、このカードを召喚するためだったのだ。

そして、会場はそんなクロノスの戦術の巧みさに湧き上がる。

『おおー!!』

『すっげー!?!』

『まさか、あそこからあんな強力モンスターを……』

『さすが、クロノス先生だ』

会場の声援に、クロノスは気をよくして思わず頬を緩めるが、クロノスの攻めはここ
では終わらない。

ここで、クロノスは大嵐によって破壊された2枚の伏せカードも発動する。

「これだけでは終わらないノ。私はさらに2枚の破壊された伏せカード、「黄金の邪神
像」の効果が発動します」

おうごん
黄金の邪神像 じゃしんぞう

通常罫

セットされたこのカードが破壊され墓地へ送られた時、

自分フィールド上に「邪神トークン」（悪魔族・闇・星4・攻／守1000）1体を
特殊召喚する。

「セットされた黄金の邪神像が破壊され墓地に送られた時、自分フィールド上に星4、攻
守1000の邪神トークンを2体特殊召喚します」

クロノス

場：古代の機械巨竜（攻：3000）

邪神トークン（攻：1000）

邪神トークン（攻：1000）

フィールド上に2体の黄金の悪魔が召喚されたのを確認したクロノスは、さらに手札から1枚のカードを引き抜いた。——自身の尤も信頼するエースを召喚するために。

「そして、私は2体の邪神トークンを生贄に、このデッキの真のエースを召喚します」
「真のエース？」

「それとおーりー！見よ、これこそが我が至宝である伝説のレアカード。」

——「古代の機械巨人を召喚するのーネ!!!」

アンティーク・ギアゴーレム
古代の機械巨人

効果モンスター

星8 / 地属性 / 機械族 / 攻3000 / 守3000

このカードは特殊召喚できない。

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、

このカードの攻撃力が守備表示モンスターの守備力を超えていれば、

その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

このカードが攻撃する場合、

相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠カードを発動できない。

——そして、その巨人は地中から、圧倒的な存在感を撒き散らせながら現れた。

「古代の機械巨人……」

「そう、これこそが私の自慢のカードでース」

古代の機械巨人。

おそらく、デュエルを学ぶものならば一度は耳にしたことがあるであろう伝説のレアカードの1枚。

あの、世界に3枚しか存在しない「青眼の白龍」に匹敵する攻撃力を持ち、特殊召喚こそできないが貫通効果を持ち、このカードが攻撃する時、相手はダメージステップ終了時までフィールド上の魔法、罫を発動できないという強力な効果を持つ、まさに切り札という言葉に相応しい強力なカード。

そんなカードがフィールド上に召喚されたことにより、再び観客席が沸いた。

『す、すっげー!!』

『あれって、伝説のレアカードの古代の機械巨人アンティーク・ギアゴレムだよな!』

『俺、初めてみたぜ!』

『来てよかったー』

『あいつ、終わったなww』

「ムフフのフン！今日の客はわかってるーノ）私はさらにカードを1枚伏せてターンを終了します。さあ、あなたのターンですーネ!!」

クロノス

LP：4000

手札：0枚

場：古代の機械巨竜（攻：3000）

古代の機械巨人（攻：3000）

魔法、罫：伏せカード（1枚）

「私のターン、ドロー」

そして、ターンは受験生、崔黄慈へと移る。

黄慈

LP：4000

手札：4枚

場：セットモンスター（1体）

最初のターン、得意な大嵐を使用したコンボにより、圧倒的優位に立つことに成功し、気分が高揚していたクロノスであったが、黄慈へと視線を戻すと頭を冷やし冷静になる。

劣勢なはずの黄慈本人の顔が、全く動揺を見せず、つとめて冷静な表情を崩していないかったからだ。

「ふむ、この絶体絶命の状況でも動揺一つみせない。やはりかなりの修羅場をくぐった実力者のようですねーノ——ですーが、私の伏せカードは「聖なるバリアーミラーフォース」。例えこのターン、私のアンテイク・ギアモンスターたちを超えるモン

ターを召喚することに成功したとしてーモ、このカードで振り返ちなーネ。ヒヨヒヨヒヨのヒヨ♪）」

そんなクロノスの考えを知ってか知らずか、黄慈はただ淡々とデュエルを続ける。

「私はセットしていたモンスターを攻撃表示に。魔導雑貨商人を反転召喚する」

まどうざっかしようにん
魔導雑貨商人

効果モンスター

星1／光属性／昆虫族／攻 2000／守 700

リバース：魔法・罨カードが出るまで自分のデッキをめくり、

そのカードを手札に加える。

それ以外のめくったカードは全て墓地へ送る。

黄慈のフィールド上にセットされてあったモンスターが表になるとそこからなにやら大きな荷物を背負った二足歩行の昆虫が姿を現した。

このモンスターは、リバースすることにより魔法、罨カードが出るまで自分のデッキをめくり、そのカードを手札に加えるという効果があるのだが、彼の本来の狙いは別にある。

そして、デュエルアカデミアの教師であるクロノスは、そんな黄慈の狙いを正確に洞察していた。

「(魔導雑貨商人。……なるほど、墓地肥やしですーカ)」

そう、魔導雑貨商人は魔法、罨カードが出るまでにデッキからめくったカードを全て墓地に送る効果を持っており、そのためか、殆どのデュエリストは本来の魔法、罨カードを手札に加えるためではなく、デッキからカードを墓地に送る「墓地肥やし」を行うためにこのカードをデッキに入れるものが多い。

そして、クロノスはその持ち前のデュエリストとしての感と経験により、その彼の狙いを察知したのだ。

そして黄慈は魔導雑貨商人の効果により、デッキから3枚ほどのカードを墓地に送ってから1枚の魔法カードを手札に加え、そして発動した。

「……そして、私は今手札に加えた魔法カード「苦渋の選択」を発動」
「ツ!?そのカードは!!」

くじゆう
せんたく
苦渋の選択

通常魔法

自分のデッキからカードを5枚選択して相手に見せる。

相手はその中から1枚を選択する。

相手が選択したカード1枚を自分の手札に加え、

残りのカードを墓地へ捨てる。

クロノスは黄慈が発動したカードに驚愕の表情を浮かべる。

苦渋の選択。それは使用した者のデッキによつては多大なアドバンテージを与える強力なカード。

その効果は、自分のデッキからカードを5枚選択して相手に見せ、その中から相手に1枚選択させ手札に加える。そしてそれ以外の残りのカードは全て墓地に送るというもの。

そして、黄慈は苦渋の選択の効果により5枚のカードを選択し、クロノスに対して掲げて見せた。

「私が選択するのはこのカードたちです」

■ 選択したカード

- ・ 人造人間サイコ・リターナー
- ・ 人造人間サイコ・リターナー

- ・ 人造人間サイコ・リターナー
- ・ ネクロ・ガードナー
- ・ ネクロ・ガードナー

クロノスの目の前に掲示される5枚のカード。クロノスはそのカードたちを見て、訝しげに眉を潜める。

黄慈が選択した「人造人間サイコ・リターナー」というモンスター。そのモンスターの名をクロノスは聞いたことがなかったからだ。

「ネクロ・ガードナーの効果は、確か墓地から除外することにより、相手の攻撃を1回無効にすることができる。苦渋の選択で選択するのはわかるーノ。しかし人造人間サイコ・リターナー？あのカードは私も聞いたことがないカードなのーネ」

ネクロ・ガードナー

効果モンスター

星3／闇属性／戦士族／攻 600／守1300

(1)：相手ターンに墓地のこのカードを除外して発動できる。

このターン、相手モンスターの攻撃を1度だけ無効にする。

そして、クロノスはしばしどのカードを選択するかを迷ったが、結局ネクロ・ガードナーを選択することにする。

わけのわからないカードについてどうこう悩むより、今は墓地に送られたらやっかいなカードを1枚でも少なくしたほうがいいと考えたのだ。

「私ーは、ネクロ・ガードナーを選択しますーノ」

「了解しました」

そして、黄慈はクロノスの選択したネクロ・ガードナーを手札に加え、残りのカードを墓地へと送る。

そして、その瞬間クロノスは気づく。

——黄慈の口元が、いつの間にか歪に歪んでいることに。

「…………ツ!?!（な、なんなのーネ、この殺気は）!!」

突如黄慈から溢れ出る暴力的な圧力に、クロノスは思わず後ずさる。

黄慈は、そんなクロノスの様子を嘲笑うかのように、先ほどの無表情とはうって変わって、口元に邪悪な笑みを浮かべながら、クロノスの息の根を止めるべく、行動を開始する。

「悪いがクロノス先生、このデュエルはどうやら俺の勝ちのようだぜえ?」

「な、なんですすートツ!?!」

「この瞬間、俺は墓地に送られた「人造人間サイコ・リターナー」の効果を発動。このカードが墓地に送られた時、俺は墓地から「人造人間サイコ・ショッカー」を特殊召喚する

ことができる。そして、俺が墓地に送ったサイコ・リターナーは3枚。

——よつて、俺は3体のサイコ・シヨツカーを墓地から特殊召喚する!!」

「ツ!？」

「出でよ、我がしもべたちよ!!」

人造人間—サイコ・リターナー

じんぞうにんげん

効果モンスター

星3 / 闇属性 / 機械族 / 攻 600 / 守 1400

このカードは相手プレイヤーに直接攻撃できる。

このカードが墓地へ送られた時、自分の墓地の

「人造人間—サイコ・シヨツカー」1体を選択して特殊召喚できる。

この効果で特殊召喚した「人造人間—サイコ・シヨツカー」は、

自分のエンドフェイズ時に破壊される。

黄慈の叫びと共に、フィールドに闇が生まれ、そこから三体の電腦魔人が咆哮と共に現れる。

『ぐおおおおおおおおおお!!』

人造人間—サイコ・シヨツカー

効果モンスター

星6／闇属性／機械族／攻2400／守1500

(1)：このカードがモンスターゾーンに存在する限り、お互いにフィールドの罠カードの効果が発動できず、フィールドの罠カードの効果は無効化される。

『人造人間—サイコ・シヨツカー』。

かつて、バトルシテイにて超能力デュエリストとして知られた「エスパ—紹場」から、伝説の三人のデュエリストの一人、城之内克也に受け継がれ、その後、彼のエースの1

枚として愛用され続けた。

彼の魂のカードである「レッドアイズ・ブラックドラゴン真紅眼の黒竜」には及ばないが、それでも強力な、罨《トランプ》無効化能力と、攻撃力2400という、星6モンスターでも上位のステータスを持つことから、かなりのレア度を誇る強力なカードだ。

そんな、滅多に見られないモンスターが、フィールド上に一瞬にして3体も並んだことにより、観客席のボルテージはさらに上がるが、逆に対戦相手のクロノスは、出てきたモンスターがサイコ・シヨツカーであることを知り、こつそり安堵の溜め息をつく。

「な、なんですーノ、いきなり何が出てくるかと思えーバ、たかだか攻撃力2400のモンスター。確かに1ターンで上級モンスターを3体も並べるタクティクスは認めますーガ、そんなモンスターでは、私のアンテイク・ギアたちに太刀打ちなど、できるわけないのーネ!!」

だが、黄慈はそんなクロノスの言葉に、さらに邪悪な笑みを深める。

「ククク、それはど・お・か・な？」

「ひょ？」

挑発的な黄慈の言葉に、思わずどこぞの弱虫野郎のような呆けた声を出すクロノス。

そして黄慈は手札から一枚の魔法カードを引き抜き、デュエルディスクの魔法、罨スロットに差し込んだ。——デュエルの決着を着けるための必殺のカードを。

「俺はさらに速攻魔法発動！」「リミッター解除」！！

「げえ!?そ、そのカードワ!!」

リミッター解除かいじよ

速攻魔法（制限カード）

このカードの発動時に自分フィールド上に表側表示で存在する

全ての機械族モンスターは、ターン終了時まで攻撃力が倍になる。

このターンのエンドフェイズ時、

この効果を受けたモンスターを全て破壊する。

黄慈の発動した魔法カードに、クロノスは思わず某三国最強の武将と出会った時のような声を上げる。

だが、それも仕方ない。リミッター解除とは、機械族のモンスターの攻撃力を倍にする切り札級の魔法カード。機械族のエキスパートであるクロノスも、その威力はよく知っており、彼のデッキにも同じカードが入ってる。

そして、人造人間サイコ・ショッカーも機械族モンスターであり、リミッター解除の効果を受け、電脳の魔人たちの力は古代の機械巨人の力を上回る圧倒的な力を入れることとなる。

黄慈

LP：4000

場：人造人間サイコ・シヨツカー（攻撃力2400↓4800）

人造人間サイコ・シヨツカー（攻撃力2400↓4800）

人造人間サイコ・シヨツカー（攻撃力2400↓4800）

「あ……あ……ああ……」

自慢のエースである古代の機械たちをも上回る大きさにまで巨大化したサイコ・シヨツカーたちの姿に、絶望の表情を浮かべるクロノス。

そんなクロノスの顔を一瞥してから、黄慈は告げる。——クロノスへの死刑宣告を。

「これで終わりだ。3体のサイコ・シヨツカーで総攻撃！

——「電腦《サイバー》エナジーシヨック。三連打アアアアアアアア!!」

黄慈のその声と共に、1体目のサイコ・シヨツカーが古代の機械巨竜を破壊し、2体目のサイコ・シヨツカーが古代の機械巨人を破壊した。

「ぐうううううッ!?」

クロノス

LP : 4000 ↓ 2200 ↓ 400

2体の古代の機械たちが破壊されたことにより、その爆風に巻き込まれたクロノスは苦悶の声を上げる。

……………そして、

「……………あ」

目の前に現れた最後のサイコ・シヨツカー。そのサイコ・シヨツカーが放つ黒き波導が、クロノスに叩きこまれた。

『ぐおおおおおおおおお!!』

「マンマミーーーーーーヤーーーーーー!?!」

クロノス

LP：400↓1400

サイコ・シヨツカーの攻撃により吹き飛ばされるクロノス。

「ククククク。」

ハハハハハハハハハハハハハハハハハハ!!」

——そして、デュエルの勝敗は受験番号0。崔黄慈の勝利に決定した。

★ ★

海馬ドームの男子トイレ内。その個室の一つにその姿があつた。

「……はあ、またやつちまつた」

便座に座りながら、暗いオーラを漂わせている男。

彼の名は崔黄慈。そう、先ほどハイテンションでクロノス・デイ・メデイチを瞬殺したデュエリストである。

彼は、先ほどのクロノス戦の時に見せた悪役染みた態度が嘘のように引っこんでおり、両手で顔を押えながら項垂れていた。

せつかく、実技試験に勝利したのになぜ彼がここまで落ち込んでいるのか？それはデュエル中に見せた彼の態度にあった。

「なんで、俺いつもあんなつちゃうんだろう。」

——テンションが上がると悪役じみたようになるなんて」

そうなのだ。実は彼、先ほどクロノスと決着をつける際、かなり悪役染みた態度を見せていたが、実はあれは彼の本心ではなく、いわゆる彼の癖の一つだった。

彼は昔から激しい人見知りで、まともに人と目を合わせて喋れないようなコミュ障男なのだが、昔から大好きなデュエルで興奮した時、クロノスの時のように悪役染みたハイテンションになってしまう、困った体質を持っていたのだ。

そして、その状態の時には無意味に挑発的な態度をとってしまうものだから、その元々の性質もあいまって、彼は昔から殆ど友達ができたことがなく、所謂「ぼっち」生活を送っていた。

それはアメリカアカデミアにいた時も同じで、だからこそペガサス会長からこのデュエルアカデミア本島への編入の打診を受けた時、自分のことを誰にも知られていない新天地なら友達ができるかと、その話に食いついたのだが、

「(あんな公衆の面前であんな姿を見せてしまつて……。これじゃあ、ここでも友達できないよ、絶対)」

そして、再び深々と溜息をつく黄慈。

だが、そんな彼に声をかける者がいた。

『まあまあ、そんな落ち込まないでくださいよ、マスター。また次がありますつて！』

「シヨツカー……」

涙目で、顔を上げる黄慈の視線の先には、ピンク色の肌を持ち、顔にガスマスクのようなものを着けた人型のモンスターの姿がそこにあつた。

そう、彼の名前は「人造人間サイコ・シヨツカー」。黄慈のエースモンスターであり、某所では「ハゲ」とも揶揄されることがあるモンスター。

しかし、彼は先ほどのクロノス戦のように立ソリッド・ヴィジョン体映像ではなく、きちんと実体を持ちそこに存在している。

それはなぜか？実は、黄慈が持っている人造人間サイコ・シヨツカーのカード。実はあのカードは普通のカードではなく、カードの精霊が宿る特別なカードだったからである。

カードの精霊。それはDMの都市伝説の一つで、なんでもこの世界とは別の異世界に、DMのモンスターの精霊たちが住まう世界があり、カードにその精霊が宿る場合が

あるのだ。

そして、彼が持つ人造人間サイコ・ショッカーのカードも、そんな精霊が宿るカードの一枚だったというわけだ。

黄慈は元々精霊の姿を見る力など持っていないが、ある事件がきっかけでその力に目覚め、それからは彼と共に、本場アメリカでの過酷なデュエルを生き抜いてきた。だからこそ、黄慈にとっては彼は最も信頼できる存在となっていた。

『確かに、あの場面を見た多くにはひかれちゃったかもしれませんが、それでも何人かは大丈夫でしょう。それにアカデミア生はあそこにいた人数が全てじゃありません。まだまだマスターに友人ができる機会はあるでしょう』

「……本当に?」

『はい。ワシはマスターに嘘はつきやせん』

黄慈の言葉に頷くサイコ・ショッカー。そんなサイコ・ショッカーの言葉を受けて、黄慈は何度も下を見ながら、「そうか。そうだよな」と何度も頷くと、勢いよく立ち上がる。

「よし!!アカデミアで友達を作るために、特訓だ。急いで帰るぞ、ショツカー!!」
『了解だぜ、マスター!!』

そして、黄慈は駆け足で自宅へと急ぐ。最高の相棒である電腦の魔人を引き連れて。

——だが、この時黄慈はまだ知らなかった。

『あれが、鮫島師範が気をつけるようにいつていた、噂のサイコ流の使い手か。おもしろい』

自身の相棒のせいで、デュエルアカデミアで、とてもめんどくさいことに巻き込まれてしまうことに。



■ 催黄慈さいこうじ

この小説の主人公。日本生まれの日本人で間違いはないが、小学三年生の頃に両親の仕事の都合で、アメリカに引越し、それからはずっとアメリカで暮らしている。

かなりの人見知りでコミュ障。人と話すときは眼を見て話すことはできないが、むりやり眼に力を入れれば話すことは可能。しかし、その場合は本人の緊張感が表に出て、相手に多大な威圧感を与えてしまう。

整った顔つきをしているが、眼つきが鋭く、またコミュ障のために言葉足らず。さらにはデュエルでテンションが上がると挑発的な悪役染みた態度をとってしまうことから、日本でもアメリカでもぼっち。主席をとったアメリカアカデミアでは、とある二人以外の生徒とは全く交流を持っておらず、事務的なことしか話さない。ゆえに「孤高の

デュエリスト」とも呼ばれていた。

デュエリストとしての腕は一流。本人がデュエルが好きなこともあり、アメリカではいろんな相手にデュエルを挑んでいたが、そのせいでさらに孤立していたことは本人は知らない。

アメリカでとある事件にあい、精霊を見る力を手に入れて、相棒であるサイコ・シヨツカーの精霊と出会った。その後、アメリカアカデミアで起きた闇のゲームに関する事件を解決し、それをペガサスが知ったことがきっかけで、特別推薦、受験番号0番として、デュエルアカデミアの高等部編入試験でクロノスを瞬殺し、無事にアカデミアへと入学を果たすこととなる。

所持デッキは人造人間サイコ・シヨツカーをエースとした、「人造人間サイコ・シヨツカー」。

得意戦術は魔法、罫で墓地に送ったサイコ・リターナーやサイコ・ジャツカーなどを使用したサイコ・シヨツカーの大量召喚。

ちなみに名前の由来は「サイコ」。

本人は知らないが、アメリカアカデミアで起きた事件を殆ど単独で解決したため、(精霊であるサイコ・シヨツカーは通常の間人では見えないので除外。その筋ではDM関係のオカルト事件の専門家として知られている。

■ 人造人間サイコ・シヨツカー

黄慈の所持する精霊のカード。元々黄慈のデツキのカードに宿っていたが、とある事件で黄慈が精霊を見る力を得てからは、黄慈が最も信頼する存在となっている。

某クリアアモンスター使いが元々所持していたオネストと同じ、実体化が可能な上級精霊でもあり、その力を使い、アメリカアカデミアで起きた闇のゲームが関係する事件を解決するのに協力した。

ちなみに、喋り方が適当なのは、作者がサイコ・シヨツカーの喋り方をどうしようか

迷った結果、もう適当でいいやと、ちよつと雑な喋り方になった。

性格は軽いが、マスターである黄慈への忠誠心は高い。

遊戯王ストラクチャーデッキ偽CM 『電腦魔人の覚醒』

深い森の中にひっそりと佇むとある建物。

中に入ると、そこは何かの研究所のように、白衣を着た男たちが廊下を歩き来しており、やがて一つの薄暗い部屋へと辿り着く。

ナレーション「深淵の闇より生まれし、電腦の魔人が、その枷を取り外し、真の力を解放する」

部屋には、なぜか人造人間サイコ・ショツカーが、磔のような形で、壁に鎖で拘束されていたが、やがて画面がその顔をアップで移すと、サイコ・ショツカーの暗かった瞳に赤い光が灯り、勢いよく顔を上げる。

そして、サイコ・ショツカーは無理やり鎖を引きちぎり、一步、二歩と前に出ると、雄叫びをあげるようなポーズをとる。

そして、サイコ・ショッカーは空中に飛び立ち、闇の中に消えていったかと思えば、そこから光が溢れ出し、画面が白く染まりだす。

黄慈「今こそ思い知れ、闇に葬られた最強の魔人の力を。」

——来い、人造人間サイコ・ロード!!」

そして、光が晴れると、上空から体のあちこちからバチバチと火花を散らしながら、ゆっくりと腕を体の前で組んだ人造人間サイコ・ロードが登場する。

黄慈「受けてみる、俺の最高のしもべの攻撃を! 『サイバー電腦エナジーインパクト!!』」

その言葉とともに、サイコ・ロードがサイバーエナジーインパクトを画面に向かって放つと、サイコ・ロードの技によって放たれた黒い光が徐々に画面を覆っていき、見えなくなってしまう。

そして、それが晴れると、腕組みをしたサイコ・ロードの姿をバックに、ストラクチャーデッキの姿が、値段とともに画面に表示される。

~~~~~

◆ストラクチャーデッキ「電腦魔人の覚醒」

■値段：1000円（税抜き）

■パッケージ絵：「人造人間サイコ・ロード」

■商品内容

- ・構築済みデッキ40枚
- ・プレイングガイド1枚

・公式ルールブック1冊

・デュエルフィールド1枚（人造人間サイコ・リターナー、サイコ・ショツカー、サイコ・ロード、サイコ・ジャツカーのイラストが描かれている）

■デッキ内容

モンスター×22

人造人間サイコ・ロード×1

人造人間サイコ・ショツカー×1

邪帝ガイウス×1

ダーク・アームド・ドラゴン×1

冥府の使者ゴーズ×1

魔導ギガサイバー×1

魔鏡導師リフレクトパウンダー×2

メカハンター×1

ドリラゴ×1

人造人間サイコ・リターナー×2

人造人間サイコ・ジャッカー×1

終末の騎士×1

ダーク・グレフアー×1

バトルフェーダー×1

アサルト・ガンドック×2

召喚僧サモンプリースト×1

メタモルポット×1

増殖するG×1

スナイプストーカー×1

魔法×13

電脳増幅器×2

手札断札×1

強者の苦痛×2

帝王の烈旋×1

強欲で謙虚な壺×1

おろかな埋葬×1

ブラックホール×1

闇の誘惑×1

デーモンの斧×1

禁じられた聖槍×1

リミッター解除×1

罨×5

ブレイクスルースキル×1

リビングデッドの呼び声×2

サイコ・ショックウエーブ×1

針虫の巣窟×1

〵  
〵  
〵  
〵  
〵  
〵  
〵  
〵



ナレーション「ストラクチャーデッキ『電腦魔人の覚醒』。好評発売中」

黄慈「——これが、サイコ・シヨツカーの真の力だ」

## とある保身の転生者：オリジナル

書かなかった理由：乙女ゲーのイベントが、未だにどういものがあるのか理解して  
いなかったから

### 【クラウス魔法学園】

大陸きつての魔法大国である「サンクレア王国」の首都郊外に存在するこの学園は、かつて初代サンクレア国王が永遠の我が友と讃えたとされる伝説の魔法使い、「大賢者クラウス」が創設した、この国で最も歴史と権威がある名門校として知られている。

そのためか、この学園には毎年多くの素質ある若者たちがこの学園にやって来るのだが、実は今年。そんな学園を震撼させる大事件が起こる。

前述したように、この学園には毎年多くの才能のある者たちが入学するのだが、その

中には普段ならお目にかかれないほどの、高貴な身分にいる者たちも多数存在する。

学園では、身分など関係ないとされ、学園の教師たちも、その規則があるため例え相手が王族でもそれが生徒ならば毅然と対応するのだが、それは人間社会の常、皆が皆そういう対応をできるはずもなく、そのためか、自然と彼らは学園の重要な仕事を任せられる有力者になっていったのだが、そんな彼らが、今年入学してきたとある女性徒に次々と籠絡されていき、その女生徒の取り巻きになってしまったのだ。

その女生徒は元々平民として生活していたのだが、最近とある事件により強大な魔力に目覚め、それに目をつけたとある伯爵家の人間が彼女を養子にとり、自家の人間としてこの学園に入学させたのだ。

そんな彼女が取り巻きにした男子生徒たちは、この学園の有力者たちの中でもさらに高い地位におり、そのため、自然とこの学校内の最高位の組織である生徒会に所属することとなり、彼らもそれを当然と受け止め、様々な人々の期待の念に見事に応えながら、この学園の経営に関わっていた。

そのためか、彼らは学園中の生徒たちから尊敬の念を一身に受けていたのだが、しかし、彼女の取り巻きへと墜ちてからは、生徒会の面々は自分たちの業務を放棄し、その女生徒の気を惹くための行動ばかりを行うようになる。

そのためか生徒会の活動が停止し、学園経営に支障が出始め、そればかりか彼らは、その女生徒に危害を加えようとした者（ただしその女生徒の主観）、その女生徒が邪魔だといった者たちを、その実家の権力で次々と排除していったのだ。

もちろん、彼らを諫める者もいたが、その者たちも邪魔者として排除されていき、やがて彼らに何かをいうものは誰もいなくなっていた。

なにせ、いくら名目上は学園では地位など関係ないといわれても、彼ら（正しくは彼らの実家）は貴族として最高位の地位を持つ者ばかり。そんな彼らに逆らえるものなど殆どおらず、また王家からある程度の保障を得ている学園側であったが、学園は彼らから毎年多額の寄付を受け取っており、また今代の学園長は家のコネでその地位に就いた、気弱でことなかれ主義な性格の人間であるため、数人の教師の反発を受けながらも彼らの行動を止めようとはせず、そのため学園の雰囲気は徐々に暗いものになってい

き、治安もどんどん悪化していった。

自然と生徒たちは、その女生徒達と取り巻きたちを、尊敬から一転侮蔑の念で見始めたのだが、しかしそれと同時に彼らは現状を諦め始めてもいた。

名実ともに彼らの代表に相応しかつた彼らはもはやなく、彼らを諫めようとするもの末路を見てきた彼らには、もう彼らの行動に干渉するような勇氣も度胸もない。なので、彼らにできることは、心の中で見下しながらも、彼らのご機嫌とりに終始するか、彼らに目をつけられないよう、彼らが全員卒業するか、自身が卒業するまでひっそりと隠れるように学園生活を送るしかない。

誰もが暗い雰囲気学園生活を送る中、その事件は起こった。件の女生徒がとある侯爵令嬢に暴行を受けたというのだ。

その侯爵令嬢は、この学園の生徒会会長である第二王子の婚約者で、そのため生徒会の面々とも友好的な関係を築けていたのだが、あの女生徒がこの学園へとやってきて生徒会の面々を籠絡していくと、彼らは自然と彼女を疎み遠ざけはじめ、そしてなぜかほ

とんど面識のないその女生徒もその侯爵令嬢を「悪役」などと呼び出し忌み嫌い始めると、彼女の取り巻きと化していた生徒会の面々も彼女を本格的に嫌い始め、嫌がらせを始める。

そのためか、彼らはこの事件のことを女生徒から聞いた際、ここぞとばかりに罵り、攻め立て始め、学園から追放しようと行動した。

この時、この一連の事件を見ていた一般生徒たちは気づいていた。これはいつものあの女のやり口だと。あの女は、邪魔者である侯爵令嬢を排除するために彼女に濡れ衣を着せたのだと。

しかし、彼らはもはや何もいわない、いやいえなかった。彼らにできるのは、自分たちが新たな標的にならないように、目の前で起きている出来事から目を逸らすことだけ。

そして、生徒会の面々の罵倒を受けながら、侯爵令嬢の学園での生活もここで終わるはずだった。その男が現れるまでは。

『そこまでだ!!』

そういつて現れたのはこの国の第一王子。五年ほど前、弟の第二王子と同じくこの学園の生徒会長として辣腕を振るっていたのだが、卒業してからは王の後継者としての勉強のため、王城で父親である現国王の代理として国政について勉強していたのだが、王子曰くとある人物からの情報により、昔から妹のように可愛がっていた侯爵令嬢が、弟をはじめとした生徒会メンバーから嫌がらせを受けていると聞き、またそのために彼女の安全を凶ろうと秘密裏に彼女の周りに潜ませた密偵たちから、令嬢への嫌がらせの主犯である生徒がなにやら企んでいるという報告を受け、こうして今日手勢を引き連れて、女生徒の企みを阻止するためにこの学園へとやってきたのだという。

そして、第一王子は今日まで集めた彼らの悪行、愚行の証拠を集めそれらにつきつけ、裁きを下した。

会長であり、弟である第二王子は謹慎に王位継承権の剥奪。副会長である侯爵子息、そして書記である子爵、庶務である男爵子息の実家からは多大な賠償金が侯爵令嬢の実

家へと支払われ、彼らは実家の跡取りとしての地位を失った。

そして、主犯とされた伯爵家令嬢は実家から勘当。生徒会の面々とともに、学校を自主退学という形で追われることとなった。

そして、学園に平和が持たされることになり、学園の生徒たちは歓喜の声を上げるのだが、この事件において誰も知らない隠された事実がある。

実は今回の一連の出来事は、とある人物の掌の上だったということに。

★ ★

「ふう、どうやら上手くいったようだな」

第一王子の手勢が生徒会の面々を連行するのを大衆の中から確認した俺は、内心でほくそ笑みながらもこっそりとその場を後にした。



「(やれやれ、苦勞したぜ。ここまで来るのには)」

俺の名前は「リオン・バレンシユタイン」。俗にいう転生者だ。このクラウド魔法学園で歴史の教師をやっている。

俺はサンクレア王国のバレンシユタイン伯爵家の次男坊としてこの世に生を受けたわけだが、実は転生者だと自覚したのは、つい最近。あのヒロインである生徒がこの学園にやってきてからだった。

その女生徒の名は、「クロネ・ローズマイン」。その類稀なる強大な魔力で平民から伯爵家の養子にとられたという彼女の姿を一目見て、俺は自身に電流が走るような感覚を受け、そして全ての記憶を思い出したのだ。

そう、自身の前世。地球という世界の日本という国で過ごしていた自分の姿を。そして、この世界が前世で見た、いわゆる乙女ゲームの世界の中だということに。

その乙女ゲームの名前は『クラウス魔法学園にようこそ!!』というもので、舞台は魔法が存在する世界の中でも最も魔法技術が発展しているといわれているサンクレア王国に存在する魔法学校「クラウス魔法学院」で、たしか物語のあらすじは、平民として生活していたヒロインが、その魔法使いとしての才能を伯爵家の人間に見出され、クラウス魔法学園に入学し、そこで攻略対象たちと出会い、さまざまな事件に巻き込まれながらも彼らと愛を育むという定番ともいっていいもの。俺はその攻略対象の一人であるリオン・バレンシュタインに転生したのだと、その時になつてはじめて理解したのだ。

ああ、一応いっておくが俺は別に前世は腐女子だったわけでも、そういうゲームを好む性癖だったというわけでもない。ただ、前世の俺の妹が腐女子で、このゲームの熱心な大ファンだったためか、よく俺にこのゲームの話をしており、そのせいかこのゲームの世界の設定や登場人物なんかをいつの間にか覚えてしまっていたんだ。

まあ、それでこの世界がその乙女ゲームの世界だと気づくことができたのだが、最初はそれに気づいても俺はなんにも思わなかった。

まあ、それは当然だろう。いくら魔法の世界の話とはいっても所詮は恋愛物のゲー

ム。自身が攻略対象に転生してしまったが、それでも自分から彼女の方を避けていれば、それほど厄介事に巻き込まれることはないだろうと考えたからだ。

——だが、俺はすぐにその考えが甘かったことを思い知らされる。

『あなたがリオン先生ですね？よろしくお願いします!!』

初めに彼女が話しかけてきたのは、ただの偶然だと思っていた。俺は妹に聞いたイベントはなるべく避けるように生活していたはずだったからだ。

しかし、それから彼女は俺の行く先々に現れ、何かと俺に話しかけてくる。しかも初対面なのにやけに馴れ馴れしく。

さすがにこれは少しおかしいと思い、しばらくそのヒロインである女生徒に見つからないように、彼女の様子を観察していたのだが、どうやら彼女はルート通りに攻略対象たちに粉をかけていることがわかった。

それだけみれば、この世界が乙女ゲームの世界であることを考えれば不思議ではなかったのだが、そこで俺は気づく。ヒロインの行動にどこか不自然なものがあるということに。

いくらこの世界が乙女ゲームだからといって、ここはシナリオのない現実の世界。放っておけば全てのイベントが起こるなんてあり得ないし、なによりゲームの設定では、元平民などという自分の身分に負けず、前向きに頑張るその姿勢、そして誰に対しても分け隔てなく接するその明るい性格で、攻略対象ではなく、学園の皆に好かれていたのだが、この世界の彼女は攻略対象や顔がいい男子生徒とそれ以外のそれほど顔がよくない男子生徒に女生徒との態度があまりにも違いすぎる、まるで二重人格のような性格の女性だった。

そして、俺はさらに思い出す。そんな彼女の性格が、妹に次に進められた乙女ゲームを題材としたネット小説の転生もの。そこでヒロインに転生した踏み台転生者の行動に、彼女の行動が全く同じとっていいほどそっくりだということ。

そこで俺は気づく。彼女も俺と同じ転生者で、ネット小説の踏み台転生者と同じく、

逆ハーレムを狙っているのではないかということに。

それに気づいた俺は、思わず体に怖気が走ったのを覚えているからだ。

なにしろ、俺が妹に見せられたネット小説のヒロインに転生した踏み台転生者は、攻略対象たちを籠絡するが、攻略対象の力を好きに使い、学園の治安を悪化させ、最終的にはその攻略対象たちと共に断罪されるという展開が多かった。

そう、つまりこのままネット小説のとおりに話が続けば、攻略対象の一人である俺も、彼女たちと一緒に俺の人生も終わりを告げてしまう可能性があるからだ。

いや、単純に俺がヒロインの誘惑にひっかからなければいいだけの話なのだが、どうやらこの世界には二次創作などでいう強制力というものが働いているらしく、攻略対象が次々と、不自然なくらいあっさりと籠絡されていつている場面を俺は目にはしている。だからこそ、下手すれば俺も彼女の奴隷とりこになってしまう可能性がある。

それゆえに、俺は日々の生活においてなるべく彼女に接触しないように心がけ、その

おかげか彼女の毒牙に刺さらずにすんでいたのだが、しかし彼女の我侫で、彼女の取り巻きになった攻略対象たちがその無駄に持っている権力で、どんどん学園の治安と雰囲気が悪くなっていくことを止めることはできず、俺にできることはせいぜい、ヒロインたちとの接触を最低限にし、接触しても偽の笑顔で取り込まれないようあしらうしかできない。

そんな時だった。原作では悪役として登場した侯爵令嬢がヒロインたちの嫌がらせを受け、苛められているという報告を聞いたのは。

現国王の親友であり、第一の側近である宰相の一人娘である彼女は、原作では嫉妬深く、その実家の強大な権力により学園で好き勝手していたのだが、この世界では貴族らしく、凛とした雰囲気と淑やかな雰囲気を持ったまさに一流の貴族令嬢と目についていいほどの女性のように、学園の生徒たちからかつての生徒会の面々と同じように多くの尊敬を集めており、生徒会の面々とも、生徒会長が許婚だということもあり、良好な関係を続けていたのだが、あのヒロインたちが来てから生徒会の面々は彼女を疎み始め、ヒロインが彼女をライバルキャラとしてはつきりと嫌い始め、あることないこといいはじめると、ハッキリと嫌悪の感情を示しだし、彼女に本格的な嫌がらせをはじめた。

国内でも屈指の権力者たちの子息である彼らのその行動に、しかし俺も含めて誰も口出しできずに、放っておくことしかできなかつたのだが、二次創作でこのような展開を既に見たことがあつた俺は、このままこの学園内での出来事がバレてしまつてはおそらく日和見の学園長を初めとした俺を含めた多くの教職員がヒロインたちの退学（二次創作のパターンでいえば、おそらく彼らの実家の面子もあり、最低限こうなるだろう）と共に首になるだろう。

そうなれば、貴族の次男として一生を兄を補佐する役目から逃れたいばかりに、両親に頭を下げ、寝る間も惜しんで勉強して手に入れた、この名門校クラウス魔法学園に所属するエリート（笑）教師としての立場が全てパーになつてしまう。

「（あいつら、本当になんとかしなければ。……主に俺の平穩のために）」

そして、俺は原作の設定を思い出しながら、対策を練ろうと必死に頭を捻つていたのだが、そこで俺は思い出す。原作では悪役である侯爵令嬢。誰からも嫌われた彼女を唯一愛していた男のことを。

そう、それこそが、今回侯爵令嬢のために学園に乗り込んできた第一王子なのだ。

実は原作のゲームのエンディングで、心から愛していた第二王子から徹底的に拒絶されてしまったために心を壊してしまった侯爵令嬢を見舞いに来た第一王子の姿があるのだが、そのエンディングで、彼が実は彼女に昔から恋をしていたことが語られているのだ。

どうやら一目惚れだったらしく、自分ではなく弟の婚約者だったことと、自分とは五歳ほど年齢が離れていたこと、そして彼女が弟に心底惚れていることが傍目から見てもわかることから、その想いをずっと心の中に閉まっていたらしいのだが、エンディングでは廃人同然になっていた彼女の姿を見て、泣きながら後悔している場面が描写されている。

それを思い出した時、俺は一つの計画を閃いたのだ。

そう、



——あの第一王子の恋愛感情を利用してやろうと（ゲス顔）

まあ、計画などと大げさにいったが、別に大したことはない。ようは、彼女たちの悪行愚考の数々を密かに調べ、その最中に手に入れることができたいくつかの証拠を、今は引退して悠々自適の生活を送っている、実家の全当主である親父殿と、実家の当主を継いでいる兄へと渡して、密かに第一王子に渡してくれと頼んだのだ。

そうすれば、彼女に対して深い愛情を抱きすぎ、未だに婚約者の一人も決められていない（ちなみにこれは妹に最低限覚えろといわれて押し付けられた設定集のようなもの）に書いてあった）第一王子はこのことを知っていてもたつてはいられず彼らの断罪に動き、しかしそれを彼に報告した俺は、彼らの断罪に協力したのだから晴れて無罪放免。彼らへの処罰が終わった後は、今までどおり、平穩な教師生活を送れるはずだ。

そして、狙い通り第一王子からの反応は上々であったようで、俺はその後彼らの動向

を探り、さらなる証拠を探れという指令を、親父殿たちを經由して第一王子から頂いたので、そこからさらに一ヶ月ほど、なるべく接触しないように、しかし積極的に彼らの動向を探ることとなった。

まさか、このようなスパイじみたことをやらされることになるとは思わなかったが、これも俺の日々の平穩を取り戻すため。その手の魔法が結構得意だったということもあり、俺はこの一ヶ月で三桁にも及ぶ彼らの悪行の証拠を手に入れることに成功し、その努力の甲斐あり、こうして無事に我が身を危険にさらすことなく、彼らを学園から追放することができたというわけである。

俺は、今までのストレスの原因である彼女たちの行動をこれから気にしなくていいこともあり、高揚した気分のまま職員寮にある自分の部屋へと戻っていく。

「やれやれ。これまでだいぶ苦労したが、これで学園も元通り。俺の平穩な生活もやつと戻ってくるだろう。——どうほう転生者である彼女には悪いが、これも自業自得だと思つて諦めて罪を償つてもらおう)」

——だが、この時の俺はまだ知らなかった。

この時の情報収集能力が原因で第一王子に目をつけられ、学園から無理やり引き抜かれ、国の諜報部に回され、スパイとして各国を回りながら某ゼロゼロ七な男なみに波乱万丈な日々を送ることになるとは。

……………なんでき。

★ ★

■ リオン・バレンシユタイン

この小説の主人公で転生者。

魔法が最も発達しているといわれる大国、サンクレア王国のバレンシユタイン伯爵家の次男として産まれ、当主の座を父から継いだ兄の補佐として一生を暮すはずだったが、それを嫌い、方々に頭を下げ、そして必死の努力の結果、無事に国内きつてのエリート魔法学校であるクラウド魔法学校の教師に就職することができた。

しかし、ヒロインが学校に入学したと同時に前世の記憶を思い出し、そしてその後のヒロインの行動を観察し、原作、そして二次創作の知識からヒロインが逆ハー狙いの踏み台じみた転生者と同じ性質の存在だと察知。このままでは二次創作で見たように学園の治安が悪化し、それに攻略対象である自分も巻き込まれてしまう可能性があるとして、自身の平穏な教師生活のために原作知識で知った第一王子の悪役である侯爵令嬢への好意を利用し、ヒロインたちの学園での悪行の様子をいくつかの証拠とともに父親たちを経由して第一王子へと知らせ、ヒロインたちを学園から追放する手助けをした。

そしてこれからは平穏な生活を送れると思っていたのだが、ヒロインたちの行動の証拠を集めるためにがんばりすぎ、得意な魔法も諜報部向けの魔法が多かったため、第一

王子に学園から無理やり引き抜かれ、王国の諜報部のスパイとして、全国各地を回り波乱万丈な生活を送ることとなる。（まあ、完全な自業自得であるが）

見た目は乙女ゲーの攻略対象だけあり抜群だが、性格はまずは保身に走る小物。そのためなら、それほど良心の呵責を感じない程度の相手だったら、ある程度知っている人間でも犠牲にできるぐらいには人でなし。

しかし同時に小心者でもあり、今回表立ってではなく、隠れて行動していたのは、下手に行動してヒロインたちを学園から追放することができても、彼らからなんらかの報復を受けることを恐れたため。

また、保身に走る性格ではあるが、小心者ゆえに押しが弱いために人の頼みは断れず、今回の諜報部への移動の件も本当は断りたかったが、断り切れず受けることとなった。

得意魔法は幻術系、状態異常系。原作知識は前世で腐女子だった妹に無理やり何度も語られるうちに自然と覚えた。

## 削除作品：転生の奇術師    プロローグ：転生の奇術師

突然だが、あなた方にとって“神様”というものはどういう存在でしょうか？

全知全能の存在？敬うべき尊いもの？それともコアなところで集めれば願いを叶えてくれる不思議な玉を作ってくれる元宇宙人といったところでしょうかね？

各々方それぞれいろんな意見があると思いますが、私にとって神という存在がどうい  
うものか表すならば、たった一言、こう呼べばすみます。

そう、

—— 『最低最悪のクズ野郎』と。

★ ★

元々私はとある会社で普通のサラリーマンをやっていました。

将来特になりたいものなどがなかった私は、とにかくいい会社に入ろうと思い、必死で勉強して当時地元で有名なそれなりの企業に入社することができたのですが、実はその会社がとんだブラック企業で、入社したばかりの新人であった当時の私は簡単な仕事の基本を教えられてからすぐに馬車馬の如くこき使われるようになり、深夜遅くに仕事が終わると家で泥のように眠り、そしてまた朝早く出勤するという毎日を送っていました。

その日も夜遅くまで働いてくれたくださった私は、もう今日も飯を食ってさっさと寝ようと重い足をひきづりながらもコンビニに入ったのですが、その時とある理由である漫画雑誌が目にとまったのです。

その雑誌とは「Vジャンプ」。毎月二十一日に発売されるこの月刊誌は、おそらく日本一有名な漫画雑誌である少年ジャンプの兄弟分ともいえるもので、漫画雑誌といいますが少年ジャンプとは違い、漫画よりもホビーマガジンの情報に重点を置いている、どちらかといえばゲーム情報誌のようなものに近いかもしれません。

私も子供のころよく買っていたのですが、その目的は実はゲームの情報でももちろん漫画でもなく、このVジャンプに時々付いてくるとあるカードゲームのカードが目当てでした。

そのカードゲームとは『遊戯王 O C G』。

オフィシャルカードゲーム

これは元々かつて少年ジャンプで連載されていた「遊戯王」という漫画の中に登場したものを再現した、所謂ファングッズの一つだったのだが、その美麗なイラストや多岐にわたる戦術。そして元になった漫画が元々かなりの人気作品であったこともあり瞬く間に世界中に広まり、今や世界一売れたカードゲームとしてギネス記録に認定されるほどになっていたりするのです。

そして元の漫画が同じ会社の少年ジャンプで連載されていた関係なのか、この遊戯王のカードが時々このVジャンプに付録としてついてくる時があり、私はその付録目当てでこのVジャンプを購入していました。

そしてどうやら今月のVジャンプにも遊戯王のカードが付録として付いているようで、遊戯王を辞めてしばらく、存在も忘れかけていたこの雑誌が目に残ったのは、そういう理由からでした。

懐かしく思った私は久しぶりにそれを手に取り、今はどういふカードが出ているのか軽くページをめくって見てみたのだが軽く驚いたのを覚えている。その付録カードが、私が当時一番お気に入りだったカードとそっくりだったからです。

私が遊戯王のプレイヤーだった当時は存在していなかったその黒い緑のカードはなんでも「エクシーズモンスター」というものらしく、私がお気に入りだったカードをモデルにしたカードなんだとか。



その効果をよく見ると、なるほど確かに私がかつて使用していたデッキに入れたら十全に活躍するであろう内容であり、そのサポートとしていくつかの知らないカードもそこで紹介されていました。その殆どが（中には意味がわからない効果のカードもあったが）どれもおもしろい効果のカードばかりでした。

そしてそれを見た私は、当時このカードゲームにハマっていた時のことを思い出し懐かしくなり、明日から三カ月ぶりの二日間の連休だったこともあり、せっかくだからこのカードを入れて昔使っていたデッキを今風に組みなおして遊んでみようということになり、そのVジャンプをその日の晩飯と一緒に購入し、そのコンビニを後にしたのです。

——それが間違いだつたとも知らずに。

★ ★

コンビニを後にした後、いつもの安アパートに帰宅した私は、さっそく押入れの奥底

にしまっていたデッキを引っ張り出し、パソコンで今の遊戯王のルール、そのデッキにあうであろうカードを調べ上げ、次の日にはそれを全て購入し一つのデッキを作り上げた私は、ちょうどその日の午後にカードを購入したゲームショップで遊戯王の大会をやると聞いたのでせっかくなので参加しようと、その時間までの暇つぶしにと、付録目当てで購入したVジャンプを読んでいたのですが、その中にとある記事を見つけたのです。

それは「遊戯王アニメ新シリーズ放送決定」というもの。しばらく遊戯王から離れたいたので知らなかったのですが、なんでも遊戯王のアニメは既に第四シリーズまで放送されていたらしく、近日記念すべき第五シリーズが放送されるというのです。

私は遊戯王のアニメは第二シリーズが終了してから見てなかったのだから知らなかったのですが、第三シリーズでは「シンクロ召喚」、第四シリーズでは先ほどいった「エクシーズ召喚」という新しいモンスターの償還方法が登場したらしく、この第五シリーズでも今で全貌は知れないが、「ペンデュラム召喚」という新しい召喚方法が登場するらしい。

私は今までアニメにはまるで興味がなかったこともありそれらのことをまるで知らなかったのだが、それらのことを知り驚くと共に、とてもわくわくしたことを今でも覚えていてる。大人になり遊戯王から離れていたが、当時自らを決闘者デュエリスト（漫画やアニメの中

での遊戯王―ちなみに漫画やアニメの中でこのカードゲームはデュエルモンスターズと呼ばれている―のプレイヤー全般を称する名称)と称して学校で同行の士であった当時の友達と決闘に明け暮れていた当時の血(笑)が騒ぎ出したのです。

その時ふと私は自分の今の状況を思い出しました。

寝る間も惜しんでまでとはいえませんでした。それでも私なりに一生懸命勉強して入った会社。それがブラック企業だったせいで、殆ど休みも無く働くことになり、上司に理不尽に怒られ、先輩にはいびられながら過ごす日々。

そんな日々を思い出し、私は遊戯王のアニメの登場人物たちが羨ましくなりました。もちろん彼らが苦勞してはいないとはいいません。それどころか確実とっていいほど世界の危機に巻き込まれるのです。苦勞どころではないでしょう。

しかし彼らはデュエルモンスターズという自分が好きなものに本気で打ち込み、夢に向かって危険はあるが刺激ある日々を送っているのです。

単調でただつらいだけの日々を送っていた私はそれを羨ましく思ったのです。

そう―――思ってしまった《・・・》のです。

その時でした。

——やつ<sup>……</sup>の声が聞こえてきたのは。

『——おお、そりゃあちようどよかった！じやあ送ってやるよ』

「はっ。」

突然聞こえてきたその声には思わず呆けた声を出してしまいます。

それも仕方ないでしょう、なにせ突然脳内に知らない人間の声が聞こえてきたのですから。

突然の事態に困惑した私は、とりあえず声の主を探すために辺りを見渡そうとした、ちようどその時だった。手に持っていたVジャンプが突然光り出したのは。

「——なッ!?!」

あまりに予想外の事態に私は咄嗟にそれを手放そうとしたのですが、時既に遅くそのまま私の体は光に包まれ意識が途絶えてしまいました。

そして再び意識を取り戻した時、私は自分の顎が思わず外れそうになるほど驚きました。

なにせ、私がその時いたのは元々いたゲームショップでもなく、だからといつても自

宅でも通いなれた会社でもない。

——全く知らない街の見たこともない広場にいたのだから。

★ ★

「……………は？」

どうやら私はその広場にいくつかあるベンチの一つに寝ていたようで、そのせいかわかりませんが、何人かの人は私のことを遠巻きで心配そうに見ていましたが、起き上がり辺りを見渡した私は、そんな視線には気づかず思わず再び呆けた声を出してしまいます。……まあゲームショップで雑誌を読んでいたはずなのに、突然の光に包まれたと思っただけでなく、見たこともない場所にいたのです。それぐらいの醜態は許してください。

あまりの状況に頭が混乱し、なにがなんだかわからない状態——所謂メダパ二状態ですね。え？違う？——に私は陥ってしまったのですが、それでもなんとか思考を働かせ、その場所にそのままいてもしょうがないという結論を出した私は、とりあえず辺りを探索しようと今まで寝ていたのであろうベンチから移動しようとしたのですが、その時一枚の紙が足元に落ちていることに気づいた私はなんだ？と思いつつもそれを

拾い、なんとなくその中身に目を通して思わず驚きで目を見張ります。そこには驚愕の事実が書かれていたからです。

その紙は実は私に向けての手紙だったようで、そこには以下のような内容が書いてありました。

~~~~~

やあやあ、どうやら無事にそっちに行くことができたようだね、安心したよ♪突然の状況に混乱しているようだろうけどとりあえず自己紹介だけさせてもらうZE★

俺の名前は「★★★」。……っってお前ら人間に俺らの名前いつてもどうせ理解できないんだっけすっかり忘れてたぜ、てへぺろ♪

まあ、あれだ。とりあえず俺はお前らでいう「神様」とか呼ばれる存在だ。まあ信じられないのはわかるけどそこ信じてもらわないと話が進まないから、とりあえず人間じゃないとだけ理解してもらえりゃあいい。

さて、まずはお前さんはなんで自分がそんなところにいるか知りたいと疑問に思っていると思うんだが、まずはそれに答えておこうと思う。

まあ簡単に言うと俺がその世界に送りました。

なんでかっていうと、実は俺ら神様は世界を管理する職業についてるんだけど、それって結構暇でさー。かなり退屈なんだよね。

で、そういう場合俺らは既に死んだ人間を適当に選んで自分が管理してる世界に転生させて、それを観察して暇をつぶすんだけど、どうせだったら自分が管理している世界の知識を持つてる人間を転生させた方がおもしろいじゃん？

だけど俺ってまだ神様になったばかりの下っ端で管理している世界は一つしかないし、そのせいとかその世界のことを知ってるやつってまだ殆どいないわけよ。

その関係でまあそこは諦めたわけだけど、実はその世界ってお前さんも知ってる遊戯王のまだ未放送のアニメの世界でさあ、なんでせめて遊戯王のOCGのルールを知っているやつを送ろうとちょっとお前の持ってたVジャンプって雑誌に細工をしてたんだよ。

その細工するのはそのVジャンプを購入したやつの中で、自分の住んでいる環境に不満を持っていて、少しでもデュエルモンスターズの世界にいつてみたいというやつを俺が管理する世界に送るように設定しておいたんだ。

本当は一応転生させる対象者にはその意思を聞かなくちゃいけないんだが、お前さんの場合はデュエルモンスターズの世界の人間を羨ましいと思ってたみたいだから別に大丈夫だろ。いやーよかったよかった（笑）。

じゃあお前さんのデッキはかばんごと送つといたからさつそくデュエルモンスターズの世界を楽しんでくれ★あ、ついでに肉体は十歳ぐらいまで若返らせておいたから感謝してもいいんだぜー！

ハーレムを作るもよし、原作に介入して主人公気分を味わうもよし（原作なんてまだねえからしらねえだろうが）。好きにやつてくれよ。俺はそんなお前さんの姿を見て楽しむから。……尤も原作まで後六年はかかるんだけどねww

じゃそゆことで♪

PS：あ、そういえばお前さんの戸籍と住む場所用意すんの忘れたけど、今更設定しなおすのもめんどくさいからそつちでなんとか用意してくれ★

~~~~~

……この手紙を読み終えてから思わず大声で叫んでしまった私の行動をどうか理解してもらいたい。

だって仕方ないだろう！この手紙の内容が正しけりやあ、俺はこの神様つてやつの暇つぶしのために家も無しに文字通りまったく知らない世界に放り出されたことになる。



これに怒らずにいつ怒れつてんだ!!

それに肉体を若返らせたから感謝しろって、それじゃあバイトもできねえじゃねえか、マジふざんけんああのクソヤロおとおおとおおとおおとおお!!

……おつと申し訳ありません、つい地が出てしまいました。

そのまま私はしばらくその場で怒りに打ち震えていたのですが、周りから自分に集まる危ない奴を見るような視線に気づいて気持ちをやなるとか落ち着かせると、その場から逃げるように立ち去りながらも、私はこれからどうするか考えました。

幸いめぼしいシングルカードがあつたらついでに買つておこうとある程度お金は卸しておいたので、財布にはある程度のお金がありました。それもせいぜい一ヶ月の食費程度。漫画喫茶やビジネスホテルにでも泊まればすぐに尽きてしまう程度の資金しかありませんし、働くにも戸籍がなければちゃんとしたところはおそらく雇ってくれないでしょう。仮に戸籍などみないで雇ってくれるところがあつたとしても、先ほどいったように神の野郎の余計なお世話でおこちゃまボディになつてしまった私を雇ってくれることは法律的にありえないでしょうし。

これからの生活を考え、私は絶望感打ちのめされ、思わず暗い気持ちになつてしまします。

——その時です。その話し声が聞こえてきたのは。

『——駅前のショッピングモールでデュエル大会やってるんだってな』

『ああ、確か優勝賞金五十万だろ？ふとっばらだよな』

『!?!』

私はこの話を聞いてある考えが閃きました。

手紙にはこの世界はまだ未放送のシリーズではあるが、デュエルモンスタースターズの世界だと書いてあった。

デュエルモンスタースターズの世界とはつまりデュエルモンスタースターズが中心で世界が回っており、俺が元いた世界とは違って先ほど通行人たちが話していたような賞金つきの大회가いくつも行われていても不思議ではない。

ならばその大会に出まくって優勝し続ければ生活費ぐらいは普通に稼げるんじゃないか？そう思ったのです。

もちろんそう簡単に上手くいくとは思っていませんでしたが、それ以外に生きる道がないと確信した私は、こうして賞金稼ぎのデュエリストとしての道を歩むことを決めました。



まあそんなわけで私は賞金稼ぎとして、この神曰く「まだ未放送のアニメ遊戯王の世界」だというこの世界で生きていくことになったのですが、最初は思ったより上手くいっていました。

ブランクと知識不足のせいはいくつか優勝を逃した大会もありましたが、それでもなんとか感を取り戻していき、一年ほどたった時には生活がかかっていたこともあり、滅多なことではそこいらの大会で優勝を逃すことも無くなり、ある程度生活に余裕がでけるようになったのですが、ある日思わぬ事態が私を襲ったのです。

それはある日いつものようにとある場所で行われたデュエル大会に出場し、なんとか無事優勝した帰りのこと、私は突然正体不明の集団に路地裏まで拉致されてしまったのです。

謎の展開に私は困惑していたのですが、その時一人の男性がいやらしい顔で私の前に出てきました。

そこで私は気づいたのでありますが、その男性は先ほど私が参加した大会の決勝で私が戦った相手でした。大会の選手紹介のアナウンスでかなりの経歴を持つデュエリストだと

いうことをいつていたのでよく覚えています。

その男性は私にいいました。自分がお前みたいなの小僧に負けるなどありえない。自分が負けたのはお前がイカサマかなにかをしていたからだ。だから制裁を加えると。

……正直意味がわかりませんでした。

後で知ったのですが、この男はある大企業の息子としてわがままし放題で育つたらしく、そのためかデュエルで負けた相手にこうしていちやもんをつけて手下を使つて憂さ晴らしにランチにかけているそうで、どうやら私はそんな男のターゲットに選ばれてしまったそうなのです。

もちろん私も抵抗はしたのですが、なにぶん中身はともかく肉体は子供の身。抵抗むなしく他の犠牲者たちと同じように彼らの暴力の餌食となつてしまいます。

降り注ぐ悪意の嵐に必死に耐えながらも私は思いました。なぜ俺がこんな目にあうのか。俺がいったいなにをしたんだと。

ただ羨ましいと思っただけでなぜここまでされなくてはいけないのだと。そして薄れいく意識の中、こうも思いました。

——誰か俺を助けてほしいと。

その時でした。

『——そこでなにをしている!!』

その人が現れたのは。

突如現れたなぜかシルクハットに光り輝くスーツというとても奇抜な格好をしたその男性は、すさまじい形相で私を囲んでいた男たちを瞬く間にこれまたなぜか手に持っていたステッキのような物で打ちつけ追い払うと、慌てて私のところにやってきて私に大丈夫か聞いてきた。どうやら心配してくれたようです。

私はそれになんとか返事を返すと、助かった安心感からかそのまま気絶してしまったのだが、目を覚ますと知らない天井が見えたので、またこのパターンかよと思いつながら起き上がると、白を基調とした清潔感あふれる光景が目の前に広がりました。どうやらここはどこかの病室のようです。

なぜ自分がこんなところにいるのか不思議に思い首を傾げていると、突然病室の扉が開いたので急いで視界をそちらに向けてみるとそこには私をあの手たちから助け出してくれた男性の姿が。

『おお、目を覚ましたんだね?よかったよかった!』

話を聞いてみると、彼は実はこの世界でも有名なプロデュエリストで、あの時は私が優勝した大会があった場所でイベントがあったらしくそこに呼ばれていたらしかったんですが、会場入りする前にどこからか男性の大声が聞こえてきて、それにただならぬ気配を感じて私がリンチを受けていた場所まで急いで駆けつけてくれたということでした。

私が気絶した後は直接自身でこの病院まで運んでくれたらしく、先ほど仕事が終わったので私の状態を確認するために急いでここまで来てくれたんだという。

私は思わず感動してしまった。この世界に来て既に一年が経つが、ここまでやさしい人に出会ったのは初めてだったからです。

急いでお礼をいうと、彼は照れくさそうに頬を掻いて気にしなくていいと伝えてくれたのだが、やがてその表情を真剣なものにすると、深刻そうに私にこう聞いてきました。

『ところで君はいったい何者なんだい？』と。

まさかごく普通の一般ピーポーである私がこのような質問をされる日が来るとはと思いながら話を聞いてみると、なんでも気絶した私を病院に運んでくれた彼は、私の親に連絡しようとしたらしいのだが、私が身につけているものに身分を証明できるものがないので、それを不審に重い知り合いに私のことを調べてもらったらいいのだ。

そしてその調査の結果、私に戸籍がないことが判明し、また私が持っていたカードの

いくつかもこの世に存在しないカードであったらしく、もう本人の口から聞いた方が早いとこうして詰問という手段に選んだらしいのです。

私はこの時本当のことをいうかどうか迷いました。この人がまだ信用できる人かどうかわかりませんし、それよりなにより本当のことをいっても信じてもらえるか怪しいと思つたからです。

ですが気づいたときには私は彼に全てを話してしまいました。

その理由としましては彼の雰囲気の話さなくては決して引いてくれなさそうなほど真剣だったり、命の恩人に（この表現は決して大げさではない。ランチに会った後そのまま放置されれば子供の体の私はそのまま死んでしまっていた可能性もあるからだ）嘘をつきたくないという感情が働いたというのもあるが、一番の理由は私が疲れきつていたので。

見知らぬ土地で親しい人間もない状態で孤独に一人明日の生活を心配しながら生活する日々。そんな日々になんか気づかぬ間によほど鬱憤が溜まっていたのだろう。気づいたときには私は涙をぼろぼろと流しながら彼の胸に抱きしめられていました。

彼はなんど謝りながらこういつてくれました。『よく今までがんばった。もう大丈夫だ』と。

……その言葉に思わず大声で泣き叫んでしまったのは今では誰にもいえない黒歴史

となっております。

その後その人は私にいいました。「俺たちの家族」にならないかと。

突然の申し出に驚いている私に彼が説明した内容によると、なんでも彼は結婚して既に子供も一人いるらしいのですが、彼はその職業上家を空けることが多々あり、その間彼の代わりに家族を守ってくれる人が欲しかったらしく、中身が成人を過ぎているということもあり、私が適任だと思つたらしい。また、何でも彼の奥さんは困っている人や動物を見ると放っておけない性質らしく、もし私の話とその奥さんに伝われば自分が怒られてしまうということも。

私は最後のどこか冗談めいた彼の言葉にくすりとはわさせられながらも、私は彼に恩と親しみを感じていたこと。また孤独なひとりの生活に参つていたこともあり、喜んで彼の申し出を受けることにしたのです。

——これが私、“遊緋久遠”が彼、“榊遊勝”の家族になった瞬間でありました。



# 第一話：奇術師の帰国

——質量を持った立体映像ソリッド・レシジョンの実現により生まれた「アクションデュエル」。

ファイルド、モンスター、そして決闘者デュエリストがいつたいたとなつたこの決闘デュエルは人々を熱狂の渦に巻き込んだ。

★ ★

『舞綱市』。

デュエルの技術だけが突出して進歩しており、アクションデュエルの基幹となる質量を持つ立体映像ソリッド・レシジョンの開発も、この街に本拠を構える「レオ・コーポレーション」が成功させ、普及させた、いわばアクションデュエル発祥の地ともいえる。

そんな街を歩く一人の少年がいた

赤を基調とした服に赤いハットをかぶつたその少年は、大きなスーツケースを引きずりながらも、その細長い瞳を僅かに開きながら街の様子を観察していた。

「——いや、変わりませんねここらへんは」

彼の名は遊緋久遠。

伝説のアクションデュエリスト、榊遊勝の養子にしてこの小説の主人公。——そして転生者でもある。

「(……しかし懐かしいですね。私がこの世界に転生して遊勝さんに拾われてからもう五年たちますか)」

彼、遊緋久遠はかつて勤めていた会社がブラック企業だったこと意外はごく普通のサラリーマンだったのだが、ある日神と呼ばれる存在のトラップ（笑）に引っかかり、この遊戯王アークフアイブの世界に転生してしまったのだ。

戸籍も住む場所もなかった彼は、唯一持っていたデッキで賞金稼ぎの真似事をして生活の糧としていたのだが、ある日厄介な相手に買ってしまった、その相手の逆鱗に触れその相手と手下により集団暴力を受けていたのだ。

そんな彼を助けたのが当時既に世界有数のプロデュエリストとして知られていた元デュエルチャンピオン榊遊勝で、彼の事情を聞きそれを不憚に思った遊勝はそのまま知り合いの伝で彼に戸籍を用意し、そのまま彼を養子にしたのだ。

榊家の一員としてこの世界を生きることになった彼は、遊勝の妻である榊洋子（さかきよつこ）とその息子である遊矢にも無事受け入れられ、この世界に來た当初は考えられないほど平穩な

日々を送っていたのだが、榊家の一員となって二年ほど経ったある日、榊家にとつての重大事件が起こった。

——久遠の義父である榊遊勝の失踪だ。

当時の彼は、ランキング上位のプロデュエリスト「ストロング石島」の挑戦を受けており、（この出来事によりストロング石島は不戦勝で新たなデュエルチャンピオンとなった）彼と王座決定戦を行うはずだったのだが、その決定戦の場に彼が現れなかったのだ。

もちろん警察にも捜索届けを出したが見つからず、その出来事により彼の名は稀代のデュエルスターから一転、勝負の場から逃げ出した臆病者のデュエリストと、侮蔑と嘲笑をもって呼ばれるようになり、彼が経営していたデュエル塾「遊勝塾」からはどんな生徒が減っていった。

だがそれでも彼が逃げたとは信じないものの中にはおり、彼もその一人だった。

それは久遠が既に遊勝のことを本当の家族同然に思っていたから信じたかたといふ思いもあるが、彼の家族になり彼が唱える「エンターテイメントデュエル」を遊矢と共に彼から直接教わっていた彼は、生粋のエンターテイメントである彼が、仮にストロング石島との決闘に勝てないと思つたとしても、その程度で彼が観客から逃げるとは思

えなかつたのだ。

さらに当時デュエルチャンピオンという、遊戯王の世界においてはこれ以上ないほど有名な称号の持ち主であつた彼の姿を誰も見ていない、なにも目撃証言がないというところが、久遠に遊勝がなにか事件に巻き込まれてしまったのではないかという確信を持たせるのに十分だつた。

そして彼は遊勝の情報を集めるために旅に出ることを決意したのだ。

もちろん彼の家族であり義母である洋子や遊勝の後輩であり、遊勝塾の塾長である柊修三ひいらぎしゅうぞうは反対したのだが、彼にとつては恩人であり、家族が行方不明になり、警察でも行方を見つけれられないときた、そんな状態で我慢などできるはずもなく、定期的に連絡を入れるという約束をしてなんとか許可を貰い、遊勝の情報を得るために旅に出ているのだが、一週間ほど前にとある情報が彼の耳に入りこの街に三年ぶりに帰つてきたのだ。

その情報とは榊家とも因縁が深い現デュエルチャンピオンであるストロング石島を、彼の義弟である榊遊矢が新しい召喚方法であるペンデュラム召喚により撃破したというものだ。

ストロング石島は遊勝が失踪したことにより不戦勝でチャンピオンの座についた経歴を持つ男だが、それでもプロデュエリストであり当時上位のランキングにいた猛者。

決して弱くはない。

そんな石島を義弟が倒したと聞いて彼は驚いたのだが、なにより彼に帰国を決意させたのは義弟が使用したという新しい召喚方法「ペンデュラム召喚」。これを義弟である彼が初めて使用したからであった。

「……しかしまさか遊矢のやつが主人公とは思いませんでしたねー」

彼、遊緋久遠は転生者であり、この世界がまだ未放送であった遊戯王の新しいシリーズの世界であることを知っている。そしてペンデュラム召喚が新しいシリーズで登場する所謂「テーマ」であることも。

そして彼は転生する前に見ていなかったシリーズの遊戯王のアニメのことも軽く調べたのだが、そのどの主人公の名前にも「遊」の感じが入っていることを知っていた。

「遊」が入る名前に新しい召喚方法。この二つの要素を持ち、さらに遊矢がペンデュラム召喚を行った今年が神が手紙に書いていた原作が開始する時期である、彼がこの世界に転生した「六年後」であることから彼は遊矢がこの世界の主人公であることを確信したのだ。（実は主人公である遊矢の顔も久遠はVジャンプで確認していたのだが、初めて会った時は子供のころで、Vジャンプに乗っていた十四歳の頃の姿を見たことがなく、それ以前に生活の心配や遊勝の失踪という大事件などがあったためどこかで見たとがあると思っても気にしたことがなかったのでニユースで遊勝がペンデュラム召喚

を行うまで全く気づかなかった)

そして彼は遊戯王の主人公にはとてつもない厄介ごとが降りかかることも知っており、そのため彼は遊矢たち家族の助けになるために、三年ぶりにこうして日本の地を踏んだのだ。

——踏んだのだが、

「……………どうやら少し遅かったようですね」

目の前にある遊勝塾という看板が掲げられた独創的な建物。その前に止まっているこの辺りではほとんど見ない高級車の姿に、久遠はすでに自分の家族がただならぬ事態に陥っていることを知るのであった。

そんな光景に久遠はため息を一つつくと中に入る。せめて大変なことになる前になんとかしなければと。

## 第二話：奇術師の再会

### 遊勝塾。

それはかつてのデュエルチャンピオンである榊遊勝が自身の後輩である柘修三の協力のもと設立したデュエル塾のことで、その規模は弱小といえるほど小さいながらも、榊遊勝が提唱した明るく楽しいデュエル「エンタメデュエル」を実践するために、毎日ドタバタしながらも、さわがしくそれでいて楽しい日々を送っている。

しかしそんな遊勝塾をある日とんでもない事件が襲う。

——業界最大手『LDS』の襲来である

LDS。LDSとは、質量を持つ立体映像を開発し、アクションデュエルを生み出したともいえる大企業『レオ・コーポレーション』が経営する、世界でも最大規模の勢力を誇るデュエル塾のことなのだが、そのLDSの理事長であり、レオ・コーポレーション社長の赤馬あかば零児れいじの母でもある赤馬日美香あかばひみかが、遊勝塾を乗っ取るために自身の手駒であるLDSのエクシーズコース、融合コース、そしてシンクロコースのそれぞれのコースのトップエリートである生徒たちを引き連れて乗り込んできたのだ。

なぜ彼らがそのような行動に走ったのか。そのきつかけは同じくLDSの生徒である沢渡シンゴさわたりシンゴが何者かに闇討ちされたことから始まる。

実はこの沢渡シンゴという男、以前赤馬零児の部下である中島から遊勝塾の生徒にして現在確認されている唯一のペンデュラム召喚の使い手であり、榊遊勝の実の息子である榊遊矢からペンデュラムカードを奪うように指示を受け、その際に遊矢とデュエルをして敗北してしまっただが、それを逆恨みして遊矢への報復を企んでいたところを、しかし突如現れた謎の黒マスクの男に襲撃されやられてしまったのだ。

遊矢に敗北してしまっただ理由を自身のカードのせいだと考えたのか、デッキの主力を元々使用していた「ダーツ」カードから、俗に「帝シリーズ」と呼ばれるレアカード群の一つである「氷帝」を主軸とした戦術へと変えてデッキを強化していた沢渡であったが、そんな彼のデッキをもってしても黒マスクの男の戦術を破ることはできず、男のエースカードである「ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン」により止めを刺されてしまった。

しかしそこで黒マスクの男のマスクが外れ、その男の容姿が明らかになったことにより話がややこしくなってしまった。

なんと黒マスクの中から出てきた男の顔は、遊矢の顔と瓜二つだったのだ。

その正体はもちろん全くの別人なのだが、襲撃された本人である沢渡にはそんなこと



わかるわけがなく、犯人は遊矢だと証言し、そのためか闇討ちの犯人は榊遊矢だと断定され話が進みそうになったのだが、そこでまったをかけたのが、LDS理事長である赤馬日美香だったのだ。

赤馬理事長はこれを機会に非公式であろうとLDSの生徒である沢渡を弱小である遊勝塾の生徒が破ったという事実を有耶無耶にし、LDSでも学ぶことができないう最新の召喚方法であるペンデュラム召喚の使い手である榊遊矢を手に入れるために遊勝塾の乗っ取りを考えたのだ。

しかし遊勝塾の面々としてはそんなものは寝耳に水であるし、なにより話の中心人物である遊矢本人としても見に覚えがない。

そしてLDSと遊勝塾の間で、沢渡シンゴへの襲撃についてやったやっつてないとの水掛け論が続いた結果、遊勝塾の経営権を賭けてLDSの精鋭たちとのデュエル三本勝負を行うこととなった。

★ ★

LDSとのデュエル三本勝負。第一戦目はLDSジュニアユースエクシーズコース

所属、志島北斗V S遊勝塾所所属、榊遊矢。

遊勝塾からはまずは確実に一勝をもぎとろうと遊勝塾のエースデューエリストである遊矢が出場したのだが、相手は業界最大手のLDSの精鋭。しかも公式戦勝率9割以上という同年代においてトップクラスの実力を誇る相手。当然苦戦を強いられた。

星の騎士たち「セイクリッド」を操る北斗は「ターン目から自身のエースカードの一つである、「セイクリッド・プレアデス」をエクシーズ召喚し、ペースを掴み遊矢を圧倒。二枚目の「セイクリッド・プレアデス」を召喚。そしてエクシーズユニットを使い果たし効果が発動できなくなったプレアデスを使い、二枚目のエースカードである「セイクリッド・トレミスM7」の召喚に成功する。

絶体絶命の危機に陥る遊矢。しかし遊矢が崩れゆくフィールドの中、一枚のアクシオンカードを捨て身で手に入れたことがきっかけで形成が逆転する。

新たなE Mモンスターである「EMトランポリンクス」の効果によりペンデュラムスケールの星詠みの魔術師とEMヒツクリカエルを入れ替え、再びオッドアイズと星詠みの魔術師をペンデュラム召喚する。

当然北斗はそれを妨害しようとプレアデスの効果によりオッドアイズが遊矢の手札に戻るが、星詠みの魔術師の効果によりオッドアイズを再度フィールド上に特殊召喚。そしてヒツクリカエルの効果により星詠みの魔術師の攻撃力と守備力を入れ替えた後、

逆転の魔法カード「マジカルスターイリユージョン」を発動したのだ。

このマジカルスターイリユージョンは星詠みの魔術師がフィールド上に存在する時に発動でき、その効果はこのターンの終わりまで、お互いのフィールド上にいるモンスターは、お互いのプレイヤーのコントロールするモンスターのレベルの合計×100ポイント分アップするというもの。この魔法カードにより遊矢は自軍のモンスターの攻撃力を1400ポイントアップさせることに成功し、そのモンスターたちの総攻撃により一気に北斗のライフを0にして大逆転を成し遂げたのだった。

そして次の第二戦目はLDSジュニアユース融合コース所属の光津真澄VS遊勝塾所属柊柚子。紅一点同士の対決。

宝石商の娘である真澄は、その血筋に相応しく宝石を模した戦士たちである「ジェムナイト」の使い手で、1ターン目から手札のジェムナイト・ルマリンとジェムナイト・エメラルドを融合し、ジェムナイト・パースを融合召喚するという技を見せるが、柚子も負けじと自身のエースモンスターである幻奏の音姫プロディジー・モーツァルトをアドバンス召喚し、その効果により幻奏の音女カノンを特殊召喚。ジェムナイト・パースを破壊し、大きいダメージを与えた。

しかしそんな柚子の行動も真澄にとっては計算のうち。彼女は次の自分のターンに新しく召喚したジェムナイト・アレキサンドの効果によりジェムナイト・クリスタを

デツキから特殊召喚。

タブレット・フュージョン

そしてクリスタにより幻奏の音女カノンを破壊した後、伏せていた罫カードである  
 廃石融合により墓地のジエムナイト・アレキサンド、ジエムナイト・ルマリ、ジエ  
 ムナイト・エメラルを除外し、最強のジエムナイトであるジエムナイトマスター・ダイ  
 ヤを融合召喚したのだ。

そしてその効果により墓地のジエムナイト・パーズの効果のコピーしたマスター・ダ  
 イヤで真澄はプロデューサー・モーツアルトを戦鬪破壊し、バーンダメージを与え、さら  
 に追加攻撃により柚子のライフを0にし、勝負を決めた。

こうして第二戦目はLDSに軍配が上がったのだった。

そして第三戦目。両軍一勝一敗により迎えた最後の試合。

相対するのはLDSジュニアユースシンクロコース所属刀堂刃VS権現坂道場所属  
ごんげんざかのぼる  
 権現坂昇。

本来なら遊勝塾側は遊勝塾所属である少年紫雲院素良しうんいんそらが出るはずだったが、彼の気が  
 どうしても乗らないということで彼が変わりにこの勝負の場に出ることになった。

序盤権現坂は得意の不動のデュエルにて自らの守りを固め、万全の体勢を築き上げた  
 かのようには見えたが、藤堂刃は大量召喚を得意とするXセイバーというモンスター群に  
 よる即効のシンクロ召喚により攻め立てる。

しかし権現坂はその攻めを耐え、自身のエースカードである超重武者ビッグベン<sup>ちようじゆうむしや</sup>ーKにより手痛い反撃を食らわせた。

だが、敵もさるもの。罨カードメテオレインにより自身のモンスターたちに貫通効果を加え、さらにフィールド内を駆け巡り次々とアクションカードを入手し、自軍を強化しつつ順調にダメージを与えていった。

そしてとうとう権現坂の拠り所であるビックベンKの守備力を0にした刃はそのままビックベンKを破壊しようとしたのだが、そこそが権現坂の狙い。権現坂は墓地にあるモンスターカード、超重武者装留ブレイク・アーマーの効果を発動したのだ。

刃のシンクロモンスターであるガトムズのハンデス効果により墓地に送られていたこの超重武者装留ブレイク<sup>ちようじゆうむしや</sup>・アーマーは「自分の墓地に魔法・罨カードが存在せず、元々の守備力よりも守備力が低い自分フィールドのモンスターが攻撃対象に選択された時、自分の墓地からこのカードを除外し、そのモンスターの守備力と、その元々の守備力の差分のダメージを相手に与える」という効果を持つ。

つまり権現坂はこの効果により一撃必殺のダメージを相手に与えるためにわざとビックベンKの守備力を0にしたのだ。

しかし刃も曲がりなりにもLDSのトップエリート。

速攻魔法セイバリーフレクトの効果によりそのダメージを反射させあわや敗北とな

りかけたが、権現坂は最後の力を振り絞り墓地に眠るさらなるモンスターカード  
ちようじゆうむしやせうる  
 超重武者装留ビッグバンの効果を発動。フィールド上の全てのモンスターを破壊し、自  
 分と相手にその破壊したモンスターのレベルの数×100。つまり3300のダメー  
 ジを与え相打ちに持ち込んだ。

こうして最後の第三戦目。勝負は引き分けとなったのだった。

★ ★

さて、不慮の事態により生じた遊勝塾の経営権を賭けた三番勝負は一勝一敗一分け。  
 イーブンに終わったことにより、「勝ったほうが経営権を得る」という条件だった以上、  
 本来ならこれで遊勝塾の危機は免れたということになるはずだったが、これに異議  
 を申し立てたのがLDSの赤馬理事長だった。

赤馬理事長はいう。ここまでできたらどちらかが真の勝者か決着をつけなければ収ま  
 りがつかないと。

遊勝塾塾長である終修三はこの赤馬理事長の言葉に渋るが、しかし遊勝塾側の唯一の  
 勝者である遊矢がこれを受けたためお互い一勝した同士で最後の決着をつけること

になったのだが、そこで一人の男が現れ、LDS側の勝者である光津真澄の代わりにその男が変わりに戦うこととなった。

「——その決着、私がつけよう」

この男の名は赤馬零児。そう、レオ・コーポレーションの社長にして若干16歳にしてプロ資格を持つ天才デュエリストだ。

遊勝塾を手に入れるために、そして自分たちの敵を燻りだすために今回の策略を仕掛けたLDSだったが、その保険として彼もこの場に来ていたのだ。

弱小デュエル塾の生徒とプロ資格を持つ天才といわれたデュエリスト。本来ならば絶対に成立するはずがない不公平感すら感じるこのマッチメイクだったが、遊矢はたまたまなくその勝負を受けた。

遊矢は怒っていた。相手に本当はなにがあったのか知らないが、彼にとつては今回のことは言いがかりに等しい。その言いがかりにより自分が尊敬する父が残した遊勝塾を奪おうという彼らが、遊矢としてはどうしても許せなかったのだ。

「(これが本当の決勝戦。これに勝つて塾を……父さんデュエルを守るんだ!!)」

そして気合を入れた遊矢は赤馬社長とのデュエルに向かおうとした……その時だった。

「——その勝負。少し待ってもらってもよろしいですかね？」

「……え？」

その声を聞いた遊矢は思わず呆けた声を漏らす。

それはその声知らない声だったからではない。その声が幼いころから自分が知っている人物の声で、それでいて今はこの場にいるはずのない人物の声と同じだったからだ。

そして遊矢が感じたその感覚は、この中で最も昔からこの遊勝塾に出入りしていた柚子に権現坂も同様に感じていたようで、その二人と共に彼ら三人は、とつさに声が聞こえてきた場所。彼らがいた観覧席の入り口に視線を向け、それに釣られてか他の面々も三人が見ていた場所へと意識を向ける。

そこにはいつの間にか一人の男が立っていた。

「やれやれ。何か起こる前になんとかしようと思つたのですが、もうこのような事態になつていたとは思いませんでしたねえ」

燕尾服のような服に赤いハットを被つたその男は、ハットを片手で抑えながら頭を振



ると、ふかぶかのため息をつく。

そんな彼の姿を見て、柚子と権現坂は信じられないようなものを見たかのように、驚きに目を瞠った。

「なッ!?あの人は」

「嘘…いつ帰ってきたの?」

だがその声はどこか喜んでいるようにも感じる。

それもそうだ。この状況において彼の存在は彼らの希望になり得るからだ。

しかし、彼のことを知らない者たちは彼が誰なのか首を傾げる。LDSの面々においては勝負に水をさされたように感じ不快に思っている者もいるようだ。

LDS理事長である赤馬日美香もその一人だった。

「どなたか知らないけれどいきなりなんなのかしらあなた。せめて名前の一つでも名乗るのが筋なのではないの?」

そんな彼女の言葉にその男は一瞬目を瞠った後、額に手を当ててなにやらしまったという仕草を見せる。

「おっと、これは私としたことが。それではせつかくなので名乗らせていただきますしよ  
う」

そういうと男は被っていたハットを片手でとり胸の辺りに当てると、腰を曲げまるで

舞台俳優のような大仰な礼をして口を開く。

「——私の名前は、遊緋久遠」。そのの榊遊矢の義兄になります」

——それは五年前、遊勝の行方を捜しに家を飛び出した彼ら遊勝塾の長兄の名前だった。

## 第三話・奇術師の決闘。VS異次元の王(1) 黒の魔術師の登場

遊勝塾専用実技用決闘場<sup>デュエルフィールド</sup>。普段は生徒たちが試行錯誤して作り上げた自らのデッキを試す場所として使われているこの場所では、現在二人の男が対峙していた。

「いやあ、すみませんね無理いっちゃって」

「いや、かまわないよ」

一人は燕尾服のような服を身に纏い、赤いハットを被った男。名は遊緋久遠。五年前に失踪した義父である榊遊勝の行方を捜しに家を飛び出した遊勝塾の長兄的存在だ。

そしてもう一人の赤いマフラーをした男の名は赤馬零児。アクシオンデュエルにおいて重要な役目を持つ質量を持った立体映像を開発したことで知られる大企業レオ・コーポレーションの社長にして、若干16歳にしてプロ資格を持つ天才デュエリスト。

なぜこの二人がこうして向かい合っているのか。それは遊勝塾の経営権を賭けたお互いの生徒たちを戦わせ、結局一勝一敗一分けで終わってしまったデュエル三本勝負。その決着をつけるために彼らはこうしてこの場にいるというわけだ。

本来ならば遊勝塾からは唯一一勝を獲得した榊遊勝が出るはずだったが、突如現れた

この男、久遠が彼の代役として出ることとなったのだ。

相對する二人のデュエリストの姿を觀覽席から眺めながら、本来赤馬の代わりにこのデュエルに出るはずだったLDSの生徒、光津真澄が口を開く。

「よろしかったんですか、理事長。彼の出場を認めて」

「かまわないわ。それなら零児さんの出場自体取りやめにしなきゃならぬだろうし、なによりどこの馬の骨ともわからない相手に零児さんが負けるわけありませんからね」  
自信満々で真澄の言葉にそう答える赤馬理事長だったが、実は彼女が久遠の出場を認めたのには一つの理由があった。

「あの遊緋久遠という少年、榊遊矢の義兄という話だけれど私たちの集めた情報網にそんな人物の名前は無かった。五年前に義父である榊遊勝の行方を捜しに海外にいったというけれど、ということはこの五年間彼の行動を正確に知るものは誰もいない。だということももし榊遊勝が私と零児さんの敵と関係があるのなら彼が接触している可能性があるわ。それを探らないと」

そしてその遊緋久遠の味方である遊勝塾サイドだったが、その中で真澄と同じく久遠の出場に異論を唱えている者が一人いた。遊勝塾の新人である少年、紫雲院素良だ。

「いいの、遊矢あの人に任せちゃって。知り合いみたいだけど相手の人強そうだよ？遊矢がやったほうがよかったんじゃない？」

この素良の一見失礼とも思える疑問。

だがこれは当然のことだ。この試合は遊勝塾の存亡を賭けた大事な試合。彼のことを知らない素良にとっては、赤馬理事長ではないがどこの馬の骨ともわからない人物に勝敗を任せるのを不安に思つたのだ。

遊勝塾の生徒たちである三人の子供たち。タツヤ、フトシ、アユの三人も素良の言葉に同感なのか、遊矢のことを不安そうに見つめながらも何度も頷いた。

だが聞かれた当の本人である遊矢は、そんな彼らの質問に自信満々で答えた。

「大丈夫だ。兄貴は強いからな」

「うむ。あの人なら間違いない。必ずや我らに勝利をもたらしてくれるだろう」

遊矢のその言葉に、部外者ではあるが幼いころより遊勝塾に出入りしていたために彼と面識があつた権現坂も頷く。

そんな彼らの様子に素良は首を傾げる。彼らの自身の根源がわからなかつたからだ。なので素良は彼らの他に唯一彼と面識がありそうな柚子に話を聞くことにした。

「あの人ってそんなに強いのか？海外に行つていたとは聞いてたけど」

素良にそう聞かれた柚子は、顎に指を当てながらしばしなにやら考える仕草を見せていたが、なにやら思いついたような表情を浮かべると、片目を閉じながらどこか悪戯めいた笑みを浮かべる。

「うーん、ここでもいいんだけど実際に見た方が早いと思うわ。——ほら、そろそろ始まるし」

そういつて柚子が指し示した先には準備が終わったのかデッキをセットしたデュエルディスクを携えた二人の姿があった。

「それではデュエルフィールドはどうします？」

「(ブ)自由(ク)……」

久遠のその言葉に、零児が言葉少なげにそう答える。

これは自身がプロ資格を持ったための自負からなる余裕の言葉。相手を舐めているといつてもいい言動だったが、久遠は特に気にしたようすもなくしばしなにやら考え込んでいたが、やがて何か結論を出したのかコントロール室にいた柊修三に向かって呼びかける。

「というわけで塾長。デュエルフィールドは適当に選んどいてくださいーい！」

「いや、適当にしてお前」

柊塾長はそんな彼の言葉に何やら呆れたような表情を浮かべるが、やがて気を取り直すとデュエルフィールドを選択するコントロールパネルへと意識を戻す。

「(久遠はああいったが、相手はプロ資格を持つ天才赤馬零児。下手なフィールドを選んで彼を有利にするわけにはいかないが。例えば卑怯といわれようと、ここは久遠のため、

そして遊勝塾のため、久遠が最も得意とするフィールドで……」

とそこで彼の視線が一つのフィールドパネルへと止まった。

それは五年前、未だ遊勝塾で遊矢と共に遊勝のエンタメデュエルを学んでいた頃、彼が最も得意としていたフィールドだった。

「!?これならば……!!」

そして柘塾長は高らかに宣言しながらも、迷わずそのアクションフィールドを選択した。

「頼んだぞ、久遠。お前の成長を俺たちに見せてくれ！」

——アクションフィールドオン！フィールド魔法発動、『マジカルブロードウェイ』!!」

その言葉と共に久遠と零児が相対していたデュエル場にフィールド魔法が展開されると、観客席から驚きの声上がる。

「これはマジカルブロードウェイ!?父さんの得意だったフィールドだ!!」

そう、天高く聳える摩天楼が立て並ぶこのフィールドは、かつて彼らの父である榊遊勝も得意としていたフィールドだった。

彼の教えを最も受けた一人である久遠がこのフィールドを最も得意とするのも実は

それが理由だった。

自身の得意なフィールドを塾長が敢えて選択したということに気づいた久遠は、困ったような笑みを浮かべてコントロール室の窓ガラスに視線を向ける。そこには久遠にサムズアップする塾長の姿があった。

「やれやれ。全く心配性ですなぁ塾長も。……最もその心配も当然かもしれませんが（ぼそ）」

そう誰ともなしに呟くと彼は目の前にいる今回の彼の相手となる人物、赤馬零児へと視線を向ける。実は彼のことは久遠もその噂を耳にしていたのだ。

「（大企業の社長でありながら、プロ資格を持つ天才デューエリスト。まるで物語の主人公のような人物ですねえ）」

彼が今は社長業に専念しているためにプロ資格をとってからは公式戦には出ていないが、それまで全勝無敗を誇った人物であることを知っていた久遠。彼が今回このデューエルを買って出たのは実は遊矢ではまだそんな彼には勝てないということを知っていたから……というわけでは実はない。

確かに今の遊矢では彼には勝てないと人はいうだろうが、遊矢がこの世界の主人公のポジションにいる（推測ではあるが）ことを知っていた久遠にとっては別に彼に任せてもその後の展開はなんとなる可能性が高いと踏んでいた。



ではなぜ彼は遊矢の代わりに戦おうとしているのか？それは実は単に彼が戦いたかっただけだったりする。

「(おそらくこの状況からして彼はこの物語のライバルとして配されたであろう人物。ここは遊矢に任せるのが筋なのでしょうが、こんな状況でなければ彼と戦う機会など滅多にありませんでしょうからね。それに遊矢のライバルならばここで私が彼がどんな戦い方をするのか知っていれば後々遊矢の役にも立つでしょうし(言い訳)」

最も久遠が負けければ遊勝塾の経営権が取られてしまうが、実は久遠はそこまで考えてない。

つまり彼が今回のデュエルを受けたのはこの世界に転生してから七年、その影響を受けたせいで根っからのデュエル脳になってしまった故の選択だったのだ。

最も実はそれは彼が塾の存亡をそれほど重要視していないということもある。

彼にとつては大事なものは義父の残した教えである明るく楽しいエンタメデュエルの考え方であり、もし仮に塾が乗っ取られても新しくまた他の場所で塾をやれば良いというだろう。

このように彼が転生者だからかもしれないが、彼は感情の起伏が激しい人物たちが集う遊勝塾の中では珍しく、このように物事を理性的に考える癖がついていた。(もちろん、塾も義父の残したものには違いないので好きにさせようとはしないだろうが)

「それじゃあ、場も整ったことですしそろそろ始めましょうか」

「いいだろう」

久遠の言葉に零児は一つ頷いて答えると、デュエルディスクを構える。

そんな彼らの様子を見ていた観覧客にいる遊矢や柚子たち遊勝塾の生徒たちは、久遠の勝利への祈願も込めて、お互いの顔を見ながら一つ頷くと、勢いよく叫びだす。

「戦いの殿堂に集いしデュエリストたちが！」

「モンスターと共に、地を蹴り、宙を舞い！」

「フィールド内を駆け巡る！」

「見よ！これぞデュエルの最強進化系！」

「アクシヨォ——ン……」

「——デュエル!!」

そして遊勝塾の今後を賭けた最後のデュエルが始まった。

★ ★

~~~~~

赤馬零児（以下零児）

LP：4000

手札五枚

遊緋久遠（以下久遠）

LP：4000

手札五枚

~~~~~

「フィールドの選択権は譲っていただきましたからね。お礼代わりに先行はそちらに譲りましょう」

久遠は公平性を保つために、零児にそう申し出るが、しかし零児はその言葉を聞いて、眉を潜めながら若干不快そうな声をあげる。

「お礼？譲る？……なるほど、君はそういう思考をするのか」

「ふむっ？」

「まあ、いい。申し出は受け取っておこう。では、私のターン」

くくくくく

零児

LP：4000

手札五枚

くくくくく

先行は零児。ルールにより先行はドローができないために、ドローフェイズは行わず、そのままスタンバイフェイズ、そしてメインフェイズに移行する。

「私は魔法カードを三枚発動する。まずは、一枚。永続魔法「地獄門の契約書」を発動！」

くくくくく

地獄門の契約書

永続魔法

①：自分スタンバイフェイズに発動する。

自分は1000ダメージを受ける。

②：1ターンに1度、デッキからレベル4以下の「DD」モンスター1体を手札に加

える事ができる。

~~~~~

「このカードは自分のターンのスタンバイフェイズに、自分自身が1000ポイントのダメージを受ける」

「ほう……」

零児が口にした魔法カードの効果に、何かを感じ取ったのか感心とも警戒ともつかぬ声をあげる久遠。

だが、それは彼が天才と呼ばれていたことを知る彼だからこそ、「この男が無意味にこんなことをするはずがない」という警戒心から出てきた言葉であり、赤馬零児という男がどういう人物たちか全く知らない柚子たちは、その魔法カードの効果に驚きの声を上げる。

「自分のターンが来るたびに」

「自分自身に1000ポイントのダメージだど!？」

しかしそんな彼女たちの声が聞こえていないのか、それとも意図的に無視しているのか。零児はそのままデュエルを続行する。

「さらに1ターンに一度、デッキからレベル4以下の「DD」と名のついたカードをデッ

キから一枚手札に加えることができる」

そして零児はデッキからカードを一枚抜くと、そのカードがどういうカードなのか久遠に確認させる。

「私は「DDケルベロス」を手札に加える」

~~~~~

DDケルベロス

効果モンスター

星4 / 闇属性 / XX族 / 攻 1800 / 守 XXXX

（7月8日現在テキスト不明）

~~~~~

その零児の言葉に遊勝塾の生徒の一人である太めの少年、フトシが疑問の声を上げる。

「DD?なんだそれ?」

それに答えたのは横で一人、チョコレートを齧っていた素良が答える。

「ディアフアレントダイヤモンド D。異次元のことだよ」

「へー」

以外に物知りな素良のその言葉に子供たちが感心の声を上げる中、まだまだデュエルは続く。

「さらに、二枚目の魔法カード。これも同じく地獄門の契約書」

それに困惑の声を上げるのは、遊勝塾と昔から懇意にし、そしてライバル関係にあるデュエル塾の跡取りである、権現坂と、遊勝塾塾長の一人娘である柚子の二人だった。

「なに!?これで次の自分のターン」

「自分自身に2000ポイントのダメージが……?」

自らハイリスクを負う、今まで彼らが経験してきたデュエルとは全く違うまさに「異次元」にふさわしいそのデュエルに、遊勝塾の面々の顔にうつすらと不安の影が差し始める。

しかし、そんな彼らの不安を払拭したのは、今デュエル場に立っている男の一人である遊緋久遠の義弟である遊矢だった。

「大丈夫。兄さんは必ず勝つ」

「遊矢……?」

「なにせ、兄さんは父さんが俺たちの中で唯一一人前と認めたデュエリスト。あんなやつに負けるもんか。(そうだろ、兄さん)」

絶対の信頼を込めて、相手の不可解な行動に、しかし未だ余裕なのか柔らかな笑みを浮かべている久遠へと視線を戻す。

遊勝塾の面々は、そんな彼の姿にどこか安心したのか、彼と同じく、視線をデュエル場へと戻すが、そんな彼らを横目で見ていた赤羽理事長は怪訝な表情を浮かべる。

「（榊遊勝が認めたデュエリスト？ そんな話聞いたことがない。しかし彼の息子である榊遊矢がいうのならはそのとおりなのでしょうが……）」

そして彼女はデュエル場にいる自らの愛する息子へと視線を向ける。

「（どうやら一筋縄でいく相手ではなさそうですね、零児さん……）」
 そんな彼女の懸念をよそに、デュエルは続く。

「私は二枚目の地獄門の契約書の効果により、デツキから「DDリリース」を手札に加える」

くくくくく

DDリリース

効果モンスター

星4 / 閻属性 / 悪魔族 / 攻 1000 / 守 2100

①：このカードが手札から特殊召喚に成功した場合、

自分の墓地の「DD」モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを手札に加える。

~~~~~

ユリの花を模した様な花を手札に加えると、零児は三枚目の魔法カードを発動させる。

「私はさらに三枚目の永続魔法「魔神王の契約書」を発動」

~~~~~

魔神王の契約書

永続魔法

①：自分スタンバイフェイズに発動する。

自分は1000ダメージを受ける。

②：1ターンに1度、自分の手札・フィールドから、

悪魔族の融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、

その融合モンスター1体をエクストラデッキから融合召喚できる。

~~~~~

「このカードも地獄門の契約書同様、自分のスタンバイフェイズ時、自分自身に1000ポイントのダメージを与える」

「これで合計3000ポイントのダメージですか」

久遠の言葉に、しかし零児の表情は変わらず、彼は淡々と自身のカードの効果を読み上げる。

「魔神王の契約書は1ターンに一度、悪魔族融合モンスターを融合魔法無しに融合召喚できる」

「なッ!？」

「融合魔法無しに、融合召喚!？」

その彼の言葉に反応したのは、融合使である素良と、その素良と戦い苦戦させられた遊矢の二人だった。

その二人の声が聞こえたのか、零児はどこか不適な笑みを浮かべる。

「私が融合するのはDDケルベロスとDDリリース」

そして零児は先ほど地獄門の契約書の効果により手札に加えた二枚のカードを天高く掲げると叫びだす。——まるで王の誕生を祝うが如く。

「牙むく地獄の番犬よ、闇夜に誘う妖婦よ。冥府に渦巻く光の中で、今一つとなりて新た

な王を生み出さん!!融合召喚。——生誕せよ「DDD烈火王テムジン」!!  
 そして天から一人の紅き王が現れる。

~~~~~

DDD烈火王テムジン

融合・効果モンスター

星6／炎属性／悪魔族／攻2000／守1500

「DD」モンスター×2

「DDD烈火王テムジン」の(1)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：このカードがモンスターゾーンに存在し、

自分フィールドにこのカード以外の「DD」モンスターが特殊召喚された場合、

自分の墓地の「DD」モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを特殊召喚する。

(2)：このカードが戦闘または相手の効果で破壊された場合、

自分の墓地の「契約書」カード1枚を対象として発動できる。

そのカードを手札に加える。

~~~~~

素良と遊矢。そして柚子と真澄のデュエルにより融合召喚については知っていた遊勝塾の面々も、それらとはまた違った融合召喚の方法を披露した零児のやり方に驚きを隠せない。

「あいつ融合使いか!!」

「でもあのモンスターを呼び出すためだけにあんなリスクを？」

「今度はDDD……」

「Dが三つ？」

「どういう意味だ？」

困惑する遊勝塾の面々。塾長である柊修三も、今までの試合で零児が一回も融合召喚を使っていないことを確認すると不安そうな表情を浮かべるが、しかし当の本人である久遠だけは、ただ感心の声を上げるだけでいつものペースを崩さない。

「ほー、融合魔法無しで融合召喚ですか。フュージョンゲートを使うわけでも無し、専用の融合魔法でも無し。珍しいカードを使いますねえ」

そんな彼の言葉に、しかし零児は無言で返すと、カードを二枚伏せる。

「私はこれでターンエンドだ」

くくくくく

零児

LP：4000

手札：0枚

場：DDD烈火王テムジン

魔法、罨：地獄門の契約書×2

魔神王の契約書

伏せカード二枚

くくくくく

そして、ターンは久遠へと移行する。

「それでは、私のターン。ドロー!!」

くくくくく

久遠

LP：4000

手札6枚

くくくくく

久遠はドローカードを確認すると、それがよほどいいカードだったのか、うつすらと笑みを浮かべる、さっそくという感じで一体のモンスターを召喚する。

「私はまずはこのモンスターを召喚しましょう。タロットカードの大アルカナの一つ「Temperance<sup>制</sup>」を司る魔術師。魔導召喚師テンペルを召喚!!」

すると、二つの杯を持ったロープで身を隠した一人の魔法使いが現れる。

くくくくく

魔導召喚士テンペル

効果モンスター

星3 / 地属性 / 魔法使い族 / 攻1000 / 守1000

自分が「魔導書」と名のついた魔法カードを発動した

自分のターンのメインフェイズ時、

このカードをリリースして発動できる。

デッキから光属性または闇属性の

魔法使い族・レベル5以上のモンスター1体を特殊召喚する。

この効果を発動するターン、  
自分以外のレベル5以上のモンスターを特殊召喚できない。

~~~~~

攻撃力2000ポイントを誇るテムジンを前に攻撃力が1000ポイントほどしかないモンスターを攻撃表示で出すという久遠のその一見間違えているといつてもいい行動に、零児は眉を潜め眼光を鋭くするが、それは弱小といつてもいいモンスターが獲物として現れたことによる慢心でも、舐められているという不快感からくる怒りでもなく、それは未知の行動をしてくる敵に対しての、王者だからこそその警戒からの行動だった。

そんな彼の様子を見て、久遠は満足げな笑みを浮かべる。

「ふふふ、珍しいものを見せてもらったお礼といつてはなんですが、私も見せて差し上げましょう。——私のエースモンスターを」

「……なに？」

零児はそんな彼の言葉に訝しげな表情を見せるが、久遠はそんな彼に一つ笑みを見せると、両手を天高く掲げる。

それは見せ場が訪れると、彼の義弟である遊矢。そして彼の義父である遊勝がよくや

るお決まりともいえる行動だった。

「レディース&ジェントルメーン!!今回は我がマジックショーにご来場いただきありがとうございます
とうございまーす」

遊矢がペンデュラム召喚を行う際に必ずといっていいほど喋る、決め台詞と同じ、しかし彼よりよほど堂に入った言葉でそういうと、久遠は手札から一枚の魔法カードを引き抜いた。

「これより皆様に今回のマジックショーの主役を紹介しましょう。私は魔法カード、グリモの魔導書を発動!」

くくくくく

グリモの魔導書

通常魔法

デッキから「グリモの魔導書」以外の

「魔導書」と名のついたカード1枚を手札に加える。

「グリモの魔導書」は1ターンに1枚しか発動できない。

くくくくく

「私はこの効果により、デッキから「ヒュグロの魔導書」を手札に加える」

~~~~~

ヒュグロの魔導書

通常魔法

自分フィールド上の魔法使い族モンスター1体を選択して発動できる。

このターンのエンドフェイズ時まで、

選択したモンスターの攻撃力は1000ポイントアップし、

戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、

デッキから「魔導書」と名のついた魔法カード1枚を手札に加える事ができる。

「ヒュグロの魔導書」は1ターンに1枚しか発動できない。

~~~~~

ヒュグロの魔導書。魔法使い族の攻撃力をエンドフェイズまで1000ポイントアップさせ、戦闘により相手モンスターを破壊した場合、デッキから魔導書カードを一枚手札に加えることができる。つまり実質手札を減らさずに攻撃力を上げることができる強力な魔法カード。

しかし彼の本当の狙いは、その魔法カードを手札に加えることではなく、「魔導書」と名のついたカードを発動させることにあった。

「そしてこの瞬間、魔導召喚士テンペルの効果を発動！」

すると、その言葉と共にテンペルの体が光り輝く。

「な、なんだあれは!?!」

その光景に、LDSの生徒の一人である志島北斗が驚きの声を上げる。見れば他のLDSの生徒たちも、その表情を驚愕の感情で染めていた。

——そして久遠は、告げる。自らの半身たるその魔術師の名を。

「出でよ、我が矛にして我が盾にして我が半身。この者こそがデュエルモンスターズ創世記よりその頂点に存在する最上級魔導師。」

——来い、「ブラック・マジシャン」!!」

その久遠の言葉と共に、光が晴れるとその中から一人の魔法使いが現れた。

~~~~~

ブラック・マジシャン

通常モンスター

星7／闇属性／魔法使い族／攻2500／守2100

魔法使いとしては、攻撃力・守備力ともに最高クラス。

~~~~~

赤紫のローブに身を纏い、褐色の肌をしたその魔導師の登場に、零児はその時初めてその表情を大きく崩した。

「……ッ!?ばかな、ブラック・マジシャン。伝説の黒魔導師だと!!」

そんな零児の様子を見て、久遠はその口元を不敵に歪める。

「——さあ、マジックショーを始めましょう」

第四話・奇術師の決闘。VS異次元の王（2）“天才”赤馬零児

~~~~~

久遠

LP：4000

手札：五枚

場：ブラック・マジシャン

~~~~~

「『ブラック・マジシャン』ですって……ッ!？」

LDS理事長、赤馬日美香は、目の前に広がるその光景を簡単に信じていることができなかった。その理由としては、遊勝塾側の選手である、遊緋久遠が出した一枚のモンスターカードにあった。

【ブラック・マジシャン】。

それはデュエルモンスターズの黎明期。初代決闘王デュエルキングにして、強い絆で結ばれたカードなかまたちに、反則ともいえるカードの引き。そしてその圧倒的な戦術ガジェットスにより、過去、現在、未来において史上最強のデュエリストと謳われた男“武藤遊戯”が自らの相棒パートナーとしてデッキのエースに据えていたモンスターこそが、このブラック・マジシャンなのだ。

今では伝説を通り越して、神話と同等に語られる初代デュエルキングの伝説。

元々かなりのレアカードではあったが、武藤遊戯により数多の伝説を打ち立てると、さらに爆発的に人気が広まり、世界中の人々がこのカードを求めるようになる。

しかし、そのあまりの人気故に多くのコレクターは窃盗を警戒しそれらのカードを死蔵するようになり、また所有者の死後盗まれてしまったのか、それとも正当な後継者が隠し持っているのかいつの間にか紛失しているという事態が続出。

その結果、時が経つにつれブラック・マジシャンの姿は表舞台では自然と見なくなっ

ていく。

そして今ではその所有者は確認できるだけでも、世界中で片手で数えられる程度にまで減少してしまった。まさに『幻のレアカード』の名に相応しいモンスターカードなのだ。

普段大企業の経営者に相応しく、あえて常に笑みを浮かべることにより感情を隠すのが得意な彼女がここまで動揺しているのも、まさかいくら元チャンピオンが経営していたとはいえ、このような弱小塾にいる少年がそのようなレアカードを使うとは思っていなかったからだ。

そしてそれは彼女の教え子であるLDSの生徒たちもそうだったようで、彼らはそれぞれブラック・マジシャンの登場に動揺した顔を見せている。

「ブラック・マジシャンだと……!?なんであんなやつが!!」

「あの幻のレアカードをこんな弱小塾のやつが?」

「すごい。初めて見た……」

そしてそれは遊矢、柚子、権現坂。遊勝塾の古参メンバー以外の面々も同じだった。

「あ、あれって……」

「ほ、僕知っている!!教科書に載ってたよあれ!」

「ブラックマジシャン、本物はじめて見た!しびれる〜!!」

そしてその中で一番驚いているのは遊勝塾で最も新入りである紫雲院素良だった。

「うっそ……。ブラック・マジシャンなんて僕はじめて見たよ!」

「そりゃあ、そうだ。俺どころか父さんも兄貴以外に使っているやつなんて見たことないっていつてたからな」

素良の言葉にそう答えたのは遊矢。その表情はなぜかどこか自慢げに見える。どうやら自分の兄が皆を驚かせたのがよほど嬉しかったようだ。

遊矢はいう。六年前、彼と初めて会った時のことを思い出しながら。

「兄貴は六年前、父さんがどこから連れてきたんだけど、それまでは賞金付きの大会で賞金稼ぎをしながら生活していたらしい。父さんが引き取ってからはそういう大会には進んで出なくなっただけで、出たら大人が混じっていた大会でも優勝するほど、強かったんだぜ？」

「うむ。当時魔法使い族を使い、圧倒的な強さを誇ったあの人は、我ら同年代のデュエリストたちの憧れでもあった」

そんな彼らの言葉を、横で聞いていた赤馬理事長は、そこで自分の記憶に何か引つかかるものを感じた。

「『賞金稼ぎ』？それに『魔法使いを使うデュエリスト』？そういえば五、六年まえぐらいにまだ年端もいかなない少年デュエリストが大会を荒らしまわっていると噂で聞いたことあったような……。もしかしたらその噂の少年デュエリストが彼だったのかしら？……あら？そういうえば最近これと同じような話をどこかで聞いたことがあったような」

そう、あれは確か海外に仕事にいった時に取引先との世間話の中で……。

だが、赤馬理事長はそこで思考を止める。デュエルが再び動き始めたからだ。

「(……そうね、今はそのことはいいわ。今はこのデュエルを見届けなくては)」

そして赤馬理事長は再びその意識をデュエル場へと戻すのだった。

★ ★

母である赤馬理事長と同じく伝説のレアカードであるブラック・マジシャンの突然の登場に動揺していた赤馬零児であったが、流星は天才と謳われたデュエリストだということか、彼はすぐに平成を取り戻す。

「(落ち着け。例えブラック・マジシャンといえど所詮は効果を持たない通常モンスター。決して対処できないわけじゃない)」

そう、彼のいうとおりブラック・マジシャンは効果を持たない通常モンスター。そして攻撃力もレベル7でありながら2500と低めに設定されており、決して対処できないモンスターではない。

しかし久遠はそんな彼の考えを見透かしているのか、なにか含むような笑みを浮かべると一枚の魔法カードを発動させる。

「ブラック・マジシャンの真価はあらゆるカードとの関係により発揮される。ということで私は魔法カード「千本サウザントナイフ」を発動!!」

くくくくく

千本サウザントナイフ

通常魔法

自分フィールド上に「ブラック・マジシャン」が存在する場合に発動できる。

相手フィールド上のモンスター1体を選択して破壊する。

~~~~~

するとブラック・マジシャンの周りに無数のナイフが出現した。

その一本一本が、どこか禍々しい雰囲気を纏っている。

「このカードはフィールド上にブラック・マジシャンが存在する場合に発動できる魔法のナイフ。その効果により、相手フィールド上のモンスター一体を選択して破壊する事ができます」

「ほう?」

「行け、千本ナイフ!!」

久遠が号令と共に右手を振り下ろすと、千本のナイフがテムジンに向かって殺到していく。

圧倒的なその光景に、しかし零児は不敵に笑うと一つバク転するとビルに張り付いていた一枚のカードを発動させる。

「私はアクション魔法「幻影」を発動！このターン、1ターンに一度だけモンスターの破壊を防ぐことができる!!」

「!?これはこれは、アクションマジックですか」

~~~~~

幻影

アクション魔法（作者オリジナル）

①フィールド上のモンスター1体を対象に発動できる。

1ターンに一度だけ対象としたモンスターの破壊を無効にすることができる。

~~~~~

『アクションマジック』

それはアクションデュエルの醍醐味のひとつともいえる魔法カードのこと。

アクションフィールドが発動した瞬間にフィールド全体に散らばるこの魔法カード

たちは手札に一枚まで持つことができ、普通の魔法カードとは違い速攻魔法のように相手ターンでも使用することができる。

質量を持ったソリッド・ビジョンとこの魔法カードの導入により、アクションデュエルは世界中で行われるほど爆発的に広まっていったのだ。

「さすがは赤馬零児。あらかじめアクションカードの位置はある程度把握していたということですか」

時にはデュエルの決着に左右するというアクションカードの位置を把握しておくのはアクションデュエリストにとつての必須のスキル。それを当然のように行っていた零児はアクションデュエリストとして高い力量を持っているということになる。

だが関心してばかりはいられないと、久遠は次の行動へと移る。

「テムジンの攻撃力は2000。ブラック・マジシャンの素の攻撃力で十分に倒せる範囲ですが、ふむ。……ここはヒュグロの魔導書は温存しておきますかね。一応、先ほど

手に入れた保険もあることですし）ならば、私はブラック・マジシャンでDDD烈火王テムジンに攻撃。黒・魔・導!!」

漆黒の波動がブラック・マジシャンの杖から放たれるが、それにも零児は慌てずに対応する。

「ならば、私は伏せカード「戦乙女の契約書」を発動！」

~~~~~

ヴァルキリー

戦乙女の契約書

永続罨

①：自分スタンバイフェイズに発動する。

自分は1000ダメージを受ける。

②：このカードが魔法&罨ゾーンに存在する限り、自分フィールドの悪魔族モンスターは、相手ターンの間は攻撃力が1000アップする。

~~~~~

「このカードも他の契約書カードと同じく、自分のスタンバイフェイズ毎に私は1000ポイントのダメージを受ける。そしてこのカードが魔法&畏ゾーンに存在する限り、自分フィールドの悪魔族モンスターは、相手ターンの間、攻撃力を1000ポイントアップさせることができる!!」

~~~~~

DDD烈火王テムジン

攻撃力20000↓攻撃力30000

~~~~~

畏カードの影響力を受けたためか、テムジンの体から紅色のオーラが噴出した。

「行け、迎撃しろテムジン!」

力を増強させたテムジンの持っている大剣が波動を切り裂くと、そのままブラック・マジシャンに向かって斬りかかる。

「兄貴!？」

その光景に悲痛の叫び声を上げる遊矢だったが、そんな彼の心配をよそに久遠は一つ笑みを浮かべると、いつの間にか手札に加えていた一枚の魔法カードを発動させる。

「私はアクションマジックフレイム・マジック「炎の魔術」を発動。この効果によりブラック・マジシャンの攻撃力を1000ポイントアップする」

「なんだと!？」

「迎撃しなさい、ブラック・マジシャン!!」

フレイム・マジック  
炎の魔術

アクション魔法

①このターン自分フィールド上のモンスター1体の攻撃力をエンドフェイズまで1000ポイントアップする

~~~~~


するとブラック・マジシャンは先ほどの呆然としたような表情を一転、不敵な笑みを浮かべるとテムジンの剣を結界のようなもので受け止める。

くくくくく

ブラック・マジシャン

攻撃力2500 ↓ 攻撃力3500

くくくくく

そしてブラック・マジシャンは口元を歪めながら片手の指を「まだまだ甘い」といわんばかりに何度か横に振ると杖をその場から動けないでいるテムジンへと向け、そこから大量の炎が噴出しテムジンへと襲い掛かる。

そしてテムジンは炎に焼かれてそのまま破壊される。

「くッ……!?!」

くくくくく

零児

LP：4000↓LP：3500

~~~~~

苦悶の声を上げる零児。表情を歪めると久遠を睨みつける。

「……いつの間にアクションマジックを」

「デュエルが始まってすぐに。海外を回っている時は奇術師マジシャンの真似事をしながら旅費を稼いでいましたね。自分でいうのもなんですが、手先は器用なほうなんですよ」

少し得意げにそういうと、久遠はさらに二枚のカードを伏せる。

「私はこれでターンを終了します——さて、私のターンが終了したことにより、あなたには契約書の効果により4000ポイントのダメージを受けてもらいますよ」

~~~~~

久遠

LP：4000

手札：二枚

場：ブラック・マジシャン

魔法、罨：伏せカード二枚

~~~~~

ここで遊勝塾側の観覧席から歓声が上がる。

「やった、兄貴が先手をとった！」

「さすが久遠さん！それにあの人のターンに移行すれば」

「契約書の効果によりやつは合計4000ポイントのダメージを受ける。つまり」

「これでこっちの勝ちだ!!」

だが、そんな彼らの様子に水をさす者がいた。素良だ。

「それはどうか？」

「?どういうこと素良？」

「あいつ、そんな間抜けなことするようには見えないんだよね」

——そしてそんな彼の予想は的中することになる。

零児は久遠の言葉に口元に歪んだ笑みを浮かべた。

「契約？そんなもの……」

そしてその時だった。その言葉とともに零児のフィールドに4枚の契約書カードが現れたかと思えば、その全てが破壊されたのは。

「なッ!？」

「これは!!」

突然の事態に観客席から驚きの声がかかる中、零児は眼鏡の位置を直しながら言葉を続ける。

「私はこのターン、既に契約<sup>リース・ロンダリング</sup>洗浄を発動していたのだ」

〽〽〽〽〽〽〽〽  
 リース・ロンダリング  
 契約洗淨

通常罨

①：「契約書」カードが発動したターン、自分の魔法&罨ゾーンの「契約書」カードの効果を全て無効にして発動できる。このターンのエンドフェイズに、自分の魔法&罨ゾーンの「契約書」カードを全て破壊し、

自分は破壊した数だけデッキからドロウする。

〽〽〽〽〽〽〽〽

「このカードは契約書が発動したターン、自分の魔法、罨ゾーンにある契約書カードの効果を全て無効にして発動できる。このターンのエンドフェイズに、自分の魔法、罨ゾーンの契約書カードを全て破壊する。つまり私はこのカードの効果により契約書のカードを無効にしたのだ。そしてこの効果により破壊したカードの数だけ私はカードをドロウする!!」

そういうと、零児はデッキの上から契約洗淨の効果により破壊した数、四枚のカード

をドローした。

そんな彼の行動に、久遠は感嘆の声を上げる。

「なるほど。まさかあのまま素直に自爆してくれるわけがないとは思っていましたが、まさかこのような手で無効化し、さらに手札も回復するとは。計算尽くされたその行動。さすがは天才と呼ばれたデュエリストですね」

零児はそんな久遠の賞賛に笑みを一つ返すと、再びデッキトップに手を置いた。

「そして私のターン、ドロー!!」

くくくくく

零児

LP：3500

手札：五枚

くくくくく

場は久遠が圧倒的に有利ではあるが、それでも天才と呼ばれたデュエリスト。自らの不利にもかかわらず、その口元に余裕の笑みを浮かばせる。

「ふふ、なるほど。さすがは榊遊勝が養子にしたというだけある。はじめお礼に先行を譲るなどといわれたときには甘いと思っていたが、いやはやどうして……」

「おや？ 甘いのはお嫌いですか？」

「少なくとも勝負事に感情を持ち込むのは間違っていると思うがね」

零児のそのある意味エンタメデュエルを否定するような言葉に、しかし久遠はそうですかとばかりに肩を竦めるだけだった。

エンタメデュエルを標榜する一人である久遠であったが、別にそれを強要する気はない。前世で個人の自由を尊重する日本に生まれた彼としてはそんなことしても意味がないとわかつているからだ。

「しかし、ブラック・マジシャンとは。まさか幻のレアカードをこんなところで見られる

とは思わなかったよ。——いったいどこでそのカードを？」

「それはあなたにいう必要が？」

突き放すようにそういう久遠であったが、これは別に意地悪とかではなく単にいえないだけ。まさか前世から持ってきたとはいえるわけがないのだ。

そんな彼の言葉になにを思ったのか、零児はふつと軽く笑うと口を開く。

「久しぶりだよ、ここまで昂ぶるデュエルは。——いいものを見せてもらった礼だ。代わりにとっては何んだが、私もいいものを見せよう。私は手札から魔法カード「死者蘇生」を発動！」

くくくくく

死者蘇生

通常魔法（制限カード）

自分または相手の墓地のモンスター1体を選択して発動できる。

選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。



くくくくく

零児が一枚の魔法カードを掲げると、そこから光が現れ、光の中から先ほどブラック・マジシャンの攻撃により破壊されたテムジンが再び現れる。

くくくくく

DDD烈火王テムジン

攻撃力20000／守備力1500

くくくくく

そのモンスターの姿に、遊勝塾の子供たちから悲鳴が上がる。

「あれは!?!」

「さつきブラック・マジシャンで倒したモンスターだ!!」

「そんな。せつかく倒したのに……」

だがそんな彼らの様子に構わず零児はデュエルを続ける。

「さらに私はDDモンスター。チューナーモンスター「DDナイト・ハウリング」を召喚する」

~~~~~

《DDナイト・ハウリング》

チューナー（効果モンスター）

星3 / XX属性 / XX族 / 攻 300 / 守 XXX

（7月10日現在正確なテキスト不明）

このカードの召喚に成功した時に墓地に存在するレベル4以下の「DD」1体を特殊召喚する。その際特殊召喚に成功したモンスターの攻撃力は0になる。

~~~~~

すると零児のフィールドにワニの顔のようなモンスターが現れる。

そのモンスターの出現に、久遠の顔が僅かに警戒心からか強張った。

「チューナーモンスターだと……」

「このカードが召喚に成功した時、墓地からレベル4以下のDDモンスターを特殊召喚することができる。私はこの効果により墓地からDDリリスを特殊召喚する」

すると黒い穴が出現し、その中からユリを模した悪魔が現れる。

~~~~~

DDリリス

攻撃力1000 / 守備力2100

~~~~~

新たに出現した悪魔の登場に、久遠はこのデュエルにおいてはじめて笑みを消した。

「なるほど、シンクロ召喚ですか……」

「ご名答だ。——さあ、行くぞ。私はレベル4のDDリリスに、レベル3のDDナイト・ハウリングをチューニング!!」

すると2体のこの悪魔が飛び上がったかと思えば、DDナイト・ハウリングが光の輪となりその姿を消し、DDリリスがその光の輪の中を駆け抜ける。

「闇を切り裂く咆哮よ。疾風の速さを得て、新たな王の産声となれ!!——シンクロ召喚。生誕せよ、レベル7「DDD疾風王アレクサンダー」!!」

その零児の言葉とともに、光の柱の中から緑色のオーラを纏った新たな王が現れた。

~~~~~

DDD疾風王アレクサンダー

シンクロ・効果モンスター

星7/風属性/悪魔族/攻2500/守2000

「DD」チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

「DDD疾風王アレクサンダー」の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：このカードがモンスターゾーンに存在し、

自分フィールドにこのカード以外の「DD」モンスターが召喚・特殊召喚された場合、

自分の墓地のレベル4以下の「DD」モンスター1体を対象として発動できる。
そのモンスターを特殊召喚する。

~~~~~

シンクロ召喚により新たな悪魔の登場に、観覧席からこのデュエルで何度目かわからない驚きの声上がる。

「やつが使えるのは融合だけじゃなかったのか……!!」

だが、どうやら驚くのはまだ早かったようで、零児のデュエルはさらなる動きを見せる。

「まだ終わりではない。私はDDD烈火王テムジンのモンスター効果を発動」

するとテムジンの纏っていたオーラが紅色から紫色のオーラへと変色する。

「このカード以外にDDDと名のつくモンスターが特殊召喚された時、墓地に存在する

DDと名のついたモンスターを一体特殊召喚できる。再び蘇れ、DDリリース!!」

その言葉とともに先ほどアレクサンダーのシンクロ召喚に使われた一体であるDDリリースが再びフィールド上にその姿を現した。

「さらに、DDD疾風王アレクサンダーのモンスター効果を発動! DDと名のついたモンスターが特殊召喚された時、墓地にいるDDと名のついたモンスター一体を特殊召喚することができる!!」

すると、アレクサンダーの周りに突風が吹き荒れ、新たに黒い渦が生まれたかと思えば二足歩行の三つの犬の首を持つ化け物が零児のフィールドに出現した。

~~~~~

DDケルベロス

攻撃力1800 / 守備力? (まだ不明)

~~~~~

「そしてレベル4のDDケルベロスとレベル4DDリリースでオーバーレイ!!」  
「なッ!?!」

「2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築!!」

そして2対のモンスターが光となり、空に出現した渦の中に飛び込んだかと思えば、その中から大きな雷が、フィールドに落ちた。

——そしてその中から三対目の王が出現する。

「この世の全てを統べるため、今世界の頂に光臨せよ!!——エクジーズ召喚。生誕せよ、ランク4「怒濤王シーザー」!!」

~~~~~

DDD怒濤王シーザー

エクシーズ・効果モンスター

ランク4／水属性／?族／攻2400／守XXXXX

(7月10現在正確なテキストは不明。蘇生効果?)

~~~~~

新たに出現した王の姿に、観覧席から今日一番の驚愕の声が上がる。

「あれは……!?!」

「エクシーズモンスターまでも……」

「な、なんてやつだ!?!」

そしてそれは零児の本気のデュエルを見たことがないLDSの生徒たちも同じであつたが、そんな中、赤馬理事長だけは笑みを浮かべていた。

それは先ほどの不安な状態から自らの息子が一気に逆転したことからなる安心の笑みだった。

「（そう、それでいいのよ零児さん。あなたは最強のデュエリスト。こんなところで負けるはずがない）」



そして零児の情報をあらかじめ知っていた柊塾長も、赤馬が行った三つの召喚により生み出された三体のモンスターに動揺こそしていなかったが、その顔にはいつものどこかコミカルな表情はなく、深刻なものを宿していた。

「三つの召喚方法を自在に操る。これが赤馬零児……」

そしてその三体の王と相對している久遠は、いつもの笑みを浮かべながら、しかし珍しくその額から冷や汗を流していた。

「（これはこれは……。少々まずいかもしれませんがねえ）」

そんな彼の内心を知ってか知らずか。零児は片手で眼鏡の位置を直しながら話を続ける。

『『DDD』とはすなわち、「ディアレントディメンションデーモン」 D D D 』。

——異次元をも制する王の力、たつぷり味わうがいい」  
そして彼は不敵に笑った。

くくくくく

零児

LP：3500

手札：三枚

場：DDD烈火王テムジン

DDD疾風王アレクサンダー

DDD怒涛王シーザー

くくくくく

第五話・奇術師の決闘。VS異次元の王(3) DD魔導賢者ケプラー、ガリレイ

~~~~~

零児

LP：3500

手札：三枚

場：DDD烈火王テムジン

DDD疾風王アレクサンダー

DDD怒涛王シーザー

~~~~~

三人のDDD、異次元の王の前に、久遠はいつもの笑みを浮かべていたが、内心ではこれ以上ないほど焦っていた。

「(これは少々、まずいですね。DDD疾風王アレクサンダーの攻撃力は2500。ブ

ラック・マジシャンと同じ攻撃力。つまりアレクサンダーと相打ちにされれば残り2体の攻撃で私のライフは0になる。……まだ発動させたくはなかったが、ここはあのカードを発動させるか？」

だがそこで彼は今自身がいる場所から少し離れた街灯に一枚のカードが落ちているのを見つけた。アクションカードだ。

しかし零児はそんな彼の様子に気づいていないのか、そのままさらに一枚の魔法カードを発動させる。

「そして私は魔法カード「運命の宝札」を発動。私はサイコロを振り、出た目の数だけデッキからカードをドロー。そしてドローした数だけデッキの一番上からカードを除外する」

くくくくく

運命の宝札

通常魔法

サイコロを1回振る。出た目の数だけデッキからカードをドロースする。その後、同じ数だけデッキの1番上からカードをゲームから除外する。

くくくくく

そしてその彼の言葉とともに空中からサイコロが落ちてきたかと思えば、それは「3」の数字を表した。

「出た目は3。よって三枚のカードをドロースし、さらに三枚のカードを除外する」

くくくくく

零児

手札：三枚↓六枚

くくくくく

運命の宝札の効果により三枚のカードを引いた零児はドロースカードを横目でそのまま確認しながらも次の行動に移る。

「それではバトルだ。——行け、アレキサンダー!!」  
「ちッ!?（やはり相打ち狙いか!!）」

自身に迫る大剣に、久遠は舌打ちを一つすると、急いで街灯へと駆け寄りカードを拾うと、その中身を確認し、そのまま発動させる。

「私はアクションマジック「回避」を発動!!このカードによりアレクサンダーの攻撃を無効にする」

~~~~~

《回避》

通常魔法

①：フィールドのモンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターの攻撃を無効にする。

~~~~~

回避の効果によりブラック・マジシャンがアレクサンダーの攻撃を交わすのを見て、

零児はしかなぜか満足げな笑みを浮かべた。

「ふっ。さすがにそう易々とは破壊させてくれないか。ならば私はカードを三枚伏せてターンエンドだ」

くくくくく

零児

LP：3500

手札：三枚

場：DDD烈火王テムジン

DDD疾風王アレクサンダー

DDD怒涛王シーザー

魔法、罫：伏せカード三枚

くくくくく

「さあ、君のターンだ」

「……私のターン。ドローします」

（~~~~~）

久遠

LP：4000

手札：三枚

場：ブラック・マジシャン

魔法、罫：伏せカード二枚

（~~~~~）

「デッキからカードを引いた久遠は、とりあえずブラック・マジシャンの攻撃でDDDを一体でも減らそうとしたのだが、そんな彼の内心を見透かしたのか零児は一枚の伏せカードを発動させる。」

「私はこのターン、「和睦の使者」を発動。このカードの効果により自分フィールド上のモンスターはこのターン戦闘で破壊されることはなくなり、ダメージは0となる」  
「なッ!?!」



くくくくく

和睦の使者

通常罾

このターン、相手モンスターから受ける

全ての戦闘ダメージは0になり、

自分のモンスターは戦闘では破壊されない。

くくくくく

「このカードによりこのターン。私はダメージを受けず、私のモンスターは破壊されることはなくなる」

「くっ!?!」

笑みを浮かべる零児の姿に、自分の考えを先読みされたせいかわ遠くは屈辱で歯噛みするが、それも一瞬頭から振り払い、気を取り直す。

「……ならば私は「マジシャンズ・ヴァルキリア」を守備表示で召喚し、ターンを終了します」

くくくくく

マジシャンズ・ヴァルキリア

効果モンスター

星4／光属性／魔法使い族／攻1600／守1800

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、  
相手は他の魔法使い族モンスターを攻撃対象に選択できない。

くくくくく

くくくくく

久遠

LP：4000

手札：二枚

場：ブラック・マジシャン

マジシャンズ・ヴァルキリア

魔法、罨：伏せカード二枚

くくくくく

久遠のフィールドに戦装束に身を纏った少女の魔法使いが現れ、その瞬間零児の眼光がぎりりと光り、彼はさらなるカードを発動させる。

「私は君のターン終了時、罠カード「DDDの人事権」を発動！このカードの効果により自分フィールド上のDDDモンスター3体をデッキに戻し、その後デッキからDDと名のついたモンスター2体を手札に加える！！私はこのカードによりデッキから「DD魔導賢者ケプラー」、「DD魔導賢者ガリレイ」の2体を手札に加える」  
「なんだとッ!？」

~~~~~

DDDの人事権

通常罠

①：自分フィールドの「DDD」モンスター3体をデッキに戻す。
その後、デッキから「DD」モンスター2体を手札に加える。

~~~~~

零児のその行動に、久遠は珍しく声を荒げる。それだけ彼の行動が予想外だったの

だ。

「どういうことですか？せつかくのDDDを全てデッキに戻すなど？正気の沙汰とは思えない」

「なに、せつかくだから私のおきも見せてさしあげようかと思つてね？」  
「なに？」

その彼の言葉に、久遠は訝しげに眉を顰めるが、零児はそんな彼の様子に笑みを浮かべるだけ。

「くく。私のターン、ドロー!!」

くくくくく

零児

LP：3500

手札：六枚

魔法、罫：伏せカード一枚

~~~~~

零児はドロークカードを確認すると、久遠のほうに視線を向ける。

それは敬意とともに、このターンで決着をつけようという決意のようなものが見えた。

「(来るか……!!)」

そんな彼の感情を感じ取ったのか、零児は再び口を開く。

「……見事だったよ、遊緋久遠。まさかここまでやるとは思わなかった。——だからこそ見せよう。私の本当の全力を!!」

そういうと彼は、二枚のカードを目の前に掲げる。

「私はスケール1の魔導賢者ガリレイとスケール10の魔導賢者ケプラーでペンデュラ

ムスケールをセッティング!!」

「なんだと!?!」

~~~~~

DD魔導賢者ケプラー

ペンデュラム・効果モンスター

星1／闇属性／悪魔族／攻 0／守 0

【Pスケール：青10／赤10】

①：自分スタンバイフェイズに発動する。

このカードのPスケールを5つ下げる。

その後、このカードのPスケール以下のレベルを持つ、

P召喚した自分フィールドのモンスターを全て墓地へ送る。

【モンスター効果】

①：1ターンに1度、自分フィールドのPモンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを手札に戻す。

~~~~~

くくくくく

DD 魔導賢者ガリレイ

ペンデュラム・効果モンスター

星10 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻 0 / 守 0

【Pスケール：青1 / 赤1】

①：自分スタンバイフェイズに発動する。

このカードのPスケールを倍にする。

その後、このカードのPスケール以下のレベルを持つ、

P召喚した自分フィールドのモンスターの全てを墓地へ送る。

【モンスター効果】

①：このカードが戦闘を行う場合、

このカードの攻撃力は、自分のPゾーンのカードの攻撃力の合計になる。

くくくくく

零児のその言葉に驚きの声を上げるのは久遠。その表情にはあまりの驚きからか、いつもの飄々とした態度が完全に消え去っているのが見て取れる。

だが零児はそんな彼の様子を尻目に、ペンデュラムスケールにセッティングした2体の悪魔がフィールドに無事に現れたのを確認すると言葉を続ける。

「これでレベル2からレベル9のモンスターが同時に召喚可能!!」

そして観覧席の面々もまさかのペンデュラムモンスターの登場に驚きで沸いた。

「あれは、ペンデュラムモンスター?!」

「そんな!!」

「嘘?!」

だがそんな彼らの中でも最もその登場に驚いていたのは、今まで自分が唯一のペンデュラムの使い手だと信じていた少年、榊遊矢だった。

「……なんで? どうしてあいつがペンデュラムを?!」

半ば茫然自失としている遊矢を横目で確認した赤馬理事長は、やがて興味を無くした

かのようにその視線をデュエル場へと戻す。

「(あの様子では彼は榊遊勝から特になにも聞いていないようね。たぶんなにもいわれずにペンデュラムカードを渡された。つまり彼は何も知らないことになる。……となるともう警戒する必要はなさそうね)」

そして赤馬理事長は口元に笑みを浮かべながら、その視線を久遠へと向ける。

「(うちの零児さんを相手にここまでやる腕は見事だったけど、どうやらここまでのようね。——さあ、とくと見なさい、遊緋久遠！零児さんの真の力。我らレオ・コーポレーションの技術の結晶を!!)」

そしてそんな彼女の言葉に答えるがごとく、零児は力強く、それでいて謡うようにそのモンスターたちを呼び出した。

——そう、最強の異次元の王たちを。

「我が魂を揺らす大いなる力よ。この身に宿りて闇を引き裂く新たな光りとなれ！」

——ペンデュラム召喚、出現せよ私のモンスターたちよ!!」

そして空に浮かぶ光りの渦から3体のモンスターが現れる。

その姿を見て、啞然とする遊勝塾の生徒の一人、フトシが掠れるような声を漏らす。

「なんだ……あれ……?」

だが彼がここまで驚くのも無理はない。

零児が呼び出したまさに振り子を模したような巨大な3体のモンスターはそれほど

大きな威圧感を放っていたのだ。

「全ての王をも統べる3体の超越神、「DDD死偉王ヘル・アーマゲドン」召喚!!」

~~~~~

DDD死偉王ヘル・アーマゲドン

ペンデュラム・効果モンスター

星8／闇属性／悪魔族／攻3000／守1000

【Pスケール：青4／赤4】

(1)：1ターンに1度、自分フィールドの

「DD」モンスターの攻撃力を対象として発動できる。

そのモンスターの攻撃力はターン終了時まで800アップする。

【モンスター効果】

(1)：1ターンに1度、自分フィールドのモンスターが戦闘・効果で破壊された場合、

そのモンスター1体を対象として発動できる。

このカードの攻撃力はターン終了時まで、

対象のモンスターの元々の攻撃力分アップする。

この効果を発動するターン、このカードは直接攻撃できない。

(2)：このカードは、このカードを対象としない魔法・罫カードの効果では破壊されな

い。

く  
く  
く  
く  
く

そのあまりの重圧に圧倒させられたのか、呆然としている久遠の姿を零児は片手で眼鏡の位置を直しながら鋭く見据える。

く  
く  
く  
く  
く

零児

LP：3500

手札：一枚

場：DDD死偉王ヘル・アーマゲドン×3

魔法、罫：伏せカード一枚

く  
く  
く  
く  
く

「さあ、そろそろ決着を着けようか」

# 第六話・奇術師の決闘。VS異次元の王(4)最強の王の 力と奇術師の切り札

~~~~~

零児

LP：3500

手札：一枚

場：DDD死偉王ヘル・アーマゲドン×3

魔法、罫：伏せカード一枚

~~~~~

「ペンデュラム召喚……だ……と？」

まさかのペンデュラム召喚により現れた3体のモンスター、DDD死偉王ヘル・アーマゲドン。そのあまりの威圧感に久遠は飲まれかかるが、なんとか気を取り直すと踏みとどまる。

「落ち着け！相手はおそらく主人公ゆうやのライバルとして設定された人物。このぐらいやつても決しておかしくない!!」

そこで久遠は視線を自らの伏せカードの一枚へと向ける。

「（それにこのターンならなんとか耐えられる。その間に反撃の目を見つければ）」

久遠がそんなことを考えている間にもデュエルは動く。

「それでは行くぞ。DDD死偉王ヘル・アーマゲドンの攻撃!!」

その霊児の言葉により一体のアーマゲドンの体から紫色の光線が放たれるが、その瞬間を狙い、久遠は一枚の伏せカードを発動させる。

「私はこの瞬間、罠カード「ガガガシールド」を発動!!このカードは発動後フィールド上の魔法使い族モンスターに装備する。私はこのカードを守備表示のマジシャンズ・ヴァ

ルキリアに装備!!」

~~~~~

ガガガシルド

通常罫

発動後このカードは装備カードとなり、

自分フィールド上の魔法使い族モンスター1体に装備する。

装備モンスターは1ターンに2度まで、戦闘及びカードの効果では破壊されない。

~~~~~

久遠の言葉とともにマジシャンズ・ヴァルキリアに「我」とイラストされた盾が装備される。

「このカードを装備したモンスターは1ターンに二度まで戦闘及びカードの効果では破壊されない。そしてマジシャンズ・ヴァルキリアにはフィールド上の他の魔法使い族モンスターに降り注ぐ攻撃を代わりに受ける能力がある。——受け止める、マジシャンズ・ヴァルキリア!!」

マジシャンズ・ヴァルキリアは自身へと降り注ぐ破壊の光をシールドを盾にししながらなんとか耐えるが、そんな彼女に構わず、零児はさらなる無慈悲な指令を自身のモンスターたちへと下した。

「ならば二体のアーマゲドンで攻撃。マジシャンズ・ヴァルキリアを破壊しろ!!」

その言葉と共にマジシャンズ・ヴァルキリアに二本の光線が降り注ぐ。

一度目の光線は盾に罅を入れられながらもマジシャンズ・ヴァルキリアはなんとか耐えるが、二度目の光線でその盾ごと打ち抜かれ、破壊される。

光となって消えていく戦乙女の姿に久遠は瞑目し、心の中で謝罪する。

「(すまない、マジシャンズ・ヴァルキリア……)」

しかし、零児はそんな彼の様子には気づいた様子を見せず、ただ感心したような声を



上げる。

「ほう、今のを交わすとは。さすがに簡単にはとらせてもらえないか。ならば、私はカードを一枚伏せ、ターンエンドだ」

くくくくく

零児

LP：3500

場：DDD死偉王ヘル・アーマゲドン×3

魔法、罫：伏せカード一枚

くくくくく

「私のターン!!」

くくくくく

久遠

LP：4000

手札：三枚

場：ブラック・マジシャン

魔法、罫：伏せカード一枚

~~~~~

久遠はドローカードを確認すると僅かに笑みを浮かべる。

「(来た!)」

逆転のカードをドローできた久遠は、その喜びのままにそのカードを召喚するために行動に移す。

両手を中心に掲げると、その場にいる全ての人間に呼びかけるように高らかに叫びだす。

「レディース&ジェントルメン!!」ご来場の皆さま、只今より当一座の魔術師たちによる逆転のマジックショーをご覧くださいませ!!」

「……なに？」

突然の逆転宣言に零児は訝しげに眉を寄せるが、久遠はそんな彼の様子に構わず自らの発言を現実にするために最初の一手を打つ。

「それではまずは当劇場のヒロインの一人を紹介しましょう。私はブラック・マジシャンをリリース!!」

「なんだとツ!？」

「えー!」

「どういうこと!？」

まさかエースカードを自ら墓地に送るような行動をするとは思わず驚愕の声を上げる面。そんな彼らに久遠は笑みを浮かべながらも、そのモンスターを召喚した。

「出でよ、最上級魔術師の唯一の弟子。——「ブラック・マジシャン・ガール」!!」

そしてフィールド上に一人の魔法使いの少女が現れた。

くくくくく

ブラック・マジシャン・ガール

効果モンスター

星6／闇属性／魔法使い族／攻2000／守1700

このカードの攻撃力は、お互いの墓地の「ブラック・マジシャン」

「マジシャン・オブ・ブラックカオス」の数×300ポイントアップする。

くくくくく

くくくくく

ブラックマジシャンガール

攻撃力2000↓攻撃力2300

くくくくく

回転しながら片目を睨り現れたのは、先ほど零児がアーマゲドンの攻撃によって破壊したマジシャンズ・ヴァルキリアに似ている魔法使いの少女の姿に、会場は再び騒然と
かした。

その中の一人である赤馬理事長は驚愕の声を上げる。

「ブラック・マジシャン・ガールですって！まさかそんなカードまで持っているというの
!？」

ブラック・マジシャン・ガール。それはデュエルモンスターズの世界において最上級魔術師ブラック・マジシャンの唯一の弟子といわれる少女の名前。

このカードは師匠であるブラック・マジシャンと同じく武藤遊戯が使用していた伝説のカードとして有名なのだが、その存在は主にレアカードの強奪、密売などを行っていたデュエルモンスターズの歴史に残るほどの犯罪組織「グルーズ」のレアハンターである『ブラック・マジシャン使い』“パンドラ”との戦いの時に遊戯が召喚したことで初めて確認されるほど目撃情報が少なく、そのレアリティは師匠であるブラック・マジシャンを超えるほど。

その可憐さと知名度から「永遠のアイドルカード」とも呼ばれている。

「どうやらその異名を知っていたのか、零児はブラック・マジシャン・ガールの登場に不快そうに眉を潜ませる。」

「それで？確かに珍しいカードだが、そんなレアリテイだけのアイドルカードでこの状況をどうにかできるとでも？」

苛立たしげな彼の言葉に、しかし久遠はいつもの飄々とした態度を崩さずにただ肩を竦める。

「いえいえ。ですがブラック・マジシャン・ガールは仲間の力を借りることにより真なる力を発揮します。あなたにはそれをお見せしましょう」

そういうと、彼はその言葉を実行するためにさらなるモンスターを召喚する。

「ブラック・マジシャン・ガールのアドバンス召喚に成功したことにより、私は手札からこのカードを特殊召喚することができます。来い、「イリユージョン・スナッチ」!!」

~~~~~

イリユージョン・スナッチ

効果モンスター

星7／闇属性／悪魔族／攻2400／守1000

自分がモンスターのアドバンス召喚に成功した時、

このカードを手札から特殊召喚できる。

この効果で特殊召喚したこのカードの種族・属性・レベルは、

アドバンス召喚したそのモンスターと同じになる。

~~~~~

その言葉とともに、久遠のフィールド上に全身真っ黒のゆらゆらと揺れる影のようなモンスターが現れる。

「イリユージョン・スナッチはレベル7だが、自分がモンスターのアドバンス召喚に成功した時に特殊召喚することが出来る特別なモンスター。そしてこの効果で特殊召喚したこのカードの種族・属性・レベルは、アドバンス召喚したモンスターと同じになる！

『チェンジ・イリユージョン
変身魔法!!』

そしてイリユージョン・スナッチはその姿をブラック・マジシャン・ガールと同じ姿へと変貌させていく。

その姿を訝しげに見ていた零児だったが、やがてなにかに気がついたようでハッと目を睜った。

「同じレベル……まさか!？」

「御名答♪私はレベル6の魔法使い族モンスター二体でオーバーレイネットワークを構築!!」

すると、ブラック・マジシャン・ガールとイリユージョン・スナッチが光となって、上空に出現した渦の中に飛び込んだ。

「真なる魔術師の力を受け継ぐ乙女よ。今同胞の魂と混じり合い、新たな力を持って我が元に舞い降りよ。エクシーズ召喚。出でよ、未了の魔力を持つ美☆魔☆嬢。「マジマジ☆マジシャンギャル」!!」

すると、渦の中から先ほどのブラック・マジシャン・ガールとそっくりな、しかしそれだけで明らかに存在感が違う一人の美少女が舞い降りた。

~~~~~

マジマジ☆マジシャンギャル

エクシーズ・効果モンスター

ランク6 / 闇属性 / 魔法使い族 / 攻2400 / 守2000

魔法使い族レベル6モンスター×2

1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除き、

手札を1枚ゲームから除外して以下の効果から1つを選択して発動できる。

● 相手フィールド上のモンスター1体を選択し、

このターンのエンドフェイズ時までコントロールを得る。

● 相手の墓地のモンスター1体を選択し、自分フィールド上に特殊召喚する。

~~~~~

零児は突如現れたその美しい魔女に目を奪われかける自分を自覚しながらも、なんと

かそこから目を反らすと、久遠は睨みつける。

「だが、所詮は攻撃力2400。アーマゲドンには及ばない」

だがそんな彼の言葉にも、久遠は余裕の笑みを崩さない。

「そう、焦らないでくださいよ。このカードの真価はこれからです。——マジマジ☆マジシャンギャルの効果を発動！このカードのオーバーレイユニットを墓地へと送りさらに手札を一枚除外することにより相手モンスター一体のコントロールをこのターンエンドフェイズまで奪うことができる!!」

「なんだと!?!」

「私は手札のヒュグロの魔導書を除外し、アーマゲドン一体のコントロールを奪う。
『チャーム・マジック魅了の魔法』」

その久遠の指示でマジマジ☆マジシャンギャルはアーマゲドン一体の前に飛び出てウインクすると、彼女の体からピンク色のハートが飛び出て、アーマゲドンに当たる。

するとアーマゲドンの瞳がハートの形になり、そのアーマゲドンはそのまま自身の居場所を零児のフィールドから久遠のフィールドへと移動した。

そんな様子を見ていた零児は屈辱で齒噛みする。

「(くツツ!?まさかこんな効果があるとは……。だがたった一体のコントロールを奪って
もせいぜい相打ちさせるのが関の山。逆転とは言い難いはずだがどうする気だ?)」

そんな彼の内心を見透かしてか、久遠は笑みをさらに深めるとエクストラデッキから逆転の最後のカードを取り出した。

——そう、文字通りの切り札を。

「さあさあ、紳士淑女の皆さん!これより当劇場最高の役者を皆さんに紹介しましょう
!!——私はマジマジ☆マジシヤンギャル一体で再びオーバーレイネットワークを再
構築!!」

「なに!?オーバーレイネットワークの再構築だと!!」

オーバーレイネットワークの再構築。それはLDSのエクシードコース所属の志島北斗も魅せた、エクシードモンスター一体を使い更なる強力なエクシードモンスターを呼び出す技。

これを行うということはつまり、

「(さらに強力なエクシードモンスターを召喚するということ!!)」

そしてそんな零児の予想は的中することになる。

久遠は両手を広げると、自身の切り札を呼び出すために天へと叫ぶ。

「伝説の中に生きる黒の魔術師よ。今こそその幻想を自らの力とし、我が手に勝利を!!」

——エクシード召喚。出でよ、「幻想の黒魔導師」!!」

——そしてその魔術師は姿を現した。

~~~~~

幻想の黒魔導師

エクシーズ・効果モンスター

ランク7／閥属性／魔法使い族／攻2500／守2100

レベル7モンスター×2

このカードは自分フィールド上の魔法使い族・ランク6の

エクシーズモンスターの上にこのカードを重ねてエクシーズ召喚する事もできる。

1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除いて発動できる。

手札・デッキから魔法使い族の通常モンスター1体を特殊召喚する。

また、魔法使い族の通常モンスターの攻撃宣言時、

相手フィールド上のカード1枚を選択して発動できる。

選択したカードをゲームから除外する。

「幻想の黒魔導師」のこの効果は1ターンに1度しか使用できない。

~~~~~

久遠が召喚したブラック・マジシャンに酷似したその魔術師の姿に、しかし零児は今度はブラック・マジシャンやブラック・マジシャン・ガールを召喚した時のような驚きは見せず、なぜか困惑したような表情を見せる。

「幻想の黒魔導師だと……？（なんだ、このカードは？こんなカード見たことがない）」
零児が困惑しているのは久遠が召喚した零児も見なかったエクシーズモンスターについてだった。

もちろん零児が全てのカードを知っているとはいわないが、零児は大企業の息子に産まれ、子供のころから英才教育を受けてきたまさに麒麟児。そしてその中にはもちろんデュエルモンスターズ関連の教育も混ざっており、そんな彼があのような有名なブラック・マジシャンに酷似したエクシーズモンスターについての知識を逃すはずがない。

だがそれ彼はふと気づく。見たこともないエクシーズモンスターを使う魔法使いの族使いのデュエリスト。その情報を自分は依然聞いたことがあるということに。

「そう、あれは海外支社の情報部から来た一人の賞金稼ぎの話。東洋人らしきそのデュエリストは様々な魔法使い族や見たこともないエクシーズモンスターやシンクロモンスターを使いこなし、世界各地の大会を荒らしていることに。そしてそのデュエリストは一流のマジシャンであるともいう」

と、そこで零児は久遠の今までの行動を思い出す。そういえば彼はまるで劇場に上がった奇術師マジシャンのような振り舞いをしていたことに。

そしてそのことに気づいた零児は、そこで口元を歪めた。

「そうだ、思い出したぞ！近年、海外の大会を荒らしまわる賞金稼ぎのデュエリストがいることを!!その者は一流のマジシャンであることから『奇術師』の二つ名を持つという。貴様がその奇術師か!!」

その彼の言葉に久遠は一瞬驚いたような表情を浮かべるが、やがてどこか照れたような笑みを浮かべた。

「まさか、その名は知っている人が日本にいるとは。どこでその名を？」

「レオ・コーポレーションは世界中に支社を持つ企業だ。優れたデュエリストの噂は自然と私の耳に入るようになっていたのだよ」

「ああ、なるほど……」

零児の言葉に納得したような顔をした久遠は、だがやがて顔を真剣なものへと戻すとそのままデュエルを続行する。

「それじゃあ、デュエルの続きと行きましょう。私は幻想の黒魔導師の効果を発動！一ターンに一度、このモンスターのオーバレイユニットを取り除くことにより手札、デッキから魔法使い族の通常モンスターを特殊召喚する!! 私はデッキから二枚目のブラック・マジシャンを特殊召喚!!」

幻想の黒魔導師は自身を取り巻く光の玉を一つ杖に吸収させると天に掲げる。

すると空中に光の玉が出現し、その中からブラック・マジシャンが再び久遠のフィールド上に現れた。


~~~~~

ブラック・マジシャン

攻撃力2500 / 守備力2000

~~~~~

問答無用で上級モンスターをフィールドに呼び出すその強力な効果に、しかし零児は冷静な表情を崩さない。

「だが今さらブラック・マジシャンを呼んだところで君にはなにもできまい」

だが、そんな彼の言葉に久遠はただ含みのある笑みを返すとデュエルをさらに進める。

「バトルだ！私はDDD死偉王ヘル・アーマゲドンで同じく相手のDDD死偉王ヘル・アーマゲドンに攻撃!!」

するとその言葉とともに二体のDDD死偉王ヘル・アーマゲドンがお互いに紫の光線を打ちあい、その結果お互いの体を破壊し、そのまま大きな地響きとともに崩れ落ちた。

「ちっ!?だがペンデュラムモンスターは破壊された場合エクストラデッキに戻り、次のターンには再び召喚できるようになる。そしてブラック・マジシャンと幻想の魔術師は両方とも2500。そしてDDD死偉王ヘル・アーマゲドンの効果を発動!!」

すると最後に残ったDDD死偉王ヘル・アーマゲドンのオーラが倍増し、その攻撃力が上昇する。

くくくくく

DDD死偉王ヘル・アーマゲドン

攻撃力3000↓攻撃力6000

くくくくく

その姿を見て、観覧席の権現坂が叫び声を上げる。

「攻撃力6000だ?!」

「そう、DDD死偉王ヘル・アーマゲドンは一ターンに一度、戦闘・効果で破壊されたモンスターは攻撃力分その攻撃力を上げることができる。つまりこれは先ほどのアーマゲドンの攻撃力分その力を上げたわけだ。君のそのモンスターたちではこいつを超えることなどできるわけがない」

それはこの状況を見れば誰もがわかる現実。まさに『絶望』と呼ぶに相応しい絶体絶命の状況だった。

しかしそんな中、久遠はハットで目元を隠すと、その口元を不敵な笑みに形作る。

「——それはどうかかな?」

「……なんだと?」

「バトルだ! ブラック・マジシャンでDDD死偉王ヘル・アーマゲドンへと攻撃!!」

「なにッ!?!」

突然の久遠のまさに蛮行ともいってもいい行為に零児は驚愕の声を浮かべる。

そして彼の行動に驚いたのは零児だけではなく、観覧席にいた面面も同じく驚きの顔を浮かべていた。

「なんだとツ!!」

「なにをする気だ、あいつ!!」

「自爆する気?」

だがそこで久遠は口を開くと、その効果を発動させる。

——自身の逆転の一手となるカードの真の力を。

「私はこの瞬間、幻想の黒魔導師の効果を発動!!魔法使い族の通常モンスターの攻撃宣言時、相手フィールド上のカードを一枚ゲームから除外することができる!!」

「なに!?!」

そのあまりの効果に、今日一番の驚愕を見せる零児。

それも仕方ないだろう。つまりこのカードは魔法使い族の通常モンスターさえいれば、毎ターン、問答無用で相手フィールド上のカードを除外できるのだから。

そしてペンデュラムモンスターは破壊されればエクストラデッキに戻り、次のターンになれば再度呼び出すことができる。

しかし除外されてしまっただけではどうすることもできない、まさにペンデュラムの弱点をついた、見事な手だった。

そして久遠は幻想の黒魔導師とその視線を合わせると、一気に振り下ろす。

「行け、幻想の黒魔導師。『破滅の魔術―ブラック・コア』!!」

すると幻想の黒魔導師の杖から黒い球体が出現し、零児のフィールドに最後に残ったDDD死偉王ヘル・アーマゲドンがそれに吸い込まれる。

「アーマゲドン!!」

「続けていきますよ! DDD死偉王ヘル・アーマゲドンがフィールド上にいなくなつたことにより、ブラック・マジシャンの攻撃対象をプレイヤーに移行!!」

「!? ちい!!」

「ブラック・マジック!!」

まさかの一手でフィールド上のモンスターを一掃された零児はしばし呆然としていたが、久遠の声に我に返ると、ブラック・マジシャンの攻撃を防ぐために伏せカードを発動させる。

「罨カード発動、「ガード・ブロック」!! このカードによりブラック・マジシャンの攻撃により生じる戦闘ダメージを0に!! その後はカードを一枚ドロウする」

くくくくく

ガード・ブロック

通常罨

相手ターンの戦闘ダメージ計算時に発動する事ができる。

その戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になり、自分のデッキからカードを1枚ドローする。

くくくくく

水色の薄いオーロラのような防壁が零児の前に出現したかと思えば、ブラック・マジシャンの攻撃を防ぎ、そのままカードをドローする。

くくくくく

零児

手札：一枚

くくくくく

そんな彼の行動に久遠は感心の表情を浮かべる。

「今のを防ぎましたか。——ならば、幻想の黒魔導師の攻撃。」

『ハイ・エンシエントブラック・マジック 超古代黒魔導』

!!

幻想の黒魔導師の杖先から巨大な魔力の波動が出現する。

そして手近のアクションカードを既に取りつくしていた零児はそんな攻撃になすすべがなく、もはやできることはその場から吹き飛ばされないように踏ん張るだけだった。

「ぐううううう!!?」

「零児さん!!」

くくくくく

零児

LP：3500 ↓ LP：1000

くくくくく

苦悶の声を上げる零児の姿に、赤馬理事長は思わず苦悶の声を上げる。

美しい親子愛。そんな彼らの様子に、まるで自分が悪者だなど思いながらも、久遠は

苦笑した。

「私はこれでターンを終了します。——さて、次はあなたのターンです」

久遠にそう告げられた零児は、若干憔悴した様子を見せるも、久遠を一度睨みつけると目を瞑りながらデッキの一番上に片手を置いた。

圧倒的優位な状況から逆転され逆に圧倒的に不利な状況に陥ってしまった現在の展開に、これで逆転のカードを引けなければこのまま負けてしまうと確信したのだ。

「(おそらくやつあの伏せカード。私のモンスターに対するさらなる反撃のカードであるはず。ならばこのターンにそれを上回る一手を引かなければ私は……負ける!!) 私のターン、ドロー!!」

そして、彼は勢いよくカードを引いた。

~~~~~

零児

LP：1000

手札二枚

伏せカード一枚

~~~~~

ターンが零児に移行すると、久遠は密かに表情を引き締める。

前世の記憶から、ペンデュラム召喚についてある程度の知識があつた彼は現在の状況が、先ほどからさほど好転していないということに気づいていたからだ。

「幻想の黒魔導師の効果により一体の除外に成功したとはいえ、未だ彼のエクストラデッキには二枚のアーマゲドンが眠っており、それはいつでもペンデュラム召喚に呼び出され、その二体の攻撃により私のフィールドは今度こそ、全滅してしまう……一応、対策は用意してはいますけどねえ」

久遠はその視線を最後の伏せカードへと落とす。

このカードの正体は罠カード「燃える闘志」。条件付きで自分のモンスターの攻撃力を大幅に上げる強力な罠カードだ。

くくくくく

燃える闘志

通常罠

発動後このカードは装備カードとなり、

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体に装備する。

元々の攻撃力よりも攻撃力が高いモンスターが相手フィールド上に存在する場合、

装備モンスターの攻撃力はダメージステップの間、元々の攻撃力の倍になる。

くくくくく

このカードは発動後装備カードとなり、自分フィールド上に存在するモンスター1体に装備することができる。

相手フィールド上に装備モンスターより元々の攻撃力が高いモンスターが存在する

場合、装備モンスターの攻撃力をダメージステップの間、その攻撃力を倍にするという驚異の力を持っているのだ。

つまり久遠は相手がアーマゲドンを召喚し、どちらかのモンスターを攻撃されたらこの罠カードを発動させそのモンスターの攻撃力を倍にし、そのまま迎撃し、零児のライフを0にしようと考えたのだ。

「でもなあ……。あの人まだなにかやりそうなんですよねえ」

それはこの世界から培われたデュエリストとしての感。それがこのままデュエルが続くのならばとんでもないことが起きると先ほどから警鐘をけたたましく鳴らしていた。

そう、あくまでデュエルが続けばだが。

「なにッ!？」

「なんだ？」

それは突然起こった。零児のペンデュラムスケールにセッティングしてあった魔導賢者ケプラーとガリレイの体から、なにやら機会がショートしたような音がしたかと思えば、体から電流をはじけさせ、光の柱に記されたそれぞれのモンスターのスケールがどンドン減少していき、とうとう二体のスケールが2から5までへと減少してしまう。

久遠はなにが起こったかわからないように呆然としていたが、零児はなにが起こったのか察したようで、目を細めながらも舌打ちを打つ。

「……なるほど、ここまでが限界か」

そして観覧席にいた遊勝塾の面々も思いがけない事態にしばし呆然としていたが、どうやらその事態が久遠に有利に働きそうなことは理解できたようで、ここぞとばかりに声援を送る。

「行けー、今だ!!」

「これは好機だ」

「今なら、3と4のモンスターしか呼べないはず！」

「がんばれー!!」

久遠はそんなちやつかりした声援に今は相手のターンなんだけどなあと苦笑しつつ、零児の方に視線を戻すと、零児は今のフィールドの状況になにか思うことがあるのか、光の柱の中にいる二体のペンデュラムモンスターを視界に入れながらもなにやら思考に耽っていた。

「（所詮はプロトタイプ。まだまだ安定しない。……しかしこの状況は）」

と、そこで零児はなにかに気づいたようで、片手で顔全体を覆うと、突然笑い出した。

「ふふふふ、ふはははははははは!!……なぜ、気づかなかった。ペンデュラムも完成形ではないことに」

「……なに？」

零児のその言葉に、久遠は不審そうに眉間を寄せる。

そして観覧席にいるもう一人のペンデュラム召喚の使い手である遊矢も驚きの表情を示した。

「ペンデュラムも……完成形ではない？」

だが零児はそんな彼らにかまわず話を続ける。

「私には見えた。ペンデュラム召喚の更なる進化の可能性が。——今、それを実証してみせよう！」

そういうと、零児は片手を天上へと高く上げる。すると久遠はなぜか彼から受ける威圧感が急激に増したような感じを受ける。

「(なんだ？ やつはなにをしようと……?)」

——だが、そこでとある人物の叫び声が彼らのデュエルの邪魔に入った。

「なんですつて!？」

「ん？」

「え？」

観覧席から聞こえてきたその声に、零児と久遠は二人ともその視線を声の発生源へと移動させる。

するとそこいたのはLDSの理事長、赤馬日美香だった。

彼女は部下らしき男から小声でなにか伝えられており、それを横で聞いていたLDSの生徒、光津真澄が普段は男子生徒から「可愛くない」と陰口を叩かれるぐらいの冷静沈着さから一転、驚きの声を上げる。

「マルコ先生が!？」

「零児さん!!」

そしてそれは赤馬理事長にとつても一大事だったようで、彼女は普段の自信に満ち溢れた表情から一転、継るような視線を自らの息子へと向ける。

そんな母親の顔を見た零児は、なにやら只ならぬ気配を感じ、デュエル中ではあるが事情を聴くために自身のデュエルディスクで自身の腹心である“中島”と回線をつないだ。

「どうした、中島？」

そして中島から事情を聴いた零児は表情を僅かに強張らせると、先ほどのやる気はどこへやら。デュエルディスクを停止させると、出口へと速足で歩きだす。

そんな彼の突然の行動に、先ほどまで呆然としていた久遠は我に返ると、慌てて口を開く。

「ちよ、ちよつと？」

「この勝負預ける」

「はあ!？」

いきなりのその言葉に思わず久遠はいつもの調子を崩し叫び声をあげてしまうが、そんな彼の様子に零児はくすりとみせず言葉が続ける。

「緊急の用件ができた。この決着はいずれまたつける」

「は、はあ……?？」

最後に思わぬ言葉を受けて、久遠は結局間抜けな声しか出すことができず、零児もそんな彼を一瞥すると、そのままその場を去ろうとしたのだが、そんな彼に声をかける者が。

「待って!!」

「ん?？」

「おや?？」

その声に久遠と零児が振り向くと、そこには走ってきたのだろう。いつの間にか息を

切らした久遠の義弟である遊矢が立っていた。

遊矢は息を整えると真剣な、それでいてどこか怯えたような表情を浮かべながら口を開く。

「あ、あんた名前は？なんでペンデュラムを！」

「……なるほど、榊遊矢。榊遊勝の実子か」

「!?父さんのこと知ってるのか？」

「もちろん。君の父上、榊遊勝のことは、アクションデュエルに新しい可能性をもたらした開拓者バイオニアとして深く尊敬しているよ。——尤も養子がいるなんて話は今の今まで聞いたことなかったが」

そういうと、零児はチラリとその視線を久遠へと視線を一瞬向けた後、再びその視線を遊矢へと戻す。

「あいにくと、ペンデュラムのことは企業秘密でもあるから詳しくはいえないが、とりあえず自己紹介だけはしておこうか。——私の名前は“赤馬零児”。一応レオ・コーポ

レーションの社長をしているよ」

「赤馬…零児…」

「噛み締めるように零児の名を口にする遊矢。そんな彼に構わず零児はその場で踵を返す。」

「いずれ君とも戦ってみたいものだ」

「そんな言葉を残し、零児は今度こそ遊勝塾を後にするのだった。」

嘘CM 『ストラクチャーデツキー久遠編』

暗く薄暗い劇場の中、一人の奇術師風の男がデュエルディスクに二枚のカードを置く
とそこからブラック・マジシャンとブラック・マジシャン・ガールのシルエットが飛び
出し優雅な礼をする。

ナレーション「伝説の魔術師たちが、今新たな力を得て今再びデュエルの舞台へと舞
い降りる」

ナレーションの言葉とともにブラック・マジシャンとブラック・マジシャン・ガール
が勢いよく天空へと飛び出すと、突如そこから眩い光が発生し、二人の姿をそのまま包
み込んだ。

久遠「伝説の中に生きる黒の魔術師よ。今こそその幻想を自らの力とし、我が手に勝
利を!!」

——エクシーズ召喚。出でよ、幻想の黒魔導師!!」

久遠が台詞をいい終わると、光が画面いっぱいを覆うように強くなり、そして光が下りると光の雨とともに幻想の黒魔導師が劇場へと静かに降り立った。

久遠「活目せよ。今宵貴方は真なる魔術を目撃することとなる」

そしてその言葉とともに幻想の黒魔導師が杖を画面の方に向けるとそこから魔力の波動が放たれて紫色の光が画面を見えなくし、それが晴れると幻想の黒魔導師の姿をバックにストラクチャーデッキの姿が値段とともに画面に表示させる。

~~~~~

ストラクチャーデッキ―久遠編―

■値段：1000円（税抜き）

■パッケージ絵『幻想の黒魔導師（隅の方に久遠のイラストが描かれている）』

**■商品内容**

- ・構築済みデツキ43枚（メインデツキ40枚、エクストラデツキ3枚）
- ・プレイイングガイド一枚
- ・公式ルールブック一冊
- ・デュエルフィールド一枚

**■デツキ内容**

- ・エクストラデツキ×3
- 幻想の黒魔導師×1
- マジマジ☆マジシヤンギヤル×1
- アーカナイトマジシヤン×1
- ・メインデツキ×40
- ブラック・マジシヤン×1

ブラック・マジシャンガール×1

黒の魔法神官×1

黒魔導の執行官×1

イリユージョン・スナッチ×1

魔法剣士トランス×1

熟練の黒魔術師×2

魔導召喚士テンペル×2

魔導書士バテル×1

見習い魔術師×2

マジカルフィシアリスト×1

墓守の偵察者×2

サモンプリースト×1

チェミナイ・エルフ×1

黒・魔・導×2

千本ナイフ×1

デイメンション・マジック×2

ブラックホール×1



拡散する波動×1

魔導師の力×1

グリモの魔導書×2

トーラの魔導書×1

ヒュグロの魔導書×1

マジシャンズ・クロス×1

死者蘇生×1

六芒星の呪縛×2

マジカルシルクハット×1

マジシャンズ・サークル×1

魔法の筒×1

燃える闘志×1

シエイプシフター×1

リビングデッドの呼び声×1

神の宣告×1

〵  
〵  
〵  
〵  
〵  
〵

ナレーション「ストラクチャーデッキー久遠編一。発売中」

久遠「——さあ、マジックショーを始めましょう」

# 火属性メタな長兄（前編）：ONE PIECE×フェアリーテイル？（微クロス）

【エドワード・ニューゲート】という男がいる。

『白ひげ』の二つ名を持つ、この大海賊時代の頂点に君臨する世界最強の海賊であり、世界最強の男。かつて、海賊王ゴール・D・ロジャーと唯一互角に渡り合った猛者であり、その伝説的・怪物的な雷名は世界中に轟いている。

三日月のような白い口ひげを蓄えた、常人の数倍はある体躯の筋骨隆々の大男で、希少な霸王色の覇気の持ち主でもある彼は、仲間を「家族」として何よりも大切に想い、船員のことを息子と呼ぶ。船員や傘下の海賊達からはオヤジと呼ばれ、絶大な尊奉の念を抱かれている。

その本人の実力と強い絆で結ばれた強大な勢力により、世界政府から常に最大限の警戒をされているが、しかし下手をすれば海軍に匹敵しかねない保有戦力。さらに白ひげにそれほどの野心がないこともあり、多少の小競り合いはあれど、両者が本格的にぶつかりあうことはこれまでなかった。——そう、これまでは。

☆

☆

そのニュースは突如世界中を駆け巡った。

【白ひげ海賊団2番隊隊長ポートガス・D・エースの公開処刑決定】。

王下七武海に加入するため、元白ひげ海賊団2番隊隊員「黒ひげ」マーシャル・D・ティーチが、裏切り者として自らを追って来たエースを返り討ちにし捕縛。海軍にその身柄を差し出したのだ。

思いがけず、白ひげ海賊団の幹部の1人であるエースの身柄をその手中に収めることができた海軍は、これを好機と見て、あることを決断した。

そう。——白ひげとの「戦争」である。

長年、目の上のたんこぶであった白ひげ海賊団をこれを機に殲滅するため、エースの公開処刑を餌として、白ひげ海賊団を自分たちにとって有利な戦場におびき寄せようと考えたのだ。

そして、エースを収監していた深海の大監獄「インペルダウン」に侵入者が現れたり、七武海への加入を果たしたばかりの黒ひげとの連絡が途絶えたり、白ひげと友好的な関係を気づいているということで警戒し監視をしていたはずの、白ひげと同じ四皇の一人である「赤髪」シャンクスの消息が途絶えたりと様々なアクシデントがありはしたが、しかしエースの処刑が予定されていた時間前、海中からという海軍の予想外の形では

あつたが白ひげ海賊団が姿を現したことにより、その世界の命運を賭けた戦争は始まるのであつた。

☆

☆

それは、戦争の真つただ中。モンキー・D・ルフィとMr3により処刑台より助け出されたエース・D・ポートガスの目の前で起こつた。

彼は処刑台から救出されると、命懸けで自分たちを助け出してくれた仲間たちの思いを汲むために急いで戦場を離れようとしたのだが、途中で海軍最高戦力の一人である大将“赤犬”に、自らがオヤジと慕う白ひげのことを侮辱されてしまったエースは我慢が出来ず、そのままエースは赤犬と戦闘を行うことに。

しかし、いくら新世界でも有数の実力者集団である白ひげ海賊団の隊長の一人といえど、海軍最高戦力の一角を担う赤犬相手では、純粋な武力、戦闘経験、そして悪魔の能力の相性の悪さもあり、あつという間に劣勢に追い込まれてしまう。

そんなエースに助勢しようとするルフィも動き出そうとしたのだが、その時彼の麦わら帽子からある物が零れおちる。

それはビブルカード。エースから貰つたその紙が落ちるのを視界の隅に収めたルフィは、反射的にそれを拾おうとその場に屈んだ。——それが間違いだつた。

元々赤犬の目的は、次代の「悪の芽」となり得る海賊王の息子であるエース。そして「世界最悪の犯罪者」革命家ドラゴンの息子であるルフィ両名の抹殺。つまり彼にとつてはエースだけではなくルフィも標的の一人には違いなかった。

だからこそ、赤犬はルフィのその隙を見逃さず、彼を抹殺しようと自身の能力「マグマの実」の力で作り上げた巨大な溶岩の拳をルフィに向かって振り下ろしたのだ。

「……………ツ!? まずい!!」

それを察したエースは、大切な弟の命を助けるため自らの身も省みず飛び出そうとした——その時だった。その声が聞こえてきたのは。

「———そこまでにしてもらおうか」

その言葉とともに、エースの傍を凄まじい速さの何かが通り過ぎたかと思えば、それが今にもルフィに攻撃を加えようとしていた赤犬を吹き飛ばした。

「ぐう……………ツ!?! いったい何者じゃあ!!」

吹き飛ばされた赤犬は、空中でなんとか体勢を整えながら着地すると、その能力と同じくぐつぐつと燃え滾るマグマのような怒りを持って、自らを襲撃した不埒者の招待を

確かめるために向き直る。

すると、そこには一人の男が立っていた。

海軍の制服に身を包み、「マリーン」と書かれた帽子を目深に被ったその男は、その首元に巻いている竜の鱗のような模様のマフラーという少し変わった装飾品を除けば、どこにでもいるようなただの一海兵に見える。

だが、歴戦の強者である赤犬には理解できた。

その服の上からでも理解できる限界まで鍛え上げた肉体に、立ち方からわかる重心の安定。そして海軍でも五本の指に入る実力者であるはずの赤犬の殺気を前にしながらも、まったく動じた様子を見せず口元に浮かべている不敵な笑みから、目の前の男が一般の海兵などではない、いや一般どころではなく、そもそも海兵ではない自分のまだ見ぬ強者だということに。

先ほどの烈火のような怒りを瞬時に沈め、その男に警戒の視線を送る赤犬。

そんな赤犬の様子に、しかし男は特に気にした様子は見せず口を、口を開く。

「これは白ひげの旦那と海軍の喧嘩。だから様子見だけで戦争に手を出すつもりはない。——けど、こいつらは別だ。俺の弟たちに手を出すつもりなら容赦はしねえよ」

「……………何者じゃ貴様？」

赤犬のその言葉に、男は笑みを深めると、自身のその正体を明かすために、先ほどから自分の顔を隠していた帽子をとった。

エースとルフィはその帽子の下から現れた男の顔を見て驚愕で思わず息を呑む。なにせ、その男は、自分たちがよく知る人物だったからだ。

「俺は、ラグニル・D・ナツ」。しがたない賞金稼ぎで、その二人の兄弟さ」  
——それは、本来の歴史には存在しない彼ら二人の兄貴分の名前だった。



## 火属性メタな長兄（後篇） ONE PIECE

突然だが、俺「ラグニル・D・ナツ」には前世の記憶というものがある。

前世の俺は、その日毎週の楽しみであるジャンプを自分の部屋でベッドでゴロゴロしながら読んでいたのだが、神様のミスで自宅に隕石が落ちてきてしまい、屋根を突き破って俺の頭に直撃し、そのまま死んでしまったのだ。……改めて考えると死因が隕石の落下とか凄まじいな。今となってはどーでもいいが。

それで俺は俺を殺した神様という存在に出会い、そのお詫びというわけで、ジャンプの漫画の中でも一番のお気に入りである、この「ワンピース」の世界に、転生特典として、ランドムで手に入れたある漫画の登場人物の能力を持って、この世界に転生したというわけだ。（ちなみに俺が出会った神様の姿は美少女でも美女でも威厳のある爺でもなく、童で玉な物語に出てくるナメックな緑色の生物だった。実はあの漫画も結構好きだったんだよね俺。そのせいかな？）

んで、俺はこの世界に転生したという訳なんだが、なんと俺が赤ん坊の頃に俺の両親が死んでしまうというハプニングが起こり、俺はある人物に引き取られることとなる。

その人物の名は「モンキー・D・ガープ」。いわずと知れた海軍の英雄にして、ワン

ピースの主人公であるルフィの祖父という、ワンピースという物語の重要人物。

なんでも詳しくは知らないが、俺の父はガープと同じ時代を生き抜いた海兵であり親友だったらしく、その縁で孤児になった俺を引き取ってくれたということらしい。

そして俺はガープに父と同じく立派な海兵となるために育てられた……正直あれを教育とは決していいたくはないが。

何せ、普段の世話は山賊を脅して彼らに任せ、時々やってきたかと思えば特訓と称して虐待紛いのことばかり。

そりゃあ、原作のルフィとエースが海賊を目指すわけだよ。この環境で海兵を目指す人間がいたら見てみたいわ。

まあ、最初はダダンも冷たいし、森の猛獣は怖いで大変だったのだが、人間というものは慣れるもの。この体の身体能力が、前世の世界では考えられないほど凄まじいものだということもあり、獰猛な猛獣の捕獲もわりと簡単にできるようになっていき、それをダダンたちに分けたり家事を手伝うことによって、彼らとの人間関係も大分良好になっていった。

そして、後にエースにルフィ。そしてサボもここにやってくるようになり、ここで生きた大変さも知っていた俺は彼らの世話を積極的に見るようになり、それが功を奏したのか、人懐っこいルフィはともかく、最初は警戒していたエースとサボも俺に懐いてく

れるようになった。そしてそんな俺は、17歳になってからは独り立ちし賞金稼ぎとして生計を立てている。

ルフィとエースは原作どおり海賊志望なために、独り立ちする際二人に一緒に海賊をやらなかつたかといわれたが、正直冒険するにしても、個人的にはなぜわざわざ海軍に追われかねない海賊を名乗るのか理解がでなかつたために、海賊ではなく賞金稼ぎとして生活することに決めたのだ。……え？海兵？いや、海軍は元々候補にも入ってないよ。正直格式ばつたのつて苦手だし、例の天竜人てんりゅうじんどものいうことも聞かなきゃいけないしな。そんなストレス社会はごめんこうむる。

まあそんなわけで賞金稼ぎとして生きることを決めた俺だったが、神様から貰つた特典「漫画の登場人物の能力（ランダム）」のモデルとなつていた人物の性能や能力がチート染みていたこともあり、独り立ちしてから徐々に名が売れていき、今では今世紀を代表する新進気鋭の賞金稼ぎなんて呼ばれてたりする。照れるぜ☆……ごめん、嘘。海軍とか政府からの勧誘がめんどいので正直こんなものいらぬ。

まあそんなわけで、悠々自適な生活を送つていたのだが、ある時そんな俺は衝撃のニュースを聞くことになる。

そう、そのニュースこそが「エースの公開処刑」。

二十年以上の時をこの世界で生きていたために、原作知識の殆どを忘れかけていた俺

であつたが、そのニュースを聞いて三つのことを思い出す。

エースを取り替へすために白ひげと海軍の間で戦争が起るこゝと、そしてその戦争にインペリダウンから脱獄したルフィや道化のバギーたちがその戦争に乱入すること。……そしてその最中にエースが死んでしまうということも。

だからこそ、俺は海軍の制服を裏ルートを駆使して入手し、こつそりとある支部の海兵に紛れ込み、こうしてこの戦争の場にやってきたというわけなのである。——  
自分の義弟の、家族の命を助け出すために。

「(……もう、“サボ”の時のようなことはごめんだからな)」

そんなことを考えながら、俺は先ほど助け出した二人の弟分へと視線を向けた。

「よう、久しぶりだな。元氣……そうでもなさそうだが、無事なようで何よりだ」

そんな俺の言葉で我に返つたのか、なにやら慌てたように口を開く。

「ナ、ナツ!」

「な、なんでお前がここに!!」

「おいおい、水臭いこというなよ二人とも。弟分がピンチだつづうのに、兄貴分の俺が何もしないわけないだろ?——まあ、いろいろ積もる話はあるが、まずはさつきからやる気満々なあのおっさんをなんとかしないとな」

そういつて俺が視線を向けた先には、俺が先ほど吹っ飛ばした海軍の制服を着たおっ

さん——おそらく状況的にあのおっさんが例の「赤犬」なのだろう——が、おそらく悪魔の実の能力なのだろう、腕をぐつぐつと煮えたぎる溶岩に変えながらも、いつでも戦闘に移れるよう構えていた。

それを見て、エースとルフィも構えを取ろうとするが、

「おっと、そこまでだ二人とも。ここは俺に任せて先いきな」

「なッ!」

「正気か? やつは仮にも海軍大将だぞ!! ここは三人で戦ったほうがいい」

俺の言葉に二人は抗議の声を出す、俺はそんな彼らの言葉には耳を貸さないで、片手をひらひらと揺らし、大丈夫だという意思を見せる。

「別に犠牲になろうとか思ってるわけじゃねえよ。あのおっさんは赤犬つてやつだろ? なら俺の能力が一番愛称あいのなづながいいってだけだ」

「でも」

「いいから行け!!」

「……………ツ!?! わかった必ず追ってこいよ!!」

「絶対だぞ!!」

俺の言葉にエースとルフィは、しかし納得しきれずさらに言葉を重ねようとしたが、しかしそんな二人を睨みつけながら語気を強めると、二人はやつと決意を固めたのか、

後ろを向いて走り出す。

「!?逃がすわけなからうがあ!!」

だが、二人を悪の芽と断じ、この世から滅しようとしている赤犬がそれを見逃そうとするはずがなく、二人に攻撃を加えようとしたが、

「させねえつつただらうが!」

「ぐツ!?」

横からナツにより加えられた、自然系への攻撃も可能とする“武装色の覇気”を纏ったその攻撃に、赤犬は攻撃を中断せざるをえず、結果として二人を取り逃がしてしまっ

た。

「く!?邪魔をするでないわあああああ!!」

標的を逃がしてしまった悔しさに、赤犬は歯噛みをしながらも、腕から流れ出る溶岩を犬の形に変えて俺に向かって撃ち込んできた。

「———」  
“犬噛紅蓮”!!」

紅に燃える猟犬が俺に向かって襲い掛かるが、俺は慌てない。慌てる必要がないのだ。

——なにせ、俺にこの攻撃が効くことはないのだから。

俺は迫りくる灼熱の奔流に、ニヤリと笑みを浮かべると、ぎりぎりまで横に避けて大きく口を開けると、その溶岩を噛み千切った。

「なんじゃと?」

俺のまさかの行動に驚愕の声を上げる赤犬。

だが、それも仕方ないだろう。現在判明している悪魔の実の中でも屈指の攻撃力を誇るマグマグの実の能力で膿み出した溶岩の一撃。

防がれるかとは思っていたが、まさか食われるなどは、海軍でもトップクラスの頭脳を誇る“知将”センゴクでも予想することはできない出来事だっただろうから。

呆然としている赤犬をよそに、俺は赤犬の腕から食いちぎった溶岩をもぐもぐと咀嚼すると、ごっくんとその場で飲み込んだ。

「ふー。ごちそうさん。さすが海軍大将の溶岩なかなかうまかつたぜ——礼代わりだ。今度はあんたがくらいな」

素晴らしいながら、俺は首をわずかに後方に引きながらも口を開く。とつておきの一撃をくらわせるために。

「——“火竜の咆哮”!!」

俺の口から吐き出される業炎の一撃。本来炎が効かないはずである、溶岩すら焼き尽くす一撃が、赤犬を襲った。

「なツ!?ぐああああああああ!!!」

赤犬はその予想外の凄まじい衝撃に苦悶の叫び声をあげながらも吹き飛ばされるが、そこはさすがに海軍最高戦力。なんとか耐え抜きながらも、地面を転がりながら体勢を立て直す。

そんな彼の姿を見て、俺は思わず関心の口笛を鳴らす。まさか、今のを耐えられるとは思わなかったからだ。

「さすがは海軍大将。一筋縄ではいかないな」

若干挑発も兼ねての俺のその言葉に、しかし赤犬には思ったような効果を見せず、赤犬は先ほどの攻撃で荒くなった息を整えると、口を開く。

「——なるほど、今思い出したぞ。最近億越えクラスの賞金首も標的とする新進鋭の賞金稼ぎが現れたと聞いていたが、そうか。貴様が噂の“サラマンダー火竜”か」

「……これはこれは。海軍大将にも名が知られていたとは光栄だ」

半ば本心で俺は赤犬の言葉にそう答える。

そう、サラマンダー“火竜”とは俺の二つ名のこと、なんでもゾオン系悪魔の実。ヘビヘビの

実幻獣種モデル“サラマンダー”の能力者であることからこのような二つ名がついた。



……まあ、ぶっちゃけ俺はそんな実を食べたことはないのだけでも。

確かに火を体に纏ったり、火を吐いたり、火が聞かなかつたり、そして火を食べたりとそれっぽいことはできるが、それはあくまで神様から貰った転生特典、「漫画の登場人物の能力（ランダム）」で引き当てた能力だからこそで、だからこそ俺は普通に泳げたりもするんだが、まあこのことは都合がいいので誰にも喋ってはいない。下手な人間に知られて迫害とか捕まって研究材料とかにされても困るし。

そんな考えながらの俺の言葉に、赤犬は「フン」と鼻を一つ鳴らす。

「いくら億越えといえど、所詮は賞金稼ぎと今まで忘れていたがの。まあ、今はそのようなことはどうでもよい。——邪魔をするならわしの全力を持って排除するまでじゃ」

「——ッ!？」

その言葉と共に赤犬から放たれたその覇気に、俺は思わず身構えてしまう。それほど凄まじい殺気を感じたからだ。

「なるほど、さすが海軍大将。最高戦力の名にたがわれない力はあるみたいだな。——

——これは厳しい戦いになりそうだ」

だが、俺は自覚していた。これから始まる激戦の予感に、自分の口角がいつの間にか自然と釣りあがっていたことに。

「燃えてきたぞ!!」

——そして、本来の歴史にはなかった戦いがここに始まった。

☆ ☆

■ ラグニル・D・ナツ

この小説の主人公。23歳。

転生者であり、「火竜」の二つ名を持つ凄腕の賞金稼ぎ。

センゴク元帥がまだ大将の地位にいたころ、同じ時期に大将を務めていた「イグニル・D・ラグニル」の息子。

しかし、当時白ひげと同格とされていたとある犯罪者との戦いでその命を落としていたために、彼の親友だったガープが引き取った。

ルフィたちとは義兄弟であり、エースより3歳ほど年上で、殆ど面倒をみないガープの代わりにエース、ルフィ、サボたち三人の面倒を見ていたために、彼らにはかなり懐かれ、長兄的存在として今でも慕われている。

所謂転生特典として「漫画の登場人物の能力（ランダム）」を神様に貰っており、結果として「漫画「フェアリーテイル」のナツ」の能力を貰うことに（この能力とはドラゴンスレイヤーの魔法だけではなく才能などの潜在的な能力も入っている）。

転生特典のせいかな容姿はフェアリーテイルの主人公であるナツそのもので、それもあつてか、使用する技もナツとほぼ同じ。だが、ナツより頭がいいので、結構小細工的な技も多い。

ルフィやエースから一緒に海賊へと誘われているが、本人は冒険するならば別にそのように海軍に追われるような真似をしなくてもいいと考えており、賞金稼ぎの道を選んだ。

今回海軍にどさくさに紛れて潜入し、エースが赤犬に殺されそうになっていたところをすんでのところで助け出し、その結果赤犬と戦うことになった。

ちなみにこの世界に転生してからはそれなりの時間が経っているため、原作知識のかなりの部分を失っている。そのせいでサボが天竜人の船に撃たれることを察知できず、エースの救出に動いたのもその面が大きい。

インフィニット・ストラトス～アンチ物に見せかけたなにか～：インフィニット・ストラトス

“織斑千冬”  
おりむらちか

第一回モンドグロツソの優勝者にして、その圧倒的な実力から『戦乙女』ブリュンヒルデの称号を持つ伝説のIS操縦者。

現在は次代のIS業界を担う人材を育てる施設である「IS学園」で教育者の道を歩んでいる彼女には、実は一人の弟がいたことはあまり知られてはいない。

その弟の名は“織斑一夏”  
おりむらいちか

彼がまだ小さいころに彼女たちの両親は失踪しており、そのため千冬はまだ学生の身でありながら、女手一つで苦労しながら彼のことを育ててきたのだが、その甲斐あって、両親に捨てられた（実際は失踪なので本当に捨てたかどうかはわからないが）という、一見不幸ともいえる境遇でありながら、少し……いや一部物凄く鈍感なところ（主に恋愛の）もあるが、歪んだ様子も見せず、まっすぐに誠実な少年へと育っていく。

そんな彼の成長を見るのは千冬にとって人生の楽しみといってもよく、無自覚に異性を惹きつけたり、その相手がどんなにアプローチしても全く気づかないそのいつそ病的

なまでの鈍感さに呆れることはありながらも、彼女にとって彼は自分の全てを犠牲にしても惜しくない、大切な宝物だったのだ。——そう、あの時まで。

★ ★

第二回モンドグロツソ。前回優勝者として彼女が参加したその大会で、事件は起こってしまう。

前回の大会で八面六臂の戦いを見せた千冬。そんな彼女の活躍をテレビ画面で見ていた一夏は、今回は会場で直接応援したいと、千冬に頼み込みその会場にやって来た。

愛しの弟の声援を受けて、彼女は意気揚々と戦場へと赴き、そしてその圧倒的な強さで見事二回目の優勝を決めた。

試合を終えた彼女は、さっそく一夏とその喜びを分かち合い、二人で祝杯でも上げようかと考えたのだが、そんな彼女に残酷な事実が知らされることとなる。

そう、最愛の弟である

——『一夏が誘拐された』という事実を。

★ ★

その電話は千冬がモンド・グロツソ決勝に向かう直前に、今回の開催国であるドイツの日本政府大使館へとかかっていた。

その内容は簡単にいえば「織斑一夏を誘拐した」というもの。

そうその電話の相手は、一夏の身柄と引き換えに、前回のモンド・グロツソ優勝者である千冬の出場を取りやめるよう、要求を突き付けてきたのだ。

これには日本政府も慌てた。

千冬の唯一の身内である一夏を誘拐し、彼女の出場を妨害するというのは彼らも予想していた。だからこそ、凄腕の護衛も彼につけていたはずだったのだ。

なのにその護衛が気づかない内に無効化され、護衛対象が奪われてしまったというのだ。失態という言葉だけで済む事態ではなかった。

そして、そのことを日本政府から聞き知った当時の千冬の担当官はさっそく千冬に報告する——はずだった。彼女は千冬が弟をどれだけ大切に思っているかを彼女から聞いて知っていたから、おそらくこれを知れば千冬は大会どころではないと考えたからだ。

しかし、結局彼女が弟が誘拐されたことを彼女に伝えることはなかった。なぜならば日本政府の高官から、情報と一緒に千冬にこの事態を、一夏が誘拐されたことを決して伝えるなどという命令も一緒に伝えられたからだ。

千冬にとつては何より大切である一夏の存在も、日本政府にとつてはただの子供。いや、むしろ誘拐されて千冬のモンドグロツソへの出場辞退の材料にされてしまっている現在の状況から、一夏は日本政府の威信を貶めかねない害悪な存在へとなってしまうていた。

だが、国益のためとはいえ自国民を見捨てたと知られては外聞が悪い。少なくとも今回の責任者の首が飛ぶことは必然。だからこそ、日本政府は非公式な形で担当官への命令を出した。

なので、ここで担当官が命令を無視することも一応はでき、彼女が千冬に一夏の現状を伝えればまだ一夏が助かる可能性はあった。

なにせ、本来の歴史では、千冬がモンド・グロツソを欠場し一夏捜索に加わったおかげで、一夏を見つけ救出することができたのだから。

だが、悪いことにこの担当官。実は当時から流行していた所謂「女尊男卑主義者」というやつで、千冬の担当官になったのも、女性の強さの象徴（千冬にとつてはおそらく不本意なことながら）である千冬に密かに憧れ、あわよくば彼女と個人的にも親しくな

るために自ら志願した。

そんな彼女だからこそ、度々千冬との会話で話に上がる一夏の存在を不快に思っていた。嬉しそうに一夏のことを喋る千冬の姿を見て嫉妬したということもあるが、彼女にとつて織斑千冬は完璧な存在でなくてはならなかった。だからこそ彼女の欠点となり得る一夏が邪魔だったのだ。

だからこそ、彼女は最初は千冬に誘拐があつたことを伝えようと考えたのだが、その命令があつたことをいいことに千冬に一夏誘拐の情報を彼女が帰ってくるまで伝えることはせず、彼女が帰ってくるとさきも大変だという雰囲気ですべて彼女に一夏が誘拐されて現在も行方不明であるということを知らせたのだ。(尤も彼女はその後千冬に八つ当たりとばかりに全力で殴り飛ばされ、さらには今回の責任の全てを負わされ千冬の担当どころか、左遷されてしまい、出世コースから完全に外れてしまうのだが)

それらのことがあり、試合会場から帰還し初めて一夏が誘拐されたことを知った千冬は、前述したようにその場で担当官を殴り飛ばしそのまま暴れ始めたのだが、そんな彼女の元に、ドイツ軍から一夏の誘拐場所と思わしき場所を発見したという情報もたらされる。

その情報を聞いた彼女は、ISを身に纏い一縷の望みをかけてその場所に向かったのだが、時既に遅かったようで、その場にはなぜか誘拐犯のものなのか、複数の死体しか



残っておらず、彼らに攫われたはずの一夏の姿は影も形もなかった。

その場には血痕も残されていたが、DNA検査の結果、それは一夏のものではないと判明し、それを聞いた千冬は一応安堵する。つまり一夏は未だ生きている可能性が残されているのだから。

千冬は今回の情報提供、そして今後の一夏を捜索することへの謝礼として、ドイツ軍のIS舞台で教官として働きながら一夏を探し続けた。

しかし、親友の束の手を借りながらも千冬は必死に探し続けたのだが一夏の姿は一向に見つからず、結局彼女は失意と共に帰国し、そのままIS操縦者として引退することになった。

一夏を失ったことにより、心にぽっかりと穴が空いてしまったような千冬は、もはや何もする気が起きず、まるで死んだような日々を送っていたが、そんなある日、彼女は知り合いからIS学園で教員をやらなにかという誘いを受けた。

ISは最強の性能を誇るとはいえ、まだ若い兵器。千冬最強のIS相乗者としての経験がこのままダメになるのは惜しいと考えたゆえの誘いであったが、どうやら千冬自身もこのままではいけないと考えていたようで、その知り合いが考えていたよりあっさりとその誘いに乗り、こうして彼女はIS学園の教師という道を歩むこととなった。



★

千冬がIS学園の教師となり数年が経ち、初めは戸惑うばかりだった千冬もドイツの教導の経験が生きたのかすぐに慣れ、その持ち前のカリスマ性もあいまって、今では教師からも生徒からも一目置かれる存在へと成長していた。

頼りないところはあるが気のいい同僚たちや、騒がしく喧しいが自らを無邪気に慕ってくる生徒たちと関わる日々は、千冬に休みの少ない多忙な日々を送らせていたが、しかし自慢の弟を失ってしまった虚しさを、すこしはまぎらわせてくれた。

そんなある日のことだった。千冬の前にその青年が姿を現したのは。

『きりゅういんしょう  
鬼龍院翔です』

「……………ッ!?!」

突如現れたISを動かした男。

その身柄の保護のため、情報がマスコミに流れる前に、男はIS学園へと入学するという形でその身柄を移送することとなり、そのため教師の代表者として千冬がその男と面会することになったのだが、千冬はその男の顔を見て思わず息を呑む。——なにせ、その男の顔は自分の弟である一夏そっくりだったのだから。

「髪は銀色で瞳の色も燃えるように赤いが……私にはわかる。こいつは一夏、大切な私の弟——一夏が帰ってきた!!」

あまりにも衝撃的な出来事にしばし呆けていた千冬であったが、そのことを理解すると、彼女の体は一夏が行方不明になって以来の歓喜の感情で包まれる。

だがそれも仕方ないことだろう。なにせ、半ばその安否を諦めかけていた最愛の弟が帰ってきたのだから。

だからこそ彼女は、いろいろ聞きたいところではあるが、人目をはばならず飛びつきたい衝動に襲われながらもなんとかそれを堪え、瞳を潤ませながらも普段の彼女を知る者がいたら驚愕するような柔らかな笑みを浮かべた。

「お帰り、一夏。会いたかったぞ」

万感の思いを込めてそう口にする千冬であったが、そんな彼女の言葉に男が返したのは、彼女が予想だにしていなかった言葉だった。

「人違いです」

「え？」

これは、行方不明になってしまっている間に謎の変貌を遂げてしまった青年織斑一夏と、そんな彼をどうにかしようと悪戦苦闘する乙女たちの物語。

「……え？なんであんなことになってんのあいつ？」

——ではなく、織斑一夏と全く関係ないのに、容姿が似通っていたために間違われてしまった青年鬼龍院翔と、そんな彼の幼なじみであるために事あるごとに騒動に巻き込まれてしまうこととなる地味にハイスペックな少女藻部愛。そんな2人の割りと不幸な騒動記である。

「……………どうしてこうなった」

「いや、あんたのせいなんだけど!？」

★ ★

■藻部愛

主人公兼不幸な人その1。

幼い頃両親を事故で亡くし、親戚をたらい回しにされた結果、ある孤児院に引き取られ、今回の騒動の中心である鬼龍院翔とはそこで出会った。

翔とは文字通り兄弟のように育っており、だからこそ翔を一夏と勘違いしている千冬、箒、鈴の三人にはありえないといっているのだが、彼女たちには聞いてもらえず、若干敵視されはじめているという。(特に一夏に恋していたという箒と鈴には闇討ちされかねないほど敵視されている)

見た目は整った顔立ちではあるが、原作一夏ラヴァーズのような飛びぬけた感じではない。いわば「地味美少女」。

しかし容姿と同じく地味にハイスペックで、中学のときは決して1位はとれなかったが殆どの科目の二番手におり、そのため彼女のことを知るものからは、「ネオ・モブ」「ミス・セカンド」などと呼ばれていたりする。

将来の夢はお金持ちになり孤児院をリフォームすることで、IS学園に進んだのも将来職に就くさい有利になると思ったから。

翔と幼馴染ということさまざまな騒動に巻き込まれていくという巻き込まれ型の不幸な人(笑)

## ■鬼龍院翔

主人公兼不幸な人その2

生粋の日本人なのに銀髪赤眼というまるで踏み台転生者のような容姿なのだが、実は本当に転生者という裏設定が。

しかし、よく踏み台に選ばれるような「皆俺の嫁」とかいふ悪質な性格の転生者ではなく、謂わば神様の楽しみのために無理やり転生させられた道化型転生者。

ちなみに転生特典は戦闘の才能と優れた容姿。だが、実は戦いの才能はともかくこの優れた容姿という特典は、神様の独断と偏見で、転生先の世界でイケメンと呼ばれる容姿をこの特典を得た転生者の容姿として設定するというもので、そのため一夏と彼が似ているのは、転生先で多くの女性を虜（笑）にした一夏に似た容姿を選んだから。

そして髪が銀色、瞳が赤かったのは翔以前にこの神様に転生させてもらったまさに踏み台的思考とでもいふべき性格の転生者が容姿を頼み時にこの設定にしていたため、この色が人の好みなのかとサービスとしてつけた。

しかし、その髪と瞳の色のせいで転生した世界で彼を生んだ両親は自分たちの容姿の特徴を受け継いだ様子のない彼の姿を不気味に思い、なんとダンボールに入れて川に流すという暴挙に。

そして川に流されている最中、彼が現在住んでいる孤児院の院長に拾われ、その孤児院の一員となった。

まったく関係ないのに、神様のせいで一夏とそっくりな容姿にされてしまったため、いろいろな厄介ごとを惹きつける吸引型の不幸な人（笑）

無口に見えるがただのコミュ障。

## 鬼人が斬る! : アカメが斬る! ×ナルト

それは霧隠れの里に伝わる七本の特殊な忍刀を使いこなす実力者たちに与えられる称号。

その霧の忍刀七人衆の一人に、かつて「鬼人」と呼ばれた忍びがいた。

鬼のオーラを背負い戦うその姿からそう呼ばれるようになったその忍びは、自身に与えられた大刀・断刀首斬り包丁を巧みに操りながらも、得意の無音殺人術サイレント・キリングをはじめとしたその高度な技術に裏打ちされた圧倒的な戦闘力を持つて、多くの忍びをその手で血祭りにあげてきた。

敵味方問わず恐怖と畏怖の念を受けながらも、彼は多くの修羅場をくぐり抜け、里に多くの恩恵をもたらしてきたのだが、そんなある日のことだった。彼が水影暗殺のために、クーデターを起こしたのは。

なぜ、彼がそのような真似をしたのかは未だに理由が判明していない。

彼の性格から、とうとう他者に従うのががまんできなかつたのではないかという者もいれば、突然その態度を変貌させ、「血霧の里」と呼ばれる恐怖独裁政治へとその政策を移行させた当時の水影をなんとかしようとしたのだという者もいる。



最も、今さらそのようなことは意味もない。クーデターは結局失敗し、彼は数人の部下と共に里を離れることとなったのだから。

抜け忍となった彼は、再び水影の首を狙えるよう力を蓄えるため、「白」という霧隠れでは忌み嫌われている雪一族という血継限界の血を引く子供を拾い自らの相手として育て上げながらも、彼らは、やがて抜け忍の集団の中では多くの裏世界の人間にその名を知られていくことに。

そしてある日、彼は世界でも有数の大富豪であるガトーという人物からある依頼を受けることに。

それは波の国とのあらゆる交流を可能とするであろう巨大な橋を建設している住民たちの妨害。そしてその中心人物であるタズナの暗殺。

本来ならば、かつて忍刀七人衆に数えられた彼のような忍びを雇うような仕事ではなかったかもしれないが、ガトーは自身に反抗する勢力を潰し、波の国の完全支配を目論んでいたこと。そしてタズナが五大国最強である木の葉隠れの里の忍びを雇ったという情報を得たことから、抜け忍の中では凄腕の集団として数えられる彼らにタズナと一緒に彼らの抹殺を依頼したのだ。

再び里に舞い戻るために多額の活動資金が必要だった彼は、一般人が雇える忍びなど高が知れていると、その依頼を受けることにしたのだが、彼はそこで予想外の強敵に出

会うこととなる。

その強敵の名は“はたけカカシ”。「コピー忍者」「写輪眼のカカシ」と他国で恐れられ、後に六代目炎影にも選ばれることとなる、彼と互角の実力を持つ凄腕の忍び。

彼は白と共に彼が率いる第七班。後にそれぞれ伝説の三忍の弟子となり影クラスの忍びへと成長する面々と戦い……そして死んだ。

カカシとの戦いの最中雇い主であるガトーが乱入し、味方であるはずの彼ごとカカシたちの抹殺を図ったのだが、その際ガトーが白のことを足蹴にしながらも侮辱し、ナルトの言葉で自身が白のことを道具だと思っていなかったことに気づいた彼はそれに激昂。そのまま怒りのままにガトー一味を斬り続け、自分の命を賭けてガトーを打ち取ると、そのままその人生を終えたはずだった。——しかし彼は思わぬ形でその姿を再び舞台上に現すこととなる。

それは第四次忍界大戦。あの伝説の忍び「うちはマダラ」を名乗る暁の首領による宣戦布告によって起こったその戦争で、彼は暁側で参戦したカブトの禁術により白と共に戦争の駒とされてしまったのだ。

自身で納得できる死を迎え、そのことを誇りにすら思っていた彼は、何の因果か再び相対したカカシにナルトが成長したことを聞くと、既に“人間として死んだ”自分を止めるように頼み、それを受け入れたカカシはカブトにより意識を消された彼を破り、彼

らを布縛りの術で拘束封印することに成功し、そしてその後彼と同じく禁術により蘇ったイタチのサスケの手により禁術が解けた結果、彼らはその魂を解放され、再び天に召されるのであった。

——これは、そんな彼「桃地再不斬」の第二の人生の物語。

☆

☆

「帝国」と呼ばれる国がある。

かつて始皇帝と呼ばれる初代皇帝により統一された巨大国家。しかし現在は腐敗に塗れ、帝国の民はその圧政により普段の生活もままならず苦しんでいるまさに末期といつてもいい、そんな国の首都である帝都。この国の闇の全てが詰まったといわれるその街の路地裏を、必死で走る一人の男がいた。

「——はあつはあつはあつ!!くそ、なんで俺がこんな目に!!」

深夜で道が暗いこともあり、道端の石や荷物などに躓きながらも脇目も振らず脚を必死で動かすこの男の名は「カマセオ」。この帝都でガマルという男が営む油屋で番頭を勤める男で、悪質な商売で莫大な利益を得ていたガマルに仕えることでそのお零れを

長い間得ていたという所謂小物というやつのだが、そんな彼の生活は今夜で終わりを迎えてしまう。

なんと、今夜ガマルの油屋に警備隊の介入が入り、関係者が全員捕えられてしまったのだ。

彼は最初わけがわからなかった。彼の上司であるガマルは狡猾な男で、自身の悪事がばれそうになると、多くの人間に賄賂を渡してその罪を逃れてきた。

彼の側近であるカマセオはそのことを知っており、最近でも警備隊の隊長に賄賂を渡していたことをガマルから聞いていたため、はじめはその目的がわからなかった。いや、予想はできたが何かの間違いだと思ったのだ。

だが、そんな彼の疑問も警備隊の先頭にいた男の顔を見て吹っ飛んだ。なんと先頭にいた強面の男、その男こそがガマルが賄賂を渡したはずの警備隊の隊長その人だったのだから。

その瞬間彼は悟った。ガマルは、自分の上司はこの男に嵌められたのだと。

おそらくあの男はあらかじめガマルの悪事に対する証拠をある程度用意していたのだろう。そして今回ガマルから賄賂を受け取ったのは、自分たちを油断させるためのものだつたと理解したカマセオは、おそらくガマルからのお零れで大きな利益を得ていた自分も確保対象であると考え、警備隊の隙について咄嗟に裏口から逃げ出し、こうして

夜の道を必死で走り続けているというわけなのである。

「(おかしいと思つたんだ!!今の警備隊長はあの將軍肝いりで入つた男。狡猾で容赦がないことでも知られたあの鬼のような男が賄賂ごときでそんなあつさり懐柔できるなんて!!)」

そんなことを考えながらそのまましばらく走り続けたカマセオであつたが、やがて誰も追つてきていないということを確認すると、ほつとした表情を見せると、息を荒げながらもそこで立ち止まる。

「はあはあはあ……。ここまですればもう大丈夫だろ……」

安堵のあまりその口を笑みの形に吊り上げるカマセオ。無事に逃げ切つたと確信したところだつたのだが、そんな彼に声をかけるものが。

「おい」

「え?」

唐突に聞こえてきたその声に、カマセオは思わず振り向いた。——それが彼が見た最後の光景だつた。

自らに振り下ろされる大剣。そして、その剣を操る

—— 鬼の姿を。

「……………あ」

そして、そこでカマセオの意識は途絶えた。

☆

☆

「ふん。とりあえずこれで標的は全部か」

貧弱そうなカマセオの体が峰打ちで地面に倒れ伏すのを見て、その男は思わず鼻をつまらなそうに鳴らしながらもその大剣を収める。

白髪混じりの頭髮に、正直下手したら子供が泣き出しそうなほど強面であるこの男の名は“オーガ”。犯罪者然とした容貌ではあるが、それでもこの帝都の治安を守る警備隊の隊長だ。

実は持ち主に超常の力を与えるといわれる帝具持ちの人間相手にも互角以上にも戦えるといわれるほどの剣の達人であり、帝国でも有数の強さを誇るといふ。

そんなわけであるため、その顔の怖さも相まって、彼の事を“帝都の鬼人”と呼び、恐れる者は多い。

最もその一人で下手な盗賊集団なら全滅させることができるほどの戦闘能力と、罪を犯したのなら下手に権力を持つ相手でも断固とした態度をとるその姿勢に、帝都に住み

住人の彼への信頼は意外なほどあついたりするのだが。

さて、そんな彼がなぜこのようなところにいるのかというと、それは今夜裏で悪事を行つて莫大な利益を得ているというガマルという人物が営む油屋に彼らが立ち入り検査に入り、その最中、その隊長であるオーガがカマセオが一人油屋から逃げ出すのを察知し、時間が深夜だということもあり、下手な隊員に後を追わせれば少しばかりやつかいなことになる、諸事情《・・・》より夜目が抜群にきくオーガが彼を捕らえるために、こうして直々に追つてきたというわけなのである。

オーガは自分の峰打ちで気を失つたカマセオに再び視線を向けて、再び溜息をつく。

「しかし、楽な仕事だ。刺激を求めるつて歳じやあねえが、忍び時代の頃のようなもちつとやりがいがあつてもいいと思うんだが」

そんなことを思いながら、オーガはなんとなく空を見上げた。

「そういうえば、もう30年以上前になるのか——俺がこの世界に生まれ変わったのは」

……………ここで唐突だが、もう一度彼の紹介をさせていたどころ。

彼の名はオーガ。ここ帝都の警備隊長にして、帝都の鬼人と恐れられる帝国きつての武人。しかしそんな彼にはある秘密があることを知る者はいない。

その秘密とは、実は彼には所謂『前世の記憶』というものがあるというもの。

前世の彼の名前は————ももちぎぶぎ桃地再不斬。異世界にて“霧隠れの鬼人”と恐れられた忍びであった男である。

☆ ☆

俺の名前はオーガ。この帝都で警備隊長をやっているのだが、実はそんな俺には本来ないはずの前世の記憶という者が存在する。

その記憶を思い出したのは、まだ俺が幼かった頃。この世界での実父に殺されかけた時。

殺されかける前までの記憶から知ったのだが、確かこの世界の俺の父親はこの帝国という国の文官として働いており、この腐れかけた帝国の役人としては真面目な人間として知られていたのだが、ある日俺が母親が浮気をしてできた子供だということが発覚し、それに激怒した父親が母親を殺し、そして俺のことも殺そうと考えたらしい。……どーでもいいが、前世でも今世でもろくな親にあたらねえ俺は。

まあそのショックなんだろうな。それで前世の記憶を思い出したわけなんだが、実はその前世の記憶では俺はこの世界とは違う世界で忍びというものをやっていた。



………いいたいことはわかる。しかし仕方ないだろう本当の事だからな。

その国は帝国のように一国が強大な力を持っているというわけではなく、「忍び五大国」という強大な軍事力を誇る五つの国を中心として、小国などもいくつも点在していた世界。その世界ではこの世界のように帝具などの特殊な道具ではなく、忍びというチャクラというエネルギーを使いこなす戦士たちが強大な力を持っており、軍事力として使用されてきた。

俺はそんな世界で、忍び五大国が一つ、水の国の霧隠れの里で忍びとして活動していたのだが、自分でいうのもなんだが俺の名は一流の忍びとして知られ、霧隠れでも七名にしか与えられない忍刀の一つである首切り包丁を与えられたことからそれはわかるだろう。

しかし、俺はとある理由から霧隠れの里を抜け、抜け忍として数名の部下たちと活動を続けるために。

抜け忍となった理由は簡単で、当時の霧隠れの長である水影の暗殺に失敗したのが理由だ。

当時の水影は霧隠れの里に恐怖政治を引いており、自身の部下である忍びたちを捨て駒同然に扱っていたため、このままでは自分の身の安全もままならないと考えたからだ。

だがさすがは霧隠れの里の長だけあり水影は生半可な実力ではなく、結局俺は命から逃げ出すのに精いっぱい、前述したように俺は里を抜けることとなった。

だが、その時の俺は水影の首を諦めきれず、強力な血継限界の一族である雪一族の子供を腹心として鍛え、裏の仕事で資金を稼ぎながらも、いつか霧隠れの里をその手中に収めるために活動を続けていった。

しかし、そんな俺の野望はある男との対決で終止符を打たれることとなる。

その男の名は“はたけカカシ”。「コピー忍者」「写輪眼のカカシ」としてその名が知られた忍びである男。

ガトーという大富豪の依頼を受けた際に出会ったその男と、その男が率いる3人のガキどもと戦い、一度は口惜しいが舐めてかかっていたこともあり俺の負け。そして先ほどいった腹心として育てた雪一族の子供である“白”と共に俺は二度目の戦いを挑んだのだが、俺はその最中で死んじまった。一応いつておくがカカシに負けたわけじゃねえ。その時の雇い主であるガトーのクソ野郎が部下を連れて乱入してきたせいだ。

俺を高額の金で雇ったガトーのやつは、しかしどうやら元々金を払う気はなかったよう、俺がカカシたちとの戦いで消耗するのを見計らって、まとめて始末しようとして他に雇ったチンピラ達を大勢連れてきたのだ。

本来ならなんてことない相手だが、カカシのやつにぎりぎりまで削られたせいで、そ

の当時の俺にはチャクラが殆どなかったから、さすがにあの数の人間を相手取ることができなかった。

だから最初はカカシのやつらを囷にして一旦引き、その後に報復することにしようかと考えたのだが、そのような考えは、ひとしきり俺のことを嘲笑ったガトーが次に行つた行動で頭から吹き飛んでしまう。

あのクソ野郎は、俺を庇つてその命を落とした白の頭を蹴りつけ、侮辱の言葉を投げかけたのだ。

もし俺と白の関係を知る者がいれば、なぜここまで激昂するのかと不思議に思う者もいるだろう。だが、それも仕方ない、俺は完全にあいつのことを道具として扱っていたのだから。

しかし、カカシが連れていたあの金髪のカキの言葉で……いや、本当は元からわかっていた。

確かに最初は道具として育て上げるために白を引き取り育て始めた。しかしいつの間にか情が沸き、まるで弟か子供のように思っていたことに。

だからこそ、ガトーのやつたことは許せない。俺にはそんな資格はないのはわかつている。しかし我慢することができなかった俺は、最後の力を振り絞り、首切り包丁片手にガトーたちに襲いかかった。

さすがにカカシとの戦いで既に満身創痍だったために全員を倒すことはできず、途中で体中に獲物を刺されてしまったが、なんとかガトーを撃つことができた俺は、そのま  
ま命を落とすことになる。

だがそのことに後悔はなかった。白に感謝の念を伝えることはできなかったが、自  
分の道を貫き、白の顔を民がら死ぬことができたのだから。

だが、その後禁術として指定されている死者を蘇らせる穢土転生えじとてんせいの術により死んだはずの俺は白と共に蘇らせられ、第四次忍界大戦の駒として働かされることとなるのだが、しかし誇りと共に死んだ俺は今さらこのような形で操られることを許さず、人間としての死を選び、なんのいたずらか再び対峙したカカシに俺を再び殺すことを頼み、そしてその願いを聞き入れたカカシの手により、再びその命を絶った。

魂が昇天し、やっとこれでゆっくり休めると思ったのだが、しかしまさか生まれ変わ  
り、しかも異世界でそのような形で再び生を得ることになるとは。

全てを思い出した俺は、そのおかげで思い出した生前の技術を使い父親を殺し、家を飛び出した。当時まだ五歳ではあったが、さすがに大人といえど前世でさんざん殺しの経験をした俺に叶うはずがなく、また、前世の記憶を思い出したからには、父親とはいえ自身を殺そうとする相手にかけてようという情など俺は持ち合わせちゃあいなかったからな。

それから俺は帝都のスラムで、食い物を盗んだり、郊外の森で獲物をとったりなどして生活していた。幸いこの世界ではチャクラは使えなかったが、チャクラを使わない体術や生前の経験が役立ち、そこらのチンピラや一般兵士では俺を捕まえることはできず、この世界特有の危険な猛獣である「危険種」などのようによほど強力な力を持つ獣出なければ狩りを行うこともできたので、屋根のない生活ではあるが食うには困ることはなかった。

一応相手は選んでいたが、チンピラ相手に追い剥ぎなどを行ったり、小さいがマフィアやらなんやらも潰したりしているうちに俺はいつの間にか「鬼の子」と呼ばれ同じスラムの住人にも恐れられるように。

そんな俺がなんせ帝都の警備隊の隊長などというものをやっているのか？それは簡単だ。全てあのクソジジイ。——ブドーの野郎のせいだ。

あのクソジジイ。帝国の大將軍なんていう地位についている癖に、どこからか俺の噂を聞きつけたのか、俺をぼこぼこにして自分の部下として無理やり宮殿に連れて行ったのだ。

どうやら今帝国の政治を牛耳っている大臣オネストのことを、あの野郎は当時から危険視していたらしく、その影響を少しでも減らすため、腕の立つ部下が一人でも欲しかった奴は、当時弱小勢力であったとはいえマフィアを単独で潰したという俺の噂を聞き、その子供

を鍛え上げ自身の部下の一人にしようとな俺の身柄を攫ったのだ。

もちろん俺がそんなあの野郎の都合に付き合う義理もないので、何度も逃げ出そうとしたが、前世と違いチャクラという特殊な力もなく、まだ体もできていない状態では、この国でも三本の指に入るブドーのジジイにかなうはずもなく、なんやかんやで成人して10年以上過ぎた現在、こうしてあのヤローの目論見通り警備隊の隊長としてこの帝都で働いているというわけなのである。

「(全く、なんで俺がこんなことを……)」

ちなみに現在俺は書類仕事に精を出している。

いくら帝都の街の治安を護るっていつても組織である以上仕事は現場仕事だけなどありえない。特にオーガの場合は、下部組織とはいえ帝都警備隊のトップ。この手の事務仕事から彼が逃れられるわけがなかった。

「(抜け忍時代は殆どこんなもんなかったし、あつたとしても白に丸投げしてたんだが、さすがにあいつがいけないのにそんなことできるわけねえしなあ)」

溜息をつきながらも、そのまま仕事がなくなるわけがないので、めんどろと感じがながらも仕方なく手を休まず動かししていると、そんな俺のいる執務室の扉をノックする音が。

「隊長、今大丈夫でしょうか？」

「ああ、入れ」

「失礼します」

俺の返事を聞き、部屋の中に入って来たのは警備隊の服を着た、見た目17、18ほどの小娘。

こいつの名は“セリユー・ユビキタス”。この警備隊の隊員の一人であり、一応俺の弟子のようなものでもある。

こいつは元々俺と同期で警備隊に入った男の一人娘だったのだが、こいつの両親がある日賊に殺されてしまい孤児になったところを俺が弟子として引き取ったのだ。

別に好きで引き取ったわけじゃなねえ。なんでもこいつは貴重な帝具への適性持ちらしく、その教育係として俺が選ばれただけのこと。

「全く俺も暇じゃねえつつうのに……」

賊に両親を殺されたためか、出会った当初のこいつはちよつとしたポイ捨てを行う程度でも犯罪を犯すものに激しい憎悪を持っており、すぐに殺そうとしたり視野が狭かったりとこいつを育てるのはなかなか苦労したが、しかし苦労したかいがあったのか、今では今こいつの足元で同じように俺に向かって敬礼している犬のような帝具「ヘカントケイル」を下賜されたこともあり、この警備隊でも俺に次ぐ戦闘能力を持つていたりする。

俺は、セリユーが部屋に入って来たことにより一旦仕事の手を止めてペンを置くと、セリユーの方に向き直る。

「それでなんの用だ」

俺のその言葉に、なぜかセリユーは若干緊張しながらも答える。

「……ブドー大將軍がお見えです」

「あん? あの雷爺がか?」

セリユーのその言葉に俺は思わず首を傾げた。確かにあの爺と俺にはそれなりの親交というものがあるが、別に気軽にお互いの仕事場を行き来するほどじゃあねえし、あの爺はそもそも皇帝の住む場所である城を護ることを絶対としており、滅多に城から出ることはない。

だからこそよほどのことがなければわざわざ城を出ることはないはずなのだが……。「……まあいい。直接会えばわかることだ」

そして俺はブドーが待っているという応接室へと向かうのであった。

☆☆



## ■オーガ

この小説の主人公。転生者。

“帝都の鬼人”と称される帝国でも五指に入るほどの剣の達人。帝具の使用者相手でも互角以上の戦いをする事ができる。

そんな彼の前世はナルトの原作キャラである霧隠れの鬼人「桃地再不斬」で、この世界では帝国では珍しい生真面目な文官の子供として産まれたが、実は母親が浮気をしたことにより生まれた子供で、それを知った父親に母親ともども殺されかけたことにより記憶を思い出し、父親を殺して帝都のスラム街で生活することに。

スラム街では体を鍛えながらも前世での忍びの経験を生かして物を盗んだり、手ごろな獣を狩ったりしながら生活をしていたが、その生来の気性の荒さも手伝って、チンピラを追い剥ぎしたり小規模ではあるがマフィアを単独で潰したりと荒事に身を染め始めたことにより、“鬼の子”として恐れられるようになっていたが、ある日その噂を聞いたブドーが、当時からその影響を危険視していたオネスト大臣への抑えの駒の一つとして、彼を弟子として引き取り育て、無理やり帝国のお膝元である帝都の治安を護るための警備隊に入隊させた。(前世の能力そのままなら、反抗はできたのだが、当時はまだ子供で肉体もできあがってはおらず転生したことによりチャクラなどが使用できない

ので、抵抗がまるでできなかった。現在なら逃げ出すくらいはできるが、今は別にそのようなことをしようとは思わない程度の信頼はあるため問題はおこっていない)

警備隊に入隊してからは、前世の経験から会得した無音暗殺術サイレントキリングをベースにした剣術と、ぶつきらばうではあるが意外に生真面目な性格であるため、ブドーの影響もありある日警備隊の隊長へと任命された。

警備隊の隊長としては、強面でありぶつそうな異名を持つてもいるために怖がる人間もいたが、意外に生真面目な性格ため仕事はきっちり行っており、下手に権力を持っている相手にも断固とした処置をとるので、帝都の住民たちには意外なほど信頼されている。

前世では断刀首切り包丁を使っていたのだが、今世ではもちろんそんなものがあるわけがなく、特注で作った首切り包丁と同じような大きさの刀を使っている。

何時ものように警備隊の仕事に勤しんでいる最中、ブドーがやってきて彼からとあることを頼まれることになるのだが……？

一応ブドー派（良識派だっけ？）に属する。

### ■セリユール・ユビキタス

主人公の弟子。原作キャラ。

ふとしたことがきっかけで帝具への適性があることがわかり、そのため帝具を使いこなすための訓練を施すため、ブドーからオーガへと託される。

原作では両親（父親？）を賊に殺されたことになり、悪、つまり犯罪者に対し狂おしいほどの憎しみを持つようになり、少しの悪事をした人間に対しても容赦がなくなっていたが、当然ぼくらの再不斬さんが正義なんて言葉を教えるわけがないので、そこからへんは調きよ、強制され、原作のような正義狂いではなくなったが、それと引き換えに、「力なき正義は無意味」という考えに至り、オーガも止めるほどの修業狂いになる。文字通りの肉体改造なんかもやっちゃったりする。

実は再不斬内臓オーガに弟子入りしたことにより、サイレントキリング無音殺人術を習得している。

### ■カマセオ

原作でも出てきたガマルの油屋の番頭。

名前の通りカマセキヤラ。警備隊のがさ入れを察知して逃げ出したが、結局オーガに捕獲される。

# バカとテストと召喚獣～修羅（ある意味）の道を行く転生者～：バカとテストと召喚獣

「バカとテストと召喚獣」というライトノベルを皆様はご存知だろうか？

内容的には科学と偶然とオカルトによって開発された「試験召喚システム」を試験的に採用し、学力低下が嘆かれる昨今に新風を巻き起こしたとある学校「文月学園」。振り分け試験の成績で厳しくクラス分けされるこの学園で、自信満々にテストの結果を受け取った主人公・吉井明久を待っていたのは、最低クラスであるFクラスの、学び舎とは思えないほどの最低な教室だった。

そんな中で始まったHRの最中教室に現れたのは、学年トップクラスの学力を誇る才女であるはずの姫路瑞希。彼女はもともと体が弱いため、振り分け試験中に体調不良で途中退席し、無得点扱いでFクラスに振り分けられてしまったのだ。

密かに瑞希に憧れる明久は、クラス代表である悪友・坂本雄二を焚きつけて、彼女をこの最低設備から救うために「試験召喚戦争」を勃発させる（WIKI参照）というもので、その過激なまでのコメディ描写と読み応えのあるストーリーにより、ドタバタ学園ラブコメディというジャンルにおいて、その物語が完結した今でもかなりの人気を博

している。

——これは、そんなバカとテストの召還獣の世界に転生した転生者たちの、ちよつと歪な物語。

☆

☆

どうも、俺の名前は山田聡<sup>やまださとし</sup>。文月学園二年F組に所属している高校生だ。

この学校では成績順にクラスがAからFに別れる。つまり俺は一番下のクラスに在籍しているのだが、一応いっておくが俺は別にこれといって成績が悪いわけではない。つるんでいる連中の殆どがこのFクラスに在籍しており、そのつきあいでわざとテストをさぼってFクラスにいったんだ。

むしろ俺は自分でいうのもなんだが、成績自体はかなりいい。Aクラスに入ってもおかしくないほどだ。

まあ、そんなわけで成績について以外は、どこにでもいるようなごく普通の男子高校生である俺ではあるけれども、実は人と違うところが、決して普通とはいえないところが二つ存在する。

一つ目は俺に“前世の記憶”があること。つまり俺は所謂「転生者」という存在だったりするのだ。

まあいいたいことはわかる。でもこれは本当のことで、けっして邪鬼眼さんとかゆんゆんさんとか厨二病さんとかそういうのじゃないから。眼帯片目につけたり指抜きグローブつけて悦に浸ってる人達とは違うから。だからその片手に持っている携帯はしまえ、いいな？……うん、それでは話を続けさせてもらおう。

前世での俺の名前は山田太郎<sup>やまだたろう</sup>。前世でも俺はどこにでもいるような高校生だったのだが、この時の俺は根暗気味で友達が殆どおらず、現在のように多くの友達と集まってわいわい遊ぶなど考えられなかった。

しかし、そんな俺にも一人だけ親友と呼べる存在がいた。それが豊臣英明<sup>とよとみひであき</sup>。

英明は俺のような根暗オタクとは違い、眉目秀麗文武両道。さらには性格も明るく親しみやすい、まさに完璧超人といった感じの人間で、俺とはまさに真逆といってもいい人種なのだが、なぜか不思議と馬が合い俺はいつも彼と一緒にいた。

英明のおかげで社交性のない俺も、彼のおかげで数は少ないとはいえ数名の友人もでき、女つ気はないものの楽しい学園生活を送っていた。

そんなある日のことだった。

——俺が同級生の女の子にナイフで滅多刺しにされてしまったのは。

『あんたささいなければ、英明君は私のものだったのに!!』

その女生徒は英明の元彼女であり、俺とも面識はあったのだが、彼女はどうかやら俺のようなオタク気質で根暗な人間に嫌悪感をもよおす人間のように、あからさまに俺に対して悪意を持って接してきて、露骨な陰口や嫌がらせなんかも行ってきた。

しかしそれを知った英明が彼女に対して激昂。英明は泣いて嫌がる彼女と無理やり別れ、しかしそれだけでは収まらず、個人で築いた人脈を使い彼女の悪い噂を流させ学校に彼女の居場所を失くし、彼女を学校にいさせられなくしたのだ。

俺は英明の行動をやりすぎだと感じながらも、しかしこれで平穏な日々を送れると思いい、彼の行動を黙認した。

だからその罰なのだろう、ある日校門で待ちかまえていた彼女に殺されてしまったのだから。

だからこそ死にたくないと思いつながらもこれも仕方ないのかなと考えながらも、俺はそのまま意識を失った。

そして出会ったのだ。——神様と呼ばれる存在に。

辺り一面真っ白な空間で出会った無駄に威厳のある爺様がいう話には、なんでも本当ならば同級生の女の子は転校先で運命の男性に出会い、英明のことを忘れて幸せに過ごすはずだったのだが、神様のミスでその運命が崩れ、あの女の子が運命の男性と出会う

ことはなく、そしてその結果英明のことを忘れることができずに彼と別れる原因となった俺を殺すまでに追い詰められてしまったのだとか。

だからこそそのお詫びとして、神様は俺にある提案をしてきた。

そのお詫びとは「好きな二次元作品に酷似した世界に転生させる」というもの。なんでも俺がオタクという人種ということを事前と知っており、これが一番喜んでくれると考えて神様は俺にこの提案をしてきたのだとか。

そして神様の考え通りに生粋のオタクである俺は、そんな彼の提案に食いつき、とあるライトノベルへの転生を希望した。その世界こそが俺が生前ハマっていたライトノベル、バカとテストと召喚獣の世界だったのである。

英明のおかげで少ないながらも友達はいたが、しかしそれでもやはり大勢の仲間たちとわいわい騒いんだり恋愛したりということに対して憧れがないわけではなく、理不尽なまでのコメディ描写などもあるが、バカとテストと召喚獣はそんな俺にとってまさに行ってみたい世界No.1だったのだ。

ということ、俺は特典として「学習速度上昇」「不自然にならない程度の容姿の上昇」「不自然にならない程度の運動能力上昇」の三つを神様から貰い、こうしてバカとテストの召喚獣の世界に転生したというわけだ。

ちなみになんでこれらの特典を貰ったのかというと、転生したからには今度こそ夢の



リア充生活を送ろうと、神様が他に何かあれば無理がない範囲でくれるっていうので、俺はこれらの特典を貰ったのだ。前世でコミュ障気味だった大きな理由は、勉強もできず運動もできないためにバカにされ続けたから自信がなくなってしまったからだ。

だからこそ俺はこれらの特典を有効活用し、努力を重ねて自分に自信をつけようと思っただのだ。

そして俺はその後特典の力を重ねて努力を重ね、原作の舞台である文月学園に入学した私は、目論見どおりに明久たち原作メンバーたちと交友関係を築き、常識知らずの彼らの行動にいろいろ苦労させられながらも、騒がしくそれでいて楽しい学園生活を現在も送っているというわけだ。

さて、それで次は俺の普通ではない二つめの点なのだが、それは俺に恋人がいるということだ。

……ま、待ってくれ。別に恋人自慢とかではないのだ。い、いや確かに自慢したい気持ちはあるが(のろけ)、俺がいたいのはその恋人に理由がある。

そう、実は俺の恋人は普通の男性たちの恋人たちとは少し変わったことがある。

一つ目はその口調。まるでどこかの漫画に出てくるようなわざとらしい「くじゃ」とかいいう爺言葉だったりする。だがこれはいい。その可愛らしい見た目とのギャップがまた萌える(のろけ2)。

二つ目はその演技力。特に声真似などプロも超えているのではないかと思えるほどそつくりで、それには真似した人物をよく知る人物たちも思わず間違えてしまうほど。……でも俺だけはなぜかわかったりするんだけどね（のろry）。

三つめ双子であること。恋人には見た目がそつくりで姉がおり、その姉は普通にFクラス相当の成績である恋人とは違い成績優秀なAクラスに所属しているのだ。……まあ、姉はきつい性格だから俺の目から見たら恋人の方がよほど可愛いのだが（のry）まあここまでいえばバカとテストと召喚獣のファンなら俺の恋人が誰かわかると思う。

そう、俺の恋人はバカテスト原作キャラの中で、本来ある理由でヒロインには絶対にならないであろう立場でありながら、その可憐な容姿と、前述したようにその可愛らしい容姿とのギャップが激しい口調。そして下手な女性より女性らしいその仕草や動作。そして読者のニーズ（笑）に答えるそのコスプレ姿の数々。

そのことから一部ではこの作品のメインヒロインである姫路瑞希ひめじみずきと島田美波しまだみなみの二人を上回る人気を誇っている。

その名は

「——ん？どうしたのじゃ聡？」

「あ、なんでもないよ秀吉」

そう、俺の恋人とは現在一緒にシヨツピングモールでデート中である彼、きのしたひでよし木下秀吉。そう、実は俺の変わっていることの二つ目というのは、実は俺の恋人

——『男』だったりするのである。

☆ ☆

彼と出会ったのはちやうど俺が明久たちと知り合う前、文月学園の入学試験が終わった帰り道でのこと。不良に絡まれていた彼を助けたのがきっかけだった。

実は彼はその男性らしからぬ美少女のような容姿のために、度々このように男にナンパされることがあり、大体は自身が男だ教えれば相手も気まづげな顔をして去っていくのだが、中には男だと信じずしつこく絡んでくる輩がいるらしく、俺が彼と出会ったときに彼に絡んでいたのもこの手合いだった。

前世の俺ならばこのような場面を見たら、目を背けながらそつと逃げ出すのだが、リア充目指して勉強だけではなく近所の空手道場に通って体を鍛えたりしていたので喧

嘩にも自信があつたので正義感に身を任せてその男たちを追い払ったのだが、まさかこんなところで原作キャラの一人に会うこととなるとは思わなかったから酷く驚いたのを覚えている。

まあそんなことがきっかけで原作キャラの中で俺は秀吉と一番早く知り合い、その後馬が合ったために原作メンバーの中で彼と一番仲がよくなり長い時間活動を共にしていった。

皆の都合が合わないときでも二人で買い物にいたり食事に行ったり映画を見に行ったり、秀吉が俺の部屋に遊びに来たときのこともあった。

そしてある日秀吉に呼び出され告白された俺はそれを受け入れ、そして秀吉と付き合いうこととなったわけだ。

一応いっておくが俺は「ホモ」ではないし、ぶつちやけ前世で一番好きなキャラは彼であり、うん、まあ正直いうとあれな目で彼を見ていこともあったのだが、ここはバカテストの世界であるとはいえ現実。男相手にそういう感情を持つていられると世間体がまずい、ましてや男と付き合うなんて修羅の道であり、そして秀吉本人にも軽蔑の目で見られかねないと考え、ずっとその思いを胸に秘め、秀吉は男だと、だからそういう目で見るのはまずいと必死で言い聞かせてきたのだが、転生してからの秀吉が思った以上に可愛かったこともあってか秀吉の告白をきっかけにその思いが爆発し、その結果

彼の告白を受けて恋人となることを決意したのだ。

「まあそれにこの世界は前世の世界と違って同性愛には寛容なようだしね。姫路と島田なんか満面の笑顔で応援してくれるといってくれたし。……まああの二人からすれば明久を誑かしかねない相手が減ったこともあり嬉しいのだろうが」

ちなみに明久たちを初めとしたFFF団の面々には襲い掛かってこられたりもしたが、皆返り討ちにしてやった。ピストルカラテ四段の俺に隙はなかった（大嘘）。

まあそんなわけで俺は学園の皆からの快い（笑）応援も受け、こうして秀吉とはれて公認の中になったというわけだ。

初めは本当に男の彼と恋仲になってもいいものかと考えもしたりもしたのだが、俺に必死で尽くしてくれようとする健気な姿や一途に慕ってくれて二人つきりになったりすると可愛らしく甘えてくるその姿に、もういつの間にか俺の迷いや葛藤は晴れ、心に誓う。

これからたとえどんな試練があろうとも、どんな罵倒を受けようとも、この愛らしい恋人を守り抜き、共に幸せに生きていこうと。

「それじゃあ、行こうか秀吉。せっかくの休みなんだ、楽しもうぜ」  
「そうじゃの、楽しむとするか」

そして、俺は最愛の恋人とのデートを楽しむのだった。

——だが、この時の俺は気づかなかつた。

秀吉が俺に見えないように歪んだ笑みを浮かべながら放つたその言葉に。

「（もう、絶対逃がさない。今度こそ俺が守ってあげるからな

——太郎——

☆ ☆

■ やまださとし  
山田聡

この小説の主人公であり転生者。前世の名前は山田太郎。やまだたろう

前世の彼はクラスに一人はいるようなコミュ障気味な根暗オタク。しかし、彼とは正反対ともいっていい人間である親友の豊臣英明とよとみひであきのおかげで数人の友達ができ、クラス内の所謂底辺カーストの位置にはいたが、それでもそれなりに楽しく生活していた。

しかし、かつて自分に嫌がらせをし、それを知られた英明の手により社会的に致命的

な傷を負わされた英明の元恋人に殺されるが、実はそれは神様のミスというやつで、所謂テンプレ的な経緯を経て、「学習速度上昇」「不自然にならない程度の上昇」「不自然にならない程度の上昇」という三つの特典を貰い、自身が憧れていた「バカとテストの召喚獣」に転生、憧れのリア充（笑）生活を送るために努力を重ねた。（正し当の本人は「リア充」の定義をあまりよくわかっておらず、なんとなくニュアンスでいつている）そして文月学園に入学してからは、目論見通りに原作メンバーの仲間になることができ、割と大変な目に巻き込まれたりもしているが、前世より楽しい学園生活を送っている。

前世では運動も勉強も上手くいかずバカにされてしまったことがきっかけで挫折。それがコミュ障となった原因だったりもするのだが、転生してからは特典の力もあるが努力を重ねた結果、前世では考えられないほどのスペックを持つようになってため、自身に溢れるようになった。

成績もAクラスのトップとも張り合えるほどまで上がっているが、明久たち原作グループと学園生活を送った方が楽しそうだとわざとFクラスに所属している。

Fクラスの問題児グループの一人として知られているが、ある程度常識人であり、また本当にまずいと思った時には明久たちを止めたりしているので、教員たちからはそれなりの信頼がある。

顔よし、成績よし、運動能力よし、そしてまあ性格も愉快的なものがあるが、いほうなのでそれなりにモテていたが、秀吉と付き合っていることがわかってからは、彼にアタックしようとする女生徒は格段に減り、逆に彼らを見守ろうという発酵系淑女が大幅に多くなった。

秀吉と付き合ったのは秀吉に告白されたのがきっかけだが、実は前世で彼がバカテストキャラの中で一番好きだったキャラが秀吉で、またそういう目でも見ており夜のおか、げふんげふん！まあいろいろお世話になったために元々意識はしていたのだが、現実の世界で男を愛するというのは修羅の道だと思い、転生し知り合っただけからは、彼は男だと必死で自分に言い聞かせ、そういう対象としてはみないようにはしていたのだが、現実の秀吉が思った以上に可愛く、また本人は気づいていないが秀吉のアプローチを受けて無意識に彼を意識し続けた結果、秀吉の告白を受け、付き合うこととなった。

実は秀吉と付き合うこととなった後も彼を慕う者はいたのだが、とある理由でいつの間にかいなくなったのだが、その理由は木下秀吉の説明にて。

■ きのしたひでよし  
木下秀吉

この小説のヒロイン。……だが男だ（笑）。

原作キャラの一人であるのだが、実は転生者で前世の名前は主人公の親友である豊臣



英明。

前世の彼は完璧超人に見えるが、実は幼いころは引つ込み思案で幼稚園の頃はそれで苛められていたのだが、その頃はまだコミュ障じゃなかった前世の主人公に助けられたために主人公に惚れたガチホモ。(いや、主人公限定なんでガチホモじゃないかもしないが)

高校の頃に再び再開し、以前とは変わり果てた主人公を見てもその思いは消えず、むしろなぜか母性愛のようなものを刺激されてその思いを強くした。

しかし同性愛というのは世間では受けいられづらいということも理解もしているため、主人公に思いを告げる勇気が持てず、親友ポジションを維持していたが、以前主人公に嫌がらせをしていたために自分の持てる能力全てを使って転校にまで追い込んだ元恋人が主人公を殺してしまったために、せめて思いを告げておけばよかったと後悔。その後主人公を殺した元恋人を殺した後に自身も主人公を追って自殺する。

その後、それを見ていた主人公を転生させた神様がそんな彼のことを気の毒に思い、彼の想い人である主人公が転生したバカテスの世界に、「演技力上昇」「原作キャラに転生する権利」「不自然にならない程度の恋愛運の上昇」の三つの特典をもらって、バカテスの原作キャラの一人である木下秀吉として転生する。

木下秀吉に転生したのは、前世で彼が好んで読んでいたバカテスで彼が一番好きなの

キャラだと知っていたために今度こそ彼と恋人となるために彼の好みであろうキャラである秀吉に転生。彼と再び再会してからは特典で貰った演技力を使って原作の秀吉どおりの行動を送りながらも、自分が覚えてる限り主人公の琴線に触れるであろうアップローチを続け、そしてめでたく主人公の恋人となることができた。

転生してからの主人公はかなりモテていたが、彼と恋人同志になつてからはその殆どがその動向を見守る発酵系女子へと変化したが、しかしそれでも諦めきれない女生徒もおり、そんな女生徒達から密かに嫌がらせを受けていたがそれを返り討ち。主人公を諦めるように彼女たちの心を折った。（最も前世の反省も踏まえてあまり追い詰め過ぎないようにしたが）ちなみにこのことは主人公は知らないが原作メンバーは知っているために、秀吉がこの行動を起こしてからはFFF団からの嫌がらせもなくなった。知らないことって幸せだね☆

転生しても主人公を追つて来たということもあり、それなりにヤンデレ気質。主人公が女性と話すぐらいいいだが、その女性が主人公に好意を見せようとすれば……（黒笑）え？なんで転生して顔が変わったはずの主人公のことがわかつたって。それは愛ゆえにだよ（適当）

仮面ライダーダードライブと黒井響一郎にはなぜ前世の記憶が存在するのか？

黒井響一郎というF1レーサーを御存じだろうか？

50歳近い年齢でありながら、20代半ばほどの若々しい容姿の持ち主である彼は、日本では最高年齢の現役レーサーでありながら、その巧みなテクニックと勝負どころを逃さない勇敢さで数々なレースを制し、日本史上最も偉大なレーサーとして現在もその活躍を続けている。だが、そんな彼にはある秘密が存在した。

それはとある記憶が存在するもの。所謂「前世の記憶」というやつなのだが、それがまた奇妙な記憶だった。

【仮面ライダー】

かつて「ショッカー」という世界征服を企む悪の組織が登場し、世界を恐怖と混乱に陥れた時現れた二人の正義の味方。それが仮面ライダー「1号」「2号」。

彼らはその強さと正義の心をもって、多くの仲間たちの力を借りてとうとうショッカーを打倒したことにより、仮面ライダーという名前はその当時の人々にとつてまさに正義の象徴となった。

当時まだ高校生だった黒井もちろん彼らのことは知っていたのだが、それを知っていたからこそ、かれは自分が持っていた前世の記憶を奇妙に思う。

なぜならその記憶とは——自分が三人目の仮面ライダーとなつて1号、2号を殺すというものだったのだから。

——これは別世界で最強最速のシヨツカーライダー「仮面ライダー3号」として活動していた記憶を持つ、一人のレーサーの物語。

☆ ☆

私の名前は黒井響一郎。今年45歳とそろそろ引退を考えなければいけない年齢ではあるが、未だレーサーとして現役で活動させてもらっている。

自分で言うのもなんだが、私はレーサーとしては優秀で、自慢になつてしまふがそれなりに多くの賞も受賞しているのだが、実はそんな私には誰にもいったことのないある

秘密があったりする。……まあ、秘密と呼べるほどのものではないが。

その秘密とは所謂「前世の記憶」。つまり自分生まれる前の記憶が存在するというもの。

だが、それ自体は別にいい。どこかで聞いた話だが、「前世療法」という前世の記憶に關係する治療法も存在するらしいし、前世の記憶を持つ、少なくとも前世の記憶を持っているという「妄想癖」を持っているものがないというわけがないということだろうし。

なら何が問題なのかといわれると、その前世の記憶の「中身」が問題なのだ。

その中身とは、私がショッカーという世界征服を企む組織に、所謂「仮面ライダー」という存在に改造され、1号2号を初めとした正義のために戦う仮面ライダーたちをその手で倒し続けてきたが、最後にはある仮面ライダーとのレース勝負の果てに、正義の心に目覚めた私は他のライダーたちと共にショッカーを打倒し、そして消えていったというもの。

まるでできの悪い特撮映画のような内容だと思われるかもしれないが、仕方ない。子供のころから私にこの記憶があったのは本当のことだったのだから。

それに私が仮面ライダーになるといえるのはともかく、「ショッカー」という組織と「仮面ライダー」という存在については、実際に実在してはいた。

それは私がまだ学生時代の頃。突如世界征服を企む悪の組織ショッカーが現れ、怪人たちを率いて世界を恐怖と混乱に陥れた。そんなショッカーに対抗するように彗星の如く現れたのが、後に正義の味方の代名詞となる存在「仮面ライダー」だったのだ。

だからこそ彼らの存在を知ってからは私は不思議に思った。なぜ私が仮面ライダーになつているのか、なぜ正義の味方であるはずの仮面ライダーとなつて悪の組織であるショッカーの手先となつていたのか。

私がこの記憶に気づいたのは前述したように幼少期の頃から、そうショッカーと仮面ライダーの存在が世間に知られる前なのだ。なのになぜそのような記憶が私にあるのか。

一応医者にかかったりもしてみたが、彼らにも詳しい原因はわからないようで、鬱からならなる妄想の一種などともいわれたのだが、それだと子供の頃からその記憶がある理由がないので、結局理由はわからずじまい。

まあ、子供の頃ならともかく私生活には特に影響があるわけではないので、日々ちよつとした違和感を感じながらレーザーとして活動していたのだが、そんなある日。私はニュースである存在のことを知り、自身のその記憶がただの妄想ではなかったことを知ることになる。

それは最近ネットで日本各地に現れていると噂になつている怪物。その怪物を倒す

ために現れた一人のヒーローの姿が激写されたというのだ。

『こ、これはッ!?!この姿は!!』

そのヒーローの姿を見て、私は信じられない思いで思わず驚愕する。なぜならそのヒーローこそが、私が前世の記憶で正義の心に目覚めた仮面ライダーの姿、そのものだ。だからだ。

私はその後、警察の道に進んだ友人の一人に、現在警察のとある部署にいるはずの男が、ちゃんと歴史どおりにその部署にいるかどうかの確認を頼み、そして予想通りその男がその部署にちゃんと所属していることを知ると、私はそのことをさらに確信する。

私がその所属を確認した男の名は“泊進とまり・しんのすけノ介”。

そう、彼こそがかつて歴史が改変された世界で最速最強のショッカーライダー「仮面ライダー3号」として君臨していた私をそのドライビングテクニックで破り、正義の心に目覚めさせてくれた仮面ライダー。「仮面ライダードライブ」の正体。

「(もしや、あれは私の妄想でも前世の記憶などでもなく、本当にあった出来事だったのか?)」

いろいろ考えた結果、このままじつとしていても事態は進展しないだろうという結論に至り、私は事の真偽を確かめるために直接この男に会いに行くことを決めた。長年悩んできたこの記憶に決着をつけるために。

だが、この時の私は知らなかった。

『俺の名は「仮面ライダー4号」』

——まさかあのような事件に巻き込まれてしまうことになるとは……………。

☆ ☆

■ 黒井響一郎

この小説の主人公。

映画「スーパーヒーロー対戦GP 仮面ライダー3号」で仮面ライダー3号として登場した黒井響一郎の、ショッカーにより歴史が改変されていなかった場合の姿。

年齢45歳とそれなりに年をとっているが見た目はいまだ20代半ばと若々しく、現役



のレーサーとして活躍を続けており、レーサー界では日本で最も偉大なF1レーサーの一人として称えられている。

シヨツカーに歴史が改変されていない世界の話であるため、本来ならば仮面ライダーの力どころかその記憶もないはずなのだが、この黒井はかつて仮面ライダー3号として活動していた頃の記憶がある。しかし不思議とは思っていたものの、仮面ライダーという存在を正史でシヨツカーを倒したという1号2号のことは知ってはいたが、仮面ライダー3号の存在など聞いたことも見たこともなかった。

なので今まで不思議には思っていたが、日常生活でこれといった影響があるわけではないので、日々に違和感を感じながらも放っておいたのだが、しかしある日ニュースで前世の記憶で自分を正義の心に目覚めさせてくれた仮面ライダードライブ。そして警察の友人からその正体である泊進ノ介が警察に前世の記憶どおりに所属していることを知り、今まで自分を悩ませていた記憶に決着をつけるために彼に会いに行くのだが、その途中シヨツカーの仮面ライダー4号を使った新たな作戦に巻き込まれ、やつらのなんの罪もない人々を平気で傷つけるその姿勢に怒りを覚えて、改造されてはいないが、再び仮面ライダー3号に覚醒する!!……つていうのをやりたかつたんですが、時間もなく、仮面ライダーの知識もにわかですのでこういう形で終わらせていただきませぬ。もうしわけありません。

## 仮面ライダードライブ～4人目の仮面……ライダー？～

サイバロイド“ZZZ”。かつて己の死期を悟ったベルトさんことクリーム・スタインベルト博士が、自身の人格を宿す器としてドライブドライバの前に開発していた強化ロイミュード。

ロイミュードと同じく重加速を起こすことができ、凄まじい怪力を起こる。さらに吸収したものをコピーすることができるといふ能力まで持ち合わせているが、しかしこれら起動するためには人並み外れた精神力が必要で、当時のクリームはこれを起動できるほどの精神力を持ち合わせておらず、またこれを使用してしまうと心が暴走する恐れがあることを知ったクリームは、自身の器をドライブドライバへと変更しこのボディは彼が生前所有していたとある古城の地下深くに封印することとなった。

だが、そんなZZZの存在を嗅ぎつけた存在がいた。

その名はゾルク東条。

白いシルクハットにスーツ、そして黒いマントを羽織ったマジシャンを思わせる装いが象徴的な伝説の怪盗である彼は、しかし高齢のために泥棒家業を引退していたのだが、仮面ライダードライブがヒーローとして活躍していることを聞き付け、かつて英雄

になることを夢見ていた東条は彼に嫉妬。

独自の調査でドライブやロイミュードの事を調べ上げ、自身がドライブに代わる仮面ライダー。英雄になることを決意し、とうとう封印されていたサイバロイドZZZのボディを見つけ出し、自身の魂をインストールしてZZZを起動させようと試みる。

本来の歴史ならばこれで老いた体を捨て去りZZZに自らの人格をインストールした東条が、新たな仮面ライダーパンとなり、仮面ライダードライブと戦いを繰り広げることとなるのだが、

—— その時 不思議なことが起こった。

なんと東条の人格がZZZにインストールされるまではよかったが、なぜかインストールされた東条の人格がZZZから消去されていったのだ。

『な、なんだと!?!』

これに慌てたのは東条。それもそうだろう、目論見どおりに新しい肉体を手に入れたと思ったのに、その新しい体から自身の意志が消えていくのを実感しているのだ。焦り

もする。

彼はなんとか自分の意識の消去を止めようとあの手この手を尽くすが、しかしあらかじめその機能を十分に把握しているならばともかく、先ほど入手したばかりのそのボディの全貌を短時間で完全に把握するのは、流石にあらゆる知識・技術を会得した東条でも不可能。

『い……いやダ。死ニタクナイ。死ニタクナイ!!』

自身の意識が薄れつつあることを認識した東条は必死にそう叫ぶが、しかしそんな彼の叫びでは人格の消去を止めることはできず、とうとう彼の人格は完全に消去されてしまう。

『……ア……ア……ア……ア……』

人格を消去されてしまった東条、いやZZZは肉体を操っていたインストールされた人格がいなくなってしまったことにより、その場でくずれるように倒れ伏してしまう。

本当の歴史からは考えられない完全なイレギュラーな出来事。

しかし起こってしまったことは仕方なく、このままZZZは日の目を見ることなく終わることになる……はずだった。

『なんじやこりゃああああああ!!』

——これは、神様の願いで仮面ライダーの世界に転生というテンプレを果たし、敵役の能力を持った怪物に憑依というテンプレじゃない転生の仕方をしたとある男の奮闘記である。

☆ ☆

『……どうしてこうなってしまったんだろう』

俺、おりしゅらいだ織朱来駄は、今の自分の現状を省みて思わずそんな言葉を呟いてしまう。

俺は所謂仮面ライダーオタクというやつで、ある日新しく放映された仮面ライダーの映画を見た帰り道、トラツクに轢かれて死んでしまったのだが、その時俺は自らを『神様』と名乗る老人に出会った。

普通そんな存在に会ったら胡散臭く思うのだが、なぜか俺はその老人と出会った時、彼が本当の神様という存在だと確信していた。

だからこそその老人の言葉を俺はわりと素直に聞いていた。そしてその老人の話によればその老人が神として管理する一つの世界があるのだが、その世界にイレギュラーが介入したらその世界にどういう影響を起こすか実験がしたいらしく、そのためにちよ

うどよくトラックに轢かれて死んでしまった俺を見つけて、自分の所に呼び出してこの話を持ちかけたのだという。

俺はその神様の話を二つ返事で承諾した。なぜかって？だって、仕方ないだろう、転生する先が「仮面ライダードライブ」の世界だっていうんだから。

【仮面ライダードライブ】。毎週日曜朝8時に放送されている特撮ドラマのことで、幼い子供から大きな子供まで、日本中の多くの子供たちから絶大な支持を受けている。

もちろん自他ともに認める仮面ライダーオタクである俺もこの作品の大ファンで、この話を聞いた時には生で仮面ライダーの戦いを見れるとろくに神様の話も聞かないでこの世界に転生したわけなのだが……………。

『もつとちゃんと話聞いとけばよかった。まさか、あの『ZZZ』に憑依転生することになるとは』

俺が憑依したこの怪物ZZZ。正式名称はサイバロイドZZZといい、劇場版仮面ライダー「MOVIE大戦フルスロットル」でその存在が明らかになったそれは、元々は仮面ライダードライブを誕生させたクリム・スタインベルト博士が、自分の死期を察知したために自分の人格をインストールする「器」として造り上げた強化ロイミュードのボディだったのだが、これを動かすためには多大な精神力が必要でありクリム博士ではその精神力が足りず動かすことができなかつた。さらにはこれを使用した者は暴走の

危険があることを察した彼は、このボディを生前所有していた古城の奥底に封印した。

しかし、MOVIE大戦フルスロットルではその封印されたボディの存在をドライブの活躍に嫉妬した伝説の怪盗「デューク東条」が嗅ぎつけ、その封印を解いて自身の人格をZZZにインストールし、その後ルパンガンナーを製作し仮面ライダーパンとしてドライブたちと対決することになるのだが、この世界ではそのようなことにはならないだろう。なにせ、ZZZのボディは俺が使っているし、デューク東条は記憶と知識を残してその人格をこの世から消滅させてしまったのだから。

『まさか、東条がこいつに人格をインストールしてから憑依するとはねえ。こいつの人格が消えたのはそのためか、それともあの神様とやらがなにかしたか?』

なぜ俺がそれを知っているのかというと、俺が憑依してしばらくして、この体に俺以外の誰かの記憶が残っていることに気づいたからだ。

その記憶からこの体に東条の人格が元々インストールされていることを知った俺は、多少の罪悪感を感じたが、元々画面の向こうから見ていただけで特に知り合いというわけでもなく、また俺が望んでやったことでもないものでそれはできるだけ考えないようにした。

まあそんなわけで、最初は敵役の怪物に憑依して若干鬱になっていた俺であったが、しかしいつまでも落ち込んで入られない。それにせつかくの憧れの仮面ライダーの世

界。せっかくなのであるものの製作に取り掛かっていた。

『ふん、ふん、ふん♪』

鼻歌を歌いながら俺が製作しているのは、なんと仮面ライダーの変身に必要な変身ベルト。劇中で東条が仮面ライダーパンに変身するために必要なアイテムであるルパンガンナーを自分で製作していた。つまり彼の知識と記憶がある俺も、彼と同じように変身アイテムを製作することができるというわけだ。

これに気づいた俺は、心の底から歓喜した。仮面ライダーオタクにとつて仮面ライダーに本当に変身できるアイテムはまさに夢にまで見る垂涎間違いなしのアイテム。それをこの手にできるとあつては、いかに手間がかかったとしても、俺に作らないという選択肢は存在していなかった。

実は本来東条が使うこととなるルパンガンナーの設計図は既に頭の中に、というか東条の記憶の中にはあつたのだが、正直仮面ライダーパンの姿は俺の趣味ではなく、もう東条自身がこの世にいないということとで本来このボディが使うルパンガンナーを製作することはやめ、せっかくだから以前から仮面ライダードライブの世界に仮面ライダーの一人として登場するならある仮面ライダーがぴったりだと妄想していたので、その仮面ライダーを再現できる変身アイテムを作ることにした。

そして睡眠も食事もない体になったことをいいことに、変身アイテムの製作に時



間を費やして1週間。そのアイテムがとうとう完成した。

『——やった。これで俺も仮面ライダーとして活躍できる!!』

そういつて満面の笑みで俺が持ち上げたベルトは、まるでバイクのハンドルのような特徴的な形をしており、もし俺と同じ仮面ライダーオタクがこのベルトを見たら思わず「こういうだろう。」

—— “アクセルドライバー” と。

☆

☆

■ スリーゼット  
ZZZZ

この小説の主人公。転生者。

前世の名前は織朱来駄<sup>おりしゆらいだ</sup>。家族そろって生粋の仮面ライダーオタクで、彼の名前も仮面

ライダーからとられている、いわゆるDQネーム持ち。でも本人も仮面ライダーが好き

なためかそれなりに気に入っている。

仮面ライダーの最新作の映画を見に行った帰り道、神様の手により仮面ライダードライブの映画作品の一つの敵役である、サイバロイドZZZのボディに憑依転生する。

神様からは、自分の管理する世界にイレギュラーが介入したらどう変化するかの実験をするために仮面ライダーの世界に転生してほしいとだけ頼まれており、仮面ライダーオタクのために二つ返事で承諾したのだが、よく話を聞かずに承諾したために、転生先が仮面ライダードライブ劇場版「MOVIE大戦フルスロットル」の敵役として登場するサイバロイドZZZへの憑依転生だとは知らず転生する。

本来サイバロイドZZZに憑依する仮面ライダールパンとなるデューク東条が人格をインストールをした後、彼の人格だけ消して体に乗っ取るという形で憑依しているの、彼の経験、技術、知識などがそのまま彼の能力として引き継がれているために、ちよつとした疑似チート状態となっている。

その能力を使い、本来ならルパンガンナーを造り仮面ライダールパンとなるのだが、彼の趣味に合わなかったために、その代わり以前から仮面ライダードライブに登場してもおかしくないかと考えていたアクセルドライバーを造り上げる。

ちなみになぜアクセルドライバーなのかというと、作者自身が仮面ライダードライブに同じ乗り物をモチーフにしている仮面ライダーアクセルが登場してもおかしくない

と考えていたため。それに本来このアクセルに変身する照井さんも警察のそれも警視なのでなおさら登場してもおかしくないから、誰か変わりにそういう二次創作を書いてくれないかなーと作者は考えてたりする。作者は肝心のWを殆ど見たことがないから無理なのでw w

後、主人公の台詞の括弧が普通の人を使うような「ではなく『』になっているのは肉体がZZZZに変わっているために声質が変わっているため。別に某負け犬の人と同じようにマイナスとかじゃない（笑）

ハイスクールD×D～グラシャラボラスの“狂”兎～：  
ハイスクールD×D

君たちは“超常”の存在というものを見たことがあるだろうか。

それは文字通り「人の常識を超えた者」たち。

悪魔や天使に墮天使。妖怪にドラゴンに吸血鬼など、普通の人間にとつてはあくまで物語の中の存在でしかないが、実は彼らは現実中存在し、この世界の裏で生きている。

神話ごとに彼らはその勢力として別れ、さらにその勢力の中でも彼らは争いを繰り返していた。

そんな世界中にある勢力の中でも、最大規模の力を誇る神話勢力に「聖書の神話」勢力というものが存在する。

「天使」「悪魔」「墮天使」。彼らはお互いにお互いの存在を否定し拒絶し、そして敵対し争いを繰り返してきた。

そしてきっかけを知るものももう殆どいないが、とうとうある日この三大勢力の間で大きな戦争が起こり、その結果この三勢力はその数を急激に減らしていったが、しかしその本能にお互いを敵視する遺伝子でも組みこまれてもしているのか、彼らは戦いを辞

めようとせず、彼らは戦いを続けていった。

しかしそんな彼らの戦いを邪魔するものがいた。

### 【二天龍】

神をも遙かに凌ぐ力を持つといわれるその赤と白、二体の龍が彼ら三大勢力が争つていた戦場へと現れ、彼らを巻き込むほどの大喧嘩をし始めたのだ。

これには三大勢力もたまらなかつた。なにせ、相手は自分たちの最大勢力である神や魔王を遙かに凌ぐ力を持つ者たち。そんな彼らの喧嘩に巻き込まれてしまつては、自分たちなどひとたまりもない。

そう考えた彼らは、争いを止めてお互い協力しながら二天龍へと挑みかかる。そう、皮肉にもより強大な存在の出現が、彼らの争いをそこで止めたのだ。

そして彼らは、天使の指導者である聖書の神、そして悪魔の指導者である四大魔王の命を犠牲にして、見事二天龍を討伐、その魂を神が人間に与えた武器である神セイクリッド・ギア器へと封印することに成功した。

そしてその後、指導者が変わつたり方針を変えたりと様々な変化をしながら、彼らは戦争によつて減らしたその数を少しでも補うため、人間や他の種族たちをその配下に加えたり眷属にしたりと自分たちの戦力を増やすために時間を費やし、これといった争いもちよつとした小競り合い以外はなくなっていく。

そして三大勢力の争いは一気に小康状態に陥り、その後長い間薄氷を踏むような危うい状態ではあるが長い間比較的平和な状況が続くこととなる。

そしてその男は、そんな状況で悪魔の一人としてこの世界に誕生した。

その名は「シオン・グラシャラボラス」。

元七十二家の一つにして、現アスモデウスを輩出した名門中の名門の一つである「グラシャラボラス家」の次男として誕生したその才児は、幼いころからその才能を発揮し、勉強で優秀な成績を収めるのはもちろん、ある日から上級悪魔の出でありながら力を求めるために修行や戦闘に明け暮れることとなる。

そしてその狂っているのかと思うほど戦いと強さを求める姿に、彼はいつの間にかこう呼ばれ、自らが所属する勢力の面々からは畏怖を、そして敵対勢力からは恐怖されることになる。

そしてそんな彼には実はある一つの秘密があった。

それは実は彼が所謂前世の記憶を持つ『転生者』だということ。

ちなみに悪魔には、「悪魔の駒」というアイテムにより、他種族の生き物を悪魔に転生させるといふ手段があるのだが、この場合の転生者というのは違う意味で、仏教などではないわれる「生まれ変わり」を指す。

そして彼が狂児と呼ばれるほどに戦闘に明け暮れる理由は、その転生者という部分に

理由があつた。

実は彼は転生者のみに与えられる有利な点である原作知識。そこから自分の立ち位置を思い出し、そこから知つた自分の無残な末路を防ぐために力を求めたのだ。

……ここでもう一度彼のことを紹介させていただこう。

彼の名前はシオン・グラシヤラボラス。ライトノベルハイスクールD×Dの世界に転生した転生者。

ここまですえれば原作ファンの方々なら彼の立ち位置がどんなものなのか理解しただろう。

そう、彼は原作で最強の若手として登場する「サイラオーグ・バアル」。その彼の強さを示すための囁ませ犬的ポジションとして登場した原作キャラ、「ゼファードル・グラシヤラボラス」。チンピラ同然であり、「グラシヤラボラスの凶兇」として忌み嫌われていた彼が、次期当主候補として認められたきっかけである、事故死してしまつた前次期当主。

そう、彼はこの事故死してしまつた前次期当主が自分であることに気づいてしまつたのだ!!

だからこそ、彼は力を求める。薄れかけている原作知識から、事故死してしまつた次期当主が旧魔王派の手にかかつた可能性があることを示唆されていたために、旧魔王派

以上の力を手に入れればその死亡フラグを回避できると考えたからだ。

——この話は、本来の歴史では旧魔王派に謀殺されることとなる一人の悪魔に転生した男が、その死亡フラグを回避するために力を求め続けるちよつとした奮闘記である。

☆

☆

俺の名前はシオン・グラシャラボラス。悪魔の名門の一つである元七十二家の一つであるグラシャラボラス家の次男として生まれた同家の次期当主でもある。突然だがそんな俺の話を聞いてもらいたい。

前世の俺はド田舎にある貧乏な農家の次男として生まれ、本来なら実家の後を継ぐ長男の手伝いとして自分も農家を手伝わなくてはいけないはずだったが、このまま貧乏な生活を送り、さらに長男の顔を窺いながら生きるぐらいならと一念発起した俺は、今よりいい生活を送るためにと高校の頃に今まで貯めた貯金を使い上京。奨学金制度を活用しながら少しでもいい大学に行こうと勉強の日々を送っていた。

さすがに仕送りも殆ど無しで、生活費と学費をバイトで稼ぎながらの勉強の日々はきついものがあつたが、しかし少しでもいい大学に入って少しでもいい生活をしたかった俺は、そんな生活に必死で耐え抜いたのだが、しかし俺は肝心の大学受験に失敗してし



まったのだ。

これには俺も心が折れてしまい、これからどうしようかと考えながらの帰り道俺はトラックに轢かれて死んでしまったのだ。

薄れていく意識の中、「ああ、俺の人生ろくなことがなかったな」なんて思いながら俺はそのまま意識を失ったのだが、実はなんと次に意識を戻した時には赤ん坊の姿になっていたのだ!!

……うん、正直自分でもなにいつてんだとか未だに思う時あるんだけど、しようがないだろ本当のことなんだから。

まあそんなわけで赤ん坊の姿になった俺は初めはもちろんわけがわからず困惑していたのだが、時が経つにつれとある言葉が頭の中に思い浮かんだ。

それは「転生」という言葉。

高校時代に知り合ったオタクの入った友人が読んでいたジャンルのネット小説の一つに、俺と同じようにトラックに轢かれたり、通り魔に殺されたりもしくは神様のミスなんかで殺されたりと、様々な要因で殺された主人公たちがこれまた様々な要因により違う世界に生まれ変わり、その世界で活動するものというもので、俺は貧乏なのでパソコンなども買う金もなく携帯もできるだけお金がかからないようになるべく使わないようにしていたから結局読むことはなかったのだが、友人がよくその手の話を（強制的

に)してきたので覚えていた。

そして俺は理解したのだ。俺は友人がいつていたような「転生」をしてしまったのだと。

そして転生してからの俺は、赤ん坊として恥辱の、ある人種にとつてはまさに御褒美(笑)の日々を送っていたのだが、俺は自分の家がどんな家なのか知った時、かなり衝撃を受けた。なんと俺が生まれた家は人間ではない、悪魔の家だったのだ!!

一応いっておくが、別に虐待とか受けたり、両親が悪魔のような犯罪を受けたりして悪魔の家とかいつているわけじゃない。本当に種族的な意味で悪魔の家だったのだ。

一歳の時に、俺の子守りを担当してくれた侍女の話によれば、なんでもこの世界には悪魔や天使に墮天使。さらには吸血鬼や妖怪。それにドラゴンなんかもいるらしく、俺が生まれたグラシャラボラス家は悪魔の中でも名門である元七十二家の一つ。それも貴族だというのだ。

自分が悪魔だと聞いた時には、流石に元人間であるから少し複雑な気持ちになったのだが、しかし貴族に生まれたと聞いた時には、内心すごくはしゃいだのを覚えている。

だってそうだろう? 確かに悪魔という言葉にいい印象は思っていなかったが、同じ悪魔である父上に母上、それに侍女や執事たちは前世の俺が住んでいた世界にいた人たちと同じく見た目は人間で、俺にとってもよくしてくれたからは今はそれはもう気になつて

いない。むしろこれで日々の生活費に困る生活が終わる、これで俺も勝ち組だ。そう思ったのだ。

実際両親はとてもやさしいし、出されるご飯はともうまい。欲しい物はちゃんと理由があればくれるし、服も質感がよく清潔。侍女や執事たちは尽くしてくれるしまさに至れり尽くせり。貴族としての勉強なんかは結構きつかったが、でもしかし前世の生活に比べればまさに雲泥の差。俺はこの世界に俺のことを転生させてくれたであろう何者かに、感謝の念すら捧げた。——そう、あの時まで。

☆ ☆

それはグラシヤラボラス家にとつての慶事。俺の弟が生まれた時の話だ。

自分の弟が生まれると聞かされた時にすごく嬉しかったのを覚えている。なんせ前世では無駄にえばっている兄貴一人で、弟はおろか年下の親戚なんかもいなかったのだ。

だからこそ、今か今かと弟誕生を待ちわびて、実際に生まれた弟の姿を見た時にはとても感動したのだが、親がその弟につけた名前を聞いた時にその全てを思い出した。

そう、それは俺が生前唯一の楽しみとしていたライトノベル。

漫画を買うことも我慢していた俺には、図書館で無料で読めるライトノベルの類は唯

一の娯楽で、よくいろいろなものを読み漁ったものだ。

その中で一番のお気に入りだったライトノベルである「ハイスクールD×D」。俺が思い出したのはこの俺が転生した世界がこのライトノベルとそっくりで、親から聞いた弟の名前がそのライトノベルに出てきたとあるキャラと同じ名前だったのだ。

その名前とは「ゼファードル・グラシャラボラス」。ハイスクールD×Dの中で最強の若手悪魔であるサイラオーグ・バアル。その力を示すための囁ませ犬的ポジションとして登場するチンピラ風の悪魔として登場するのだが、それと同時にあることを思い出した俺は、思わず冷や汗を流し、誰にもばれないように悲鳴を思わず押し殺したのを覚えている。

その理由は原作でゼファードルが次期当主候補として選ばれた理由。彼は元々グラシャラボラス家の次期当主として選ばれた悪魔が事故で死んでしまったから選ばれたのだと原作にはあった。

そして現在このゼファードルが選ばれる前に次期当主候補とされているのは俺。つまりシオン・グラシャラボラスなのだ。ということはこの事故死する悪魔というのは俺のこととなる。

さらにこの悪魔の事故死には、原作でテロリストとして登場する旧魔王派が関わっていることを示唆されており、暗殺の可能性も指摘されている。

つまり、俺はこのままでは旧魔王に暗殺されてしまう可能性が大なのだ。

初めはただの気のせいだと思った。この世界がハイスクールD×Dの世界などとは限らないし、原作では確かに示唆はされていたが明言はされてないので問題はないだろう。

しかし日が経つに連れてどんどん俺の焦りは募っていき、またいろいろ情報を集めているうちに俺と同年代に原作のヒロインであるリアス・グレモリー、さらに舞台である駒王学園の会長であるソーナ・シトリーが存在していること。旧魔王派が実際に俺たち現魔王の血族を恨んでいることなどを知った俺は、やはりこの世界はハイスクールD×Dの世界だと確信し、このままでは俺は旧魔王派の手にかかり死んでしまうのだろうかという結論に達した。

その確信を得た俺は憤慨し、そして嘆いた。せっかく勝ち組として生まれ変わったのに俺はこのまま死んでしまうのか。いったいどうすればいんだと。

そんな時だ。俺が閃いたのは。

『あれ？じゃあ暗殺なんてされないほどに強くなればいんじゃない？』と。

———こんなアホな考えが、後に敵味方に恐れられる『グラシャラボラスの“狂児”誕生のきっかけになるうとは、この時はまだ誰も知らなかった。

☆ ☆

### ■ シオン・グラシャラボラス

この小説の主人公。転生者。

前世では貧乏な田舎の家庭で生まれたため、少しでもいい生活をするために上京し、奨学金制度を活用しながら日々勉強とバイトに明け暮れる苦学生として生活していたが、肝心の大学受験に失敗してしまい、そのせいで落ち込みながら帰宅している最中に原因でトラックに轢かれて死亡。悪魔の名門の一つであるグラシャラボラス家の次男として転生する。

転生後は、悪魔といえど貴族として生まれたことを知り、「勝ち組キタコレ！」とか内心はしゃいでいたのだが、その後弟のゼファードルが生まれたことにより、転生した世界が前世図書館で読んでいたライトノベルの「ハイスクールD×D」の世界と酷似していること、弟のゼファードルはそのライトノベルの中で、若手最強とされる「サイラオー

グ・バアル」の強さを示すための嘯ませ犬的ポジションとして登場していたこと。そしてその兄である自身は旧魔王派により暗殺されていた（表向きは事故死だが、原作ではそこに旧魔王派の関与があつたことが仄めかされていた）ことを思いだし、その死亡フラグを回避するために行動することを決意する。

しかし暗殺を回避するとはいえ、どう行動すればいいかわからず、「とりあえず戦闘能力を上げればよくね？」というまるつきりバカっぽいというか脳金的な結論に達して、修行をしたり、実戦経験を積むためにはぐれの討伐やレーディングゲームなどを積極的に行つていった結果、周囲からは戦闘狂と認知されていき、なんの因果か原作で弟であるゼファードルの呼び名と一文字違いである『グラシヤラボラスの「狂」児』と呼ばれるようになる。

見た目のイメージはマフィアの若きボスカインテリヤクザ。温和な態度だが目が明らかにカタギじゃないみたい（笑）

言動は前述したように温和な態度で、ところどころでその道の人みたい感じが滲み出ている。……しかし中身は結構な脳金ww力ばかり求めていたからね、仕方ないね。（謀略ごとともできないこともないが、それより力を頼る方が楽なので）

死亡フラグを防ぐため力を求めたのに、そのおかげで某白龍皇とか某孫悟空の子孫とか某最強の若手とか明らかに旧魔王より上の力を持っている戦闘狂たちから戦いを挑

まれることもあるし、そのわりに原作メンバー以外からは結構怖がられたりしたり、魔王様たちからはかなりこき使われている不幸ではあるがある意味自業自得な男（笑）



# 仮面ライダー ドライブ 特状課の支援者の1人は先輩ライダー!? : 仮面ライダー ドライブ

## 【風都】

2009年。街の至るところに様々な形状の風車が回る、通称「エコの街」。多くの住民に愛されているこの街であるが、かつては裏でこの街きつての富豪である園咲家が密かに設立した秘密結社「ミュージアム」による実験都市としての暗黒的な側面も持つており、組織やその方針に対して敵対の意を見せる者が抹殺されることも多く、ガイアメモリによる犯罪も増加傾向にあった。

しかしある時二人の仮面ライダーが現れ、このミュージアムを倒したことにより風都は平和を取り戻した。

これはその仮面ライダーの1人として活躍した、1人の男の新たな戦いの物語。

☆

☆

2014年。世間ではある存在について、多くの人々の話題に上がっていた。

そのある存在の名は“仮面ライダー ドライブ”。突如現れたロイミュードという機

械生命体から人々を密かに護ってきたその存在が、その正体ごと世間に暴露されてしまったのだ。

ドライブの正体は泊進ノ助。そして正体を暴露したのが特殊状況下事件捜査課、通称『特状課』の課長であり進ノ助の上司である本願寺純。

実はドライブの変身者である進ノ助には知らされていなかったが、実は彼はドライブの変身システムを作ったクリム・スタインベルト、通称“ベルトさん”の支援者であり、特状課も表向きは人事上の島流しにあつた人間が行き着く先として知られているのだが、本当はドライブが警察内部で活動しやすいように、彼がとある人物と共に協力して彼が設立したのだ。

進ノ助はそのことを知らず、そしてドライブの正体をなぜか本願寺にマスコミにリークされてしまったので（一応ロイミュードの目を警察に惹きつけるためだったり、進ノ助が人前で変身してしまつたからこの際という理由もあるが）かなり困惑していたが、しかしこれで大切な仲間たちである特状課の皆に隠し事をしなくていいと彼はとても喜んだ。しかし、彼は本願寺たちの説明を聞いて、一つひっかかるものを感じていた。

「（結局ベルトさんたちがいつていた『もう1人の支援者』って誰のことなんだ？）」

そう、実はベルトさんと本願寺課長がいうには、ベルトさんの支援者として協力してくれたのは本願寺課長だけではなくもう1人いるらしく、特状課の設立にも深く関わつ

ているらしい。

彼らがいには、警察でもかなりの地位にいる人物で、ロイミュードたちのような怪異事件の類に対してのプロフェッショナルでもあるのだとか。

かつて巨大な秘密結社を潰した実績もあることから一匹狼気質でありながら、警察内でも一目置かれていたのだとか。

そんな凄い人物ならば、自分たちをもっと手伝ってもらいたいと進ノ助は思ったが、しかしその優秀さゆえに彼はなかなか自分の仕事から離れることはできず、またいくら一匹狼気質といってもその地位の高さゆえによほどのことがなければ直接表に出てくることはないということだ。

それを聞いた進ノ助は、いったいどんな人物なのだと疑問に思ったが、しかしベルトさんも本願寺課長もなかなかそのもう一人の支援者のことを教えてくれないために、進ノ助は最近は何事になったらそのことを考えていた。

彼らがいには、その支援者が表に出てこないことに越したことはないからだということだが、

「(……まあ、ベルトさんの秘密主義は今に始まったことじゃないし、別にいいか。もし必要になればいつてくれるだろうし)」

まあ、最終的に進ノ助はベルトさんの秘密主義に慣れてしまったのにそんな結論に達

し、それ以上は気にしないことにしたのだが。

そんなある日のことだった。仮面ライダードライブの存在が世間に公表され、ロイミュード事件が世間一般に知られることとなったために実現した特状課と捜査一課の合同会議。捜査一課の課長である仁良光秀がその会議でアドバイザーとして招いたある人物の登場により、多くのロイミュードたちとこれまで戦ってきた進ノ助とその相棒である詩島霧子は驚きの声を上げる。

特殊化学分野研究所所属の「能見」として仁良に招かれて会議室に入ってきたのが、ロイミュードの幹部として自分たちと戦ってきた1人、ブレンだったのだから。

アドバイザーとして対ロイミュードの会議に潜り込んだブレン。そんな彼の姿になにを企んでいるのかと進ノ助は詰め寄って問いただが、もちろんブレンが馬鹿正直に答えるわけがない。

捜査一課の課長である仁良から度々嫌味や嫌がらせを受け、そしてロイミュードのボスであるハートから自身の父・英介の死にはなんらかの秘密があることを匂わされ、それがわからず最近イラついていた進ノ助は、その過程で英介の死には未だ姿を見せないNo.001が関わっているという挑発を受け激昂。ドライブに変身し、ブレンに力尽くで真相を聞きだそうとした。

しかし実はこれはブレンの罠で、アドバイザーではあるが一般人として他の人間に認

識されている自分に暴行を振るう姿を他の人間に見せ、警察組織として進ノ助に上からなんらかの処分を下させようとしたのだ。

目論見が上手くいこうとしていることを理解したブレンは、進ノ助にばれないように歪んだ笑みをその口元に浮かべる。

だが、ブレンの目論見はおもわぬ形で崩れ去ることとなる。

—— 『ある男』の登場によつて。

「——— そこまでにしてあげ」

「ツツ!」

突如聞こえてきた声に進ノ助とブレンは驚愕し咄嗟にそちらを向くと、そこにはいつの間にかブレンの行く先を遮るように1人の男が立っていた。

年齢は進ノ助より5、6歳ほど上だろうか？ 服装は赤いジーンズに、白いシャツの上にさらに赤いジャケツトを羽織るといふ若々しい服装をしており、またその容姿も進ノ助より歳が上だとわかるがその服装に相応しかったが、そんなことより2人が驚愕したのはいつの間にかこの男がそこにいたのか、2人がまったく察知できなかったからだ。

進ノ助はかつては特殊班のエリート、そして今では仮面ライダードライブとして数多くの修羅場を経験しており、またブレンも一般人のふりをして捜査会議に潜り込んで入

るが、超常の怪物であるロイミュードのしかも幹部。これほど近くにいて彼らが気づかないわけがない。

驚きの視線を向ける2人。しかし、そんな2人に構わず赤いジャケットのその男はブレンの方へと視線を向ける。

「あなたが、特殊化学分野研究所の能見さんでよろしいですか？」

「え、ええそうですけど。あなたは……？」

自分の表向きの身分を知っている様子の子のその男の言葉に、ブレンは警戒しながらも、少しでもその男の情報を得ようとそう尋ねると、その男は「そうですか、それはちやうどよかった」と、懐から進ノ助にとつて慣れ親しんだある物を取り出した。警察手帳だ。

その男はそのまま警察手帳を開くとその中身をブレンへと向ける。

「申し送れました。私この度対ロイミュード捜査の責任者になることとなった。照井竜”。階級は『警視長』。突然ですが、あなたには「戸籍偽造」の疑いがかかっています。

——ご同行いただけますね？」

——そしてその男、照井は不敵に微笑んだ。

☆ ☆

■ てるいりゅう  
照井竜

この小説の主人公。

かつて家族を皆殺しにしたWのメモリを持つ男を追って風都警察署にやってきた刑事。 風都の探偵である左翔太郎、フィリップの2人と共に、仮面ライダーアクセルとして当時風都の裏を支配していた秘密結社「ミュージアム」を倒して風都に平和を取り戻した立役者の1人でもある。

仮面ライダーWの物語が終わってからは、鳴海探偵事務所の亜樹子と結婚してからも、刑事として風都を護ってきたのだが、ある時既にベルトさんの支援者だった本願寺がベルトさんと共に接触してきた、仮面ライダーとしてミュージアムを倒した体験を駆られ、特状課の設立、そして対ロイミュード戦に対しての協力を求められる。

当時既に警視長の階級に昇進していた照井は、特状課の設立は了承したがその高い地位のため、そして風都にも度々ロイミュードが現れるために、昔のようにすぐに動ける

状態ではなくなってしまうために、すぐに進ノ助たちに協力はできなかったが、しかしそれも超常犯罪捜査課の課長。つまり自分の後進を決め、密かに翔太郎に依頼して彼を中心とした対ロイミュード迎撃用の捜査網を完成させると、いろいろ対策して対ロイミュード捜査の責任者として表舞台に再び姿を現すことに。

ちなみに最後戸籍偽造でブレンに対して逮捕状を出したのは、本願寺からの情報で執拗に特状課を妨害する仁良を不振に重い、彼をマークしていたら彼に能見として接触するブレン（その男の特徴もクリムから情報を得た本願寺から聞いていた）の姿を見て、核心は持てなかったがいろいろ調べていた結果、戸籍が偽造されている跡が発見され、その罪でしよつ引こうと考えた……という設定です。

ただ正直確かロイミュードって人間体にはモデルがいて、そのモデルとなった人間は処分している様子だったので（たとえば究ちゃんに化けようとしたロイミュードが最初は究ちゃんを殺そうとしていたし。まああのロイミュードは結局究ちゃんと仲良くなっていたが）ブレンの場合も能見という人物が元々存在していて彼に成り代わって生活しているのかなと思ひ戸籍偽造の罪でどうのは無理かなーと思ひ、そもそも正直仮面ライダーWって途中で見るのやめてしまつて照井さんのキャラもよく思ひ出せず、この短編での照井の会話もなんとなくやってるので連載はしません（断言）



## ハイスクールD×Dと吸血鬼の王と最強のメイド

かつて吸血鬼が男性の神祖を尊ぶ「ツエペシユ派」と女性の神祖を尊ぶ「カーミラ派」の二つの派閥に分かれる前の話。吸血鬼はその神祖を自分たちの王として戴いていた。

その王は、この世に生を受けたその時から強大な力を誇り、王へと即位する頃には所謂「超越者」と呼ばれる者たちすら凌駕する力を誇るようになる。

その王は、吸血鬼たちから『最も偉大な王』と称され、彼らはこの王の元なら自分たちをもっと繁栄できると幸福に思い、この王の下で生きていける自分たちはまさに選ばれた者たちだと誇りに思った。

しかしそんな王はある日自らの後継ぎを正式に発表すると、そのまま王の立場を降り、どこへいったのかその姿をいつの間にか誰にもいわずに消してしまふことに。

吸血鬼たちはその王の姿を必死に探しまわったが、しかし結局その姿を探すことができず、彼らは王の探索を諦めて彼が残した新たな王を戴くことに。

ある日突如失踪したその王の名は、その姿を消した後でも伝説の王として吸血鬼たちに尊敬と誇りの念を込めてこう語り続けることとなる。

——『赤バラ王』“ローズレット・ストラウス”と。

☆ ☆

ローズレット・ストラウス。これはこの世界での俺の名前。

俺はかつて吸血鬼の王家ローズレット家に生まれ、神祖として成人を過ぎてからは吸血鬼の王として100年以上その立場にいたのだが、そんな俺には実は一つの秘密があった。

それは俺には所謂前世の記憶というものがあるということ。そう、俺は俗にいう「転生者」という存在なのだ。

前世の俺は所謂就職難民というやつなのだが、二百社以上の会社を回った末になんとか内定を貰い、安心のままベッドに体を沈ませて惰眠をむさぼっていたのだが、その時俺は不思議な夢を見たんだ。

それは辺り一面真っ暗な空間で、自らを「神様」と名乗る無駄に威厳のあるくせにどこかファンキーな老人から、「転生」というものをしてみないかという話を持ちかけられるというもの。

なんでもその神様と名乗る老人がいうには、彼は新しく一つの世界を創造することになったらしいのだが、その世界に本来存在しないはずの実験として強大な力、もしくは

特殊な力を持つ者を送れば、その世界にどういふ影響を与えるかということを実験したらしく、俺に好きな力を上げるから、その世界に転生してほしいということらしい。

にわかには信じがたいその話。だが俺はその話に頷いた。……いや、別に大した理由はないんだけどね。普通にただの夢だと思つてめんどくさいからさっさと終わらそうと頷いただけだし。

そして俺は神様が欲しい力をくれるというので、とりあえず適当にこういった。『最強のイケメン』にしてくれと。

……うん、まあ我ながら欲望丸出しだと思うが、この時はただの夢だと思つていたし、早く話を終わらせたかったのでこんな適当な事をいったのだが、まさか本当に転生ということが起きるとは思わなかった。目が覚めたと思つたらなぜか赤ん坊の姿になつていたと気づいた時には、心底驚いたものだ。

それで吸血鬼の王家、ローズレッド家に生まれた俺は、王家の人間らしく次代の王に相応しい厳しい教育を受けたのだが、この肉体は最強なだけあり無駄にスペックが高かつたために、前世ならすぐに根を上げてしまうような厳しい教育を受けてもすぐに物にして、王位を継ぎ王の立場につくと吸血鬼の民や貴族たちは、私のことを偉大な王だなんだと褒め称えてくれて、美人な嫁さんも貰い、順風満帆な生活を送っていた。

最初は戸惑つていた俺であつたが、いろいろ苦労した結果多くの民が慕つてきてくれ

て満更でもない生活を送っていたのだが、しかしそれも1000年を超えるとさすがに飽きてきて、ある日妻が病気でその命を落としてしまったことをきっかけとして、次の王を指名した後に吸血鬼の国を出奔し、世界を巡る旅をすることにした。

王としていろいろな勢力との会合で他の国に赴いたことはあるが、ゆつくりと観光を楽しんだことはなかったのも、世界を巡る旅は見る物見る物とても新鮮で、思いの他楽しかった。

ある時は北欧で主神のスケベジジイと一緒に色街を回ったり、ある時は日本の妖怪たちに案内されて京都のグルメを巡ったり、ある時は土佐弁の侍の命を救ったり、ある時は寺生まれのTさんと共に悪霊退治に出かけたり、ある時は骸骨ジジイから思わぬ愚痴を聞いたり、ある時は封印されていると聞いていたはずの邪竜とタイマンはったり、なぜか天の御使いとかいううさんくさい存在と間違われかけたりと、いろいろなことがあったのだが、そんなある日俺は聖書の神話勢力、俗にいう三大勢力と呼ばれる天界、悪魔、墮天使の三勢力が大規模な戦争を行っていると聞き、その様子をこっそりと見るためにその戦場へとやって来ていた。

一応いつておくが、ただの野次馬根性ではない。(絶対にはいえないが)三大勢力は世界中に存在する神話勢力の中でもかなり強大な力を持つ勢力。この戦争の勝者によつては、かつての王として故郷に戻り同胞たちに忠告をしなくてはならない。

そう考えて戦場へと降り立った俺が見た物は、

『——ギョオオオオオオオオオオオ!!』

——凄まじい雄叫びを上げて三大勢力を蹂躪する二体の巨大なドラゴンの姿だった。

「……………いや、なんでさ?」

☆

☆

私の名前はグレイフィア・ルキフグス。代々魔王ルシファー様に仕える名誉ある家柄であるルキフグス家の人間であり、その長女である私も、ルシファー様に使えるという栄誉を得ていた。

ルシファー様は個人主義が多い悪魔の王でありながらとてもおもいやりのあるまさ

しく王に相応しい方で、私がまだ幼い子供だったころからよく目をかけてくれており、だからこそそんな彼に仕えることを誇りに思っていた。

そしてルキフグス家の当主を継いだ私は、ルシファー様の傍らにいつもいるようになり、天界に墮天使との間で起きた戦争でも私は常にルシファー様の傍で戦っていた。

戦争も佳境に入り、三大勢力にそれぞれに無視できない被害が出始めたころだった。その『乱入者』たちが現れたのは。

【二天龍】

神をも遙かに凌駕すると謳われる力を持つ2体のドラゴンの中で、この2体のドラゴンたちは突如戦場に現れ、私たち三大勢力の面々を盛大に巻き込みながら、戦いを始めたのだ。

さすがにこの状況で戦争を続けることは不可能と考えた私たち三大勢力は、一時的に協力体制をとり二天龍に立ち向かったのだが、しかしそれでも神をも上回る力は伊達ではなく、三大勢力の数はどんどん減らされていく。

そして……。

『——陛下!?!』

私が敬愛するルシファー様も、二天龍の手により私の目の前でその命を落としてしまった。

目の前で心のそこから尊敬する主の命の灯火が消える姿を見た私はその場で思わず座り込んでしまう。

「あ……あ……あ……」

私の心に絶望と虚無感が襲う。それほど陛下の存在は私にとって心の支えともいべき存在だったのだ。

——だからだろうか。それに反応するのが遅れてしまったのは。

「危ない!!」

「!?!」

そんな誰かの警告の声と共に強大な魔力の収束を感知した私は、咄嗟にそちらに視線を向けると、そこには口元から強大な魔力の波動を放とうとしている二天龍の片割れである『赤龍帝』ドライグの姿がそこにあつた。

「しまッ!?!」

私は急いでそこから離れようとしたのだが、しかしそれも間に合わずドライグの口元から、破壊の光が私に向かって放たれる。

最上級悪魔すらダース単位で消滅させることができるその攻撃が迫ってくるその光景に、しかし私はなぜか自分でもわからないが慌てる様子を見せず、どこか諦めの感情のままそれを呆然と眺めていた。

「ああ、これで私もおしまいかな。……でも主がいらない私に生きている価値などないし、このままいなくなるのが一番いいのかもね。——主を護れない不忠者でもうしわけありません、ルシファー様。私もすぐにそちらにまいります」

そしてグレイフィアは赤龍帝のその一撃により、この世からその姿を消滅させる………はずだった。

そう、

——その男がその戦場にいなければの話だが。

「……………え？」

グレイフィアは思わず呆けたような声を上げる。なぜならいつの間にか彼女の前に一人の青年が現れたのだから。

「(きれい……………)」



グレイフィアは絶体絶命の危機にも関わらず、絶世の美貌を持つその青年の姿に思わず見惚れてしまうが、次にその青年が行ったそのあまりに常識外なその行動に、思わず驚愕の声を上げてしまう。

「————はああああ!!」

「なあッ!?!」

なんとその青年は、その腰に差してあつた造りのいい剣を抜刀したかと思うと、ドライグの放つた魔力の波導を一閃。真正面から真つ二つに斬り裂いた。

「なんだと!?!」

そのあまりの光景に、魔力を放つたドライグも驚きの顔を見せる。

なにせ先ほどドライグが放つた攻撃には、全力ではないとはいえまともに当たれば魔王級の実力者であろうと重傷を負わせることができるほどの威力がある。

それを真正面から斬り裂くなど、並みの存在ができることではなかった。

この戦場で初めてまともに警戒の念を持ってその青年を睨みつけるが、その青年は神をも上回る力を持つドラゴンに睨みつけられているとは思えないほどあつけらかなとした表情を見せると、グレイフィアの方にその視線を向ける。

「やあ、大丈夫かいあんだ?」

「え、あ、は、はい!大丈夫です!!」

あまりにも常識外の状況に、グレイフィアは普段から真面目で同僚からも隙がないと評判の彼女にしては珍しく口をあんぐりと開けて呆然としていたのだが、青年のその言葉に我に返ったのかグレイフィアは慌ててそう返す。

そんな彼女の様子がどこかおかしく感じたのか、青年はくすりと小さく笑みを浮かべる。

普段のグレイフィアならそんな態度をとられれば、不快に思いむつとその相手にジト目を送るのだが、しかしなぜかその青年の笑みからは、その気安い態度とは裏腹にどこか気品のようなものを感じ、不思議と不快な感じはしなかった。

そんな彼女の内心を知ってか知らずか、その青年はそのまま言葉を続ける。

「そりゃあ、よかった。あんたみたいな美人さんが死んだら世界の損失だからな」  
「な……………ッ!？」

カラカラと笑いながらの青年のその言葉に、グレイフィアは思わず顔を赤くして言葉に詰まる。

仕事一筋で恋愛など見向きもしなかった彼女は、その実力の高さと仕事に対するストイックさから欲深い貴族から体目当てで口説かれたことは多々あったが、ここまでストレートに邪気もなくいわれたことは初めてであったために、耐性がなかったのだ。

そして青年はそんな彼女の様子に笑みを深めながらも、先ほどからこちらを警戒して

いるドライブグ。そして先ほどから暴れている『白龍皇』アルビオン、二体の竜へとその視線を再び向ける。

「さて、それじゃあ——行きますか」

そしてその青年は、凄まじい勢いで二天竜へと駆けて行った。

——これが、最強の吸血鬼である赤バラことローズレット・ストラウスと、最強のメイド、そしてストラウスの二人目の伴侶となるグレイフィア・ルキフグスの初めての出会いだった。

☆

☆

■ローズレット・ストラウス

この小説の主人公。転生者。

就職難民というやつで、何が悪いのか毎日あちこちの会社に面接に行っては落ちると

いうこと繰り返し、やっと内定がとれて惰眠を食っている仲、夢の中で自分が神様だと名乗る存在に、違う世界に転生しないかという話を持ちかけられる。

それを所詮夢の中の話だと考えた彼は、その神様を適当にあしらうために適当に「最強のイケメンになりたい」といったら、その神様の独断と偏見で、「ヴァンパイア十字界」の主人公の一人である「ローズレッド・ストラウス」の容姿と能力《スペック》を持って、ハイスクールD×Dの世界に転生を果たす。（ちなみに主人公は神様の独断と偏見でストラウスの能力を貰ったということは知らず、ただ最強のイケメンと頼んだから凄くスペックの高い肉体を貰ったという認識）

吸血鬼の派閥が二つに別れる前の王家に生まれた彼は、その転生特典であるストラウスの力とカリスマを生かして赤バラ王と呼ばれ称賛されることとなり、彼自身もそんな自分の立場にはじめは酔いしれ満更でもなかったがやがて飽き、次の王を決めた後に出奔。世界を旅することに。

いろんなところに行き様々な物を食べ、様々な名所を観光し、様々な者たちと戦い、そして様々な者を救ってきたそんなある日、三大勢力の戦があるという噂を聞き、その戦場に見学に行ったところ二天龍が暴れている場面に遭遇し、グレイフィアが殺されかけたところを見て、咄嗟に彼女を助け二天龍と戦うことに。もし連載するならそこらへんの描写も詳しく書く予定。（あくまで連載するならの話）

強さとしてはストラウスのスペックを持つているだけあり、所謂サーゼクスたちのような超越者たち、さらには二天龍すら超えた力を持つ。世界で三番目に強い存在。（正し現在の原作時点での話。作者の都合で変わるかも）

### ■グレイファイア・ルキフグス

この小説のヒロイン。

魔王ルシファアの家に代々仕えている番外悪魔の名門であるルキフグス家の長女。魔王ルシファアに心の底から心酔しており、それはもしルシファアが生きていればサーゼクスに靡くことは殆どないといえるほどだが、それだけに目の前で魔王ルシファアが二天龍に殺されてしまったために呆然自失としてしまい、その間に魔王ルシファアと同じく二天龍の片割れであるドライグに殺されそうになったところを主人公に助けられる。

そこで主人公のその圧倒的な力、溢れ出るカリスマ（笑）を見た彼女は、彼に命を助けられたこともあり彼にどんどん惹かれていき、彼に仕えて最終的に彼の二人目の（一人目は既に病死している）伴侶となる。……のだが、作者の力量的にその辺の描写が不可能なのもし連載することとなる時はたぶん飛ばす（笑）。

この話の中でちよつとちよろい感じがするが、心の支えであるルシファアが死に、

サーゼクスとまだ親密な関係ではない。さらにはまだ若く恋愛経験もないためにこうなった。最新刊のイラストのグレイフィアの姿がかなりドストライクだったために無理やりにでもヒロインにしたくこう書いた。……後悔はしていない（きり）！

劇場版真剣で私に恋しなさい！嘘CM：真剣で私に恋しなさい！×HDS S微クロス

〔武士道プラン〕。

日本三大財閥の一つである九鬼家に仕える従者。その序列2位であるマーブルが「過去の偉人」に学ぶというコンセプトの元提唱したプラン。

本来今の若者たちの現状を憂いたマーブルが、彼らを導かせようと過去の英雄たちを復活させ導かせようと発案した計画であったが、この計画によって生み出された四人の英雄のクローンたちのその優秀さにより、この計画はひとまず成功を収めたかに見えた。

しかし、何事にも表があれば裏があり光があれば闇が存在する。

——これは武士道プランによって生み出された『闇』が引き起こす禍の物語。

☆ ☆

川神市内にある九鬼家本部。その事件の詳細が、九鬼家当主である九鬼帝くきみかどに報告されたのは、ある日の朝のことだった

「なに!? クラウディオが襲われただと。それは本当か?」

「ハッ! 今日未明。何者かに襲われ意識不明の重体を負って、今は葵病院にて治療を受けております。やつのことです。数日中に目覚めると思いますが」

自身の腹心である九鬼家従者序列0位であるヒュームからのその報告に帝は驚きで思わず一瞬目を瞠るが、しかしやはりそこは世界に名だたる大財閥である九鬼家のトップ。とりあえずクラウディオが生きているということを知ると、その態度を一瞬で冷静なものへと戻した。

本来なら一瞬その態度を取り乱すことも珍しいのだが、しかしそれは仕方ない。九鬼家序列3位であるクラウディオ・ネウロ。執事学校を主席で卒業し、執事王、パーフェクト執事とも呼ばれる彼はヒュームと共に彼の腹心として長い間帝に仕えており、その戦闘の腕前は壁超え前でありながら下手な壁超え相手ならば瞬殺すら可能なほどの技巧派。そんな彼がどこの馬の骨ともわからぬ輩にやられたなどと、彼はすぐに信じるこ  
とができなかったのだ。

帝は一度浮かしかけた腰を、再びその質のいい椅子に深く座りなおすと、そのまま再び口を開く。



「……そうか。まさか、クラウディオがそのような手傷を負うとは——相手はいったい？」

「わかりません。ただ現場にはこの手紙が落ちていました」

「なに？」

ヒュームのその言葉に、帝は訝しげな表情を見せるとヒュームから差し出された検閲済みの手紙に目を通すが、そこに書かれていた内容に、彼は再び、いや今度はクラウディオが倒されたという報告を聞いた以上の驚愕で目を瞠ることとなった。

「これは……ッ!？」

思わず漏れた帝のその言葉に、傍でその様子を見ていたヒュームが、いつものどこか傲慢な様子はどこへやら、深刻そうに頷いた。

「はい。そこには九鬼が把握していなかった武士道プランの不祥事が記されています」  
そう、そこに書かれていたのは九鬼に名目上所属している職員たちが、武士道プランで生み出された方がいいが正式に公表しなかったクローンたちが、闇から闇へと売られたり、口に出すのも憚られるほどの非人道的な扱いを受けていることの証拠の数々だった。

手紙の中身を見た帝は、普段の豪放磊落な態度もどこへやら、長年彼に仕えていたヒュームすら数えるほどしか見たことがないほどの凄まじい激昂を見せる。

「なんてことだ!これが本当のことならまさかこのようなことを見逃してしまうとは、一生の不覚!!」

「……お怒りごもつともですが、実は現場にはこのようなカードも置いてあります」

そういつて彼が掲げたのは、灰色のどこにでもあるようなメツセージカード。帝は先ほどの手紙のようにヒュームからそのカードを受け取り内容を確認すると、その眉間に再び皺を寄せた。

「……宣戦布告だど?」

「はい。それから察するに、どうやらクラウディオを襲った犯人はこの内容を知り、九鬼に喧嘩を売ることになったようです」

「そこにはこう書かれておりました。『自らの部下も御せない無能なる王に告ぐ。それほど英雄たちの力が知りたくば、その身を持つて受けてみるがよい。天に代わって我らが貴様に罰をくれてやる。そう、我ら』

——  
【禍の団】が」と

——ある日川神市を襲撃する闇より生み出された英雄たち。

「貴様、何者じゃ？」

「これはこれは申し送れました。我が名は“曹操”。武士道プランによって生み出されたでござらないの英雄もどきたちの首領をしております」

「禍の団？それがクラウディオを襲ったやつらの名か」

「はい、英雄様。武士道プランによって生み出された闇。それが彼らです」

「なぜこんなことに……ッ!!」

「揚羽様……」

———激突する英雄。彼らを生み出してしまった九鬼の面々も彼らを止めようと動き始める。

「やめるんだ!英雄として生み出された義経たちがこんなことしちやいけない!」  
 「私とあんたたちを一緒にするな!あの地獄を見てないあんたが!!」

「主のためだから、本気で相手させてもらおうよ」

「ははは、おもしれえ。止めれるなら止めて見やがれ!!」  
デトネイション・マイティ・コメット  
 『超人による悪意の波動』!!」

「私が貴様らを止めてみせる!!」

「あなたのような甘ちゃんでは無理ですよ。それにこのグラム魔帝剣の刃を止めることは不可能です」

———敵のあまりに強大な力次々と倒れていく強者たち。絶体絶命の状況に追い込まれてしまう。

「…ば…かな…この…俺…が…?」

「はあ…はあ…はあ…。さすがは最強と名高いヘルシング卿。かなり強かったが、俺の敵ではなかったな」

「師範代!」

「が…は…ッ!」

「おいおい、川神流の師範代にしては軟弱だな」

「へ…へ…。ロックじゃないぜ…お前…」

「知ったことじゃないわ、そんなこと」

——川神市の危機に、我らが川神ファミリーが立ち上がる。

「僕には僕のできることはあるはず…」

「俺の筋肉でぶっ飛ばしてやる!!」

「義の名の下にお前たちを倒す!!」

「ここからは私が相手します」

「仲間に手を出した相手を私は許さない!!」

「私は必ず勝つ!」

「ここでヒーロー登場ってな!」

「考えろ、考えるんだ大和<sup>おれ</sup>……」

「お前たちか?ジジイたちに手を出したのは……ッ!!」

——そして「武神」と「霸王」。二人の最強の対決が始まった。

「——川神流奥義。『かわかみ派』あああああああああ!!」

「——見よ!これこそ我が最強の『トゥルース・イデア覇輝』だ!!」

誰もが眼を背けたるけたくなる闇の中、見捨てられた英雄たちは愉しげに、そして壊れたように嗤い続ける

——そして災厄《パンドラ》の箱は開かれた。

「——さあ、楽しい楽しい戦争を始めようか」

劇場版「真剣で私に恋しなさい」武士娘とできそこないの英雄たち」各劇場で絶賛放映中!! (嘘です)

☆ ☆

■ 曹操そうそう

この劇場版の主人公。武士道プランにより生みだされたクローンの1体であり、禍の団の首領。

不完全なクローンとして、九鬼家に所属していた研究者たちに非人道的な扱いを受けていたが仲間たちを先導して反乱。そのまま、九鬼家に対する反抗分子の協力を取り付けてテロリスト集団「禍カオス・ブリゲードの団」を創設した。

その力は壁超えの達人の中でもトップクラスであり、単純な技術ならば百代を凌駕するほどで、得意技は鉄心が使う顕現と同系統の技術を使って具現化した槍「黄昏の聖槍」を使った槍術。そして必殺技は自らの潜在能力の全てを一時的に全て引き出す

「トゥルース・イデア覇輝」。



モデルはもちろん「ハイスクールD×D」の曹操。

■ カオス・ブリゲード  
禍の団

曹操が創設したテロリスト集団。その構成員は主に武道プランにより生みだされた不完全なクローン、九鬼が発展することによって破滅した人物たちの身内など、主に九鬼に恨みを持つ人物たちによって構成されており、その支援も九鬼家の敵対勢力が行っている。

その組織としての目的は「九鬼家をはじめとした世界への復讐」。寿命が短い不完全クローンたちがその力を世間に知らしめるために作られた。

こちらのモデルももちろんハイスクールD×Dで出てくる禍の団。正し出てくるのは英雄派のメンバーのみ。出てくるメンバーは神器の能力を気を使った必殺技として使う。……まあ、連載する気はないんですがwwちよっと技量不足で。

## 恋姫無双異伝～偽物の大徳～：恋姫無双

【赤壁の戦い】。

それは中国後漢末期の208年、長江の赤壁において起こった曹操軍と孫権・劉備連合軍の間の戦いである。

三国志好きのみならずとも一度は聞いたことがあるであろうほど後に有名になるその戦場の一角に、その男はいた。

「……ようやくここまでできたか」

眼下に広がる「魏」と大きく書かれた旗を掲げる大軍のその姿に、これからその大軍と戦う一軍の指導者の一人であるはずの彼は、しかしその圧倒的な数の多さに緊張する様子は見せずに、むしろどこかホツとしたような笑みを浮かべながらどこか感慨深げにそう呟いた。

男は少しの間そのまま大軍に目を向けていたが、ふと何を思ったのかその顔を気紛れに上げる。そこにはかつての彼の元々いた世界では絶対に見られないような満点の星空が広がっていた。

そんな星空を見ながら、彼は内心こんなことを思っていた

「（思えば、俺も遠いところまで来たもんだ。——まさか、1800年まえの中国。それも『恋姫無双の世界』に来るなんてな）」

……ここで彼の紹介をしておこう。

彼の名前は『劉備玄德』。本来桃色の髪を持つ少女の名を称する蜀の王。

そして所謂

——「転生者」という存在である

☆

涿郡涿県。現在でいうところの河北省保定市涿州のとある場所にあるとある村にその男は生まれた。

母を幼くして病で亡くし、州郡の官吏に勤めている父と二人で生活をしていた彼は父の方針で幼いころから私塾で勉学を学んでいたのだが、そこで彼は優秀な成績を収め、そのためかその村で彼は神童としてその名が知られていたのだが、そんな彼にはとある秘密があった。

それは彼に所謂「前世の記憶」というものがあるということ。

彼の前世は、彼が今いる世界より1800年もの未来、彼はそこでどこにでもいるよ  
うな、ごく普通の大学生として日々の生活を送っていた。

平穩であるが、代わり映えしない毎日に彼は退屈していたのだが、そんなある日彼は

突如なんの前触れもなくトラックに体を轢かれてしまい、その命を落とすこととなる。

わけもわからず意識を失った彼は、なぜか1800年前の中国、ちょうど有名な「三国志」が始まる直前の時代にこうして転生しているというわけなのである。

普通なら困惑し、そして現代で慣れてしまった便利な生活を送れないこと、親しい人たちともう会えないことで嘆き悲しむのかもしれないが、彼はそのようなことはなく、むしろこれ幸いと喜んだ。

それは彼が前世では大学生は大学生でも軽くオタクを拗らせた大学生であり、重度の二次小説中毒であつたため、日々に退屈していただいてもあり、まるで二次小説の主人公のような展開に彼は心が躍つた。それは時が経ち、現在漢の要職に就いている人たちの何人かが、本来この時代その職に就けないはずの女性<sup>レ</sup>が就いてあることを知った時、その思いはさらに高まつた。彼はその情報から、彼が生前好きだつたゲーム「恋姫無双」の世界であることを確信したからだ。

### 【恋姫無双】

それは簡単にいえば三国志の時代にタイムスリップした主人公が、なぜか美少女にTSした三国志の登場人物と共に乱世を生き抜くというもので、戦闘あり友情あり謀略ありそして恋愛ありと、元々は18禁ゲームではあつたが、通常版も発売しており、その美麗なイラストと、三国志ファンが思わずにやりとしてしまう三国志の有名な出来事を

きつちり織り込まれたストーリー。そして魅力的なヒロインたちに、このソフトは多くのコアなファンを掴み、アニメ化やカード化までされるほどの人気を博すことに。

もちろん彼の好きな二次小説でもこれを題材にした作品が多くあり、だからこそ彼はこの恋姫無双の世界に転生したことを知った彼は歓喜した。自分が物語の主役になるような才能を持っているとは思えない。しかし、今から勉強や特訓をして身体能力を上げたりすれば、魏か蜀が呉。その三勢力のどれかの重要な地位につけるかもしれないし、もしかしたらヒロインの誰かと結ばれることができるかもしれない。

だからこそ、彼は必死に勉強に励み体を鍛え始めた。前世で読んだ漫画を参考に体術のような動きの練習もしてみたが、それは才能というか鍛え方が我流だったためかそれほど効果はなかったというより、効果を確かめることはできなかった。ただ、勉強の方は生前それなりに有名な大学に入っていた彼は効率的な勉強法を身につけており、そのため父に通わされた私塾ではトップの成績を誇り、周りの人間からは神童と呼ばれるようになる。

まさに順調に第二の人生を歩んでいた彼だったのだが、実はそんな彼にも当時悩みと  
いうものが存在した。それは彼の幼馴染にあつた。

『まっつてよー、○○くーん!!』

いつもそんなことをいいながら彼の後をカルガモのようについてまわっているその

少女の名は劉備玄德。そう、現在彼が使っていた名前の元々の持ち主であり、彼が転生した恋姫世界のメインヒロイン的存在の一人である、未来の蜀王。実は彼は彼女の幼馴染として生まれたのだ。

正直彼は彼女が嫌いだった。

見た目は確かに美少女なのだが、元々生前の彼はアンチ蜀というやつで生前ゲームやアニメで見た彼女が話す言葉言葉がただの綺麗事にしか思えず、趣味で読んでいた二次創作で、よくアンチ蜀物を読んでいたこともあり、その先入観からか、彼は彼女を毛嫌いし、いつも適当にあしらっていたのだが、しかし何がおもしろいのかいくら追い払っても彼女は彼に懐き、彼の名前をちよろちよろと付きまとうようになり、彼も未だに彼女への嫌悪感はぬぐい切れなかったが、しかしさすがにしつこく懐かれては、世間的な目もあるから村の人気者である彼女をそう邪険にすることができず、結局彼は劉備となあなあな付き合いを続けていた。

そんなある日のことだった。村に盗賊が襲撃してきたのは。

その日、彼は劉備にどうしても手伝ってほしいといわれ、森で薪集めをしていた帰り道、村のあちこちから煙が上がっているのを見た彼は、劉備にそのままそこにいるように言い含めると村へと急いで駆けつけた。するとそこには村を襲撃している盗賊たちの姿があり、その姿を見て怒った彼は手近にいた盗賊の武器を奪うと、そのまま盗賊た

ちを殲滅するために戦い始める。

彼はまだ年若く、体ができはじめたばかりであったのでさすがに達人級とまではいかなかったが、それでも幼いころからの訓練のおかげか村人の中で今は一番の腕っ節へと成長した彼には、殺人に慣れていたとしても弱者を蹂躪することにしか慣れてない賊程度では敵うわけもなく、彼がなるべく不意打ちになるように事を運んでいただけあつて、盗賊たちは一人ずつ確実に数を減らしていったのだが、そんな時だった。彼が血塗れで倒れている自身の父親の姿を発見したのは。

『——父上!!』

彼は急いで地面へ倒れ伏している父親の元に駆け寄った。

しかし父親の瞳には既に光がなく、もう息を引き取っているのがわかる。片手に短剣のようなものを握っているところから察するに、賊に抵抗はしたが、そのかい虚しく殺されてしまったのだろう。

前世も含めて身内の死を目撃した彼は、何が起こったのか頭が理解せず、そのまま硬直する。——それがいけなかった。

『このクソがきやあああああ!!』

『なっ!ぐふっ!!』

先ほど仕留めたはずの賊の一人が突如起き上がり、頭から血を垂れ流しながら彼を蹴

り飛ばしたのだ。

父親のあんまりな姿に呆然としていた彼はそのことに気づくのが遅れ、そのままその男の蹴りに無様に転がっていく。

二転三転して彼は吹き飛ばされるが、彼を消し飛ばした男は先ほどのされかかった恨みか、そのまま勢いよく彼へと向けて手に持っていた剣を振りおろした。

『死ねやあああああ!!』

自らに降り注ぐ悪意の刃。彼はそんな光景を見て、ああ俺の新しい人生もこれで終わりか。そんなことを考えていたのだが、そんな彼を咄嗟に庇う者がいた。

『駄目ええええええ!!』

『劉備!!』

そう、その彼を庇う者とは村の外で待つているようにいつけておいたはずの少女劉備。彼に待つているようにいわれた劉備であったが、さすがに彼が心配になり自分にもなにかできるんじゃないかと彼を追いかけたのだ。

そして賊に殺されそうになっていた彼を見つけた劉備は、咄嗟に彼を庇い彼の代わりに賊にその華奢な体を切り裂かれてしまう。

『りゅ……桃香!!』

衝撃の光景に、彼は思わず預けられてはいたが呼ぶのをためらっていた彼女の真名を



叫びながら、賊をその場で怒りのままに斬り捨てると、腹から血を流している彼女の傍へと駆け寄った。

彼は彼女の腹部から流れ出る血を止めるために必死で彼女の傷口を押しこむが、しかし血は止まるどころか、さらに血の流れは勢いを増す。

『くそっ!!?止まれ、止まれよ!!』

何度も必死にそう叫び続ける彼の姿に、息も絶え絶えになつている桃香は、何がおもしろいのか苦痛で額に冷や汗を流しながらもなにやら嬉しそうにその口元に笑みを浮かべた。

『や、やっと真名を呼んでくれたね○○君』

『煩い!なんで俺を庇った。なんでお前をあんなに邪険に扱っていた俺を!!』

彼のその言葉に、彼女はどこか穏やかな笑みを浮かべながらも口を開く。

『うん、○○君が私のことをどこかで嫌っているのはわかった。でも、私は○○君が本当は優しいことを知ってる』

なんだかんだで私のわがままも聞いてくれるしねと彼女は苦笑しながらもぽつぽつと昔にあつた出来事を話し続ける。

一緒に食べたおやつの時。意地悪な男の子に泣かされた時。村の皆でやったかくれんぼの時。勉強がわからなくて泣きついた時。そして人手が欲しくて薪拾いを一緒に

頼んだ時など、つい最近のことから彼がすっかり忘れていた頃の時まで、彼女は意識が薄れていくことを感じながらも、懐かしそうな笑みを浮かべながらも語り続ける。

『○○君にはいろいろお世話になったからね、私も助けになろうと必死だったんだけど……』

こんなことになっちゃったと笑みを浮かべながら言葉を続ける彼女のその笑顔は、もう自分の命がここで尽きることがわかっているのだろう、どこか諦めと悲しみの感情が混じっているのが透けて見える。

『そんな……そんなこと?!』

なんとか彼女のその言葉を否定しようと彼は狼狽しながらも言葉を上げようとするが、その途中で言葉に詰まり、結局なにもいうことができずにいた。

そんな彼の様子に、劉備は穏やかな笑みを浮かべながらも静かに顔を上げる。

『あー、でも……残念……だった……。な。こ……。れで……。私の夢……。もう……。叶わない……。や……。』  
その彼女の言葉に彼は思ひ出す。彼女が常々語っていた夢。「誰もが笑顔になれる世界」を作ること。

それを語られる旅に、彼は「現実を見ていない」「夢物語」だといつも嘲笑ったり、無理だと論じたりして来たが、彼女は悲しそうに顔を歪めたりしたことはあっても、決して自分の夢を取り下げようとはしていなかった。

彼はその度に「なんて頑迷なやつだ」と内心憤ったり溜息をついたりしてはいたが、なぜだろうか、死に際にまでその夢を語る彼女の姿がどこか輝いて、神聖な物に彼には見えた。

だからだろうか、彼が思わずその言葉を呟いたのは。

『……なら、その「夢」は俺が叶える』

『……え？』

彼のその言葉があまりに予想外だったのか、呆然と彼女は彼を見上げるが、しかし彼は彼女のその視線にも自らの言葉を撤回することはなく、真剣な顔で言葉を続ける。

自分がその存在を一度は否定した彼女、そんな彼女に対してのせめてもの懺悔として彼は言葉を続ける。せめて彼女が安心して眠れるようにと。

『お前の夢は俺が叶える。だからお前は天国から見守つていればいい。この国がお前のいうとおり、「誰もが笑顔になれる国」になっているのを。俺が“劉備”としてその国を作つてやるから』

彼がそういうと、彼女は一瞬驚きで目を瞠るが、次の瞬間には心底安心したような満面の笑みを浮かべた。

『……よかったあ』

——それが彼女『劉備玄德』の最後の言葉であり、彼『劉備玄德』の始まりの言葉だった。

☆

☆

今までの出来事を思い出しながらも、彼はそのまま星空を眺め続ける。このどこかの星の上から彼女もこの光景を眺めているかもしれないと。

「見ているか桃香。この戦が終わればやっつと、やっつとお前の夢を叶えるための一歩が踏める」

思えばこれまで苦労の連続だったと彼はあの彼女へと誓った時から起こった出来事の全てを振りかえる。

なんとか蜀の王の地位についたはいいが、彼には本物の劉備玄德ほどの人望はなく、思うように人が集まらず、また市井の出ということと役人には舐められ足元を見られてしまったために、なんども苦汁をのまされた。おそらく自分の夢に、いや『彼女の夢』に賛同してくれた二人の兄弟を初めとした仲間たちの支えがなければとつくに潰れてしまっていたからかもしれない。

そんなことを考えていると、

「——劉備様!!」

「ん?」

突如聞こえてきたその声に、彼がとつさに振り向くと、そこには彼の副官をしている女性兵士がこちらに駆けてくるところが見える。

その兵士は彼の近くに到着するとそこで止まり、僅かに荒くなつた息を整えると再び口を開く。

「ここにいらつしやいましたか、探しましたよ」

どこかこちらを非難するようなその表情に、しかしそれに対する彼は頭を後ろ手で掻きながら、どこかばつが悪そうに苦笑を浮かべる。

彼は自分がここに来ることをそういえば誰にも何もいつていなかったことを思い出したからだ。

「あはは、悪い悪い。戦の前に相手の軍勢がどんなものか見たかつたものでな」

彼がその言葉を口にする、その兵士はどこか納得したような表情を浮かべるが、それと同じくどこか呆れたような表情を浮かべる。

「気持ちにはわかりませんが、どこかに行く時は護衛の兵士を連れていくか、せめて誰かにどこに行くか伝えておいてください。御身はもうただの弱小領主じゃないのですから」

「あーわかったわかった。——で、結局何の用事だったんだ？俺のことを探してたんだろ？」

彼がそういうと、その兵士は「あ！」と何かを思い出すような仕草を見せる。

「そうでしたそうでした。呉の孫権様からの使いがそろそろ作戦会議の時間だと陣まで来ているのですよ」

「孫権殿の使いが？——ああ、そういえばもうそんな時間か。わかった、すぐに行くとその使いの方に伝えておいてくれ」

劉備のその言葉に、兵士は先ほどの気安げな態度はどこへやら、顔を真剣な表情に引き締めながら「ハっ!!」と一つ敬礼すると踵を返して駆け足で去っていく。

そんな彼女の後姿を見ながらもふと先ほどまで眺めていた星空にその視線を再び一瞥すると、彼も踵を先ほどの兵士に習い踵を返しながらも、さきほどの兵士とは違い一歩一歩、力強く使いが待っているという自らの陣営の陣立てへと歩みを進める。

——少しでも早く彼女との約束を果たすために。

☆ ☆

■劉備玄德《りゅうびげんとく》

この小説の主人公。転生者。

元々はただのオタク気味の大学生であつたが、ある日突然自分が好きだつた恋姫無双の世界へと転生を果たす。

恋姫無双の本来の劉備玄德である桃香と同じ村に彼女の幼なじみとして生まれるが、元々アンチ蜀気味だったので、彼女のことはあまり好きではないとか内心少し嫌悪すらしていたのだが、しかしそんなこと知らんとばかりに桃香の方は彼になつき振り回し続けたため、少しづつ彼も桃香にほだされはじめが、最初の印象が強すぎたのかなかなか素直になれなかった。

そんな時村が賊に教われる出来事があり主人公は幼いころから特訓で体を鍛えていたために、多数の盗賊相手に有利に戦っていたのだから、しかし転生した先の父親の死体を発見し、それを発見したことにより思考が硬直していたところを不意をつかれ殺されかけていたところを桃香が庇い、代わりに彼女が死亡してしまうことに。

その際に死の間際にも夢のことを語る彼女のことかどこか神聖なものに見える、彼女を安心させながら眠らせてあげるためにも、無意識では彼女が自分の代わりに死んだという負い目もあり、彼女の代わりに劉備玄德を名乗り彼女の代わりに「皆を笑顔にする」とを決意することとなる。

桃香より能力としては圧倒的に上だが、人望という点では桃香には劣る。力で皆を

引っ張っていくタイプの指導者。

イメージは正史劉備。スペック的にも愛紗たち恋姫には及ばないものの、そこいらの將軍程度相手には負けない程度の剣腕の持ち主であり、スペックバランスも正史劉備に似ている。



# FAIRY TAIL 異伝 大魔導と呼ばれた男

それは光の聖石レイヴと闇の魔石ダークプリングの戦争により、当時世界の10分の1を破壊したと言われるオーバードライブが起こってから50年後の世界。

ガラージュ島に暮らす少年ハル・グロリーは、そのレイヴの使い手である初代レイヴマスターである老人シバからレイヴを受け継ぎ、二代目レイヴマスターとなり世界を救う旅に出ることになる。

そんな彼は旅先で多くの個性豊かな仲間たちと出会う。

魔導<sup>エリテリオン</sup>精霊力の持ち主であり、ギャンブルが得意な記憶喪失の少女“エリー”。

盗賊団の頭にして銀を操り戦う銀術師でもある青年“ムジカ・ハムリオ”。

種族不明の元暴走族。通称グリフのマップ“グリフオン加藤”。

<sup>ドラゴンレイス</sup>竜 人の王の末裔にして、誇り高き武術家“ジャヴァ・レット・ダハーカ”。

その恋人にして男勝りの姐御肌“ジュリア・ライン・ドラグーン”。

「…ポヨ」が口癖の富豪の息子。見習い魔法使いでもある“ルビー”。

元DCでありハルを護ると命に賭けて誓った爆炎の剣士“シユダ”。

治癒が得意で超上級魔法「絶対回避魔法」をも使いこなす、心優しき魔法使い“ベル

二カ”。

変身・幻術系の魔法を得意とする将来有望な時の民“ニーベル”。

彼らと一致団結し、とうとう世界を救うことに成功したハルであったが、実は彼らに  
はもう一人大切な仲間がいた。

その名は“ジークハルト・シーザー”。

全ての時を管理するという時の民の一員である彼は、大魔導の称号を得た凄腕の魔導  
師でもあり、初めはエリーの持つエーテリオンを時を歪める存在として危険視し、「全て  
の時のために」と彼女の命を狙っていた。

しかしハルトとの戦いで敗れ、彼に自身の固定観念を打ち砕かれたことで、固定観念を  
打ち砕かれ、姿を消した

そしてハルトとの戦いによって考えを改めた彼は、その態度を軟化させ、戦いに於いて  
もなるべく血の流れない手段をとるようになっていく。

そしてシンフォニアでハル達と再会した際は、彼に助力を約束。ハルたちとは別行動  
を取り、間接的な手助けに徹する。

やがて故郷の助力を求めて「ミルディアン」に帰還するも、同胞である時の民との対  
立を強いられ、戸惑いつつも彼らとの戦いに臨む。

そして時の民の一人でもある六祈將軍の重鎮ハジヤを、7日間にも及ぶ長期戦の末に

撃破。その際に魔導師としてハジヤを超えたことで、時の民の長であるミルツからは世界最強の魔導師と目される事となった。

その後、ハルやエリーと一緒に過去に飛ばされた際に全ての真実を知った彼は、二人を現代に戻すために単身過去に残る。

そして時を乱さないためにも、その姿をほかの人間に晒すことができないという状況の中で、リーシャの墓を守るためにその場で結界魔法を展開しその維持に務め、また現代に戻ったハル達の力になるための手を打ち、その生涯を終えた。

それは決して幸福な人生とはいえなかつただろう。時の民の使命のために、遊びたい盛りの幼い頃から脇目も振らずに鍛錬に励み、成人してからも戦いの日々を送り続け、終いには仲間のためとはいえ、誰にも看取られることなく死ななければならぬ。

だが、それでも彼は笑みを浮かべながらもその命を終えた。それは時の民の使命などというつまらないものではなく、友に想いを託し、愛する女性のためにこの命を使うことができることに対しての喜びからの物だった。

「…………ハル…エリー…………そして皆。…後は…………頼んだ…ぞ…………」

そして、後の歴史書にハルとその仲間たちにより「世界最高の魔導師」と記されることとなる。一人の男の人生が幕を閉じることとなる。

——はずだった。その神と呼ばれる存在すら予想外であろう事態が起こらなければ。

「ばぶばぶばああああああああああ!!? (なんだこれはああああああああ!!?)」

「奥さまおめでとうございます。立派な双子の男の子ですよ!!」

これは、かつて異世界で大魔導の称号を持つ魔導師だった男が、なんの因果か「FAIRY TAIL」の世界で自身が元となった原作キャラ「ジェラルル・フェルナンデス」の双子の兄として転生してしまった正史とは少し歪んでしまった物語。

☆ ☆

■ ジークハルト・フェルナンデス

この小説の主人公。ジェラルルの双子の兄であり、漫画「RAVE」の登場人物であるジークの転生した姿。

自身の役目を果たし、悔いなくその人生を終えたが、なぜかその後、ジェラルルの双子の兄としてFAIRY TAILの世界へと転生を果たす。

前世の影響で幼い頃から魔法が使えた彼であったが、幼いころに自身とジェラルルを残して両親が死亡してしまつたために、生活費を稼ぐために魔法を使いながらも狩りや盗賊退治などをして日々を過ごしていた。

だが、偶然依頼で遠くの街に出かけている際に、自分たちが住んでいた村を黒魔術師の集団が奴隷狩りのために襲撃し、ジェラルルも連れ去られてしまつたために弟を探しだすために大陸各地を旅することに。

その最中、彼はかつての想い人であるエリーとそっくりである少女、ルーシィと出会い……までは考えたんですか、その後の細かい話が思いつかず、またどうしても頭の中の話のアウトプットすることできなかつたために、とりあえずメモ変わりに書いてみました。いつか時間ができたらしっかりとプロットを作つて書いてみるかもしれませんね（人ごと）。

# 劇場版嘘CM「名探偵コナンと本当に怖いクトゥルフ神話」

——その事件はある日突然起こった。

「ええ!? 歩美ちゃんが帰ってきてきてない?」

「うん、そうみたいなんだ」

何時ものように学校から帰宅したコナンは、蘭が夕食の準備に取り掛かる中1人宿題に取り組んでいたのだが、そんな彼にとある人物から電話がかかってきたことにより、その物語は始まった。

その人物とは彼のクラスメイトである吉田歩美の母親。なんでも、本来ならもうとつくに帰って来てもおかしくない時間であるはずなのに、未だ家に帰ってきていないらしいのだ。

実は最近米花町に不審者が出没しているという話もあり、心配になった母親はあちこちに電話をかけており、彼女と親しいコナンの家にもこうして電話をかけてきたというわけなのだ。

流石にいつも一緒に遊んでいる1人であるコナンはこのままにしておこうとは思わ

ず、そしてそれを聞いた蘭、それに少年探偵団の面々や阿笠博士も一緒に、町中をくまなく搜索することに。

そしてコナンと蘭は、ある公園の外れにある小屋で、縄で縛られている歩美の姿と、そして今にも歩美に襲いかかろうとしている仮面を被った男の姿が。

コナンと蘭はその男をもちろん捕えようとしたのだが、その男の動きが想像以上に素早かったこともあり惜しくも逃げられてしまう。

2人はそれを悔しく思いながらも、しかし歩美を無事に保護できたことにより安堵の溜息をつき、安心して日常へと戻っていく。

——その事件が想いもがけぬ非日常への始まりとは知らずに。

☆☆

歩美を誘拐した犯人を突き止めるために捜査を開始したコナンと蘭。途中で佐藤と高木のいつもの刑事コンビと思わぬ合流を果たした彼らは、1人の人物を突き止める。

「私が柏崎ですが、いったいなんの御用でしょうか？」

“柏崎”と名乗ったその男は、初めは温和な態度でコナンたちに接していたが、やがてコナンの推理により追いつめられると途端に逃亡を図る。

だが、さすがに刑事の2人もいる状況で簡単に逃げ切れるはずもなく、柏崎はある海岸で追いつめられる。

絶体絶命の状況。にもかかわらず、柏崎は不気味に嗤って余裕の態度を崩さない。

そして、柏崎は不気味な力を使い、高木刑事に重傷を負わせてその場から逃げ出した。「うくうくくく。あの少女ですがね。さっさと殺した方がいいですよ？」

——多くの人が死ぬこととなる」

そんな不気味な言葉を残して。

突如コナンたち襲う狂気の世界。理解の及ばない出来事に巻き込まれながらも、彼らは明日を生き抜くため、そして1人の少女を救うために命を賭けて戦いに挑む。

「たす……けて……コナン……君!!」

「歩美ちゃああああああん!!」



世界規模を誇る中国マフィアの人間たちも介入する中、コナンたちはとうとう柏崎と最後の戦いへと挑む。

「かーしーわーぎーきー!!」

「おやおや、そんなに怖い顔しなくても。くふくふくふく」

不敵な笑みを浮かべる柏崎と対峙するコナンたち。今ここに世界の命運を賭けた戦いが始まった。

「——さあ、世界の終焉の始まりです」

劇場版名探偵コナン「名探偵コナンと本当に怖いクトゥルフ神話」。各劇場で好評放映中。

嘘です☆

☆

☆

■江戸川コナン

この小説の主人公その一。いわずと知れた体は子供。頭脳は大人な名探偵。

ある日、クラスメイトであり、少年探偵団のメンバーである歩美が行方不明になったということを聞き、彼女の行方を探す途中、彼女を蘭と一緒に誘拐犯から助け出すのが、そのことがきっかけで今までの常識が通じない狂気の世界へと巻き込まれることに。

■毛利蘭

この小説の主人公その二。

ある日、居候であるコナンの友人である歩美が行方不明になったことを聞き、コナンと一緒に彼女の行方を探す途中、彼女をコナンと共に誘拐犯から救い出す以下同文。

## ■ 吉田歩美

この小説のヒロイン？

立ち位置的にはこの小説の元ネタである動画の「みよん」が口癖な女子高生と同じ立ち位置なので、いろいろとひどいこと（意味深）をされる……かも（笑）

## 踏み台転生者がいる世界で平穩に過ごしたい人におすすめな転生特典：オリジナル

……突然ですが、画面の向こうの皆様。あなた方は最近ネット小説で流行の「転生物」というジャンルを御存知だろうか？

転生。仏教用語でいう生まれ変わりを意味する言葉だが、この転生物というのは漫画やライトノベルなどの創作物、または過去の歴史の教科書に載っているような時代や、剣や魔法の世界と呼ばれるようなファンタジー世界などいろいろな世界に、これまたいろいろな理由でこの転生という物を果たした主人公たちが活躍するというもので、その転生する理由として一番よく使われているのが、何をかくそう「神様転生」である。

これは、簡単にいえば神様のミスや暇つぶし、ただの仕事や全くの偶然で死んでしまった主人公を、神様が所謂転生特典と呼ばれる主人公に転生先でも十分に生きていける力を与えて前述したように様々な世界に転生させ、その主人公がその転生した世界で活躍するというもので、その男はよく暇つぶしがてらこの手の話をよく読んでいた。

しかし、これはあくまでお話の世界のことであり、実際にそのようなことが存在するわけではない。少なくともこの小説を愛読している人たちですら、いや愛読している人た

ちであるからこそそのようなことが絶対にあるわけないと理解しているだろう。そして、その男もそんな人たちの例に漏れず、そう考えていた。

だからこそ、彼は自身がそのような境遇になった時心の底から驚愕したものだ。

——まさか、「本当に神様転生などというものが存在するとは」と。

これは、他にも神様により転生した性質の悪い転生者たちがいる世界に転生した、ごく普通の平穩を求める転生者が、自分の平和な生活のためにとつたある行動の物語。

☆

☆

どうも、皆さまはじめまして。僕の名前は“田中太郎”。この平凡な名前からも見てわかるとおり、ごくごく普通の一般家庭に生まれた、少し他よりは頭がいいと評判のごく普通の小学生だ。

そんな僕にはある一つの秘密があるのだが、誰にも喋らないと約束してくれるならば、その秘密を教えてもいい。……ごめん嘘です。ぶっちゃけ誰かに話したいので是非

聞いてください。よろしくお願いします（土下座）。

実は僕は所謂前世の記憶というものがあり、神様と呼ばれる存在により転生特典というものを貰いながらもこの世界に転生した、通称「神転系転生者」と呼ばれる存在だったりするのです。

前世の僕は、とある食品関係の会社で一応部長職についていたのですが、ある日仕事からの帰り道、最近入ったばかりの新入社員にナイフで刺されそのまま死んでしまったのだ。

そして気づいたら自らを神と名乗るなんか凄い威厳を感じる老人と出会い、なんでも自分たちのミスのせいで僕の死期が縮んでしまったからと、転生特典を2つ上げるのとあるアニメの世界でお詫びとして第二の人生を送らないかという話を持ちかけられた。

その転生する先のアニメの世界というのが、前世ではオタクに大人気であり、普通の人々でも結構名前だけは知っているんじゃないかというほど有名などある魔法少女アニメの世界らしいことを聞いた僕は、そのアニメ自体はオタクではあるがあまり興味がなかったが、その手のタイプの同胞たちは喜びそうだと思い、また本当にこんなネット小説のようなことがあるんだな〜とどこか他人事のように考えていたが、そこで僕はあ

る一つの疑問が生じたので、神様にそのことを質問することにしたんだ。

その疑問とは、なぜ神様ともあろう存在がただの人間である僕のような存在相手に「お詫び」などするのかというもの。

僕の勝手な考えかもしれないが、「神様」と呼ばれる存在は万能な存在であり、ミスなどしないと思うし、仮にミスなどしても人間に対して圧倒的に立場が上のはずの神様がお詫びなどする必要が無いはずだ。

まあ、前述したようにこれはあくまで僕の勝手な考えなので、本来なら神様といえどミスもするかもしれないし、この神様は人間相手にも親身に接してくれる慈愛溢れる性格なのかもしれない。

本当にただ興味本位で聞いただけだったのだが、その質問は実にその神様の心によく響いたようで、聞いた途端に「聞いてくれるのか!？」とそれまでの威厳溢れる姿とはうって変わった様子で俺に詰め寄りながらも口早に僕に対して語り出した。

なんでも、僕はミスをしたというのは神様のことだったらしいのだが、それは僕の勘違いで本当は部下の天使がミスをして、彼はその尻拭いとしてここに立っているらしく、彼よりさらに位の高い神が決めた規律に乗っ取り、こうしてその部下のミスで死んでいった人間たちに特典を与えてそれを転生させていたのだが、その転生させることとなった人間たちがこれがまた性質の悪いやつらで、こちらがミスしたことにつけこんでいろいろ罵倒されて無茶な注文をされてしまったらしい。

自分のミスではないのになぜ自分がこんな思いをしながらもこのようなことをしなければと、彼は余程鬱憤が溜まってしまっていたらしく、こうして僕の言葉をきっかけに爆発してしまったというこらしいのだが、僕はそんな彼の言葉を我ながら真摯に聞いていたと思う。

なにせ、私も規模は中堅といえど部長職についていた身。使えない部下など多く見てきたし、何をかくそう僕を刺した新入社員も、僕がミスを注意しても口答えや言い訳ばかりする正直早くクビにしたい類の人間であつたのだ。おそらく僕を刺したのも日頃ミスの注意を何度もしたからこそその逆キレからだろう。あいつの性格上十分有り得る。だからこそ、僕はその神様の話にとても共感が沸き、とても意気投合した。

そのおかげだろうか。その神様は大分機嫌がよくなり、僕に対しては本来転生特典は2つだけのはずなのに3つにオマケしてくれ、「時々またお互いの話でもしよう」と笑顔で送り出してくれた。

そうして僕は、今現在僕が生活しているこの世界へと転生したというわけなのだ。

ちなみに僕が貰つた転生特典は「不自然ではない程度の整つた容姿」と「学習すればするだけ成長する力」の2つ。ちなみに後一つは保留にしてもらつた。

……うん、いいこととはわかる。転生特典が地味だといいたいんでしよう？でもこれでもいいんだ。僕にはよくこの手の小説のオリ主がするような原作介入をする予定は



なく、ただ平穩に、しかし特典を有効利用して所謂勝ち組になりながらも平穩に暮らしたいだけなんだから。

だつてそうでしょう？ 確かに強力な転生特典を持って原作にヒーローの如く介入し、ヒロインとフラグを立てたり活躍したりしたいのは、前世で一オタクだった身である僕も理解はできる。

しかし、今僕たちがいる世界は現実であり、ただ単に前世で有名だったアニメに酷似しているというだけの世界。無駄に命を賭けて死んでしまつては元も子もないし、そもそもアニメでは主人公である魔法少女たちが、悲しい出来事は度々あったがきつちり事件を解決していた。

だからこそ、僕はこの世界で起きる事件の全ては彼女たちに任せ、自分は特典を使つて前世とは違い高い学歴を持つことで一流の会社に入社し、勝ち組になつて平穩に過ごすと考えたのだ。

しかし、そんな僕の野望も、とある人物たちのせいで脆くも崩れ去ろうとしていた。それは今現在目の前でこの世界の主人公たちにつきまとい嫌がられている三人の独特な風貌の少年たちに会つた。

「おーい、奈葉。一緒に帰ろうぜ!!」

「え、一緒に返るのはちよつと。……それに名前と呼ぶのは止めてほしいって何回も

いつているんだけど」

一人目はこの世界の主人公である少女と一緒に下校しようと誘ったが、顔を引き攣らせられながらも名前呼びと一緒に断られた銀髪オッドアイの少年きりゆういんほくと。鬼龍院北斗。

見た目も名前もそして中身も厨二病まっさかりの彼は、主人公である少女がお気に入りにらしく、度々一緒に帰る誘いをかけては彼女に断られているが、それにも関わらず彼女につきまといストーカー行為を繰り返しているともっぱらの噂だ。

「ちよつと、いい加減どつか生きなさいよ!?!あんたたちの顔なんて見たくないんだから!!」

「またまたー。安奈はツンデレさんだな☆」

二人目は主人公の親友であるツンデレ少女に思いつきりどっか行けといわれているにもかかわらず、頓珍漢なことをいってさらにその少女につきまとっている金髪碧眼の明らかに日本人でない外見な少年ほうおうどうせつな。鳳凰堂刹那。

彼は度々あの少女を口説いているのだが、毎回ああいう感じで真っ向から拒絶されている。しかし彼はその度にそれを彼女がツンデレ。要するに素直になれないだけだといいきり、懲りずにまた口説くことを続けているという、悪い意味で前向きまへむきの少年だった利する。

「———でさあ?この間結構洒落た喫茶店を見つけたんだけど、一緒にいって見ない

「？」

「……………」

そして最後に三人目。主人公のライバル的存在であるクール系少女に、眉間に皺を寄せながらもずっと無視されているにも関わらず、延々と喋り続けている赤髪の所謂男の娘といったタイプの中性的な容姿の少年の名は「きんぎょうおんこ狂音殺介」。

名字の「狂」はともかく、名前に「殺」すという文字を入れるという、明らかに親のネーミングセンスを疑う名前の彼は、どうやらドMらしく、ああして彼女に延々と話しかけ、我慢できなくなった彼女が冷徹な瞳で罵倒してくるのを待っているという変態だ。

三人が三人とも整った容姿ではあるが奇抜な見た目である彼らには実は2つの共通点があり、1つは先ほどもいったとおり、この世界の物語の主人公たちにしつこくつきまとっていること。そしてもう1つは、彼女たちに近づく男子たちをことごとく排除しようとすること。

困ったことに、彼らは彼女たちを自分たちだけで独占したいらしく、ちよつとした用事で話しかけようとしただけ出会ったも、「モブ」だの「害虫」だのいつて難癖をつけて彼らを力づくで排除しようとする。そのせいで今この学校では彼らに近づくことは男子生徒どころか教師であろうともタブーな事とされており、必要最低限の接触だけで遠

回しに敬遠するようになった。

そんな彼らの正体を、そして彼らがなぜ主人公たちにああしてつきまどっているのか、実は僕はその全てを知っている。

その理由を話すには、実はたった一言あれば方がつく。そう、彼らは所謂“踏み台転生者”というやつだ。

踏み台転生者とは、好きなアニメの世界や漫画の世界に転生した転生者が、その世界を現実とは認識せず、どうせ創作物の世界だと前述したようにその世界の主人公やヒロインたちにストーリーカー行為を働いたり、彼女たちに近づく男たちをモブだのなんだのいい、理不尽に罵倒し、力づくで遠ざけようとする。

そのせいでヒロインたちはおろか周りからも蛇蝎の如く嫌われたりするのだが、私たちは神様選ばれた自分たちにそんなことはあり得ないとでも考えているのか、迷惑行為を繰り返す存在で、よくあるネット小説なんかでは、そんな嫌われ者の彼らをオリエント倒し、文字通り彼らの人気の「踏み台」になることから「踏み台転生者」と呼ばれている。

おそらく、その言動から転生する際にあの神様から聞いた、彼が転生させた性質の悪い人間たちだと考えた僕は、しかし実は最初は放っておこうとも考えた。

確かにあのよう存在自体迷惑な人間につきまとわれているなど道場に値するが、平

穏な勝ち組生活を目指している僕としては、あのような存在と関わって、目をつけられているのは勘弁してもらいたかったからだ。

しかし、そう思つて行動をしなかった彼らの行動が、全く関係のない男子生徒たちの排除や彼女たちのプライベートに入りだすと、流石に僕も彼らの行動を見逃せなくなつてしまった。

なにせ、この世界で未来に起こるはずの事件には、下手をすれば世界が滅亡してしまいかねない規模の事件もある。だから彼らが彼女たちに精神的疲労を与え続け、その疲労のせいで万が一原作どおりに彼女たちが事件を解決できなくなつてしまつては、勝ち組生活どころではないからだ。

だからこそ、僕は保留にしている残り一つの転生特典で彼らをなんとかしなければと考へたのだが、しかしあの神様の話では、彼らは各々が考へる抜群の容姿と最強クラスの戦闘スキルを手に入れていると僕はその時間聞いており、彼らの傲慢な性格から完全には使いこなせてはいないと思うが、しかしたった一つの特典では彼らを力づくでどうにかするのは無理だとまずは結論付け、その次にはいつそのこと彼らの命ごとこの世界から消してやろうとも考へたが、さすがに忌避はするが恨みもない相手を殺すのは忍びない。

それからしばらくうんうんと唸りながら考へていた僕は、ふとある考へが浮かび、そ

れを実行に移すために、神様へ、これが最後の転生特典としてある願いを捧げた。

そして、神様に願いを捧げた翌日。何時も通り学校に投稿した僕は、周りの子たちの噂話からその願いが叶ったことを確信し、思わず口元をにやりと歪めた。

「ねえ、聞いた？あの三人組が失踪したっていう話」

「聞いた聞いた。家族も気づかない間にどこかにいつちやつたんでしょ。その代わりになぜか全く似ても似つかないおっさんがあの子たちの部屋にいたんだって」

「なにそれちよー意味わかんない上に超怖いじゃんww……でも、正直あの子たちいなくなつてせいせいしたよ。確かに顔はいいけど、行動自体かなり迷惑だったし」

「あははは、確かにー」

談笑している女生徒達の話聞き、僕は内心思わず笑みを深める。

今の彼女たちの言葉を聞けばわかる人はわかると思うが、僕が神様に転生特典として願ったのは彼ら「僕以外の転生たちの転生特典の完全消失」。そのおかげで彼らは転生特典であるである抜群の容姿と最強クラスの戦闘スキルを失い、この世界で生きていた彼らとは全く別人である、前世のオタクであった彼らの姿そのままになってしまったというわけだ。

おそらく、彼らは幼児誘拐の容疑でもかけられて刑務所に入るか、意味不明の発言をしまくつて精神病院に強制入院でもさせられるかもしれない。

そこは少しすまないとは思うが、しかし彼らの行動が世界を滅亡に導く可能性があったし、彼らの存在自体が迷惑だったのは事実。(現に彼らが姿を消したという話を聞いた同級生たちはその口元に笑顔を浮かべていたし、特に教室に向かう途中で見かけた主人公たち三人組は人目もはばからず万歳三唱。とち狂ったように喜んでいた)

だからこそ彼らの人生設計を台無しにした罪悪感に僕にはなく、むしろいいことをしたといい気分になりながらも僕はいつもの教室へと、鼻歌を歌いながらもその歩みを進める。——これで僕の人生は安泰だと思いつつながら。

☆ ☆

■ たなかたろう  
田中太郎

この小説の主人公。

前世ではとある食品関係の会社で部長職を勤めていたが、ミスを指摘して叱った新入社員に逆キレされ、ナイフで刺されて死亡してしまふ。

部長職であるがゆえに使えない部下をどう使うかなど部下関係でいろいろ苦労しており、そのためか、部下の尻拭いのために鬱憤が溜まっていた神様と意気投合。そのおかげか、本来は2つだけしか貰えないはずの転生特典を3つ貰えることとなり、アニメ

の世界に転生することを知りながら、『平穩な勝ち組人生』を送るために「不自然ではない程度の整った容姿」と「学習すればするだけ成長する能力」の2つを貰い、残りの1つは難病にでもかかってしまった場合の保険にでもしようと保留にしておいた。

しかし、同じく彼と同じ世界に転生した踏み台転生者たちの行動があまりにも目に余り、このままでは主人公たちに悪い影響を与え、間接的に自身の平穩な生活を脅かすと結論づけ、最後の転生特典を使い、神様に「自分以外の転生者たちの転生特典の完全消失」を願い、彼らを人知れず社会的に抹殺した。

自身の平穩を脅かす者や敵対する者には容赦はないが、前世部長職で磨いたコミュスキルで温和な性格を演じているために、彼を慕う者は多い。

転生者としては、ちゃんとその世界を現実だと認識しており、例えば原作に起きた事件が起こったとしても、原作通りに進めばなんとかなるだろうというスタンスなため、原作に介入することはない。



## ハリーポッターと闇の血を引く魔法使い

かつてゲラート・グリンデルバルドという名の一人の魔法使いがいたことを皆様はご存知だろうか？

その者、かつて最も偉大な魔法使いとしてその名が知られているアルバス・ダンブルドアの唯一無二の親友でありながら力に溺れ、悪逆非道を尽くしその結果友であるはずのダンブルドアとの決闘に破れ、彼が自ら作った監獄である「ヌルメンガード」に監禁されることとなった。

あの“名前を言つてはいけないあの人”ヴォルデモート卿がいなければ、この魔法使いこそが史上最悪の闇の魔法使いの通り名をその身に冠していただろう、それほど強大な魔法使いである彼は、ダンブルドアに捕らえられ、監獄に入れられてからヴォルデモート卿が復活し、ニワトコの杖の所在の情報を手に入れるために彼の目の前に現れるまで、ずっと監獄で沈黙を保っていたのだが、実はその間、たった一度彼がとある目的で一人の人物と接触していたことは世間どころか、魔法界の規律を取り仕切る魔法省の人間にも知る者はいなかった。

その名はアルバス・ダンブルドア。

そう、かつてのグリンデルバルドの親友にして、彼を監獄へと決闘の末に叩き込んだ張本人である。

☆ ☆

その日、アルバス・ダンブルドアは、魔法省の役人から、かつての友であるグリンデルバルドが自身に面会を求めていると聞き、自身が彼を収容することに協力した、監獄ヌルメンガードまでやってきていた。

「久しいのお、ゲラート」

「そうだな、アルバス」

ヌルメンガードの最奥に位置する、最も嚴重に警備されている一室にて、光と闇。方や壁に拘束されてはいるが対照的な陣営に属する2人の魔法使いはそこで再び対峙する。

ちなみに、この場に彼ら2人以外の人間はいない。本来ならば魔法が使えない状態にされているとはいえ相手が相手。監視の1人でもつかなければならぬはずなのだが、ダンブルドアが久しぶりのかつての友との語らいを邪魔されたくない、無理をいって監視を遠ざけて2人きりにしてもらったのだ。

本来ならばこのようなことは許されないのだが、ダンブルドアが実際の権力はなくても魔法大臣への就任を請われるほどの偉大な魔法使いであること、この監獄で監視を担当としている役人がダンブルドアの新派であること。そしてグリンデルバルドを捕らえたダンブルドアならば、例え元親友であろうと彼に組することはないのである。仮にグリンデルバルドが何かの間違いで拘束から開放されてしまったとしてもダンブルドアならばなんとかなるだろうという考えからだ。

そして、グリンデルバルドとダンブルドアは再会の後、決闘の結果片方が片方を監獄へ送ることになった確執などまるで感じさせることなく、まるで十年ぶりに再会した友を相手にしているかのように、しばし穏やかに談笑していたが、やがてそろそろ話を進めようと考えたのか、ダンブルドアはその口元に穏やかな笑みを浮かべながらも口を開く。

「——それで？ わざわざワシを呼ぶとはどうしたのじゃゲラート。まさか監獄にお主をぶち込んだ恨み言をいまさらいうためはあるまい？」

どこかからかうようなダンブルドアの口調に、しかしグリンデルバルドは不快な様子を見せることなく、ただつまらなそうに鼻を鳴らす。

「ふん、当然だ。確かに監獄行きになったことに何か思うことがないわけでもない。しかしあれは魔法使いの古き規律にのっとった正式な決闘。その決闘で私は敗れた。な

らばそのことについて何かいうことは私の誇りに反する」

そう、確かにグリンデルバルドは悪名高き闇の魔法使い。しかしそれと同時に、彼は強大な力を持つ誇り高き魔法使いでもある。そんな彼がいくら敗北したとはいえ、正々堂々と戦った決闘で決まった結果において不平不満を口にするのは、彼の誇りが許さなかつた。

「今日お前をここに呼んだのはちよつとした頼みごとがあつてな」

「……頼みごとじゃと？お主が？」

「うむ」

そういうと、グリンデルバルドは監視がないことがわかつていながらも、首を左右に動かして誰もいないことを確認すると、首をくいと引きダンブルドアに耳を貸せというような仕草をする。

そんな彼の様子に、ダンブルドアはどこか面白げに耳を彼の口元に近づける。

それを確認したグリンデルバルドは、満足げな笑みを浮かべると言葉を紡ぐ。ダンブルドアにとつても衝撃の言葉を。

「俺の息子を引き取っちゃくれねえか？」

「……………」

——これは、ダンブルドアに育てられたグリンデルバルドの息子。謂わば「闇の血統種」と呼べる子供の成長録である。

☆

☆

■ゲラート・グリンデルバルド

かつて、ダンブルドアの無二の親友であった闇の魔法使い。

その力は“名前を言っではいけないあの人”ヴォルデモート卿がいなければ、彼こそが史上最悪の闇の魔法使いと呼ばれていただろうといわれるほど協力。

かつて自分に逆らうものたちを虐殺するなど悪行の限りを尽くしていたが、ダンブルドアとの決闘で敗北し、自身が作った監獄「ヌルメンガード」に収監されることに。

しかし、彼は闇の魔法使いであると同時に、古きルールを尊ぶ誇り高き魔法使いでもあるため、自身が敗北し監獄に収監されたことに大しては何も文句がないが、実はあるマグルの女と子供を作っており、子に罪はないと自身を監獄行きにしたとはいえ、かつての親友であり社会的地位の高いダンブルドアへ、自身の子供を託した。

■ グリンデルバルドの息子。

グリンデルバルドの息子で、本当はダンブルドアに育てられた彼が、若きころのヴォルデモート卿と親友になるがハグリットがホグワーツを退学になった事件を主人公が解決してしまったために、それから実父と義父のようにヴォルデモート卿と敵対することとなり、長い間戦い続けながらも、最終的にはホグワーツの教師となり物語に介入するみたいな妄想をしていたのですが、私の妄想力ではヴォルデモート卿時代のホグワーツを書くのが難しかったためにあえなく断念しました。

## 削除作品：“赫足”と呼ばれた料理人

### 旧第一ビオトープ

別名『アカシアのキツチン』と呼ばれるこの場所はIGOでも上層部しかその存在を知らないハングリートライアングルの中心に存在し、グルメ界の希少な食材を初めとしたグルメ食材が多く存在する。

実はこの旧第一ビオトープにはニトロが作ったと言われる遺跡が点在しており、それに正体不明の伝説の食材である『アカシア美食神の超スペシャルメニュー食宝』の秘密が隠されていると考えたIGOは、その遺跡の調査のためにこの旧第一ビオトープをここに造ったのだ。

IGOはアカシアのスペシャルメニューもそうだが、この旧第一ビオトープに存在する食材の希少性から情報を徹底的に秘匿し、職員も会長がじきじきに選んだ信用できる人間がただ一人という、秘匿を念頭に置いた過剰なまでの少数精鋭だったりする。

その職員の名は“あやめ”。かつて人間美食国宝の一人である“節乃”のライバルとして腕を競ったという凄腕の料理人だ。

彼女はかつて“ギリム”という美食屋とコンビを組んでいたのだが、そのギリムは誰にも負けない人生のフルコースを作るといって彼女を置いて失踪してしまったのだ。

風の噂で、より良い食材を欲するようになったギリムが美食會に堕ちてしまったことを知ったあやめは、それでも彼を信じようと、一龍からグルメ界の生物も生息できる環境であるという旧第一ビオトープの所長として就任し、彼とのフルコースの前菜オードブルである『コロナサンフラワー』を育てながら、いつかギリムが戻ってくることを願いつつことにしたのだ。

一人パートナーである巨大な黒猫のポッチーと共にビオトープの管理に奔走しながらも、いつくるかもわからない男を待つ空しい日々。

しかしあやめの後悔はない。愛しい男を待つと決めたのは、そしてなにより、彼がどこまで落ちようとも自分だけは彼の味方でいようと誓ったからだ。

しかしそんな彼女にもただ一つ心残りがあった。

それはかつて美食人間国宝節乃にも匹敵した自身の調理技術。それを後進に残すことができないということに。

彼女は「お灸ノツキング」という特殊なノツキングで常に肉体を最盛期まで若返らせていたが、それでももう年は年。いつ限界が来てしまうかわからない。

いつまで経っても進展しない事態に心が弱くなってしまうことも関係しているのだろう、そのことを思うあやめは日々憂鬱にため息をつく日々を送っていた。

——自分本当にこのままでいいのかと。



そんなある日のことだった。旧第一ピオトープに一隻のボートが流れ着いたのは。実はあやめにはピオトープの管理のほかにも仕事があり、その一つが遭難者の救出があった。

その理由としては、この旧第一ピオトープの周りを取り囲んでいるハングリートライアングル。その存在を知るものは絶対に近寄ろうとはしないが、新種のグルメ食材を発見しようとするこの海域に來た美食屋や、偶然アクシデントにより迷い込んでしまった客船や輸送船などがその犠牲になってしまうことがある。

殆どはそのまま文字通り海の藻屑になってしまふのだが、稀にハングリートライアングルからの脱出に成功する者があり、そのような者がいないか、彼女は毎日こうして海域のパトロールに出ており、そのボートもそのパトロールの途中で発見したのだ。

だが別にボートを発見したこと自体は不思議なことではない。前述したように稀にはあるがハングリートライアングルから生還したものはいるし、そうでなくても犠牲になった船の漂流物がここまで流れ着いてくるといふことはよくあることだからだ。

あやめが見つけたボートもハングリートライアングルの嵐に晒されたのだろう、かなり損傷していることから彼女もはじめはいつもの漂流物だと思い、その場を離れようとしたのだが、その時彼女の耳に信じられない声が聞こえてきたのだ。

そう、

「——おぎやあ！おぎやあ！」

——赤ん坊が泣き叫ぶその声。

「!?まさか!!」

その声にあやめは驚愕の表情を浮かべながらも、急いでボートの中身を確認する。するとそこにはあやめの想像通り一人の赤ん坊がいた。

その赤ん坊は、汚れた布に包まれており、あやめがその顔を覗き込んでもそれに構わず泣き続ける。

「おぎやあ！おぎやあ！おぎやあ！」

あやめは大声で泣き叫ぶその赤ん坊を見て思わず瞠目する。それはその赤ん坊の状態にあった。

「なぜこの赤ん坊は無事なんだ？」

その赤ん坊は見ればガリガリに痩せており、長い間食事をとっていないことがわかる。

だが、このぐらいの赤ん坊は最も栄養が必要、ここまで痩せ細ってしまった状態では普通もう死んでしまっているはずなのだ。

「(なのに、いったいなぜ?)」

だがそんなあやめの疑問は、すぐに解決することになる。

それはあやめがとりあえず赤ん坊に何か食事を与えなければならぬと離乳食を作って赤ん坊に与えたら、赤ん坊の体が急に光だし、あれほど痩せ細っていた赤ん坊の血色が急激に良くなり、明らかにその肉体が先ほどまでとは違い、強靱なものになっていくのだ。

そしてあやめはその原因にすぐに気がついた。

「この子ひよつとしてグルメ細胞が!」

グルメ細胞とは役600年前に美食神アカシアが深海に棲むグルメクラゲから発見・採取した特殊な万能細胞のことで、優れた再生機能と生命力を備えるこの細胞を他の組織とうまく結合すれば、旨いリングゴはより旨くなる、おいしい牛肉はよりおいしくなるといったように、その組織の長所を驚異的に伸ばすことができるのだ。

そしてこれを人体に結合させた場合は圧倒的な生命力を持った超人と化し、さらにその実力は旨い食材を食べば食うほどレベルアップするようになる。また、例え命の危機に陥るような重症を負ったとしても、この細胞の持ち主ならば、ある一定以上のレベルの食事をとれば直してしまうという性質をもっていた。

かつてグルメ界への進入を成功させた数少ない料理人であり、現在存在する料理人の

中でも最古参の一人にあたる彼女はもちろんこのことを知っていたので、すぐにそのことに気がつくことができたのだ。

そしてその事実気づいたあやめは、この赤ん坊がなぜ助かったのか理解した。おそらく自食作用オートファジーが発動していたのだろう。

自食作用オートファジー。それは栄養飢餓状態に陥った生物が自らの細胞のたんぱく質をアミノ酸に分解し、一時的にエネルギーを得ることで、グルメ細胞保持者はほんの僅かな絶食でこの状態に陥り、グルメ細胞が自らを食すことで生命の危機を回避するために肉体に超人的なパワーを発揮させることができる。おそらくこの赤ん坊はオートファジーで命をなんとか繋いでいたのだろう。

「……ということはかなり危なかったな、この赤ん坊は」

なにせオートファジーは確かに大きなパワーを得られることはできるが、これはあくまで最終手段。オートファジーで生み出したエネルギーが切れればすぐに死んでしまう。その前に助けることができ、あやめはホッと安堵の息をついた。あやめも女性、犠牲者が出るのは仕方ないとはいえ、このような無垢な赤ん坊が死んでしまうのは忍びない。

だがそこであやめは、このままでは一つ問題があることに気づいた。それはこの赤ん坊をこれからどうするかだ。

本来漂流者が現れた場合あやめはI・G・Oに連絡しなければならぬのだが、この赤ん坊が一人でボートに乗っていたことから両親はもう存在して見えないと見ていいだろうが、しかしそれならばこの子は孤児として生活していかなければならない。彼女はそれが不憫でならなかった。

「(本当にどうしたものか……)」

だがそこであやめの頭脳に一つの閃きが降りてくる。

それはここ最近の自分の悩みの一つとなっていた自身の調理技術の後継者の問題。彼女はこの赤ん坊を育て、自身の弟子にしたらどうだろうと考えたのだ。

料理人としての素質は赤ん坊ゆえまだわからないが、しかしグルメ細胞を生まれつき持っているということは今から鍛えれば将来的に危険なグルメ食材を捕獲できるほどの力量を持たせることができるだろう。それならば料理人がだめでも最悪美食屋にすればいい。幸い優れた美食屋であったギリムのコンビであったあやめはそれなりの美食屋の技術もある。

なによりあやめはもう一人は寂しかったのだ。

確かにギリムを待つことを決めたのは自分だし、それに後悔はない

しかし彼女も薄々気づいていたのだ。食の魔道におちてしまったギリムがもう自分の下に戻ってくることはありえないことに。

だからこそ孤独な生活にもう限界を感じていたあやめは、その赤ん坊を自らの後継者、そして家族として育て上げることを決意したのだ。

そして一度そう決めてからのあやめの行動は早かった。

自身の上司にして旧知の仲である一龍に連絡をとり、一人の赤ん坊を保護したことを伝えると、その赤ん坊を自身の養子にするための手続きを頼んだ。

本来ならばこの赤ん坊のような孤児は親族がいなかまはずは確認しなくてはいけないのだが、この赤ん坊の場合はその親族を探る手がかりがなにもないので、一龍もあやめがギリムが帰ってこないことでどれだけの孤独の日々を送っているかを知っていたので、手続きは特に障害なく進み、その赤ん坊は無事にあやめの養子になることができたのだった。

——そして時は流れて二十年。

「——それじゃあ行ってくるよばあちゃん」

「——ああ、行ってこい」

グルメ時代にまた新たな料理人が登場することになる。

# 主人公とパートナー猛獣の紹介

## ■ゼフ

原作開始時年齢：26歳

料理人ランキング：11位

出身：旧第一ビオトープ

好きなもの：祖母（あやめ）、おいしいという言葉、料理

嫌いなもの：まずいという言葉、違法食材

モデル：漫画ワンピースからバラティエオーナー「ゼフ」

・この小説の主人公。旧第一ビオトープ所長あやめの義理の息子であり唯一の弟子にしてネルグ街にあるレストラン『グルメ・バラティエ』のオーナーシェフ。

幼いころボートに乗せられたまま旧第一ビオトープの外周にある海岸に打ち上げられたところを、パトロール中のあやめに発見され、そのままあやめの養子となった。

生まれついでグルメ細胞持ちで、赤ん坊の身で一人漂流していてもあやめが拾うまで彼がなんとか生きつないでいられたのはそのおかげ。それがきっかけであやめはゼ

フを自身の料理人としての後継者として教育することにした。

20歳のころに料理人としての修行を終え、自身の人生のフルコースを揃えるために旧第一ビオトープから出て旅にでることに。

現在はネルグ街にてレストラン『グルメ・バラティエ』を構えている。

自身が元々孤児であることと、グルメヤクザ、正しくはリユウやランチの「貧困こそ子供たちを犯罪者に変える最大の悪」という考え方に共感したために、わざわざIGO非加盟国のネルグ街に居を構え、子供たちに食料を恵んだり、素質のある子供やチンピラなんかをスタッフとして雇いながら料理を教えたりしている。

モデルはワンピースのバラティエオーナー、ゼフ。(但し名前と技のみ)

パートナー猛獣に灰色のサバナドラゴンである「サンドリヨン」がいる。

#### ■ サンドリヨン

種族：サバナドラゴン

出身：旧第一ビオトープ

捕獲レベル：測定不能



・主人公ゼフのパートナー猛獣。

氷の世界の番人であるツンドラドラゴンの祖先、サバナドラゴンの変異種で、普通のサバナドラゴンと違い体が灰色。

群れから逸れて猛獣に襲われていたところを、偶然修行中だった主人公に助けられ、その後パートナーとなる。

主人公の移動手段であり、店のマスコットになっている。

く主人公の人生のフルコースく

前菜：<sup>オードブル</sup>コロナサンフラワーのバターソテー（捕獲レベル：不明）

・グルメ界に存在する花、コロナサンフラワーをバターソテーにしたもの。

コロナサンフラワーとは太陽の光を蓄える花で、「小太陽」とも呼ばれている。太陽の名を持つだけあって栄養価も計り知れないが、グルメ界でも幻と呼ばれるほど希少な花であるが、ギリムとの思い出の花であるこの花をあやめは旧第一ビオトープで繁殖することに成功しており、主人公がせっかくだからと二人と同じくこの花を自身のフル

コースへと決めた。

スープ：???

魚料理：???

肉料理：ウオータイガーのカツレツ（捕獲レベル：70）

・巨大な島を背負って海を渡る馬「島うま」の背中に生息している水の身体を持つ巨大な虎、ウオータータイガーをカツレツにしたもの。

その肉は肉は魚介エキスが詰まっており、ジューシーかつ瑞々しい味わいで、グルメビーチの名物であるガツガツカレーにもその肉が使われている。

メイン  
主菜：???

サラダ：???

ドリンク：ミルクジラのミルク（捕獲レベル：21）

・ミルクジラとは牛のような模様をした鯨で、真っ白な絹のような滑らかなミルクを潮吹きする。

そのミルクは陸上の哺乳獣類の1000倍もの脂肪分を含んでおり、大食漢のドラゴンも満足するくらいに濃厚で栄養がたっぷり。

## 登場人物設定詳細

### ■グルメ警察

・トール

年齢：32

所属：IGO、グルメ警察機動隊長

好きなもの：葉巻、刀

嫌いなもの：食の平穩を荒らすもの

グルメ警察機動隊長。

元腕利きの美食屋で、過去に単独で、伝説の猛獣であるデビル大蛇の討伐に成功しているほどの強さを持つ（但しデビル大蛇は人間界出身のもの）。

IGO内ではそれなりの強さを誇るが、それでもグルメ界入りできるほどではないのでスタージュンや主人公のような“本物”の強さを持つもの相手だとたとえハンデがあつたとしても勝てない。

戦闘には刀を使って戦い、我流ではあるが銃弾を刀で切るほどの腕前。

## ■ グルメ・バラティエ

・サンジ

年齢：13歳

所属：グルメ・バラティエ副オーナー

モデル：漫画ワンピースから「サンジ」

主人公にグルメバラティエの副オーナーに若干13歳の若さで選ばれた天才料理人。元々はネルグ街の孤児で、他の孤児たちのようにごみを漁りながらその日暮らしをしてきたが、ある日主人公に見出され、弟子となる。

その後修行を積み、主人公からグルメ・バラティエの副オーナーを任されるようになる。

ネルグ街で孤児としてすごしていたためかネルグ街の外から来た人間や金持ちにはあまりいい感情は持たず、この年齢でフグ鯨を捌けるほどの腕前をもってしまった弊害か、度々増長しそうになるが、そのために主人公の拳骨が落ちるので、深刻なまではない。

料理だけではなく足技も現在修行中。

モデルはワンピースの麦わら海賊団コックのサンジ。容姿もそのままワンピース原作のままだが、原作と違い主人公を尊敬している態度を隠さない。

・パティ

年齢：22歳

所属：グルメ・バラティエスタッフ店員兼料理人

モデル：漫画ワンピースから「パティ」

グルメ・バラティエのスタッフ兼料理人その一。

ねじり鉢巻をした、板前風の男で、料理の腕は一流でそれなりのベテランでもあるが、その容姿と言動。そして喧嘩っ早さから殆どのレストランから就職を断られ、また雇われたとしてもその度に問題を起こして店を追い出されているために長続した試しがない。

そのためその喧嘩っ早さを容認し、自身の高度な料理技術を惜しげもなく孤児たちに教える主人公に中世を慕っている。

ちなみに副オーナーのサンジのことは生意気なガキだと思っているが、その若さでの料理技術と貪欲なまでの向上心は密かに尊敬している。

デザート作りが得意。

実は戦闘も行うことができ、フォークを武器として使う。

モデルはワンピースのバラティエに出てくる料理人であるパティだが性格その他を多少いじっている。

・カルネ

年齢：23歳

所属：グルメ・バラティエ店員スタッフ兼料理人

モデル：漫画ワンピースから「カルネ」

グルメ・バラティエのスタッフ兼料理人その2。

丸サングラスをかけた男。パティのチンピラ時代からの相棒的存在である料理人。

パティと同じで行く先々の店で就職を断られ続けているところを主人公に拾われてグルメ・バラティエで雇われることとなった。

副オーナーであるサンジに思うところがないわけではないが、相棒のパティとは違い素直に尊敬している。

パティと同じく戦闘もこなすことができ、巨大なナイフを使う。

肉料理が得意。

モデルはワンピースのバラティエに出てくる料理人であるカルネだが、パティと同じく性格その他を多少いじっている。

※登場人物が増えたらその度に更新します。

## 第一話 料理人ゼフ

——誰かがいった。

全身の肉が舌でとろける霜降り状態の獣がいると。

濃厚で芳醇なマスクメロンや完熟マンゴーの高級果物のジュースや甘みのある泡が止めどなく踊る爽快な飲み物が沸き出る泉があると。

世はグルメ時代。人々は数多の食に魅せられる。

——世はグルメ時代。未知なる味を求めて探求する時代！

『アニメトリコ』第一話ナレーションより抜粋。

(CV：石丸○二郎)







## 【ネルグ街】

ネルグ街。それはI G O非加盟のグルメ犯罪都市の一つであり、同じくI G O非加盟国である“犯罪王国”ジダル王国に近い場所にある。

非加盟国の例に漏れず治安が非常に悪く、流通の禁止された食材が公然と出回る無法地帯で、グルメ刑務所に収監されている囚人の役1割がこの街の出身である。

しかし最近ではとある男（・・・）のおかげでその傾向が徐々に薄れていき、治安が良くなっていったのは、その筋の者たちの間では有名な話だ。

『グルメ・バラティエ』。ネルグ街の中央付近、この街の名物となりつつあるこのレストランにその男の姿はあった。

その男の名は「ゼフ」。このグルメ・バラティエのオーナーシェフにして、この物語の主人公である。



どうも諸君、はじめましてだな。

俺の名前は「ゼフ」。おかげさまでここ、ネルグ街で「グルメ・バラティエ」という店のオーナーシェフをやらせてもらってるよ。これからよろしくな。

俺は旧第一ビオトープというハングリートライアングルに囲まれた島でその所長であるあやめばあちゃんの養子として育った。なんでも俺は赤ん坊の頃この旧第一ビオトープにボートで流れ着いたらしく、そこをパトロール中に偶然通りかかったあやめばあちゃんに助けられたのだ。

それからばあちゃんは俺に自身の料理人としての技術や、美食屋としての技術を叩き込んでくれた。

なんでも俺には旨い食材を食べば食うほど細胞がレベルアップするという「グルメ細胞」という特殊細胞が生まれつき備わっているらしく、そのおかげか俺は料理人としても美食屋としてもどんどん成長し、20歳を超えた頃には自分でいうのもなんだが、いっぱしの料理人になっていた。

そんな俺は自分の人生のフルコースを作るために、ばあちゃんに免許皆伝を貰って相棒と共にいろんな所に旅に出たのだが、このネルグ街で出会ったグルメヤクザ組長のリュウと副組長のマツチの二人と意気投合し、この街に店を構え、日々店を切り盛りし

ながら、マツチたちと協力し街の孤児たちに食料を恵んだり、素質のある孤児や街で眠りてゐるチンピラ、料理人希望のグルメヤクザなんかをスタッフに雇いながら料理を教えたりして過こしてゐる。

そして実は本日、多くの人たちに支えられながら忙しくも楽しく日々を過こしていた俺の自慢のこの店に、とある大物が客としてやってきていた。

「できましたよ、事務局長」

「あら、おいしそう。さっそくいただくわ」

濃いヒゲとグラサン、おかつぱ頭が特徴のこの男は「ウーメン梅田」。あの「国際グルメ機構」、通称「IGO」で事務局長という大役についているこのグルメ時代の大物中の大物だ。……オカマだが。作者的にはもし戦闘シーンがあつたら絶対に釜と名のつく技を使うと思つてゐるのは完全なる余談である（メメタア）

梅田事務局長は、俺が調理した赤毛豚のローストをナイフで一口大に切り分けると、その濃い見た目からはとても信じられないほど優雅な仕草で口に含んだ。

「んー♪さすがはゼフちゃん、火の扱いに関して右にでる者はいないといわれるだけはある。とつてもおいしいわん」

「ありがとうございます」

事務局長に褒め言葉を貰い、我ながら単純だと思いながらも、自信の頬が自然と綻ぶのを感じる。やっぱり褒められて悪い気はしないからな。

だが今の俺にはそれより気になることがあったので、まずはそれを聞いてみることにした。

「それで、本日はいったいなんの用事なんですか？わざわざ店を貸しきりにまでして、用事があるなら適当に使いでも出してくれればいいのに」

その俺の言葉に、しかし事務局長はなぜか呆れたような顔をする。

「だってあなた、相手が下つ端だったら適当に煙に巻いて断るじゃない」  
「うぐっ!？」

俺は事務局長のその言葉に思わず言葉に詰まってしまふ。

実は俺が旧第一ビोटープを出てから、ばあちゃんの友人であるIGO会長である一龍氏にいろいろお世話になってるんだが、その縁で度々IGOから俺に対してグルメ食材捕獲の依頼や特殊調理食材の調理などの依頼が度々来るようになったのだ。

まあ初めは修行にもなるし、いろいろ出資してくれている会長にも恩があるからとおとなしく受けていたのだが、ここに店を構えていろいろ忙しくなり、それに何を勘違いしたのかIGOの職員の中に俺をIGOの便利屋みたいに思い始めてるやつがいたから、それが癪に障り、依頼が来てもやってきた人物が気に入らなければ適当に断ってい

たのだ。聞いてみたら別に俺がやらなくても他のやつで十分可能な依頼ばっかだったし。

「(今考えたらたぶん俺がネルグ街に店を構えたのも原因なんだろうな。ネルグ街出身だってだけで犯罪者予備軍扱いを受けたやつもいるっていうし、あいつらもそこらへんを勘違いしてたんだろ)」

まあ俺が断り続けることで向こうもそれを理解したんだろう。本当に重要な依頼がある時は下っ端じゃなくてこうしてそれなりの大物が直接押しかけてくるようになったので一気に断りにくくなってしまったが。

俺は事務局長の言葉に誤魔化すように視線を逸らしながら2、3回咳払いすると、話を逸らすために再び事務局長の方に視線を戻す。

「えー、つまり今日はなにか依頼かなにかで」

「ええ。といっても今回はグルメ食材の捕獲や調理とはまったく関係ないけれど」

そういうと、事務局長は手持ちの鞆の中から一枚の書類を取り出して俺に無言で差し出した。

俺はそれを首を傾げながらも受け取ると、書類の中身を確認する。

「ビオトープ襲撃事件？」

「ええ、実は最近うちのビオトープの食材が奪われる事態が多発していてねん。既に第

四ビオトープの「陸ウツボ」「バーガー貝」。第五ビオトープの「紅サソリ」がやられてるわん」

ちなみにビオトープとはIGOが生物の生態調査や繁殖のために建造した生物生息空間のことで、「庭」とも呼ばれる広大な敷地内では、自然同様の環境下で猛獣が放し飼いにされている。

俺の故郷である旧第一ビオトープも、ニトロの遺跡を研究するために建てられはしたが、他のビオトープの例に漏れず、これらと同じく生態調査や繁殖なんかのために多くの猛獣や植物なんかが放し飼いになっているのだ。

「警備はどうしてたんですか？ IGOの警備はそこいらの悪党程度じゃとても突破できないはずですが」

「そこいらの悪党程度ならねえ。——これを見なさい」

そういうと、事務局長は一枚の写真を俺に渡してくる。

「これはッ!？」

「そう、正式名称「グルメテレイグジスタンスロボット」。通称GTロボ。被害にあった現場の監視カメラのいくつかからその姿が確認されているわ。どうやら新型みたいだけど」

「グルメテレイグジスタンスロボット」。

テレイングジスタンスとは、遠隔地のロボが受ける視覚などの情報を操縦者がリアルに感じながら操縦できる技術のことで、このG Tロボとはそれを利用して深海数万メートルや月面を調査する無人探査機がグルメ用に進化したものをいう。なんとこれを使えば生身の人間でもロボを介して危険な土地へ足を踏み入れてのグルメ食材の調達が可能となるのだ。

操縦者と全く同じ動きをリアルタイムでこなし、その誤差は実に1ミリ秒以下。視覚・触覚・聴覚はもちろん今や嗅覚や味覚さえも忠実に操縦者に伝えるこの技術は、ちなみに医療機関でも大活躍で、世界的な外科医がその場にいながら世界中の患者の診察や手術さえも行えるようになったが、実はこのG Tロボを悪用し、世界のグルメ食材を牛耳ろうと悪用している組織がいることはあまり知られていない。

「……なるほど、美食會が絡んでいるというわけですか」

「ええ。それもかなりの実力者の仕業ねこれは」

美食會とはI G Oと敵対する闇の組織のことで、その組織力は名実ともに世界中のグルメ関連の期間の間でも世界一の組織であるI G Oに匹敵するほどだといわれている。

その目的は前述したように世界中のグルメ食材の独占にあり、それを調理させるためなのか世界中の料理人を浚ってでもいるようで、一度俺もやつらに襲われかけたことがある。(尤もその時はなんなく返り討ちにすることができたが)

そしてこの美食會こそが、このG Tロボを悪用し、グルメ食材強奪のための尖兵として悪用している組織なのだ。

そしてI G Oの警備の嚴重な警備の中、ビオトープの内部まで潜り込めるということは美食會の中でも事務局長のいうとおりにかなりの実力者とみていいだろう。

「実はうちの情報課の皆のがんばりで次にやつが現れるポイントが予測できたんで、うちの専属の美食屋の中でも上位の実力者を送り込んだんだけど、私の感だとちよつとそれでもイヤな予感がしたんであなたにその手助けを頼みたいと思つたわけなの。――

――それで、どうかしら？もちろん報酬は弾ませてもらうわよん♪」

期待の籠つた事務局長のその視線に、俺は少し考えたが、I G Oにはまだ借りがあるし、最近店が忙しくてちよつと欲しい食材もあつたので、ついでにその話を受けることにした。

「わかりました、その話受けさせてもらいます。それでそいつが次に現れるポイントはどこなんですか？」

そんな俺の言葉に、事務局長はなにやら満面の笑みを浮かべながらこう答えた。

「――洞窟の砂浜。フグ鯨の産卵場所よん♪」







### 【洞窟の砂浜】

ここは近年「深海の珍味」と呼ばれている幻の魚、フグ鯨の産卵場となっており、その海岸は洞窟の中にあり、海は非常に透き通っている。

そこまで行くルートは二つほどあるが、そのどちらも凡百の美食屋たちでは絶対に辿りつけないほど過酷。一つは全長数十km、深さ800mにも及ぶ迷宮のような洞窟を抜けるルートは、そこにはかの伝説の猛獣デビル大蛇を筆頭にした危険な生物がたくさんいるため、行ける確率は0.1%（プロの美食屋で1000人に一人）ほどしかなく、またもう一つ海側からのルートがあるが、そのルートを通り抜けるには深海1,000mまで潜る必要があるため、さらに確率が低くなる。

まさに深海の珍味と呼ばれるフグ鯨の繁殖場所に相応しい天然の防犯（セキュリティ）と呼ばれる場所なのだが、今回に限りその舞台はその洞窟ではなく、その洞窟の入り口付近の岩窟地帯で、その戦いは行われていた。

『ピーラーカッター!!』

「ぐはッ!？」

その姿からどこかトカゲを連想させるその機体、GTロボの技に今吹き飛ばされた男

の名は“トール”。グルメ警察機動隊の隊長を務める男で、元美食屋としても実績豊富な実力者だ。

そんな彼がなぜこんな場所でこんな目にあっているのかというと、実は最近IGOのビオトープ内にある食材や、各地にある貴重食材が、この今彼と戦っているGTロボらしきものに奪われる事件が多発しており、彼はその実力を

IGO上層部に買われてこのGTロボの捕獲、もしくは破壊を命じられ、次にやつが狙うであろうフグ鯨の産卵場所であるこの砂浜の洞窟までやってきたのだが、今回彼と相対したGTロボの操縦者オペレーターが予想以上に強く、こうして絶体絶命の事態にまで追い込まれているというわけである。

「———こんな、こんなはずではッ」

トールは前述したように美食屋としても多大な実績を誇る実力者。この砂浜の洞窟に住むという伝説の猛獣デビル大蛇も倒したことがあることから、自分でもそこいらのわか美食屋程度ならどれだけかかっても負けない自身がある。

だが目の前のこいつはそんな彼の自身を粉々に踏み砕き、現在その命を花を摘むように容易く刈り取ろうとしていた。

「(こいつはいつた……)」

そしてそんなトールに止めを誘うと、GTロボは一瞬でトールの懐に潜り込み、片手

を大きく振り上げる。

『コレデオワリダ!!』

「(???)までか!?!」

絶対的な絶望の中見たその光景に、ツールが自身の命を完全に諦めかけた

——その時だった。

「粗碎（コンカッセ）”!!」

『!?!』

突如聞こえてきたその声に、G Tロボは咄嗟にその場から飛び退いた。

するとそれから数瞬後、さきほどまでG Tロボがいたその場所に、上空から降ってきた青年の足が突き刺さった。

ドゴオオオオオオオン!!

「なあッ!?!」

目の前の光景に驚愕の声を上げるツール。

だがそれも仕方ないだろう。目の前で地面を文字通り「割る」なんていう芸当を見せ

られたら、常識人ならば驚愕の声の一つや二つあげたくなる。

だがどこからともかく現れたその青年は、そんなツールをよそに、GTロボが自身の攻撃を避けたところを見ると、舌打ちを一つ。その童顔のわりにはそこいらのチンピラのような青年だった。

「ちッ！外したか」

そして青年はGTロボに向き直り、戦闘態勢を維持しつつも、後ろでにツールへと話しかける。

「あんたが、グルメ警察のツールさんかい？」

「あ、ああそうだが。君は……？」

トールのその言葉に、その青年は横目で一瞥しながらこう答えた。

「——俺の名はゼフ。しがない料理人さ」

## 第二話 戦闘。V S G T ロボ

「(どうやら間に合ったみたいだな)」

目の前にいるG T ロボから意識を外さないようにしながらも、横目で背後にいる男の状態を確認すると、俺は内心ホッと安堵の息をつく。

事務局長の依頼を聞いた俺は、さっそく相棒に乗り込み、今俺の後ろにいるグルメ機動隊の隊長と目の前にいるG T ロボの捕獲に対して打ち合わせをしようと思っていたのが、上空から、G T ロボが写真で見た機動隊の隊長と交戦しているのを見て、咄嗟に相棒から飛び降りてこうして駆けつけたのだ。

……え？相棒ってなにかって？まあ、それはまた後で説明するよ。今はそれどころじゃないからな。

俺はとりあえず敵じゃないことを示すために懐から一枚の手紙を取り出すと、後ろで未だ困惑しているツールにそれを投げ渡す。

「実はウーメン梅田事務局長に頼まれてね」

「局長に？」

「ああ。なんでも事務局長が嫌な予感があるからって個人的に俺にあんたを助けてくれ

と依頼されたのさ。その手紙に詳しい内容が書いてある」

そして俺は横目でツールが手紙を読み始めたのを確認すると、視線を再び前方にいるG Tロボへと戻す。

「しかし、事務局長の判断は正しかったみたいだな」

目の前のG Tロボから自然と伝わってくるその威圧感プレッシャーから、その操縦者が尋常ではない力量の持ち主であることが推察できる。少なくとも相手は美食會でも幹部クラスと見ていいだろう。

もしかしたらグルメ界入りできるほどの実力者なのかもしれない。

「まあ、たとえそうでもこんなおもちゃに乗ってる状態なら関係ないが」

前に聞いた話が正しければG Tロボはその並の美食屋なら相手にならない性能性能に、ある程度なら操縦者の力量を反映させることができるという代物らしいが、逆にそれはある程度しか実力を反映できないということに他ならない。つまりはグルメ界入りの人間はこのG Tロボででは、全力の実力を出せないということになる。

たとえこいつが新型だとしても後ろのツールが重症を負いながら未だ生きていることからこいつもその限りではないことは確かだろう。

ならばさっさと仕留めるかと、俺が再び戦闘態勢に入ろうとした、その時だった。

先ほどまで様子見でもしていたのか、だんまりを決め込んでいたG Tロボが突如喋り

だしたのは。

『……ナルホド、キサマガ<sup>あかあし</sup> 赫足<sup>あかあし</sup>ノゼフ。マサカコンナトコロデアウコトニナルトハオモワナカツタヨ』

「あん？俺のことをしつてんのか？」

そんな俺の言葉に、何を思ったのか、GTロボは（というよりその操縦者は）一瞬間を空けると、小さく笑い声を上げた。

『ククク。我々ノ仕事ニハ料理人ノスカウトモハイツテイル。料理人ランキングノ上位に入ツテイル貴様ヲ知ラナイハズガナイダロウ。確力貴様ノ所ニモスカウトガイツタハズダガ？』

「ああ、そういうことね。確かそんなこともあったなあ」

確かあの時はネルグ街に店を構えはじめての頃で、ガキどもを人質に取りやがったから半殺しにして送り返したんだっけ。だったらこいつが俺のことを知ってもおかしくねえな。

まあそれなら話がはええな。

「それならもう諦めて大人しくしてな。俺のことを知ってるつつうんならGTロボ<sup>そんなおもちゃ</sup>じゃ勝てないことぐらいわかるだろ」

そう、先ほどこいつがいったとおり、実は俺は世界でも上から数えたほうが早い腕前

の料理人。たとえこいつがグルメ界入りを果たしている強者だとしても、G T ロボを介してでは俺に勝てるはずもない。

「まあそうあっさり諦めてくれるわけではないだろうが……」

なにせ、いくら一定以上の実力者にはむしろハンデになるとはいえ、G T ロボはこいつらの基本戦略の一つといってもいい。それを不倶戴天の敵であるI G Oにみすみす渡すことなどできるはずがない。

そして案の定、そのG T ロボは俺の諦めろという言葉に耳を貸さず、改めて戦闘態勢をとった。

『アイニクトコチラニモ都合ガアルノデナ。ソレハ諦メテモラオウ』

「まあ、そうくるよなあ」

その言葉に俺はため息を一つ吐きながらも、仕方ないと思いつつ構える。

「まあちやっちやと終わらすか」

——そして戦いは始まった。

★ ★



突如はじまった主人公ゼフとGTロボの戦い。先手をとったのはGTロボ。

GTロボは凄まじいスピードで一瞬でゼフの近くまで近寄ると、右腕を回転させながらゼフに向かってその腕を振り下ろす。

『ミキサーパンチ!!』

まるでミキサーのように凄まじい勢いで回転するその拳が、相手の肉を削り取ろうとゼフに襲い掛かる。

常人ならば絶対にかわせないであろうその一撃を、しかしゼフはしゃがんでなんなくかわす。

「あめえよ」

そしてゼフは今度は俺の番だとその場で後ろに倒れこみ逆立ち状態になると、その反動を利用して体をバネのようにすると、GTロボの顎めがけて蹴りを叩き込んだ。

「木犀型斬《ブックティエール》シユート!!」

『グハッ!?!』

蹴りの衝撃にGTロボは思わず呻き声を漏らす。

そしてゼフは空中に飛び上がるとまずはGTロボの首元めがけて蹴りを放った。

「首肉!」

『ム!?』

G T ロボはなんとかそれを防ぐが、ゼフのその攻撃の真骨頂はまさにこれから。

彼はそのまま次々と連続で蹴りを常人では考えられないほどのスピードで放つ。

「エポール 肩肉・背肉・コトレット 鞍下肉・セル 胸肉・ボワトリース もも肉!」

『グッ!? ガッ! グア?!!』

肩、背中、腰、胸、そしてとてもと凄まじい速さと威力で放たれるその蹴りに防御が追いつかず、つぎつぎと攻撃をくらっていく。

最後にゼフは止めとばかりに強烈な後ろ蹴りを放った。

「ムートン 羊肉シヨット!!」

おそらく捕獲レベル30以上の猛獣でも一撃で仕留められるであろう凄まじい威力のその後ろ蹴りがG T ロボへと迫るが、G T ロボもやられてばかりではない。

『ナメルナ!!』

G T ロボはそう怒号を上げると、顔の部分が中心から真つ二つに割れ、中からレーザーストームがゼフへと向かって真つ直ぐに放たれた。

「なあッ!」

さすがにこれはゼフも予想外だったのか、彼は攻撃をとっさにキャンセルすると、体を回転させて、自身に向かってきたそのストームをなんとかやり過ごし、G T ロボはその

隙についてゼフから咄嗟に離れて距離をとった。

ゼフもなんとか空中で姿勢を立て直すと、そのまま地面へと着地する。

ゼフは額から冷や汗を流しながらも口を開く。

「ふー、あせった。まさかあそこでレーザービームが出てくるとは思わなかったぜ」

ゼフは先ほどのG Tロボの攻撃に内心戦慄しながらもそう答えた。

先にいっておくがレーザービーム自体はゼフにとつては特に脅威でもなんでもない。

ゼフの体内にあるグルメ細胞と鍛え上げられた肉体ならば、体に穴は開くだろうが、その程度食事をすればすぐに再生する。

ゼフが戦慄したのはレーザービーム自体ではなく、G Tロボがレーザービームで狙った箇所とそのコース。眼球から脳にかけて一直線の道筋で狙ってきたからだ。

脳は肉体に命令を出す重要な機関。そこをやられてはさすがのゼフも無事ではすまない。

ゼフが戦慄したのは安全の代わりに自身のハンデともなるはずのG Tロボを使つての戦闘で、絶対に勝てないはずの自分相手に一撃で逆転する手を打ってきたその戦闘経験の濃さにあった。

「(……これはなにか下手なことされる前に本気を出してきつきと終わらせたほうがいいかもしれない)」

そしてゼフは自身の切り札を切ろうとした。……しかし、その前にG Tロボが動く。

『……フム、ヤハリコノ状態デハ勝負ニモナラナイカ』

「は？」

突然のG Tロボの敗北宣言にゼフは困惑して思わず呆けたような声を出してしまう。

——その隙をつかれた。

『スタンフラッシュ!!』

「なあッ!」

G Tロボの頭部の部分がいきなり開いたかと思うと、そこから俺に向かって強烈な光を放ってきたのだ。

「くうッ!」

突如発生したその光に俺は思わず目を瞑ってしまった。

そして光が収まり、目を開くと……。

「——なるほど、悪くない手だ。」

目の前の光景に自分がしてやられたことを理解したゼフは、どこか関心したような声を上げる。ここから遠く離れた場所に、G Tロボがこちらに背中を向けて逃走している姿が確認できたからだ。

おそらく今の自分では勝てないことを確信したのだろう。だからこそあのゼフが戦意を高めようとした瞬間、思わぬ言葉で僅かな隙を作り目を潰してきたのだろう。

確かにあのG Tロボの操縦者がグルメ界入りできる実力者だとしてもG Tロボを使っている限りゼフには不意でもつけなければ絶対に勝てない。だったらG Tロボを奪われぬように自爆でもするか逃走するしかないだろう。

G Tロボを渡さないならば自爆でもした方が手っ取り早いはずだが、やつはおそらく今回の獲物であろうフグ鯨を持っていたし、今回ゼフの後ろには重傷者のツールがいる。なので深追いはできないと思つて逃走を凶つたのだろう。

確かにその判断は正しい。逃げようとしている場面を見ているならともかく、既にあそこまで遠くに逃げているならゼフもそれなりにがんばらなければ追いつくのは難しかった。

だからこそゼフは相当な実力者であるはずのG Tロボの操縦者が、プライドに固執せず、任務を遂行するために冷静に逃走を判断し、それを成功させるための道筋を作り上げたことに関心の声を上げたのだ。

戦闘では圧倒的に不利ではあったが、もはやこれでは今回の勝負はこのG Tロボの勝利といえよう。

——尤もそれはこの場に彼の相棒がいなかった場合の話になるが。

ゼフは今も逃走を続けるG T ロボの姿に、慌てず冷静にG T ロボを指差しながらも、上空にいる自らの相棒に向かって叫んだ。

「そいつが敵だ！ 噛み砕け『サンドリヨン』!!」

すると、上空から一つの巨大な灰色の生物が現れ、猛スピードで場を離れていったG T ロボへと近づくと、その鋭い牙で噛み付いたのだ。

『グ、グアアア!?!』

逃げ切れると油断していたのだろう。その突然の攻撃に驚愕しながらもG T ロボは苦悶の声を上げる。

そしてゼフの後ろで今まで自分で傷の手当をしながら少しずつ回復を凶っていたツールがその灰色の生物を見て、驚愕の表情を浮かべる。

「あれはまさかツンドラドラゴンか!?!」

ツンドラドラゴン。それは氷の大陸アイスヘルに住む「地獄の番人」とも呼ばれるドラゴンのことで、口から吐き出されるその大量の水分を含んだその息の攻撃は、アイスヘルの低気温も相まって一瞬で吹雪と化す。

捕獲レベルも55と、人間界の生物では最高クラスの強敵で、その冷気はどんな防寒

具でも防ぐことができずにすぐさま凍り付いてしまうという、まさに出会ったが最期の地獄の番人の名に相応しい生物なのだ。

だが、そんなトールの言葉を聞いたゼフは、首を横に振ってそれを否定する。

「いや、あいつはツンドラドラゴンじゃなくてその祖先のサバナドラゴン。ツンドラドラゴンのように氷の世界だけではなく、砂漠のような熱帯地帯にも対応できる。――

まあ今じゃ絶滅種らしいし、あいつは変異種だから普通のと違って灰色なだけだな」  
そういつてゼフは少し笑いながらも、自身の相棒、パートナー猛獣である灰色のサバナドラゴンサンドリオン「灰かぶり」へと一瞬で近づき頭を撫でる。

「よくやったサンドリオン。もう離していいぞ」

そういうと、サンドリオンはぐると小さくひと鳴きしながらも、口にくわえていたGTRロボの残骸を地面へと放り出す。

「よし、いい子だ」

そしてゼフはもはや身じろぎもしくなくなったGTRロボの残骸をしばらく調べていたが、やがてその中心部からメタルボディでできた虫の残骸のようなものを発見する。おそらくこれがこの機体のコアなのだろう。

そのコアが壊れているということは、もうこの機体は動くことは完全にできないだろう。

それを確信したゼフは満足げな笑みを浮かべる。

「——ふむ、少してこずったがこれで任務は完了か。ボロい仕事だったな」

そういうと、ゼフはG Tロボの残骸を持って踵を返す。そろそろ顔色が青を通り越して真っ白になりかけているトールの傷の手当をするために。



### 第三話 悪意の胎動。そして出会いと帰還。

〔悲哀の森ソーンウッド〕。

人の悲しみを表すという文字通り巨大な針のような木を張り巡らせ外的の進入を防ぐその森に、美食會の人間界本部は存在する。

その本部の一室で、仮面を被り漆黒の衣服を纏ったその男の姿があった。

「くっ。噂には聞いていたがまさかあそこまでの実力者だったとは」

苦悶の声を上げ、そうつぶやくこの男の名は“スタージュン”。強大な闇の組織である美食會で副料理長という役職につく、組織の中でもトップクラスの實力者だ。

そんなスタージュンであったが、今は普段の自信溢れる姿とは違い、疲労困憊の姿で、自身の部屋に用意された大きな椅子に座り込んでいた。

その理由は先ほどまで彼がG Tロボに乗って行っていたフグ鯨の捕獲任務。その際に彼が乗っていたG Tロボが、その任務で敵対した人物に自爆する隙もなく行動不能にされてしまったためだ。

その敵対した人物の名は“ゼフ”。

赫足の異名を持つ料理人で、世界料理人ランキング1位と世界でもトップクラスの

実力を持つている。

スタージンはその男と相対した時に、なぜこのような男がここにいるのかと思いつながらも、決して負けるとは思わなかった。

噂でスカウトが半殺しにされて送り返されてきたと聞いてはいたが、そのスカウトは自分の管轄とは関係なかったし、興味もなかったからだ。グルメ界入りするほどの猛者と聞いていたが、それを感じさせるほどの威圧感をその料理人からは感じることはできなかったからだ。

——だがそれはスタージンの間違いだった。

スタージンはまず左手調べとGTRロボの腕を回転させながら放つ技、ミキサーパーチを放ったのだが、それをあっさり交わすと、そのまま凄まじい蹴り技で、一気に追い詰められてしまったのだ。

その時にはもう初めに感じた時のような威圧感の無さが嘘のような覇気を感じたことから、おそらく実力を隠していたか、戦闘時以外は実力をむやみにさらさぬよう抑えるタイプなのだろう。

そして生身ならともかくGTR<sup>足</sup>ロボ<sup>脚</sup>に乗ってるような状態では絶対に勝てないと判断したスタージンは一瞬の隙をつき任務を優先するために逃走を図ったのだが、その際ゼフのパートナー猛獣であるサバナドラゴン「サンドリヨン」に噛み砕かれ、そのまま

行動不能に陥ってしまったのだ。

さらにそのせいでフグ鯨の捕獲に失敗し、先ほどまで自分の上司である料理長に折檻を含めた叱責を受けていたので、このように疲労困憊に陥っているというわけである。

スタージンは料理長からの激しい叱責のために痛む体に顔を歪めながらも自身をGTロボに乗っていたからといって軽く打倒せしめた料理人の顔を思い出す。

「あの男、さすがは料理人ランキング上位だけある実力者だった。しかもまだまだ本気を出してはいないのだろう」

なにせ異名の由来ともなった噂に聞く真つ赤に染まった足技を出させることもできずに終わってしまったのだから。

スタージンは考える。あれほどの実力者なら、必ずボスの役に立つ。だが捕らえるとしたらたとえ二ト口を使うとしてもそこいらの下っ端程度では話にならない。

「……ならば私が直々に出向くしかないか」

そう呟くスタージンの言葉は、どこか仕事だからしょうがないという感じだったが、しかし彼は気づいていなかった。

——自身の口元がいつの間にか獲物を見つけた狩人のような獰猛な笑みを浮かべ

ていることを。

★ ★

——さて、その頃スタージユンの乗ったG Tロボを撃破したゼフは、未だに砂浜の洞窟付近にいた。G Tロボのせいで重症をおった、グルメ警察のトールの治療を行っていたためだ。

「これで、どうだ？もう大丈夫だと思うが？」

包丁を片手にトールにそう尋ねるゼフのその言葉に、トールは訝しげに自分の体の調子を確認し、そして愕然とする。

「な、治ってやがる!?!いい、いったいどうして!!」

そう、命に別状はないものの、歴戦の美食屋でもあるトールが行動不能に陥るほどの重症。そんな彼の怪我が、まるでなにもなかったかのように治っていたのだ。

まるで理解できないその状況に驚くトールの姿を見て、ゼフは僅かに安堵の笑みを浮かべた。

「よかった、久しぶりにやったから少し心配だったんだけど、その様子なら無事に成功し

たみたいだな」

一般には広まっていない料理の技術に「蘇生包丁」というものがある。

それは自己再生機能を持つ生物やそれを促す鉱物から造られた包丁のことで、これで見切られた食材は細胞が一気に活性化し、まるで生き返るように分裂を繰り返して蘇生する。

しかしそのためには、細胞を傷つけないように細胞同士の隙間から包丁を通すという高い技術が必要となり、また人間の治療にも応用可能だが、あくまでも回復を促すだけで、蘇生包丁と一緒に栄養価の高い食材を食すことで初めて効率のいい回復が見込める。つまり既に死んだものの蘇生は行うことはできない。

もともとは食材の味や鮮度を保つ目的で造られたもので、グルメケースの無い大昔に生まれた、一流の料理人ならば普通に使っていた技術だったが、しかしこれを自在に使えば一個の食材を少量ずつなら無限に食べられるため、IGOは食の流通が乱れることへの懸念から使用を制限。倫理的な観点からも禁じられている闇の技術だ。

ゼフはこの蘇生包丁を使用し、トールの治療を行ったのだ。

「まあこれで大丈夫だろうが、一応病院には行つといた方がいいぞ」

「あ、ああ。ありがとう」

困惑しながらも礼をいうトールの姿に、ゼフは別にかまわないといつてからそういえ

ばと言葉を続ける。

「あのG Tロボの残骸はどうする？ 実は事務局長からG Tロボの捕縛は頼まれたんだが、どこに運べばいいのかは聞いてなくてな」

「ああ、それなら後でI G Oの職員が来るからそのまま置いていつてくれればかまわな  
いが……」

「そうか、それは助かる。実はこの後用事があつてな」

「用事？」

「ああ」

ちなみにゼフの用事とはフグ鯨の捕縛。せつかくだからネルグ街のガキどもに食わせてやろうとグルメヤクザの副組長の「マツチ」にも頼まれていたこともあり、依頼を受ける前に取つてこようと思つたのだ。（ちなみにゼフの故郷である旧第一ビオトープにもフグ鯨はいるが、一応ビオトープの食材は禁止されているから持ち出すことはできない。ばあさんの所長権限があれば持ち出せるけどそこまで迷惑をかけることはできないしな）

「思つたより時間がかかつちまつたが、今ならまだ間に合うかもしれないからな。パツ  
とつてパツとつてくるよ」

ゼフのその言葉に、トールはしばしなにか考えていたが、やがてなにか決心したかの

ように一つ頷くと、先ほどまでG Tロボが持っていたフグ鯨の大量に入った網を持ってきてゼフに向かって差し出した。

「じゃあ、これを持ってけ。今からいつて間に合うかどうか知らないし、これなら足りるだろ」

「それは助かるけど……いいの？」

フグ鯨は調理もそうだが捕獲も難しいレア食材。これだけの量をI G Oに持つていこうとすれば結構な手柄になるはずだが。

そんなゼフの言葉にトールは苦笑する。

「別にかまわねえよ。グルメ警察機動隊の隊長になったのも美食屋に限界を感じてたからなっただけだし、別に出世したいわけでもないしな。それにこいつは今までみたいにおトーブから強奪してきたわけじゃない野生のグルメ食材。だったら別にかまわねえだろ」

「……わかった。そこまでいうなら」

そういつてゼフはフグ鯨が入っている投網を受け取る。

「もし申し訳なく思っせんなら今度あんたの店に行ったらなんか奢ってくれ。今度休みの日にお邪魔するからよ」

「ああ、そういうことなら了解だ。いつでも来てくれてかまわない。とっておきをご馳

走しよう」

そういつてゼフは感謝の念を込めて、笑みを浮かべながら片手を差し出すと、ツールもそれを力強く握り返した。

「それじゃあ俺はこれで。ガキどもが待つてるんでな」

「ああ、気をつけてな」

ツールのその労いに、ゼフは笑みを一つ返し、フグ鯨の入った投網を持ち上げると、サンドリヨンへと乗り込んだ。

さっそく帰ってフグ鯨をガキどもに振舞おうとそのまま飛び立とうとした——その時だった。その声が聞こえてきたのは。

「な、なんですかあれ——!!?」

「あれは!？」

「あん?」

二名ほどの騒がしい声が近づいてくるのが聞こえてきたので、そちらを向くとそこにはふたりの男がそれぞれ驚愕の表情を浮かべながらこちらを見ているのが見えた。

突如現れた二人の男に、ゼフは不思議そうに首を傾げたが、そこで彼は気づく。その二人の男の内の一、大柄な男の顔をどこかで見たとあるということに。

「(あれは確か……?)」



ゼフはしばらくその男の顔を見つめていたが、その視線に気づいたのだろう。ゼフの視線と大柄の男の視線が交錯する。

そして男はゼフの姿を見て首を傾げた。

「あん？なんだおまえ？」

「どうしたんですか、トリコさん？」

——これが我らが主人公ゼフと、後に美食神アカシアのメインディッシュ『ゴツド』を手に入れる伝説のコンビとなる美食四天王が一人“トリコ”とその相方である料理人“小松”の初めての出会いだった。

## 第四話 『ゼフ』という男について

I GO 非加盟国ネルグ街付近上空。人間界では規格外の大きさを持つ灰色の竜の上  
にその男たちの姿があつた。

その内の一人、大柄な男が満面の笑みで口を開く。

「いやー、しかしラツキーだな小松？」

「本当ですね、トリコさん。まさか料理人ランキング1位のゼフシェフの料理を食べ  
れるなんて夢のようです!!」

「ははは。そんなに喜んでくれて嬉しいよ」

彼らの名前はそれぞれトリコに小松。そしてゼフ。原作主人公コンビとこの小説の  
主人公である(メモry)。

なぜ彼らがゼフのパートナー猛獣である灰色の竜、サンドリヨンと一緒に乗っている  
のか。それはゼフが彼らを誘ったからだ。

前回ウーメン梅田事務局長の依頼によりG Tロボの捕縛に成功したゼフは、G Tロボ  
の残骸をグルメ警察機動隊隊長であるツールに託し、自身の店があるネルグ街に帰ろう  
としたところに彼らと出会ったのだ

そして本来ならそのままお別れになるはずだったが、ゼフが料理人ランキング上位のシェフだと知っていたトリコがせっかくなので彼の料理が食べたいと頼み、ゼフもグルメ四天王の一人であるトリコと誼を通じるのは悪くないと考え、彼を自身の店へと招待することに決めたのである。

「まさかあんなところで美食屋トリコに出会えるなんてなあ……」

美食屋トリコ。それはこのグルメ時代において最も有名な男の一人だ。

このグルメ時代文字通りのトップであるIGO会長一龍の四人の弟子「グルメ四天王」。その中で最も多くの新しいグルメ食材を発見し、このグルメ時代に貢献してきたのがこのトリコという男なのだ。

今ではグルメ時代のカリスマの一人として、人々から尊敬と感謝の念を集めている。

ゼフが今回彼を誘ったのも有能な美食屋である彼と誼を通じておきたいという下心もあつた。

ゼフは料理人としての仕事のほかに美食屋としての仕事もやっているのだが、自身の教え子でもある従業員スタッフがいるとはいえ、さすがにオーナーシェフである彼が何度も店を開けるわけにはいかないので、腕の立つ美食屋とは何人知り合いになっても困ることはない。

「(それに……)」

ゼフはちらりとトリコと談笑している小柄な男、小松へと視線を向けた。

なんでも彼は五つ星レストランであるIGO直轄のホテル・グルメの料理長をやっているらしく、俺のように料理人ランキング上位100位以内の料理人たちにはまだ及ばないようだが、その肩書きに相応しい技量を持っていることを感じることができる。

トリコも認めている料理人ということでも少し話してみたのだが、その謙虚で、それについて料理の知識に貪欲な姿勢。そしてその向上心は同じ料理人として好感がもてる。……いやどもまさか、俺の正体がわかったとたんいきなりあそこにいた理由を説明する前にいきなりサインを求められるとは思わなかったが。

さて、実は今回そんな彼らを誘ったもう一つの理由として、彼を見た時に感じたある感覚が気になったからというのもあったのだが、まあそれはまた今度にしよう。

と、そこでゼフはいつの間にか眼下に見慣れた街並みが見えてきたことに気づいた。

「おっと、そろそろ着くぞ二人とも」

「えっ？」

「おお、あれが!!」

ゼフの言葉にサンドリヨンの上から下を覗き込む二人。そんな二人の様子にゼフは薄く笑みを浮かべながら答えた。

「そう、あれが俺の店がある街。」

## ——ネルグ街だ」

★ ★

どうも皆さんはじめまして。僕は「ホテル・グルメ」で料理長をさせていただいている小松と申します。以後どうかよろしくおねがいます。

実は僕、今幻の魚であるフグ鯨が十年ぶりに深海から産卵のためにながってくるというところで、その捕獲をするというトリコさんについていかせてもらったのだが、その帰り道とある人に出会いなりゆきでご馳走になることになりました。

おかげで僕のテンションは今ギガギガ（最上級）です！

「あれ、ゼフさん帰ってたんですか？」

「お疲れ様ですゼフさん」

「ゼフさんおかえりー！」

「ああ、ただいま。元気にしてたかお前ら」

そう、今道行く人たちに笑顔で話しかけられているこの人こそが今回僕たちがご馳走

になることになった人で名前はゼフ。

六年前新星のごとく現れたこの人は、その大胆かつ精密な調理技術に他の料理人たちでは真似できない絶妙な火加減。そして自ら捕ってきた滅多に食べられない高レベルのグルメ食材を使った極上の味の料理を提供することから瞬く間に話題を集め、また第二級麻薬食材のエレキバナナ、超特殊調理食材であるサンスオオトカゲなどの危険食材たちの調理法を確立し、また自身の調理技術を惜しげもなく多くの人に伝授し、優秀な料理人を多く誕生させるなど多くの功績を打ち立てたことから美食ランキング1位と26歳の若さでランキング上位にランクインした天才料理人。

また、美食屋としても優秀で、“赫足”という二つ名を持つほどの蹴りの達人でもあるこのグルメ時代で最も有名な一人。

まさかそんな彼の料理を食べるなんて夢のようだ。

「(それに彼はフグ鯨を捌ける世界でも数少ない料理人。そんな彼の調理を見るなんて本当にラッキーだ)」

と、そんなことを考えていた時だった。

「ん? ありやあ……」

「? どうしたんですかトリコさ……ん?」

トリコさんが突然不思議そうな声を上げたので、それにつられてトリコさんの視線の

先を辿り思わず絶句する。

なぜなら目の前から僕らの方に黒服にサングラスといった明らかに普通とは違う強面の男性たちが大勢走りよってくるのが見えただからだ。

「な、なんですかあの人たち!？」

「ありやあ、グルメヤクザだな」

「グルメヤクザ!!」

なんとなしにいったトリコさんのその言葉に、僕は思わず驚愕の声を上げてしまう。

グルメヤクザ。それは非合法食材の取引を生業とする美食屋集団のことで、主にネルグ街をはじめとしたIGO非加盟国を拠点に、活動しているらしい。

非合法の食材の取引をしているだけあり、IGOの決めた法律としては犯罪者集団ではあるのだが、なにぶんIGOが手を出せない非加盟国を拠点とし、中には非加盟国の治安維持を担っている組もあるため半ば黙認されていると聞いたことがある。

だから最近では治安が急激によくなっているらしいが、一応非加盟国であるこのネルグ街にいることは別におかしくはないのだが、

「(なんでこつちに来るのー!!?)」

だが、その理由はすぐにわかった。グルメヤクザの人々がゼフシェフの目の前までくると一斉に中腰になりながら礼をとったからだ。

『お疲れ様です、ゼフの兄貴!!』

「……………へ?」

「ほう」

そんな彼らの様子に僕は思わず呆けたような声を出し、トリコさんはどこか感心したような声を出す。

「(え?なにこれ。いったいどうなってるの!?)」

突然の事態に混乱する僕をよそに、彼らにそんな態度をとられた当の本人であるゼフシエフは苦笑いで答える。

「おう、ただいま。———とかいい加減いちいち仕事先から帰ってきたぐらいでこんな大勢で出迎えなくていいっていったらどうだろうが」

「そうはいきませんよ。兄貴はこのネルグ街の恩人。組長おやしからも丁重に扱えとお達しも出てるんですから」

「大げさな」

グルメヤクザの人たちのうちの一人の言葉に、ゼフシエフは呆れたような苦笑で返すが僕は彼の言葉に、以前呼んだ料理関係の情報雑誌に載っていたゼフシエフが世間で評価されている理由の一つを思い出す。

先ほどいったように、ゼフシエフがその若さで料理人ランキング上位にランクインす



ることになった実績の一つに、その調理技術を惜しげもなく伝授し、多くの優秀な料理人を生み出したということが上げられるのだが、そのための施設や一定の腕前に達した自らの教え子のために店を出店させるための資金を低金利で貸し出し、また自身の店や弟子の経営する店に街の外の人間も気兼ねなく通えるように街の開発の費用も自費で出し、そのために最近ではネルグ街の治安は見違えるようによくなっているらしい。おそらく彼がゼフシエフのことをネルグ街の恩人といったのはそれが理由だろう。

「慕われているんだな……」

表の世界の住人とは相容れないはずの裏世界の人であるグルメヤクザの人たちにも慕われるその人望に、元からあった彼への尊敬の念が強くなるのを感じる。

そんな僕の思いをよそに、ゼフシエフはそのグルメヤクザの人たちと話を続ける。

「すごいや、マツチのやつはどうした？姿が見えないようだが」

「ああ、マツチさんは仕事です。なんでも最近ちよつとすごい食材の噂を小耳に挟んだんでその情報収集に」

「へー、大変だねえあいかわず。——あ、そうだ。今日は客を連れてきたんだよ」

と、そこでゼフシエフは視線をこちらへと向ける。どうやら僕たちを紹介してくれるらしい。

「こいつらはトリコと小松シエフ。今回の仕事で偶然あつてな、せっかくだから招待し

「たんだ」

そんなゼフシエフの言葉に、グルメヤクザの人たちはどこか驚いたような表情を浮かべる。そんな彼らの視線はなぜかトリコさんを警戒しているかのように見えた。

「(……え？なんで?)」

僕はグルメヤクザの人たちの思わぬ反応にひよつとして以前にトリコさんと揉めでもしたのかと思つてトリコさんの様子を横目で伺うが、若干戸惑っている様子から見てトリコさんにも身に覚えがなさそうだ。

そんな僕の考えをよそに、グルメヤクザの人たちの内の一人。おそらくリーダー格であらうある程度年配の男性がおそろおそろといった感じでゼフシエフに尋ねる。

「あのトリコつてひよつとしてあの男と同じグルメ四天王の……?」

そんな彼の言葉に、ゼフシエフは「ああ、なるほど」と呟きながら、なにやら納得したように彼の質問に苦笑しながら答えた。

「ああ、安心しろ。こいつはあいつと違つて誰彼かまわず喧嘩売るようなやつじゃないから。俺が保障しよう」

「は、はあ。それならいいんですが」

ゼフシエフの言葉にどこか腑に落ちなさそうな顔をしながらも、そのグルメヤクザの人は安堵の息を漏らした。気のせいかわりの人たちもゼフシエフの言葉に安心してい

るようだ。

そんな彼らのやりとりを見ていたトリコさんは、訝しげな顔をして口を開く。

「どうやらだいぶグルメ四天王を警戒してみたいだが、他のやつがなにかやったのか？」

「ん？ああ、お前さんの同期にゼブラつていただけろ？そいつとこいつらが前ちよつとしたことで揉めてな。こいつらの副組長を半殺しにしちまったんだよ」

「ゼブラだと!？」

ゼフシエフのその言葉にトリコさんが驚きの声を上げる。

グルメ四天王ゼブラ。その名前だけは僕も聞いたことがある。

なんでもカリスマとして尊敬されているトリコさんと違い、恐怖の象徴として知られており、最近ではニュースに天気注意報や猛獣注意報等と同じく、ゼブラ注意報などというものがあつたりする。その危険性は人間でありながら第一種危険生物に指定されるほどなんだとか。……できれば会いたくな。

「まあ、そのゼブラつてやつもその後再生屋に捕まったらしいけどな。——それよりこの話はもうやめようぜ、辛気臭くてしょうがねえ。あいつも別にもう気にしてねえだろうし」

そういうとゼフシエフは先ほどから手に持っていたフグ鯨の入っている網を周りの

人たち全員に見えるように高く掲げた。

「仕事の帰りにこのとおりフグ鯨を手に入れてな。この際だからこいつらを交えて宴会でもしようと思うんだがお前らもくるか？」

「本当ですか!？」

「やった!!」

「フグ鯨、それも兄貴の料理が食えるなんて!」

先ほどまでとは違いグルメヤクザの人々は喝采の声を上げ盛り上がる。

「まあそれは仕方ないよね、なんてったってフグ鯨だもん」

そしてゼフシエフはそんなグルメヤクザの人たちの様子に満足げな笑みを浮かべると、再び口を開いた。

「それじゃあ今から三十分後に俺の店に集まれ野郎ども!!スラムのガキどもを呼ぶのも忘れんなよ」

『おう!!』

ゼフシエフの言葉に威勢よく返事をするグルメヤクザの人々。その様子はどこか強固な絆を感じさせられて、見ていて気持ちいい。

……ただ、

「これ、僕たちのこと忘れられてませんトリコさん？」

「まあ、気にすんな。おもしろそうだし」

「はあ、トリコさんがそういうなら……」

笑顔のトリコさんのその言葉にどこか納得できないものを感じたが、まあここでどうこう言っても仕方がないので僕は気を取り直す。

「(……まあせっかくゼフシエフのお店で食事ができるんだし、気にせず楽しむことにしよう)」

そして僕たちは新たに加わった面子とともに、ゼフシエフのお店へと向かうこととなった。

わくわくするなあ。

## 第五話 グルメ・バラティエ

「グルメヤクザの人たちと合流した僕たちは、そのまま十分ほど歩き、ようやくゼフシエフのお店であるグルメ・バラティエへと到着した。

「おお、これが!？」

「グルメ・バラティエですか……」

その紅色を基調としたお城のような建物の美しさに、僕たちは思わず簡単な息を漏らす。

なんでもさつきグルメヤクザの人の一人に聞いた話だと、ゼフシエフがこの街に店を構えるという話になった際、せっかくだからこの街の名物になるぐらいに立派なものにしようということとでグルメヤクザの人々を中心としてこの街の人たちが協力してこのお店を作り上げたらしい。

「(そりゃあ、ゼフシエフのお店なら名物になるだろうなあ)」

なにせ料理人ランキング100位以内に入っただけでそのお店の収入は一日で一万を超えるほどの集客効果があるのだ。料理人ランキング11位とランキング上位のゼフシエフのお店ならばそこいらにいる一般人から世界トップクラスのVIPまで、そ

のお店の存在をすれば全てを放ってやってくるほどの集客率を見込めるだろう。(実際噂ではIGOのトップクラスの幹部が度々お忍びでやってくるという噂も聞いたことがあるし)

そしてそんなお店の主であるゼフシェフは僕たちのそんな反応にくすりと笑うと扉を開ける。

「まあとりあえず中に入れてくれ。話はそ——ぐばああ?」

『おかえり、兄ちゃーん!!!』

突如店の中から出てきた大量の子供たちに吹き飛ばされてしまったが。

「つてええええええええええ!?なに?何事これ!?!」

あまりに突然の事態に僕は混乱してしまう。横を見ればいつもどんな状況でも自然体のトリコさんもこの事態には困惑を隠せないように僅かに冷や汗をかいている。気のせいかわずかに「……この俺が見えなかつただど!?!」と呟いているような気がするが、そのことについては考えたくないので気のせいだということにする。

吹き飛ばされた時に子供たちの頭が鳩尾に入ったのか、尻餅について子供たちに群がられながらも痛みで悶えているゼフシェフの姿を前に、そろそろ誰かが助けに入ったほうがいいんじゃないかと思った、その時だった。その声が聞こえてきたのだ。

「こら、お前たち!オーナーになにしてんだ!!」

「ん?」

「誰だ、ありやあ?」

店の中から現れたその声の持ち主は金髪にくるりと丸く曲がった眉毛を持つ特徴的な容姿をしている12、3歳ほどの少年が飛び出してきて、ゼフシェフに群がっている子供たちを怒鳴りつけたのだ。

「ほらどいたどいた!」

そしてその少年はゼフシェフに群がっていた子供たちをむりやりどけてゼフシェフを助け出す。

「大丈夫ですか、オーナーゼフ」

「あ、ああありがとうサンジ助かったよ」

そういつてゼフシェフはサンジと呼ばれた少年の差し伸べた手をとり立ち上がる。その表情は子供たちの拘束から助かったせい、安堵の感情を浮かべている。

しかし無理矢理ゼフシェフから話された子供たちはそれが不満だったのか、サンジ君にぶーぶーと文句をいいます。

「ひどいよ、サンジ兄ちゃん!」

「そうだよ、僕たちだつてゼフお兄ちゃんとお話したいのに」

「黙れ。オーナーは仕事帰りで疲れてるんだし、今日は客人も来てるんだからあんま手



間とらせんじゃねえよ。——お前らだつてオーナーに迷惑かけたいわけじゃないだろ?」

「うゝ」

「そ、そりゃあそうだけどさあ……」

サンジ君の言葉に、不承不承ながら同意する子供たち。どうやら先ほどの突撃は彼らなりのゼフシエフへのスキンシップらしい。

そんな彼らのある意味微笑ましい行動に、ゼフシエフは苦笑しながら口を開く。

「ははは、まあまあ俺は気にしてないから」

「……まあオーナーがそういうなら」

ゼフシエフがサンジ君の頭を撫でながらそういうと、サンジ君は照れくさいのか、そっぽを向きながら答える。気のせいか、その頬は仄かに赤く染まっていた。

と、そこでゼフシエフが僕らの視線に気づいたのか、ふとこちらを見ると申し訳なさそうな顔で再び口を開いた。

「ああ、すまない。ほつたらかしにしてみました」

「え、ああいやそれは別にいいんですけど……その子は?」

「ああ、そういえば紹介してなかったな。——こいつの名前は“サンジ”。俺の教え子の一人で一応この店の副オーナーをやっている。ほら、挨拶しろサンジ」

「あ、はい。どうもサンジです。よろしく」

ゼフシエフに促されたサンジ君はそういつて頭を下げる。

なるほど、この子がゼフシエフのお店の副オーナー……て、

「ええええええええええ?!?!この子が副オーナーなんですかあああ!!」

あまりの驚きに思わず僕は叫び声を上げてしまいが、そんな僕の叫びが気に入らなかつたのか、サンジ君は僕を睨みつけてきた。

「なんだよ、あんた。俺がここの副オーナーだつたらなんか、文句あんのかよ」

「え!?あ、いやそんなこと……ない……ですけど……」

サンジ君の鋭い眼光に思わずそういつてしまったが、ランキング上位の料理人の店であるゼフシエフのお店の副オーナーがサンジ君のような子供だつたら誰でも驚くと思ふ。

隣を見ればさすがのトリコさんにも予想外だつたみたいで、口をあんぐり開けて驚いていた。

そんな僕たちの様子に、ゼフシエフは当然かと苦笑する。

「まあ、その反応が当然だわな。だけどこれでもそれなりの持ち主だな。もうフグ鯨の捌き方も教え込んである」

「ええ!!」

「フグ鯨の捌き方だ!!」

再び驚愕の声を上げる僕たち。だがそれも仕方ない。フグ鯨の捌き方を習得している料理人は世界でも10もいないのだから。

「(ひよつとしてこの子つて俗にいう「天才」ってやつなのかな?)」

思わず少し嫉妬してしまうが、そこでゼフシエフに声をかけられて我にかえる。

「まあ、俺にいわせればまだまだだがな。——それよりそろそろ店に入ろうぜ。俺にも宴会の料理を準備する時間つてもものがあるしな」

そのゼフシエフの言葉に一番早く反応したのは、やはりこの場で一番の食欲の持ち主であるトリコさんだった。

「ああ、そうだった!!早く宴会にしようぜ、俺もう腹ぺこぺこだぜ」

「あはは、トリコさんたら……」

そのトリコさんの笑顔に思わず毒気を抜かれ乾いた笑みを漏らしてしまう。

「(どんな時でもかわらないなあ、トリコさんは。でもトリコさんの笑顔を見ると、なんかさっきの自分の嫉妬心が洗い流される気がするから注意する気にもなれないんだよなあ……)」

そしてゼフシエフもそんなトリコさんに似たようなことを考えたのか、穏やかな笑みをその口元に浮かべていた。

「ふふふ、そうだな。じゃあさっそく準備するので中に入ってくれ」

ゼフシェフはそういつて店の扉を開けると、僕たちを中に招き入れてくれた。その口元にどこか得意げで、それでいて自慢げな笑みを浮かべたまま。

「——ようこそ、ネルグ街一番のレストラン、『グルメ・バラティエ』に」

★ ★

おつす、お前ら。

俺の名前はトリコ。しがない美食屋をやっているんだ、よろしくな。

実は俺は今回フグ鯨が十年ぶりに繁殖にくるつてんで、最近知り合ったIGO直轄のホテルグルメの料理長、小松に俺と同じ美食四天王なんてよばれてる毒使いのココ。その二人とフグ鯨の捕獲に出かけたんだが、ココと別れた帰り道、世界料理人ランキングの上位ランカーであるゼフつていう料理人と出会い、幸運にもそいつがフグ鯨を使った料理をご馳走してくれるつてんで、そいつのパートナー猛獣であるサバナドラゴンに乗り、このネルグ街にある店、グルメ・バラティエまでやつてきていた。

「さあ、できましたぞ。フグ鯨の刺身にてつちり。から揚げにひれ酒だ」

『おお〜!!』

テーブルの上に並べられたフグ鯨の料理の数々に俺たちは思わず感嘆の声を上げる。それもそうだろう。世界でも捌ける料理人が少ないはずのフグ鯨の料理をこれだけ食べる事ができるんだから。

そんな俺たちの声を聞いたこの店の副店長だっという子供、サンジは心なしか胸を  
はった。

「すごいだろー！刺身は俺が捌いたんだぜ」

自慢げにサンジはそういうが、これは当然だろう。

実は俺も最初は本当にできるか疑っていたのだが、この刺身の状態を見ればこいつが  
どれだけの腕を持っている料理人かがわかる。

「さすががこの年で世界でもトップクラスであるこの店の副オーナーを任せられるだけ  
のことはあるなあ」

だがサンジの言葉が気に食わなかったのか、その上司であるゼフは眦を上げてサンジ  
の頭の上に軽く拳骨を落とす。

「あた!?!」

「調子に乗るな。それもこれも俺が体の隋まで叩き込んでやったおかげだろうが」

そしてゼフは一つため息をつく、こちらに向き直る。

「すまねえな。一応そこいらの料理人より腕はいいはずなんだが、そのせいか少し増長する癖があつてな」

「いやいや、その歳で大したものじゃねえか」

「そうですよ」

「そういつてくれると助かる」

ゼフはその俺の言葉に僅かな笑みを浮かべながらそう答えると、そうだとなにか思い出したかのような仕草をすると、店の奥へと何事か呼びかける。

「そういえば、まだ料理を作つてあるんだ。おーい！持ってきてくれ!!」

「へい、ただいま!!」

すると店の奥から大量の料理を持った丸サングラスをかけた男と捻り鉢巻をした板前風の男が出てきた。……またいかにもなやつらが出てきたなあおい。

「こいつらは?」

「ああ、こいつらは“パティ”と“カルネ”。最近この街に流れてきた料理人だ。なんでもこの見た目のせいでなかなか店に雇ってもらえないらしくてな。この見た目のわりにいい腕してるからスタッフとして雇つたんだよ」

「見た目は余計つすよオーナー」

「まあ、そういうわけでよろしくおねがいますよ、トリコさん」

「お、おう」

あまりにナチュラルに挨拶されたので、思わずそう返すので精一杯だった。なるほど、見た目で損をする典型だなこりや。

と、そこで俺はその時初めて二人が持ってきた料理の数々の内容を確認して思わず歓喜の声を漏らしてしまう。

「おー!!すげえぞ馳走じゃねえかおい!!」

「喜んでもらえてなによりだ」

セレ豚のローストにメーメイマグロの刺身。ガララワニのステーキにバナナきゅうりの生ハム巻きとそこいらの一流レストランでもここまでの品を用意することはできないだろう。

「(思わず、涎が垂れてきちまうぜ)」

気のせいかわ料理が出てきたとたんこの会場にいる俺たちにグルメヤクザ。そしてこのネलगグ街の孤児たちという子供たちと、その誰もがその豪華な料理の数々に視線が固定されてまったく動かない。

そんな俺たちにこれらのグルメ食材を捕らえ調理したんであろうこの店のトップであるゼフは穏やかな笑みを浮かべる。

「くつくつく。そろそろ我慢ができないようだし、はじめるか」

そういうと、ゼフは手に持っていたコップを高く掲げて声を上げる。

「それじゃあ、お前ら。せっかくの美味しい飯なんだ！今日は無礼講、思いつきり楽しみやがれ。——乾杯!!」

『カンパライ!!』

そして宴会は始まった。

「うめええ!!」

「すごい、これ!?初めて食べた!!」

「やっぱりうめえなあ兄貴の料理は!」

始まった途端会場のあちこちから上がる歓声。その中にはもちろん俺の声も入っていた。

「うめええ!!さすがの腕前だぜ!」

フグ鯨の刺身にひれ酒はあの洞窟で小松たちと一緒に食べたが、てっちりから揚げ。火を通すと甘みがさらに増し、口中に肉汁が広がる感覚がたまらねえ!!

「それに他の料理も他の店じゃあ味わえない絶妙の捌き方に火加減。最高だぜ!!」

「本当ですね、トリコさん!!」

「そりゃあ、よかった」

「ん?」



小松とともに至福の時を味わっていたのだが、突如背後からかけられた声に振り向くとそこにはこの店のオナーナ―シエフであるゼフが。

「どうだ、楽しんでるか？」

「ああ（ええ） 最高だ（です）!!」

「そ、そうか……」

小松と二人で一緒にそう答えるとなぜかゼフは笑みを浮かべていた口元をひくつかせたが、やがて我に返つたような表情を浮かべると、先ほどの穏やかな笑みから一転真剣な表情を浮かべる。

「実はあんたらに頼みたいことがあってな」

「頼みたいこと？」

「ああ」

なんでもゼフは以前からネルグ街の復興活動の一環として素質がある子供たちに対して料理人や美食屋としての教育をしており、そのための学校もこのネルグ街に作つたらしいのだが、週一でもいいのでその講師を行つてほしいとのことだった。

「引退した料理人や美食屋なんかが講師をやつてくれるんだが、本当の一流の人材つていうのを教えたくて名。もちろん依頼としての金も払うし、なにか他の依頼があつたらそちらを優先してくれてもかまわない。どうだ？」

「いや、依頼つていうなら別にかまわねえけど、なんでそこまでするんだ？別にごこの生まれつてわけでもないんだろ？」

「む」

そういうと、ゼフは一瞬何か考え込むような仕草を見せたが、やがて「まあ隠すことでもないか」と答えてくれた。

「実は俺もあいつらと同じ孤児でな。つい感情移入しちゃうんだよ。——俺の場合は料理の師匠でもあるばあさんが拾ってくれて今のようになつたあ名が知られる料理人になることができた。だから俺は少しでも早く、こいつらが一人でも生きて行けるように手助けしてやるつて決めたのさ」

善も悪もまずは一人前になつてからだしなと笑みを浮かべるゼフの姿に、俺は思わず口元に笑みを浮かべる。

その信念と思いの強さに、一種の気持ちよさを感じたからだ。

見れば小松も同じ気持ちなの口元に笑みを浮かべながらも、俺と視線が合うと一つ頷き口を開く。

「わかりました、店の仕事もありますしそれほど来ることはできないかもしれませんがそれでもよろしければ」

「おれもいいぜ。お前さんの考え方にも共感できるしな」

小松と二人でそう答えると、ゼフはばああと顔を輝かせ満面の笑みを浮かべる。

「ありがとう。助かるよ」

「いいって。それより宴会の続きをしようぜ。せつかくのご馳走が冷めちまう」

「くく、そうだな」

そして俺たちは景氣祝いも兼ねた宴会を続ける。この気持ちのいい料理人の思いが叶うことを願って。

「(そういえばこいつを拾ったばあさんってこいつの師匠だったけどどんなやつなのかな?こいつほどの料理人を育て上げるなんて並みの料理人にはできないはずなんだが……)」

尤も俺がその疑問の答えを知るのは大分後になる。新たな戦いの狼煙とともに。

★ ★

美食四天王に五つ星レストランの料理長。グルメヤクザにネルグ街の孤児など、様々な種類の人間たちが入り混じった宴会が終わった夜。ネルグ街レストラングルメ・バラティエ。その一室にあるベッドに俺は倒れこんだ。

「ぶはく。疲れたー」

体全体に広がる倦怠感に思わずそんな言葉が漏れる。どうやらさすがにあの人数分の食事を一度に作るのはつらかったようで、もう今夜はこのままベッドで眠りたくなくなる。

と、そこで俺は今日の宴会のために連れてきたゲストの二人を思い出す。

「しかしまさかあんなところでグルメ四天王の一人に出会えるとは思わなかったなあ」

グルメ四天王。グルメ時代のカリスマである彼らとはその内こちらから接触しようと思っていたので今回の出会いには行幸といえよう。

「これで俺の夢へとまた一歩近づいた」

俺の夢。それはこの世から少しでも食に飢える人間を救うこと。

俺は故郷から出て様々な場所を見てきて多くの場所を、そして人を見てきた。

そして知ったのだ。この飽食のグルメ時代。その時代で明日の食事のままならない人間がいることを。罪もない子供たちが大人の事情で日々飢え死にしていることを。

偽善だと思われるかもしれない。しかし俺はそれを一人でも無くすために止まる気は全くなかった。

「それにあの小松っていうシェフ。ありやあ伸びるな」

今はそこいらの一流と呼ばれる料理人程度の腕前しかないようだが、あの感覚はばあ

さんや節乃さんと同じ食材に選ばれた者のみが放てる感覚。あの感覚を持つ料理人がただの一流で終わるはずがない。

「尤もあの様子じゃあまだ目覚めてはいないようだが、トリコと旅しているならその内覚醒するだろう」

ゼフは笑う。これから俄然おもしろくなりそうだと。

そしてゼフは明日の業務に備えるためにそのまま目を瞑るのだった。

## 第六話 マッチの依頼

ネルグ街の中心部にそびえ立つ名物レストラン『グルメ・バラティエ』。

普段は、街の人間や、遠方より押し寄せた客で込み合っているこの店に、しかし今はたった二人の人影があるだけだった。

一人は、白銀に輝く長髪を後ろに纏め、コック帽を被った男、ゼフ。この店のオーナーであり、世界でも屈指の腕前を持つ料理人だ。

そして、そんな彼と共にいるのは、真っ白な白いスーツを着込んだ、金髪の男。

その全身につけられた凄まじい傷跡と、腰からぶら下げる大きな刀のせいか、一般人ではどうてもい出せないような風格を漂わせている。

この男の名は『マッチ』。若干28歳にして、このネルグ街の治安を維持している組織

『グルメヤクザ』の副組長の地位についている。

なぜ、彼らが現在共にいるのかというと、実はこの店のオーナーであるゼフとマッチは、ゼフがこの街に初めて来たときからの友人で、また、すっかりゼフの料理の虜になってしまったため、ゼフがこの街に店を構えてからは、すっかりこの店の常連の一人となっていた。

だが、副組長になってからいろいろと忙しくなったマッチは、なかなか時間をとることができなくなり、店の営業時間の内にこれることが少なくなった。

それを聞いたゼフが、相手が友人のマッチであり、彼には店を始める際にいろいろ協力してもらった恩があるために、こうして彼がやって来たときは、例え今日のように店が休日でも、彼のためにいろいろ料理を作り、こうして二人で飲むようになっていったのである。

そして、現在彼らが店でこうしてゼフと「サシ」で飲んでいるのも、いつものように、マッチが長期の仕事から帰ってきたために、マッチが捕ってきた食材の試食会も兼ね

て、ゼフが彼の労を労うために一席を用意したためである。

「しかし、お前も大分腕を上げたじゃないか。まさか、『マーメイマグロ』を捕ってくるとは思わなかったぞ」

マーメイマグロとは、捕獲レベル20を誇る「深海のプリンセス」とも呼ばれる虹色に輝くマグロのことで、その美しさと希少性から伝説の魚とも呼ばれている。

特にこのマグロから僅か200gしかとれないトロ。通用「バブリートロ」は絶品で、その天にも昇るほどの極上の味から、世界中のグルメ家たちが、大枚払ってそれを求めるほど。

本来なら、マーメイマグロは人を寄せ付けぬ激流の地を、集団で移動しており、また、滅多に人が視認できる海域に姿を見せぬことから、そんじよそこの美食屋では発見することも叶わぬのだが、マッチ率いるグルメヤクザは、荒事に慣れた歴戦の美食屋たち。

特にマッチは若くしてグルメヤクザの副組長に選ばれ、また、『正史』とは違い、ゼフ



により、高レベルの食材を摂取していることから、その実力は、グルメ界入りはならずとも、本来彼が得る強さより格段に上がっている。

ゼフは、前々からそのことを知っていたが、まさか一流の美食家でも捕獲が難しいといわれているマーメイマグロを捕獲してくるとは思わず、こうして感心の声を上げたのだ。

だが、マッチはそんなゼフの言葉に、特に誇るでもなく、酒の入ったカップを片手に鼻で笑う。

「はッ！俺だけで捕ったんじゃねえよ。それに既にグルメ界入りできる実力のあるやつにいわれてもな」

そんな、若干挑発的なマッチの言葉に、だが、ゼフは特に怒るでもなく、ただただ苦笑する。

「そうはいってもな。俺には店があるから、昔のように欲しい食材があってもわざわざ

捕りに行くわけにはいかないんだ。いくら実力があっても、無意味だよ」

そう、このネルグ街に店を構えた当初の彼ならばともかく、今の彼は世界料理人ランキングの上位に入るトップクラスの料理人。この街の住民だけではなく、世界中の人間が、毎日彼の料理を楽しむにこの店にやってくるのだ。

そんな彼が、わざわざ最高級程度の食材ごときで、店を長期間開けるわけにはいかなかった。

「まあ、店を開ける価値があるほどの、レアな食材なら考えてもいいけどな」

そういつて、ちょうどつまみが切れたので、新しい料理を作ろうと踵を返し、厨房へと戻ろうとするゼフ。

だが、その歩みはとある人物の言葉により、止まってしまう。

マッチだ。

「——店を空けるほどの価値がある食材ならいいんだな？」

「……………はっ。」

突如、自身の背中へとかけられた思わぬ友の声に、ゼフは呆けた声を出しながら振り返る。

そんな彼の視界に映ったのは、先ほどまであまり見せないような穏やかな笑みを浮かべながら酒を飲んでいた友の姿ではなく、ネルグ街を統治・統率する組織「グルメヤクザ」の副組長に相応しい歴戦の男の姿だった。

ゼフは、そんな彼の姿を見て、先ほどの彼の言葉に納得する。

「(なるほどね、今回は「友人」として来たわけではなく、「仕事」として来たわけか)」

実はマッチがこのような態度で店にやってくるのは初めてではない。

普段は、友人としてゼフの店に飲みに来ることが多いマッチであったが、実は稀に自身では対処しきれない捕獲難易度のグルメ食材の情報を手に入れたときに、よく（よくといつても、人間界ではマッチ自身も優秀な美食屋であるため、そのようなことはほとんどないのだが）こうして世界でも屈指の実力者であるゼフへと仕事を依頼しにくるのだ。

本来ならIGOの依頼も、よほどの人物がこなくては受けないゼフも、彼が長年の友人であり、マッチが持つてくる依頼の殆どが、裏の情報網を使い手に入れた、人間界でもトップレベルの食材の捕獲の依頼ばかりであるため、ゼフは彼の依頼を受けなかったことは、よほどのことがない限りない。

「（こいつの持つてくる依頼は基本的に外れがないからなあ）」

それがわかっていたゼフは、厨房へと戻るのを一旦止めて、先ほど自分が座っていた

テーブルへと戻る。

「——話を聞こうか？よほどの食材じゃなければ受ける気はないからな」  
「わかってるよ、そんなことは」

ゼフの言葉を、マツチは不敵な笑みで笑い飛ばすと、話し始める。今回彼が聞きつけた、とびつきりのグルメ食材の情報を。

「カーネル・モッコイ」っていう爺さんを知ってるか？」

「ん？ああ、グルメ大富豪の一人だろ？確か、あの年商20兆円の株式会社「グルだらけ」の会長だっという」

「ああ。それでだな。実は今回その爺さんが100億の懸賞金をかけて、ある二つの食材を求めているという情報を聞いてな。お前さんには、そのうちの一つを捕ってきてほしいんだ」

「100億!?!そりやまた剛毅なことだな」

そのあまりの懸賞金の多さに、ゼフは思わず驚愕の声を上げる。

料理人ランキング上位のゼフならば、それぐらいなら稼げないことはないが、流石に100億もの金をポンとだせるような経済力はない。(まあ、大体の食材が自分で捕ってきたほうが早いというのもあるが)

「それで？その食材つてのは、結局どんな食材なんだ？あの大富豪がそれほどの懸賞金をかけるほどだ。かなりの食材なんだろう？」

そんなゼフの言葉に、マッチはよくぞ聞いてくれたとばかりに笑みを浮かべると、持ってきた鞆の中から一束の書類を取り出すと、ゼフへと渡す。

そこには、今回彼らが狙う、二つの食材についての詳細な情報が書かれていた。

「今回俺たちが狙う二つの食材。一つは『センチュリースープ』。極寒の地獄「アイスヘル」にある「グルメシヨウウインド」。そこから100年に一度抽出される伝説のスープ。——そして、お前に捕ってきたほしいのは、このもう一つの食材だ」

そういうと、マツチは書類に添付されていた、一つのオレンジのような果実の絵を指差した。

「アイスヘルとは正に真逆。人間界でもつともでかい山、太陽に最も近いといわれている「サニーマウンテン」の主の背に宿るといわれている幻のオレンジ。こいつを捕まけてもらいたい」

「主？そんなものがあるのか？」

マツチの言葉に、ゼフは訝しげに首を傾げる。

サニーマウンテンのことは彼も知っていたが、主とやらは、彼はまるで聞いたことがなかったからだ。

そんなゼフの様子から、彼が疑問に思っていることに気づいたのか、マツチは言葉を続ける。

「ああ、お前が疑問に思うのも無理はない。なんでも、その主とやらは、主といつても殆

ど山自体にはおらず、いつもはその山のさらに上空。人が到達できないほどの高さの空域を移動しているらしいからな。だが、どうやら不定期にサニーマウンテンに下りてくるらしく、どうやってか知らないが、カーネルの爺さんは、その下りてくる時期についての情報を手に入れたようだな」

いくら相手が世界屈指の大富豪といえど、裏の情報網を使つた得意の情報収集で負けたのが癪に障つたのか、若干くやしそうな表情を見せるマッチ

そして、ゼフは自身も信頼しているマッチの（というよりグルメヤクザのだが）情報網でも入手することができていない情報をカーネルが持つっていると聞き、思わず関心の声を上げる。

「へー、さすがは世界屈指の大富豪つてところか？」

「……ああ、まあな」

そんなゼフの言葉に、マッチは元々負けを認めていたのかししぶしぶ頷くが、そこで彼は何か思い出したのか、再び口を開いた。



「ああ、そういえばどうでもいいことだが、そのオレンジは、太陽の山サニーマウンテンの主の背になること  
だから、こう呼ばれているらしいな」

——  
“ 太陽の果実 ” と。

## 黒井響一郎はヒーローの世界で何を見るのか：ヒーローアカデミア×仮面ライダー

——仮面ライダー。それは人知れず悪と戦う正義の使徒たちに与えられる称号。

彼らはその人並みはずれた能力と、太陽のように燃える正義の心により、世代が変わろうと、度々歴史上に現れる巨悪に命がけで対抗し、そして打ち倒してきた。

だからこそ、彼らの存在を知る人々は、感謝と尊敬の念を込めて彼らを称えるのだが、しかしそんな仮面ライダーたちの中には、悲しいことにその身を悪に墜としてしまうものも度々存在する。

その中でも最も強大な力を持っているとされたのが、「仮面ライダー3号」。仮面ライダーたちと激闘を繰り広げてきた悪の組織の中でも、最古参の組織のひとつである「シヨツカー」の手により、天才レーサーとして若いころから有名であった黒井響一郎が、初代仮面ライダーである1号2号を超える存在として改造された存在。

彼は、本来の歴史で組織を壊滅状態にまで追い込まれてしまったシヨツカーが作り上げた歴史改変マシン。それにより改変された歴史において作り出され、生みの親であるシヨツカーの指図に従い、1号2号をはじめとした多くの仮面ライダーたちをその手

で狩りつづけた。

だが、「仮面ライダードライブ」泊新ノ助との戦いに敗れた彼は、彼のその熱い正義の心に感化され、自身も正義の心に目覚めることに。

しかしそれをショツカーの首領に見抜かれてしまった彼は、その目覚めた正義の心に従い行動する前に、その身を捉えられてしまい、その力を利用してしまうことに。

だが、ドライブをはじめとした仮面ライダーたちに救出された彼は、その恩義もあり、一度は敵対した彼らとともに力を合わせてショツカーの怪人たちと戦い、そしてとうとうそれを打倒することに成功した。

歴史改変の黒幕であるショツカーを退けることに成功したことにより、世界はショツカーの支配から抜け出すことができ、元の平穏な世界へと戻ることができたのだが、その平穏な世界を取り戻すために2人の仮面ライダーの犠牲が出てしまうことに。

一人は「仮面ライダーマツハ」詩島剛。ドライブと共にロイミュードとの戦いの日々を送っていた彼は、数ある仮面ライダーの中でも最も若かったが、しかしその軽薄そうな態度とは裏腹に長い間重ねてきた努力によって裏打ちされた身体能力に、その生まれもつての戦闘センスにより経験豊かな先輩ライダーたちにも負けないほどの戦闘能力を身に着けていた。

しかしちよつとした油断でその体を拘束されてしまった彼は、ショツカーの怪人たち

による集中攻撃により、その命を落としてしまったのだ。

そしてもう一人の犠牲者とは何を隠そう仮面ライダー3号。

元々改変された歴史でのみ生まれた彼は、元の歴史ではその存在が許されず、歴史が元に戻されることによりその存在が世界により消されてしまうこととなった。

多くの仮面ライダーたちは、新たな仲間の消失に嘆きと悲しみの声を上げる。

自らの行いにより自身の存在を消してしまうこととなった3号であったが、しかし彼に後悔はない。ショッカーの一員として長い間その手を血に染め、仮面ライダーの称号を汚してきた自分であったが、最後の最後に仮面ライダーの名にふさわしい行動をすることができたのだから。

しかしそんな彼にも一つだけ、後悔の感情が存在していた。

それは「なぜもつと早く正義の心に目覚めることができなかつたのか」というもの。

もし他の仮面ライダーたちと同じく正義の心に目覚めることができたらなら、今まで自分が手にかけてきた人々のような犠牲を出すことがなかつただろうに。

だからこそ、彼は最後に思う。

もし、もう一度人生をやり直すことが、彼らのように正義のために、「力なき人々のために生きてみたい」と。

だからだろうか。

『……は？』

—— 彼がその世界に飛ばされることになったのは。

☆ ☆

事の始まりは中国軽慶市。“発光する赤子”が生まれたというニュースだった！  
以降各地で「超常」は発見され、原因も判然としないまま時は流れる。  
いつしか「超常」は「日常」に……。

—— 「架空」は「現実」に!!!

世界総人口の約八割が何らかの“特異体質”である超人社会となった現在！混乱渦  
巻く世の中で！かつて誰もが空想し憧れた一つの職業が脚光を浴びていた!!

それは「ヒーロー」。

そう、「超常」に伴い爆発的に増加した犯罪件数。法の抜本的改正に国がもたつく間。勇氣ある人々がコミツクさながらにヒーロー活動を始めた。

“超常”への警備！悪意からの防衛！たちまち市民権を得たヒーローは世論に押される形で公的職務に定められる。

彼らは活躍に応じて与えられるのだ。

国から収入を！！人々から名声を！！

そしてこの物語はそんなこの世界で起きるある事件。それがきっかけで始まることとなる。

☆

☆

「おおおおおおお！！！！」

それが起こったのは偶然だった。

世界最高、文字通りのNo.1ヒーローである「平和の象徴」オールマイトは、ある日他人の体と個性を乗っ取ることができる流動状ヘドロのような敵を倒し、手持ちの瓶へと封じていたのだが、ふとした拍子でその瓶を落としてしまい、それを拾ってしまったある少年が、偶然虫の居所が悪くその瓶を蹴り砕いてしまったために、そのヴィランが解放され

てしまい、その少年の体と個性をそのまま乗っ取ってしまったのだ。

そしてその乗っ取った少年の個性が優秀だったこともあり、ヴィランはそこいらのヒーローでは手も足も出ないほどの力を手に入れてしまい、今までの鬱憤を晴らすために街で暴れまわることになった。

辺り一面を火の海にしながらも暴れるヴィランに、しかし相性が悪い個性のために為す術なく傍観するヒーローたち。そしてその中の一人に、その男の姿はあった。

「……ゼエ……ゼエ……」

顔から大量の汗を流し、その痩せ細った体を押しさえながらも息を荒げているこの男。実は彼こそがNo.1ヒーロー、オールマイト。平和の象徴と称される男の真の姿。

彼は、その個性である「ワン・フォー・オール」の力により、その体に凄まじいパワーを宿していたが、五年前ヴィランの襲撃を受けてできた傷により、一日のヒーローとしての活動時間の限界を約三時間ほどにまで削られてしまい、その限界を終えてしまうと、今のような何時もの姿とはまるで想像できない貧弱な姿で一日を過ごすことになってしまふのだ。

だからこそ、今のオールマイトには目の前で止まっているヴィランを止める術はなく、他のヒーローたちと同じく傍観する以外道はなかった。

そしてオールマイトは、そんな自身の現状に憤りを抱き、思わずその掌を握りしめる。

「情けない。……情けないッ!!私があのようなミスをしなければ。あの少年に忠告しておいてなんてザマだ!!」

しかし、いくら自分を罵ろうとも力が実際に戻るわけはなく、やはりこのまま相性のいい個性のヒーローが来るまで待つほかない——はずだった。彼がその少年の姿を目撃するまでは。

「馬鹿ヤロー!!生まれ!!生まれ!!」

「!?!」

突如野次馬から飛び出し、敵へと向かっていく学生らしき一人の少年。その少年の顔にオールマイトは見覚えがあった。

それは現在暴れているヘドロのようなヴィランを捕える時に助けた、今では珍しい“無個性”の少年。

自身のようなヒーローになりたいと自分にいつてきたが、その時の自分はヒーローは命賭けだ。相応に現実を見ることが大切だと諭した記憶がある。

無個性でありながら命賭けで人を助けようとする少年の姿に、事態を傍観していた他のヒーローたちは彼の行動を「自殺行為」だと焦って止めようとするが、しかしオールマイトはそうは思わない。

確かに何の力を持たない彼では、捕えられた少年を助けることなどできるはずがな



い。

だが、強大な敵に立ち向かうその姿に、彼はヒーローに最も必要である“勇氣”の姿を見た。

そう、ヒーローは命賭けで戦う職業。彼は全くの無力な存在でありながら、ヒーローに最も相応しい精神を持っていることをオールマイトは確信した。——そして、自身の個性を受け継ぐ後継者に相応しい心を持っているということも。

だからこそ、彼はあの少年をこのまま死なせてはならないと、自身の中に残っている力を無理やりふり絞り、彼を助けに行こうとするが、その時彼の肩叩く一人の男の姿が。「まあ待て、私が行く」

「き、君はッ!?!」

肩を叩かれたオールマイトは、そのまま振り向くと驚愕の表情を浮かべる。なぜならそこにいたのは、自身がよく知る、最もその力を信頼している友の姿だったのだから。

そのあまりに都合のいい展開に、オールマイトは驚きの声を上げたが、その声を向けられた当の本人であるその男は、肩を竦めながら一つ苦笑しながらも落ち着いて答える。

「別におかしな理由はないだろう? 真のヒーローはピンチの時にこそやってくるものさ」

そして、その男は一つ不敵な笑みを浮かべると、オールマイトの元からヴィランへと目にも止まらぬスピードで向かっていく。自信と同じく「真に勇敢な者」を助け出すために。

そんな彼の後姿に、オールマイトは「あいかわらずだな」と一つ笑みを浮かべると、先ほどまで入れていた全身の力を抜いた。

自身に匹敵する力を持つ友が来てくれたことへの安心感から。

「——彼を頼んだぞ、響一郎」

☆ ☆

「もう少しなんだから、邪魔をするなああああ!!!」

「(ああ、これはもう終わったなあ)」

自身に迫りくるヴィランの巨大な手に、彼、緑谷出久は自身の死を確信する。

この個性が尊重される社会で、珍しく無個性で生まれた彼は、しかし幼いころからヒーローに憧れていたため、無個性であっても諦めきれずに多くのヒーローの研究を続けていたのだが、自身の幼馴染である爆豪勝己。そしてNo.1ヒーローであるオールマイ

トに、無個性でヒーローをやるのは無理だと完全否定されて意気消沈していた。

そして自身の長年続けてきた研究成果が書かれていたノートを爆豪の手により焼かれてしまったこともあって、彼は長年追いつけていた夢をなんとか諦めようとしていた。

そんな時だった。ヴィランに体に乗っ取られてしまった爆豪の姿を発見したのは。

それを見た時、彼は自分のせいだと思いつつも自分には何もできないと口を押さえながらも心の中で必死に謝った。

ごめんなさい。僕のせいです。僕にはなにもできません。だからなんとかできる個性を持つヒーローがくるまでなんとか頑張ってくださいと。

だが、そこで彼は見てしまった。——視線で誰かに助けを求める爆豪のその姿を。

「ッ!？」

その姿を見たとなん、彼はその場を飛び出した。助けを無意識のうちに求めていた爆豪。彼を助け出すために。

何の力を持たない彼がなぜ飛び出したのか。それは彼にもわからない。しかし普段は自信满满で何でもこなす、小さいころからいろいろひどいことを言われていたが、だからこそ一種の憧れを抱いていた爆豪のその姿を見た彼は、何故か我慢できずに他の

ヒーローたちが止める暇もなく飛び出して行ってしまったのだ。

本人は完全に無意識の行動であったが、それは幼いころからヒーローに憧憬を抱いていた彼だからこそ、「人を助けたい」という想い。その想いが生み出した、「勇氣」から出た行動であった。

そして彼は、無個性でありながら、以前ノートに書き記していたとあるヒーローの戦術を応用してヴィランの懐に飛び込むことに成功したが、しかしやはり彼の様子を見ていたヒーローたちがいうように、なんの力も持たない彼がヴィランに立ち向かうなど自殺行為であることも事実であり、彼の存在を鬱陶しく思ったヴィランによる一撃が現在彼に迫っているというわけなのである。

自身の視界に迫るヴィランの巨大な手に、出久はもうどうしようもない状況であることを理解し諦めの感情を抱いていたが、しかし彼の心には後悔は微塵もなかった。

確かに無力な自分では何の意味もなかった行動かもしれない。実際爆豪を助け出すことはできなかったし。

だが、それでも誰かを助けるために命賭けでした自身の行動に悔いはない。こんな行動を笑顔でこなししていくからこそ、彼は自身になんの力もないことを理解しながらも、ヒーローに憧れ、必死になっていたのだから。

そして自身に迫りくる死の予感に、出久がその瞳を閉じようとした————その時

だった。その声が聞こえてきたのは。

「——ヒーローに憧れているならこんなことで諦めるんじゃない」

「え？」

突如聞こえてきたその声に、しかし出久は振り向く暇もなく、自身の手でしっかりと掴んでいた爆豪と一緒に物凄い力でヘドロの敵から救い出される。

その時出久は目撃する。自身のことを助け出してくれた、そのヒーローの後姿を。

「あ、あなたはッ!？」

そして出久はそのヒーローの名を知っていた。何せ彼は自分が目標としていたNo.1ヒーローオールマイト。その彼と双璧を為すとさえいわれた最高のヒーローの一人だったのだから。

黒と緑を基調としたスーツを着込み、両手両足に枷のような物をつけている。

さらに昆虫を模した特徴的なヘルメットを被ったそのヒーローは、そのオールマイトに比肩する戦闘力、そして敵に対する容赦のなさから「悪の抑止力」といわれた最強のNo.2セカンドヒーロー。

その名も……。

「仮面……ライダー……」

呆然とそのヒーローの名を呟く出久。

そしてその声を聞いていたのか、そのヒーロー「仮面ライダー」は、出久に向かって親指を立てて一つサムズアップのポーズをとる。

「よくやった少年。ここからは私に任せろ」

そして仮面ライダーは、突如現れたそのヒーローに驚きの表情を浮かべている敵に向き直ると、思いつきりその拳を振りかぶる。

その時出久は目撃した。

「な？！、これは!!」

仮面ライダーの振りかぶったその拳に、物凄い勢いで光のような物が集中していること。

そして仮面ライダーは敵に向かってそれを振りおろした。文字通り必殺の威力を持つその拳を。

「————ライダーアアアパアアアンチ!!!」

そして、彼の拳から凄まじい爆発が起こり、どんなヒーローの攻撃も受け付けなかったヘッドの敵を吹き飛ばした。

彼のパンチが生み出した衝撃は凄まじく、そのヴィランを吹き飛ばしたただけではなく、その場で上昇気流を起こし、気候を変えて雨を降らした。

それを見ていた野次馬たちは感嘆の声を上げる。

「すげえ……」

「パンチで気候を変えるとか」

「これが仮面ライダー……」

——これが彼、緑谷出久と仮面ライダー「黒井響一郎」の初めての出会いだった。

☆ ☆

■ 黒井響一郎（仮面ライダー3号）

この小説の主人公。オールマイイトに次ぐ人気と実力を持つNo.2ヒーロー仮面ライダーの正体であり、「最強のNo.2」セカンド「悪の抑止力」の異名を持ち、オールマイイトと双璧を為すといわれている。

本来は悪の組織であるショッカーが作り上げた歴史改変マシンにより生みだされた改変された歴史。その歴史において仮面ライダーたちを倒すために誕生した最強のショッカーライダーであったが、仮面ライダードライブとのレース勝負に負け、正義の

心に目覚め他の仮面ライダーたちと共にシヨツカーを打倒することに成功する。

しかし本来改変された歴史にのみ生まれる存在であったために、彼は歴史が元に戻ると同時にその存在を消滅させてしまうことに。

だが、何の因果かそのまま漫画「ヒーローアカデミア」の世界にトリップ。最初は戸惑っていたがその世界で仮面ライダーの使命として、ヒーローの一人として活動を行うことを決意。その圧倒的な戦闘力と抜群のマシンセンス。さらにヴィランに対して容赦のない姿勢が受け、いつの間にかNo.2ヒーローとして人々から尊敬の目で見られるようになる。

オールマイトとは、昔から強敵のヴィランに出くわすと背中を合わせて戦ったり、一緒に人命救助を行っていたために、お互いに友と胸を張っていえるほどの親交があるが、彼の登場によりNo.3にまでその立場を落としてしまったエンデヴァーからかなり絡まれているために、エンデヴァーのことは大嫌い。

本来の彼のパンチの威力と実際の威力が違う感じになってしまいました。オールマイトと同等クラスの力を持つヒーローならばこのくらいできねばと思っただけです。すみません（土下座）。

後、確か仮面ライダー1号と2号とかは改造手術とかできた気がするんで、彼が出久君を改造して新たな仮面ライダーを生み出すという展開もいかなと思っっている。



# ヒロアカでアンチ物を書いてみた：ヒーローアカデミア

緑谷出久には夢がある。

かつて彼がまだ一桁の年齢であった頃、テレビで見たNo.1ヒーロー「オールマイト」を取り上げた特番番組。

彼がデビューした当時の映像を見てヒーローに強い憧れを抱いた彼は、母にねだってパソコンの動画配信サイトで何回もその映像を目にし、やがて将来は自分もこんなカッコいいヒーローになりたいと夢見るようになる。——だが、その夢はあっさりと崩れ去ることとなる。

それは彼が4歳の頃。通常はそのくらいの歳にはその人それぞれの特殊な力。“個性”は発現するのだが、いつになっても個性が発現しない彼を不思議に思った彼の母親が医者に見せに行つたところ、彼が今では珍しい“無個性”の人間であることが発覚する。

それを知つた時の彼の心を占める感情は、まさに「絶望」一色だったといつていい。医者とは、無個性でも立派に生きていく人はいると彼を慰めるが、しかし近くに優れた個性を持つ幼馴染がいたこともあり、彼のヒーローに対する憧れは、そんな医者への薄っぺら

い親切心からの言葉であっさり諦められるわけがないほど強い想いとなっていたのだ。

だから彼は自分に個性が無いと知っても夢を諦めきれず、少しでも憧れのヒーローに近づくために、趣味も兼ねて様々なヒーローの解析分析を行った。

近くでヒーローが活躍しているとすればすぐに飛んで行って観察しメモをとり、お気に入りへのヒーローに関する特番をやると聞けばテレビの前に齧りつく。

あらゆるヒーロー関連の雑誌を取り寄せスクラップブックを作って情報を整理し、常にヒーロー関連のサイトを巡って新しいヒーローの情報をチェックする。

そのような日々を送っていたために、彼は人一倍ヒーローに関する知識に詳しくなり、しかしそれと同時に新たなヒーローたちの活躍を耳にするたびに胸を躍らせ、その夢への想いをさらに強くしていった。

例え無理だと馬鹿にされても、不可能だと諭されようとも、彼は諦めず、いや一諦めきれず夢を追い続けた。

しかし、やはり個性がないヒーローなど考えられないのか。彼の夢を聞いた者はまずは冗談と思って笑い、次にそれが本気だとわかると考え直すように諭し、そしてそれでも考えを変えないと見ると、呆れてため息をつくか、彼の無駄な努力を嘲笑うようになる。

特に彼の幼馴染である爆豪勝己という少年はそれが顕著で、出久とは違い優れた個性

を持ち、幼い頃から将来を嘱望され持て囃されてきた彼は、自然と他者を見下す性格になってしまい、昔は幼馴染だけありそれなりに友好的な関係を築いていたはずだが、無個性というわかりやすい他者に劣る面のある彼のことを「デク」と蔑み、嘲笑し虐げるようになっていた。

周りの人間全て、それこそ親でさえ叶うことが不可能だと確信している長年抱いていた彼の夢。しかし彼はそれでも自信の夢を諦めることはなく必死で前に進もうとしていたが、ある日そんな彼の心を折りかける出来事が起こる。

それは彼が長年研究していたヒーローたちのことが書かれていたノートを爆豪に焼かれてしまい、意気消沈して帰宅しようとしていた時のこと、突如ヘドロ口状の個性を悪用する者ザイラン敵に彼が襲われかけたのだが、そんな時、颯爽と現れて彼のことを助けたあるヒーローがいた。

そのヒーローの名前はオールマイト。そう、彼がヒーローに憧れるきっかけとなったNo.1ヒーロー。

実は彼は有名なヒーローを多数輩出している名門校「雄英高校」の教師の一人として招かれており、そのために日本にやって来ていたのだが、偶然出久が襲われている場所の近くを通りかかり、それを感じしたオールマイトが彼を助け出したのだ。

初めて憧れのヒーローに出会った彼は興奮してオールマイトに語る。自分はあなた

に憧れてヒーローになりたいと思った。自分は将来あなたのようなヒーローになりたいと。

……だが、そんな彼の言葉にオールマイトは冷たく返した。

『個性が無くても成り立つ』とは、とてもじゃないがあ口にできないね』

実はオールマイトは五年前、あるヴィランの襲撃にあい呼吸器官半壊に胃袋全摘の重傷を負っていた。

一命は取り留めたのだが、度重なる手術と後遺症で憔悴してしまったオールマイトは、その活動限界を大幅に削られてしまい、今では彼がヒーローとして活動できるのは一日三時間ほどにまで落ちてしまったのだ。

しかし平和の象徴として知られたオールマイトは悪に屈してはならないと、彼はいつ命を落としてもおかしくないその状況の中でも、まるで苦しい様を見せずに戦い抜いた。ヒーローとしてのプレッシャーや内から出る恐怖をその笑顔の裏に隠して。

だからこそ出久にかけられたその言葉は重かった。——長年誰に言われても諦めなかった彼の夢にかける想い。その想いをほつきりと折ってしまうほどに。

☆ ☆

「はア……」

長いため息を吐きながら、街の公園のベンチで項垂れている彼は緑谷出久。ヒーローに憧れる今時の少年だ。

彼は無個性でありながらヒーローに憧れ、今までどんな人に諦めなさいといわれても、お前では無理だと嘲笑われてもその想いを胸に抱いて彼なりに必死でがんばってきたのだが、しかし長年憧れていたオールマイトからそれは不可能だと否定されてしまった彼は、意気消沈しながらもこのまま帰っては母に何事かあったと心配されてしまうが無意識に考え、こうして近所の公園で落ち着くまで帰宅の時間を延ばしているというわけだ。

「(はあ。やつぱり僕にヒーローなんて無理だったんだなあ)」

とそこで、彼はふと手元の焼けかけたノートに視線を下ろす。

幼馴染である爆豪に焼かれてしまったそのノートは、彼が将来ヒーローになるために様々なヒーローを研究してきた成果の一部が書かれており、出久が急いでノートに燃え移っていた炎を消したために、あちこち煤で汚れていたり焼け焦げていたりしてはいるが、未だノートの形をちゃんと残していた。

それを見た出久は、今までどんなに馬鹿にされてもそれでも可能性は0ではないと諦

めず、立派なヒーローになって活躍する自分の姿を夢想した彼は必死で頑張つて来た今までのことを思い出し、自信のその瞳から涙が滲んでてくるのを感じた。

それを彼は必死に抑える。

「泣くな！わかっていたことだろ!?現実さ……。わかってたから…必死こいてたんじやないか……。ツ!!見ないように。見ないように——つて」

その後しばらく名残惜しそうにノートを眺めていた出久であったが、やがて決意を決めたのか唇を強く噛みしめながらも立ち上がると、勢いよくそのノートを公園のゴミ箱に叩きつけるように捨てると、その場を去ろうとした。

その時だった。

「……ほう、これはすごいな」

——その声が聞こえてきたのが。

「……う？」

決して大きくはないが、どこか惹かれるものがあるその声に、不思議に思った出久がその場で振り返ると、そこにはいつの間にもいたのか、杖を持ちどこか品のいい服をした、

紳士然とした中年男性がそこに立ち、出久がゴミ箱に捨てたはずのノートにももしろそうに目を通していた。

まさか自分が捨てたノートをわざわざゴミ箱から拾って読む人がいるとは思わず、出久は驚きでその場に硬直していたのだが、そんな彼の視線に気づいたのか、その男性はふと視線を上げるとそこで初めて出久がこちらを見ていることに気づいた。

出久の姿を視界に収めた男性は、朗らかに笑いながらも、どこか申し訳そうにしながらもどこか親しげに出久に話しかける。

「おお、すまない。先ほどから君が大事そうにこれを持っているのを見ていてね。あれほど大事そうにしていた物を捨てるなんていったいどんなことが書いてあるんだろうとどうしても気になってしまつて」

「は、はあ……?」

「だが、すごいなこれは。オールマイトのようなベテランヒーローから始まり、シンリンカムイのような最近活躍しているルーキーたちまでよく研究されている。私もヒーローマニアの一人だからわかるが、これほど細かに研究するには、よほどの熱意と長い時間が必要だつただろうに」

その言葉で出久は気づく。目の前の彼もヒーローたちの活躍に胸躍らせる自分と同じ種類の人間であることに。

そのことに気づいた出久は、長年大切にしていたノートを誰かに託すのに一瞬躊躇したが、どうせ捨てようと思っていた物だし、しばらくヒーローに関係する物は見たくないと口を開く。

「……そんなに入ったならあげますよそれ」

「それはありがたいが、いいのかい？先ほどもいつたがかなり大切な物のように見えたが？」

「ええ。僕にはもう必要ない物ですから」

そこで出久は男性に今までのことを話します。

幼いころ見たオールマイトの映像がきっかけでヒーローに憧れを抱いたこと。しかし無個性に生まれてしまったためにそれは無理だと周りから言われ続けたこと。だが諦めきれずにいろんなヒーローの研究をしながらヒーローになるため必死になっていたこと。だがヒーローに憧れるきっかけとなったオールマイトに出会い、無個性でプロのヒーローになることなんてできたいといわれた等々。

なぜ初めて会った男性にこんなに自分のことを話しているのか、出久は自分でもわからない。それは男性が聞き上手なためか。それとも男性から感じる不思議な魅力のせいなのか。

そして出久が全てを話し終わると、男性は神妙な顔で何か考え込むような仕草を見せ



るが、やがてその顔を上げると穏やかな笑みを浮かべる。

「なるほど、それは大変だったね。君の気持ちが変わるとは決まっていえないが、それでも君がよほどの葛藤を経てその夢を諦めんとしていたことはなんとなく理解できる」

「……ありがとうございます。でもいいんです。オールマイトのいうとおり、無個性の人間がプロのヒーローになるのは無理なことぐらい、最初からわかっていましたことですから」

そう、だからこれからは身の丈に合った生き方を探さなくては。

未だ未練はあるが、出久はそう考え無理やり夢を諦めようとした。

しかし、そんな彼をしぼし無言で眺めていた男性は、何を思ったのかとんでもない言葉をお口にすする。

出久のその人生を変えたとんでもない言葉を。

「——もし、強力な個性を後天的に得られる技術があるといえはどうするかね」

「……………え？」

男性のその予想外すぎる言葉に、出久は一瞬言葉に詰まりながらも呆然と言葉を返す。

何の悪い冗談か。そんなものがあれば自分はここまで悩みはしらないと思いはしたが、男性のこちらを見つめる真剣な顔からそれがただの冗談でないことが理解できた。

そんな出久の考えを理解したのか、男性はそのまま言葉を続ける。

「実は私はこうみえても医療関係の仕事に従事していてね。君みたいにヒーローに憧れてはいるが、無個性なため。もしくは個性がヒーロー向きではないために泣く泣くその夢を諦めた子供は結構な数いるんだ。——私はそんな彼らのために人工的な個性を発現させる、もしくは個性を強化することができる技術を開発したんだ」

「……………まさか、そんなことこのニュースにも」

「そりゃあ、できたばかりの技術だからね。それに安全性も確実に確保されているわけではない」

と、そこで男性は出久に向かって手を差し伸べる。

「さて、それでどうする。この機会を逃せば一般人の君がこの手術を受けるには莫大な金と時間がかかる。だが、今この手を掴めば、確かに危険はあるが君は間違いなく憧れ

たヒーローになれるだろう。——それこそ、あのオールマイトのように!!」

「……………」

男性の言葉に出久は考える。

「…………物凄く胡散臭いな、この話」

確かに出来上がったばかりの技術ならばニユースで取り上げないのも頷けるが、しかしそのような技術が開発されているのならばネットなんかの噂くらいにはのぼるはずだ。

だが出久はそのような話を一切聞いたことはないし、そもそも個性とはそれぞれ生まれてからの物。それが後付けできる物だとは彼には思えなかった。

「…………だけでもこの話が本当なら、僕も皆みたいに関性を手に入れることができる。そしたらオールマイトみたいなすごいヒーローになれるかもしれない!!」

…………もし、彼が普段どおりの彼ならば、こんな妖しい話には決して乗らなかつただろう。

だが、今の彼は今までの頑張りの成果の一つであるノートを燃やされ、幼馴染の爆豪に自身の夢を嘲笑われ、憧れのオールマイトからはヒーローになれる可能性を完全に否定されてしまった。

そのために彼にはその手が天からの救いの手のように見え、思わずといった感じで男

性の手をとってしまおう。

「そ、それじゃあ、どうかよろしくお願いします」

「うむ、私に任せなさい」

出久の言葉に、優しげに笑う男性の姿を見て、出久はこの人なら任せられると、安心したようにほっと笑みを浮かべる。

だが、彼は気づかなかつた。その男性の瞳の奥がこの世の全ての暗い感情を詰めこんだような、妖しい光を放っていたことに。

もし、歴戦のヒーローであるオールマイトが、その光を見たら間違いないこう断言するだろう。

——この男こそ「巨悪」であると。

☆ ☆

その後、折寺中学校の生徒の一人である緑谷出久が突如失踪したというニュースがお茶の間に流れることとなる。

警察は、出久が今まで自身の夢を周りに否定され続けていたことを聞き、夢に挫折したことによる自殺も視野に入れて捜査を続けていたが、どうしてもその姿が見つからなために捜査は打ち切りとなり、自然とニュースには取り上げられなくなってしまうた。

しかし、一度その姿を消した彼は約十カ月後、彼は雄英高校にその姿を現した。

『き、君は!?!』

『——お久しぶりです、オールマイト』

ヴィランの一人。対オールマイト用に造られた「改造人間」の一人として。

☆ ☆

## ■ 緑谷久久

この小説の主人公にして原作主人公。

原作では無個性でありながらも、No.1ヒーローであるオールマイトにその勇気を認められ、彼の個性を受け継ぎヒーローの道を歩み始めるが、しかしこの小説ではその展開になる前に、とある人物に出会い、人工的に強力な個性を発現する技術があると仄めかされ、その手術を受けることに。

しかし、その人物とは実はヴィランたちの黒幕的人物であり、彼のノートを見たその黒幕が、彼の力への執念。そしてヒーローたちを研究し尽くしていることをしり、元々オールマイトに対抗するために作ろうとしていた脳無という改人へと使おうとしていた技術を応用し、彼にオールマイトに匹敵する力を与えると同時に洗脳し、彼のヒーローたちに対する知識量も合わさって、最強の対ヒーロー改人としてオールマイト達の前に現れる。

イメーজとしては、シヨッカーに改造手術を施され、そのまま正義の心に目覚められなかった（保てなかった？）仮面ライダー。

## ■ 紳士然とした中年男性。

実はオールマイトに匹敵する（少なくとも弱った彼相手には対抗できる程度の力はあ  
る）改人を造る技術を生み出したヴィラン連合の真の黒幕。原作で死柄木弔を悪の力リ  
スマに育て上げようとした人物を勝手にイメージした。

偶然公園で苦悩している出久の姿を見つけ、彼の力への執念。さらには自分よりヒー  
ローたちのことをよく研究していることを知り、これは力さえ与えれば使えらると、原作  
で脳無を作り上げた技術を応用し、出久を最強のヴィランとして改造した。

## 名探偵コナン～対決する兄弟～：名探偵コナン

江戸川コナン、いや工藤新一にはかつて一人の兄がいた。

その兄の名は“工藤光一”。自分より五つ年上の彼は、新一にとって憧れの存在だった。

今でこそ（といってもコナンへと変わってしまった前の話だが）天才高校生探偵などと世間から持て囃されていたが、彼は天才という名は自分等より兄の方がよっぽど相応しいと常々考えていた。

勉強はテストで満点をとるのは当たり前。小学生の時に、あまりに兄が好成績を取り続けるために教師が遊び半分で有名大学の入試問題を授業中に出して、軽く正解したこととはその中学では半ば伝説となっている。

さらにその頭脳もさることながら運動神経も抜群で、体を鍛えてはいたが運動部やクラブに入っているわけでもないのにどんなスポーツをこなし、得意のサッカーでもなかなか勝てなくて何度も悔しい思いをしたのはよく覚えている。

高校に入ってから始めた空手では、ずぶの素人だったはずなのに入部一年目で空手を習うために入った空手部の全国大会優勝に大きく貢献し、二年に上がった時にはまだ空



手を始めて二年ほどしか経っていないにも関わらず、個人で全国優勝を果たした。

そこまですらでもできるならば調子の一つにでものりそうなものだが、彼に限ってはそのようなことはなく、進んで敵対する相手には容赦がないところはあつたが、誰に対しても優しく寛容で、困っている人たちには進んで手を差し伸べ、そのため彼の周りにはいつも彼を慕う人たちが集まり、彼はいつもその中心でにこやかな笑みを浮かべている。

さらに彼はどこか巻き込まれ体質などところがあるらしく、行く先々でいろいろな事件に巻き込まれることが多かったのだが、そんな数々の難事件を彼は世界的に有名な有名な推理作家である父親譲りの推理力で解決していき、いつの間にか一部のメディアから「若き名探偵」として囃されるようになる。

元々父親が父親だけであり、幼いころから数々の推理小説を愛読し、幼いころから既にそんな推理小説の主人公の中でもシャーロック・ホームズに憧れを抱いていた新一は、そのシャーロックホームズにも重なる完璧な兄の姿に、心の底から憧れを覚え、両親が仕事でよく自宅を空けていたこともあり、小さい頃はよく兄の後ろをついてまわっていたのを、新一はよく覚えている。

新一は早く大きくなって兄と一緒に難事件を解決する一流の探偵になりたいと、幼なごころにそう思いながらも、両親と憧れの兄から深い愛情や様々な知識と共にいろいろ

な物を与えられながら平凡で、だからこそ幸せな生活を送っていたのだが、そんなある日、あるとんでもない事件が起きる。

それは新一が未だ中学生の時のこと。その当時高校生であった光一が、何を思ったのか海外でのボランティア活動に参加するためにとある国を訪れていたのだが、とある事件に巻き込まれてしまいそのまま行方知れずになってしまったのだ。

当然それを知った彼らの両親は、海外の知り合いなどの伝手を頼って必死に彼の行方を探したが、しかし結局彼の行方はわからずに、そのまま彼の捜索は中断されてしまうことに。

新一は慕っていた兄が突然いなくなってしまうことにより一時部屋に引きこもってしまふほどのショックを受けてしまうが、しかし幼馴染の蘭を始めとした周りの人々の支えによりなんとか立ち直った彼は、いなくなってしまった兄の代わりとでもいうように探偵として様々な事件の解決に協力し、兄と同じく探偵としての名声を手にし、やがて「東の名探偵」と呼ばれるようになる。

現在とはある事情により少年の姿となり、「江戸川コナン」として幼馴染の蘭の家で、正体を隠しながら小学生として生活しているが、目立たってはいけなそうと思いつつも、阿笠博士の発明を駆使して蘭の父親である毛利小五郎を（いいかたは悪いが）隠れ蓑とし、このような姿となつてからも探偵としての活動を続けている。

それは探偵としての本能に基づいた行動ということもあるが、それ以前に彼は示したかったのだ。自らの憧れである兄。自分はそんな兄に相応しい弟だということに。

だが、そんな彼だからこそわからなかった。

「なぜだ、なぜあんたが黒の組織と一緒にいるんだ?!」——兄さん!!」

そう、行方不明となっていたはずの自身の兄が、自身がこのような生活を送るはめになった彼の宿敵といつてもいい存在である黒づくめの男たちと同じ服装で共にいるというその現状に。

そんな彼の言葉を受けて、しかし彼の兄だった男、工藤光一は新一に今まで見せたことのない、歪んだ笑みを浮かべると口を開く。

まるで弟と敵対することとなった今の現状を、心の底から待ちわびたとしてもいうかのようにその頬を僅かに紅潮させながら。

「くくく。別にいいだろうそんなこと。それより始めようじゃないか新一、いや江戸川コナン。」

——命を賭けたゲームを」

☆ ☆

## ■ 江戸川コナン

この小説の主人公にして原作主人公。

なんでもできる完璧な存在である兄を心の底から慕っていたが、ある日彼が海外で何方不明になると一時的に引きこもり状態に。だが蘭を始めとした周りの人間に支えられて一念発起。その後は自身が兄に相応しい弟であるように。いずれ兄が戻って来ても恥ずかしくないようにという想いもあり、原作通り様々な難事件を解決して東の高校生探偵として有名に。

その後コナンへとなってしまった後も、幼馴染の父親である小五郎を矢面に立たせて隠れ蓑にしながら様々な事件を解決していったが、ある事件に黒づくめの組織が関わっていることが発覚。仲間たちの助けもあり、持ち前の推理力と行動力で彼らを追い詰めるが、そこに彼らと同じ黒づくめの服装に身を包んだ

## ■ 工藤光一

この小説では新一の兄として登場。

頭脳明晰、運動神経抜群と完璧超人と知られていたが、実は巷でいう神様転生系の転

生者で、彼の能力が軒並み高いのは自信を転生させた神様から貰った特典のおかげ。

初めはそのスペックの高さにはしゃいではいたのだが、やがて何をやってもなんでもできる。同年代はおろか身内以外の存在の殆どがいい大人でも自身より能力で劣るその状況に退屈を感じていた。

そんなある日、その能力の高さを見込んで黒の組織から勧誘にあい、犯罪組織である彼らの仲間になればそれぞれ得意分野なら自身より上な両親や、頭の回転なら自分の上をいく可能性を当時から見せていた新一、つまりコナンといずれ戦うことになるだろうと考え、この日々に退屈して腐っていくよりはと彼らの仲間になるという選択をとつた、退屈を紛らわすために犯罪組織に入ったという、実は性格がどこかおかしい人物。

コードネームは特に考えていない。お酒には詳しくないもので（すいません）。

本当はマイクロフト・ホームズみたいに能力の優れた兄が新一にいたらなーと思いを書こうと考えたんですが、そういうえばマイクロフトの方はなんかの秘密組織に所属してたんだけ？という考えに至り、コナンの世界での秘密組織が黒づくめの組織しか思い浮かばず、なぜかコナンたちと敵対することになってしまった。……本当は海外で知り合った世良さんといちゃつく感じにしたかったのに。世良さんマジ可愛いよ世良さん。